一四　自然主義の文學

島村抱月

一　解題

一　本文

「抱月全集」第三卷に收められてゐる論文「自然主義の價値」の一部分を抄出した。同論文は、初め雜誌「早稲田文學」（明治四十二年五月號）に發表されたもので、明治四十二年刊行の「近代文藝之研究」にも收められてゐる。作者自らその冒頭に「吾人は此の文によつて上に掲げた自然主義論の後を承けようと思ふ。彼れが如き文藝上の傾向は結局如何なる意義若しくは價値を有するか。本論の眼目は此の問題を研究するに在る」といつてゐる。因みに「抱月全集」は、最初大正八年に全八卷として天佑社から刊行せられ、その後昭和四年博文館によつて全六卷として再刊せられた。（抱月全集　全六卷、博文館發行）

二　作者

島村抱月（しまむらほうげつ）。評論家・新劇運動家。本名瀧太郎。明治四年一月島根縣那賀郡久佐村の佐々山家に生まれた。二十三年上京し、翌年島村家の養子となり、早稲田大學の前身東京專門學校文學部に入學した。二十七年卒業、第一期「早稲田文學」の編輯者となり、或は「新著月刊」の創刊に携はり、評論に創作に活躍した。三十一年「早稲田文學」の休刊と同時に讀賣新聞の記者となり、後母校の講師を兼ねた。三十五年から三十八年にかけて英・獨に留學し、歸朝後早稲田大學文學科講師に就任すると共に、坪内逍遙をたすけて文藝協會を組織し、三十九年には「早稲田文學」を再刊、四十年には同大學英文學科教授に就任した。三十九年「早稲田文學」誌上に「囚はれたる文藝」を發表して傳統的な文藝思潮からの解放を說いて以來、その傘下に早稲田派の新人を擁し、自然主義文學運動の指導者として活躍し、四十一年「早稲田文學」に「文藝上の自然主義」「自然主義の價値」等の論文を發表し、その文藝上の該博な知識と透徹した識見とを以て自然主義運動に明確な理論的根據を與へた。四十三四年頃から演劇に對する興味を愈〻加へ、大正二年文藝協會を解散して松井須磨子と共に藝術座を組織し、やがて早稲田大學教授を辭して改めて講師となつた。その後專ら藝術座の指導者として新劇運動に目覺しい活動をなしたが、大正七年十一月流行性感冒のため、東京市牛込區横寺町の藝術倶樂部の一室に歿した。享年四十八。著書に「風雲集」「新美辭學」「滯歐文談」「近代文藝之研究」等をはじめ、近代劇の飜譯等が多數ある。總べて「抱月全集」に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

前三課が明治二十年代に於ける、自然主義以前の文學の作例であり、殊に前課は自然主義文學の前提を成した浪曼主義的思潮の先驅をなした作者の文であつたのを承けて、本課には自然主義文學の意義と特質とを闡明した自然主義文學理論の代表的一例を掲げた。

文學理論を學習せしめるべき文藝的教材であると共に、現代文學の史的發展を知らしめるべき文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【自然主義】　シゼンシュギ　こゝでは、近代文藝に於ける自然主義をさす。即ち、一切の理想、一切の虚飾を排し、科學的・生物學的な態度によつて剔抉した人生の現實を、ありのまゝに描寫しようとする文藝思潮で、隨つてその文學は客觀的・實證的・唯物的で、事物の美醜・善惡の如何に囚れず、殊に醜惡な方面をより多く描いた。浪曼主義に對する反動として起つた思潮で、浪曼主義が熱情的な夢の王國建設運動であるのに反し、理知的な偶像破壞運動であるといへる。

近代文藝に於ける自然主義はまづフランスに起り、フローベル・ゾラ・モーパッサン・ゴンクール兄弟等を代表的作家として漸次ヨーロッパ諸國に普及し、西暦一八七〇年頃から一八八〇年頃にかけて全盛を極めた。一方ロシアに於ては、その影響を離れて別に自然主義的な文藝が起り、ゴーゴリ・ベリンスキー・ゴンチャロフ・ツルゲーネフ・ドストイェフスキー等によつて隆盛した。我が國に於ては、明治三十年代の末葉即ち日露戰爭以後から自然主義の文學が擡頭し、唯物的人生觀に立脚して偶像破壞・現實直寫を叫び、空想的技巧的な硯友社風の文學を排し、四十年代に至つて遂に文壇を風靡し、我が國の文學に眞に近代文學としての相貌を具備せしめた。國木田獨歩・田山花袋・島崎藤村・徳田秋聲・正宗白鳥等はその代表的作家として活躍し、長谷川天溪・島村抱月・岩野泡鳴等は評論家として理論的根據を與へた。

【文藝】　ブンゲイ　(一)文物と學藝。學問と技藝。(二)文學と藝術。文學と美術。(三)言語を表現の媒材とする藝術の一部門。言語藝術。こゝは(三)。

【極】　キョク　こゝでは、極點、窮極、どんづまり、等の意。

【實際的意義】　ジッサイテキイギ　實際的目的をはたすやうな意義。文學に即していへば、道徳・宗教・科學・社會等の實際的問題を內容とすることによつて生ずる存在價値をいふ。

作者は、原文中、本文不採錄の部分で次のやうに述べてゐる。

曰はく社會問題、曰はく科學、曰はく現實、此等を以て事實が示す自然主義の內容と假定するときは、其の底に共通する意義は何であらうか。蓋し社會問題といひ個人問題といふ如きものを文藝に入れたのは、明かに當時の道徳界の潮流に動かされたのである。たとへばイブセン。ハウプトマン。ズーダーマン等の作に其の適例を見る。又科學の眞を傳へ、現實を本とし、作者の實驗を語り、普通人の言葉を取次ぐを本旨としたゾラの如きは明かに當時の學問界の風潮に動かされたものである。(中略)最後に現實を殊さら其の隱れた方面に穿ち入り、野獸性、暗黑面を曝露したゾラ。モウパッサン等には、單に學問界の科學熱に動かされて的確なものを描いたといふ以上、他の意義があつたらうと察する。それは彼等獨自の人生觀で、暗黑面は人生から掩蔽し去らるべきものでは無い。是れに最もよく人生の眞相が見える、又は少なくとも是の半面を算入せざる限り眞の人生は分からぬといふ見解で、卽ち隱すところ無き人生を見せるといふ意義である。

【歸趨】　キスウ　(一)おもむき。方向。むき。(二)ゆきつくところ。おもむくところ。こゝは(二)。

【美】　ビ　こゝでは美學上の用語で、廣狹二義ある。(一)廣義には「美的」卽ち「美的なるもの」と同義に用ゐられ、美的判斷の對象たり得るもの一切をさす。かゝる美的對象は何等かの內容をもつときに始めて具體的な美の樣式として現實化せられる。例へば宗教的意識が美的對象の內容となるとき崇高美が、道徳的意識が美的對象の內容となるとき悲壯美が成立する如きである。一般に、美的樣式は、崇高・悲壯・優美・滑稽等に分類せられる。(二)狹義には、美的樣式の一としての「優美」のみをさす。卽ち、感官的快感を美的對象の內容とする美的

斯くして道徳問題を研究する、科學の助けをする、人生の眞相を見せるといふ意義が社會問題、科學、現實などいふ自然主義の內容に存するとすれば、吾人は玆に先づ見逃すべからざる重要の一問題に到達する。蓋し此等の三意義を一貫するものは道徳的又は實際的目的である。

様式で、主として婉柔・暢和・流麗等の趣をもち、優雅な感じを與へる美。こゝは（一）。

【統一的目的】トウイツテキモクテキ　箇々の部分的目的を、そのものの歸趣するところに於て統一して得た目的。

【道德】ダウトク　（二三頁を見よ）

【教義】ケウギ　（一）をしへのむね。教育の本旨。（二）教法の義理。宗教上の主たる旨。宗教の各派の主義。教理。宗旨。こゝは（二）。

【說教集】セッケウシフ　〔說教〕宗教の教義・趣旨等を說き聞かせること。

【講談】カウダン　「講釋」ともいふ。演藝の一種。軍談・御家騷動・敵討・武勇傳・俠客傳・世話物・新聞物等、巧妙な話術によつて卑俗に面白く口演するもの。

その起原は詳でないが、一般に江戸時代の太平記讀に濫觴するといはれる。太平記は「太平記」を節面白く朗讀したもので、貞享・元祿頃に最も盛行したが、「太平記」以外「曾我物語」「川中島軍記」「源平盛衰記」等も讀まれ、後には「太閤記」「三河後風土記」「赤穗記」等の新しいものが取入れられ、更に寄席の發達、落語・音曲の興隆に伴なつて芝居化・淨瑠璃化し、勸善懲惡風の小說等に題材が求められ、所謂世話淨瑠璃の發生を見た。かくして明治時代に入つては松林伯圓・桃川如燕等が出て藝風も巧緻になり、內容にも從來の軍談・御家騷動・世話物以外、新聞物・探偵物等が加り、且その出版、新聞への連載等が流行して、講談の全盛時代を出現したが、その後次第に衰微し、現在は主として世話講談の存在によつてその命脈を保つてゐる。

【落語】ラクゴ　演藝の一種。多く市井の無智・無思慮な人物、或は短氣者・あわて者等を主人公とした滑稽・諧謔な物語を、身振を添へて面白く口演し、話の末尾に巧な落をつけて聽者を興ぜしめるもの。

古くは「輕口」といひ、後「落話」と呼ばれ、更に普讀せられるに至つたものであらうといはれる。その起原は一般に江戸時代の初に求められ、慶長・元和の頃諸侯の門に出入して滑稽談を試みた安樂庵策傳が始祖とせられる。「醒睡笑」は、策傳が板倉周防守の前で口演した落語の筆錄である。その後元祿頃を中心に京都の露の五郎兵衛、江戸の鹿野武左衛門等によつて大衆化せられたが、まもなく萎微し、天明の頃自作自演に特技を發揮した立川焉馬の出現によつて中興し、風教上の事から一時禁止せられたこともあつたが却つて盛行し、寬政の頃には純然たる寄席を生ずるに至つた。幕末から明治にかけて名人三遊亭圓朝を生み、その門弟からも幾多の名人を輩出して明治時代の落語界を賑はし、新しい傾向等も取入れられたが、現今は概して衰微の一路を辿つてゐる。

【藝術】ゲイジュツ　（四頁を見よ）

【應用文學】オウヨウブンガク　文學本來の目的以外の何等かの目的の爲に制作せられた文學。例へば宗教的目的の爲に制作せられた宗教文學、社會主義的思想の普及・宣傳を目的とする社會主義文學等の如きもの。

【底】テイ　こゝでは、「こと」又は「者」の意の助語。

【意識】イシキ　心理學上で、直接に與へられた心的體驗全部の綜合概念をいひ、多く精神現象・心的事實等と同義に用ゐられる。隨つて內容として感覺・知覺・感情・表象・情緒・意志等の全部を含み、これ等の內容が何等かの對象を中心に意味ある統一をなしてある瞬間の意識を形成し、或は轉成しつゝ連絡ある體驗を形成する。その發現の目的によつて美意識・道德意識・宗教意識等と名づけられる。

【二元的傾向】ニゲンテキケイカウ　對立的な二つの根原に歸せられるやうな傾向。

〔二元的〕事物の根元を二つのものとする見方。（一元的の對。）

【評價】ヒヤウカ　ものの價値を批評し、判斷すること。

【理論】リロン　（一）經驗・觀察・實驗等に對し、一の原

理又は法則を以て、一群の事實を觀察し、これに對して下した統一的・學的な說明。(二)實際的な行爲や活動に對し、實際上の目的には直接に關しない純粹の知識。こゝは(二)。

【反動的】 ハンドウテキ　反動として現れるさま。ある事柄に對抗して、それとは全然反對の事柄の生ずるさま。

〔反動〕 (一)ある動作に對抗して生ずる動作。うちかへし。ゆりかへし。(二)一つの力が作用するとき、これに等しい力でそれと正反對の方向に作用する力。

【消長】 セウチャウ　衰へることと榮えることと。のびちぢみ。榮枯。盛衰。

【標榜】 ヘウバウ　(一)人の善行を賞揚して、その事實を札に記し、門等に揭げて衆人に示すこと。(二)自分の主義・主張等を公然かゝげあらはすこと。こゝは(二)。

【套窩に陷つて】 タウクヮにオチイつて　千篇一律な言語・文章の摸倣に墮して。

〔套〕 他人のすでに用ゐた文字・言語を摸倣する。轉じて、ふるくさい。

〔窩〕 むろ。あなぐら。

【形似】 ケイジ　形の似ること。又、そのもの。こゝでは、形式摸倣、といふほどの意に用ゐた。

【提起】 テイキ　(一)あげおこすこと。(二)さし出すこと。もち出すこと。提出。こゝは(一)。

【傾倒】 ケイタウ　(一)かたむけたふれること。かたむけたふすこと。(二)さかさにして、中にある物を出し盡くすこと。(三)心を傾けて慕ふこと。こゝは(二)で、かたむけつくす、そゝぎつくす、といふほどの意。

【露呈】 ロテイ　「呈露」に同じ。あらはししめすこと。むきだし。

【科學】 クヮガク　廣義には哲學以外のすべての學をさす。即ち、若干の假定の上に立ち、一定の認識目的の下に、一定の對象を一定の方法により、研究し組織した體系的知識をいふ。ヴントは對象の相違に基づいて、これを形式的科學(數學)と實質的科學とに大別し、後者を自然科學(物理學・化學・生理學・天文學・地質學・生物學・地理學等を含む)と精神科學(心理學・社會學・歷史學・法律學・經濟學等を含む)とに分ち、リッカート以下所謂西南ドイツ派に於ては、方法の相違に基づいて、先驗的科學(數學)と經驗的科學とを區別し、後者を自然科學(地質學・天文學・自然地理學・生物學・化學・物理學・生理學・心理學・社會學等を含む)と文化科學(歷史學・人文地理學・法律學・經濟學・政治學・宗教學・言語學等を含む)とに分つてゐる。尙、狹義には自然科學のみをさして科學といふ。

【眞理】 シンリ　眞實の道理。何人も認めざるを得ない、動かし難い道理。客觀性と普遍妥當性とを有する知識。

【敷衍】 フエン　(一)廣くしきのべること。おしひろめること。(二)意義などをおしひろめて他に及すこと。こゝは(二)。

【社會問題】 シャクヮイモンダイ　社會組織の缺陷から生ずる一切の問題の總稱。現代に於ける社會組織の缺陷は、主として經濟組織に根本の原因をもつてゐるので、勞働問題が最も重要な社會問題とせられてゐるが、その他婦人問題・中產階級問題・優生問題・人種問題等も等しく大きな現代の社會問題である。

【醱酵】 ハッカウ　酵母類・細菌類等の微生物作用により、有機化合物が分解して酒精類・有機酸類・炭酸瓦斯等を生ずる現象。酒・醬油・味噌等はこの作用を利用して製造される。こゝでは、充分に熟して表現の衝動を具して來る、といふほどの意に用ゐた。

【附燒刃】 ツケヤキバ　(一)いれぢゑ。受賣の知識。(二)一時を糊塗する爲の裝ひ又は强がり。こゝは(一)。

【動機】 ドウキ　こゝでは、最も直接に行動を喚起した根本的な原因。

【藝術的態度】 ゲイジュツテキタイド　藝術にふさはしい態度。藝術の本質に合致した態度。

【地步】 チホ　自分のゐる地位。たちば。地盤。立脚地。

【表現境】 ヘウゲンキャウ　藝術制作の境地。藝術表現の立場。

〔表現〕 (一)現すこと。又、現れること。(二)作家が觀得した對象を、藝術作品として制作すること。

【審美】　シンビ　美の性質を明らかにすること。美と醜とを識別すること。

【宗教問題】　シュウケウモンダイ　宗教に關する問題。〔宗教〕一般に、人が超人間的な威力を認めて、これに對する畏怖及び信頼の情を感じ、又犧牲を捧げ、祈願禮拜をし、更に多くの場合祭祀・儀式を行ひ、義務の念を以て服從奉仕の生活を營む時に、その關係を宗教といふ。かくて宗教は、一面には主觀的な心的生活として、他面には客觀的な社會現象として現れ、諸多の心理的・社會的事實と密接に關聯してゐる。隨つてその意義に就ては、或は個人の立場からするもの、或は社會の立場からするもの等、多樣な見解が存する。

【哲學的眞理】　テツガクテキシンリ　哲學上の眞理。哲學の有する眞理。〔哲學〕phylosophy（英）存在及び當爲に關する根本概念の統一、即ち宇宙・人生の最高原理の學問。その概念に關しては歷史的に種々變遷があり、今日に於ても種々に說かれてゐるが、一切事物の根柢に存する普遍的・必然的な原理又は根本法則を理論的・體系的に取扱ふ學であるとする點に於てほゞ一致し、形而上學・認識論の外倫理學・美學等が含まれ、精神科學の方法論・原理論も哲學として論ぜられることが多い（社會哲學・經濟哲學・法律哲學等）。

【暗黑面】　アンコクメン　（一）物事のはつきりしない方面。（二）悲慘又は惡德の存在する方面。こゝは（二）。

【因襲道德】　インシフダウトク　古來から因襲として無自覺的に守られて來た道德。現代生活に適合しない、因襲に因れた形式的道德。〔因襲〕以前からの習慣・作法等を引續き摸倣すること。舊態により從ふこと。

【文明】　ブンメイ　civilization（英）人智が進步して百般の事物が整備した狀態。近年は「文化」に對し、特に物質的發達、即ち、人類が自然を利用して招來した、外部生活の發達した狀態をさしていふことが多い。

【素手】　スデ　手に何物をも持たぬこと。空手。てぶら。

【葛藤】　カットウ　（二四頁を見よ）

【現實】　ゲンジツ　實際の事實又は狀態。現在存在し、又は現に實現せられてゐるもの。

【五官】　ゴクワン　外界の感覺刺激を受容して感覺を生ずる五つの器官、即ち、視覺器官（目、特に網膜）・聽覺器官（耳內の蝸牛殼）・嗅覺器官（鼻內の嗅領）・味覺器官（舌の味蕾）・觸覺器官（皮膚の壓點）の總稱。古來、感覺器官としては以上の五器官が考へられてゐたが、現今の心理學に於ては、その他、溫度感覺器官（溫點・冷點）・痛覺器官（痛點）等の外部刺激受容器官のみならず、有機感覺器官（內臟諸器官・循環系等に於ける感覺器官）・運動感覺器官（關節・腱・筋肉等に於ける感覺器官）等の內部刺激受容器官が數へられてゐる。

【物的現實】　ブッテキゲンジツ　物質的方面から見た現實。物質を基礎として成立してゐる現實。〔物的〕「物質的」に同じ。（一）物事の物質上の狀態を示すこと。（二）金錢などのやうに、形に現れる利益を目的とするさま。

【對照】　タイセウ　（一）彼と此と照らし合はせて參考すること。くらべ見ること。（二）contrast（英）反對の比較。釣合つた反對。こゝは（一）。

【人生圖】　ジンセイヅ　人生を描寫した圖。人間生活の縮圖。

【算中】　サンチュウ　計算の中。勘定の中。考慮の中。

【方式】　ハウシキ　一定の形式。かた。

二　解釋

1　主題　文藝の目的構造から見た自然主義文藝の意義と特質。

2　構想

(1) 文藝の目的に於ける二極（初―一〇一ノ二）。
(2) 文藝の目的に於ける二極と美（一〇一ノ三―一〇二ノ一一）。
(3) 自然主義文藝に於ける二極と美（一〇二ノ一二―一〇六ノ八）。
(4) 自然主義文藝の特質（一〇六ノ九―終）。

3　敍述

〔文藝の目的は二つの極をもつ。一は快樂であり、一は實際的意義である。併しながら、これを總括していふ時は、文藝の歸趣はたゞ美にあること勿論であらう。即ち快樂といひ、實際といふも、畢竟美の成分としてのみ文藝の目的たり得る〕――作者の文藝の目的觀の構造が明確に言明せられてゐる。作者はこの目的觀の構造によつて自然主義文藝の特質を闡明しようとするのである。

〔文藝であるためには、此の兩者が是非とも融合してゐなくてはならぬ。即ち快樂であつても、それが何等かの意義を含んだものでなくてはならぬ。また實際的意義であつても、それが其のまゝ快樂であり、懐かしく、忘れ難い底のものでなくてはならぬ。此の境を吾人はまづ大まかに美と名づける〕――文藝の目的を實用的意義と快樂との二極に見、その歸趣を美とする作者は、二極の融合境を美と呼んでゐる作者であることが注意せられなくてはならない。

〔實際的意義が眞といふ名を被つて快樂と相擁し、以て美の要求を全うせんとしてゐるのである〕――自然主義文藝の特質は文藝の目的に於ける二極の一を「眞」と呼んだ所に存するといふのが作者の立場である。適切な定位であることはいふまでもない。

〔もつと文藝に嚴肅な意義を見出したいといふ要求から、人生の眞相を露呈せしめよう、科學の眞理を敷衍しよう、社會問題を究明しようといふが如き實際的意義を標榜して來たに過ぎぬ。所詮眞は美を完成する一材料たるに外ならぬ。美を有價値ならしめる範圍に於てのみ、眞は文藝上に價値を有する〕――在來文藝の遊戯化的傾向に對する反動として實際的意義の强調として現れたのが自然主義文藝であり、「眞」の追求となつたといふ歴史的理解に立つた作者は、先づ眞を美の材料として限定しようとしてゐる。

〔併し又一轉して考へると、文藝を有意義ならしめ、嚴肅ならしめんがために眞を加へるのではなくて、逆に、此の眞を發揮せずにはゐられない要求が發して此の種の文藝となつたものとも解せられる〕――自然主義文藝の一面に、眞は單なる文藝の方便や美の材料ではなく、眞が目的であり、歸趣である場合の存することを附言したのである。

〔思ふに此の二つの場合は雙方とも事實であり、また眞理である〕――自然主義文藝が文藝史上に著しい問題を投じたのはこの後者の場合であつたことはいふまでもない。この併立又は對立をそのまゝに認めたところに、理論的缺陷が殘されてゐることはいふまでもない。

〔如何なる動機から生ずる文藝でも、結局美の一義に統括せられることに於て二つはない。たゞ美の內容に變化があるのみである〕――敍上の二つの場合は公式としては併立又は對立的な構造を示すけれども、その結局に於ては美の一義に統括せられるといふ所に、作者の理論的要請の一貫が認められ、自然主義理論の不徹底が殘されてゐる。

〔世上往々審美上の醜と道德上の醜とを混同して、道德上の醜惡をいつたものであつた。作者の所論はこの定位によつて手堅く守られ考へるが、それは誤である〕――自然主義文藝が眞を主として美を從とすることから進んで、むしろ醜を描くと批評せられたけれども、それは主として道德的醜惡をいつたものであつた。作者の所論はこの定位によつて手堅く守られてゐる。

〔美とは人間一切の現象を包容し得る文藝の終極點の名であつて、美を破るといふことは文藝でなくなるといふことに外ならぬ〕――道德的な善美も醜惡も、科學的な眞實も虛僞も共に美の內容になり得るといふことが、美が文藝の究極點であるといふ立論を可能にする。

〔それは其の藏する所の眞其のものの性質及び解釋に存すると見るのが當然であらう〕――自然主義文藝の眞は實際的意義の强調にすぎず、すべての文藝作品が實際的意義を含むとすれば、自然主義文藝を他の文藝と區別する要點は何であるかといふ問題に對する解答である。そして自然主義文藝をして自然主義文藝たらしめる眞の性質及び解釋は、社會問題、科學の眞理、人生の暗黑面などを取扱ふ所にあるといふのが作者の見る所である。

〔いはば文明對自然の關係を描く。而して文明は既にありふれたもの、自然は新に作者が掘り起したものであるため、注意はおのづから後者に集る。是れ自然主義の名のある所以である〕――所謂社會問題の文藝が如何なる性質及び解釋に於て自然主義文藝と呼ばれるかに關する作者の解答である。

〔みな根柢に現實といふこと、しかも五官を通ずる物的現實といふことを取出し、理想的・精神的といふことに對照せしめる思想を藏する〕――自然主義文藝でいふ科學の眞理、人生の暗黑面などといふ眞の性質・解釋を指摘してその特質を明らかにしようとしたものである。

〔現實が如何に暗黑・醜惡でも、それを隱蔽した人生圖は不眞實の人生圖である〕――自然主義文藝の特質を定位し、主張してゐる一句である。

三　批評

明治四十一年五月「早稻田文學」に發表せられた「自然主義の價値」の抄錄である。

まづ文藝の目的構造を揭げ、次に自然主義文藝の構造的定位を行ひ、更に進んで自然主義文藝の特質を闡明した論であつて、當時自然主義文藝の指導者の理論であるだけに、組織的である上に、簡明にして要核を得てゐる。長谷川天溪氏がその熱情に於て特色を示したのに對し、この作者は組織的であることに於て特色を出してゐる。

當年に於ける自然主義文藝の作品が、同代に於ける國民生活の誠實な解剖であり、表現であるよりも、往々人間觀の狹隘に基づく、特殊な觀點に立つての一面的誇張に傾きがちである所に、やがて反自然主義文藝の擡頭を促したものであつたのに比して、作者の論はその觀點が的確で展望も廣く、自然主義文藝の理論づけに成功し、又その史的位置を闡明し得たものといつてよい。

明治三十九年一月に發表した「囚はれたる文藝」、同四十一年一月に發表した「文藝上の自然主義」と共にその代表的論文で、當時の評論壇を賑はした所論である。

三　備考

一　指導の問題

（一）一「五重塔」、二「鹽原」、三「山庵雜記」は自然主義以前を代表する主要作家の作例であつた。こゝには自然主義文藝の作例があつて然るべきであるが、それは十分な意味に於ては教材として適當なものを得る上に困難が伴なふので、この自然主義文藝の指導者理論によつて史的展開を辿らしめることが適當な指導と思はれる。

のみならず、指導的立場に立つた作者の理論として、積極的主張的熱意が根柢を成してゐる。整頓された理論の底に、その熱意を讀ませなくてはならない。

（二）この論旨理解の爲には、全文の結構を明らかにすることが特に肝要である。しかしこの程度の生徒にとつては、それはそんなに容易い學習ではない。先づ各節の節意を考へ、各節相互の關聯を吟味した上に、論旨の發展的過程を明らかにし、一文の構成を闡明するといふやうな指導を用ゐる外はないであらう。

そして各節の有機的關聯を辿る方法としては、まづ作者の文藝に於ける目的構造論を明らかにし、これを基礎として自然主義文藝の位置及び意義を闡明してゆく作者の意向に導かれることがその手がかりをなすであらう。

說いて文藝の目的としての美と、自然主義文藝の目的としての眞との關係に至つて十分な調和を示し得てゐない點は、同時に自然主義文藝理論の致命的缺陷である。この不徹底がどの程度まで生徒の理解力・批判力によつて指摘せられるか。考察の到達點を明らかに理解させることは肝要であるが、その不備の批判はわざ〳〵指導する要はないであらう。

敍述の問題として、術語の意義を明確に理解させることも指導の力を用ゐるべき點である。

（三）明治文學史上に於ける自然主義文藝の消長に關しては、既に明治二十三年刊行の小杉天外作「はつ姿」の序文に示された官能的現實を中心とする文藝の立場に認められ、更に自然主義文藝の根柢をなす寫實的傾向は、坪内逍遙の「小說神髓」以來、二葉亭四迷・正岡子規等の立場にも現れ、森鷗外のゾラ紹介にこの名稱が始めて用ゐられた。しかし一層徹底した意味で說かれたのは日露戰爭頃からで、それはシュトゥルム・ウント・ドゥランク若しくはロマンティシズムを經て來たものである所にその特徵が存する。そしてその代表的論文は明治四十一年一月の早稻田大學に掲載せられた島村抱月の「文藝上の自然主義」及び同年五月の同誌に發表せられた本文（原題「自然主義の價値」）であり、その作家としては田山花袋・島崎藤村・國木田獨步その他が出た。藤村・獨步の作は、自然主義的傾向の作例ではなかつたにしても、既に接し來つた所である。

自然主義文藝の現代文化に對する貢獻は人生に對し、社會に對して眞摯に考察の眼を向け、文藝をして、單なる享樂・娛樂の域から救ひ出す出發點をなしたことにあるといつてよい。さういふ意義をもこの文の上に會得させることは肝要な指導の一發展であらう。

二　參考資料

（一）自然主義の特質及び價値に關する作者の所論を、「自然主然の價値」に先んじて雜誌「早稻田文學」（明治四十一年一月號）に發表せられた「文藝上の自然主義」（抱月全集第三卷）から抄錄する。

自然主義そのものゝ研究は之れを構成上及び價値上の二面に分かち得る。吾人は先づ其の構成論を概說しやう。

自然主義の構成は二點から見られる。第一は描寫の方法態度第二は描寫の目的題材である。

第一、描寫の方法態度から自然主義を分解する時は、純客觀的と主觀插入的との二つになる。言ひかへれば、寫實と說明的、若しくは本來自然主義と印象派的自然主義に外ならぬ。自然を寫すにあたつて、出來るだけ客觀のまゝを眞寫し細寫しやう、此の時の描寫方法は明鏡の事象を射映するが如きものでなくてはならぬ、すなはち純客觀的純寫實的であるを要する、是れが本來の自然主義であるといふのが一方である。蓋し最も普通な解釋である。フローベールが「藝術と作者とは全く無共通なり」といつた事、批評家テーン（H.A. Taine）が自然の再現を極意として作者の個人性を一切其の藝に潛ましめんといつた事、ブリュンチエールが自然主義の無感情性（アムパシビリテー）無人格性（アムパーソンネル）と評した事、ゾラが其の『實驗小說』論で生理學が生物を試驗するやうに小說も事實を實驗し解剖し報告すると說いた事、等が皆同じ意を有する。他の一方、印象派的自然主義の主張は、結局一旦斥けた作家の主觀を或る方式で再び插入しやうといふのである、作家が一旦自然の事象を感受して、自分の印象に纏めてそつくり再現しやうといふに歸する。前に擧げたシュタイン氏の情趣說の如きが卽ち此の論に該當する。また繪畫上の印象派が自然に忠ならんとするの極、自家の印銘を主とし漠然たる大體の自然を說いて、寫眞的の細寫を避けるの意も是れに外ならぬ。ドイツでは更に之れを徹底主義（Konsequenz

Naturalismus）と呼び千八百八十七年頃から抒情詩人ホルツ（Arno Holz）氏等が首唱してハウプトマン氏の劇『日の出前』に實行せられたと稱する者である。同國の批評家バーテルス（J. Barteb）氏の言を假りて言へば、此の主義はゾラ等の報告的自然主義（Reporter-Naturalismus）に對して、感覺界すなはち外物の印銘及びそれから生ずる情趣上の印銘を兩つながら併せて書背機的に再現せんとする印象派的自然主義である。內外徹底せざれば休まざらんとする自然主義である。尙以上の二方法を對比して說いたものでは、イギリスの外交官文學者ベアリング氏（Mr. Baring）が第九版の『エンサイクロピデキア、ブリタニカ』に述べた所などが最も參考になる。其の意、自然派には二種あつて、一は印象派（Impressionism）といふ、自然を說明するを目的とし、自然から受けた印象を以て自家の人格を表はす手段とする、他は本來自然主義（Naturalism proper）といふ、絕對に客觀的なる現實を得るを目的とする。ゴンクール兄弟等の作は前者に屬しゾラ、モーパッサン等の作は後者に屬すると。

斯くの如き描寫法上の區別は、事實に於いても存すること明かで、而も二つながら自然主義であるとすれば、理論上の解決は何うなるか。吾人の見る所を以てすれば此の兩面は作者が筆を濕し、刷毛を染めて紙面に莊むときの態度卽ち覺悟、卽ち氣持によつて統一せられるものである。一は偏に外來の自然を歪まず曲らず映寫し出ださんとするが故に、其の態度氣持は消極的となる。出來ることならば無念無想全く謙虛な心で其の事物を迎へ且つ送り出したい。こゝから排技巧、排主觀の傾向が生ずる。併し事實に於いて是れは或る度以上行はれるものでない。空虛な心には必ず何等かの思念が湧いて來る。そこで此の思念を邪道に入らしめぬため、知慧細巧に墮ちないで而も純粹無垢な或る者を拈出せんとするが如き態度で、客觀の事象に差し向ける。又は謙虛にして鏡のやうな我が心の中に事象を映じて、映じたまゝじつと息を殺して其の事象の展開するのを待つが如き氣持になる。積極的態度である。消極的態度が勝つときは純客觀の自然主義を產し、積極的態度が勝つときは主觀插入の自然主義を產する。けれども極致は二者の調和にある。

既に自然主義に積極的態度を許せば、其の積極的思念の行止りは何であらうかといふ問題が、必ず起こらざるを得ない。卽ち自然主義の目的論が生ずる。思ふに自然主義が寫實主義乃至理想主義と違ふ根本は實にこゝに存する。寫實主義は現實を寫すを目的とするといひ理想主義は理想を寫すを目的とするといふ。然るに自然主義はひとり眞（Truth）を寫すといふ。眞といふ語は自然主義の生命であるリモットーである。自然主義から言はすれば、理想といひ現實といふ語はまだ淺い、第二義の役にしか立たぬ。なまなか理想といふが爲に、狹隘な個人の選擇技巧を自然に加へて、厭惡輕蔑の念を生ぜしめる。なまなか現實といふが爲に、外形に拘泥して深奧な自然の味に觸れ得ない。此等の上に立つて、第一義の標的となるものは眞に外ならぬ。文藝の目的は眞を寫すにある。吾人が積極的態度で何物をか惝恍する、その惝恍の目的は眞といふことにあつたのである。ゾラが世の攻擊に對して『ラッソモア』の序に辯じた所は、曰はく「我が作我れを辯護すべし。我が書は「眞」の書也」と。ラスキンが其の『近代畫家』中で盛に摸寫主義を詆譏して、自然の眞（Truth of Nature）を寫すのが藝術の目的であるとしたのも、たとひ其の眞といふ語の解釋は異なつても、立意に於いて自然主義の根本要件と相合する。（中略）

眞といふ最後の目的が手の屆く所に來れば、碎けてさま〳〵の形になる。作家は手に〳〵之れを拾ひ取つて作の題材とする。言はゞ是れによつて彼等の注視點を定めんとする。湧き來たる一切の思念の流を之れにはけさせんとするのである。目の据えどころ、氣の集めどころを此所に求める。從つて斯かる目的は眞面目でなくてはならぬ、飽くまで眞實でなくてはならぬ、何時までも人の心を占有するの力あるものでなくてはならぬ。（中略）

現實を現實として最も眞に寫さんとするには一切人工虛飾の分子を擯斥するを要する、赤裸々の人間、野性、醜、描いてこゝに至れば、最も眞に近づく、最も痛切である。ゾラの所謂人間の證券（Document humaine）は斯くして始めて的確に讀まれる。肉感はすなはち實際哲學が證して最も確實な知識とするもの、之に訴へる現實は最も眞なるべき理である。肉感に近づくだけ、其の刺戟は眞實になり、隨つて痛切になる。卑近の境は最も多くの人が最も多く實驗する現實であるし、自然物は最も明確で且つ虛僞なき樸直な現實である。自然主義は現實を斯やうに考へる。（中略）

イブセンの劇は殆ど凡て社會問題を取扱つてゐる。社會劇又は問題劇といはるゝ所以である。深いものは直に個人性問題に入り、根

本道德問題に入る。また彼れの作にも遺傳論の影が見える。『幽靈』のオスワルドはゾラの書きさうな病的遺傳をあらはし、『ロスマールホルム』のロスマーは深い性格の遺傳をあらはしてゐる。

ドイツの自然主義については、コーア氏（Coar）の名著『十九世紀ドイツ文學研究』が最も巧みに其の間の消息を說いてゐる。其の要に曰はく、千八百九十年頃の若い文學者等は相率て自然主義に赴き、人生の精確なる寫像といふことを殊に精確といふことに力を入れて主張した。併し心あるものは、寫眞や機械のやうに直寫することが文學だとは信じなかつた。又事實を見ても、直寫を主張するものすら、我れの感動する部分の重要なことを忘れなかつた。彼等の說は根本に一つの希望を含んでゐた。それは事實を寫した底から、其の事實の超越的意義卽ち理想を開發せしめんとする望であつた。例へばズーダーマン。ハウプトマン。ハルベ等の思ひ切つて寫實的な作『ゾドム』『日の出前』『自由の戀』などを見ても、之れはよく分かる。つまり背景に社會的個人性の全現といふ要求が隱れてゐる。自然主義の二努力は社會を定義し個人を解放するといふことであつた。理想とは之れを指す。自然主義の目的は理想にあつたのだ。此の社會的個人の顯現といふことがフルダをもヴキルデンブルッフをも兜を脫がせた。社會主義個人主義の極端なものが自然主義から出るのも此のゆゑであると。

吾人の言を以てすれば、此の透徹した見は、自然主義が理想主義に移ることを證するよりも、寧ろ以て自然主義そのものが如何に深いところに根柢を有してゐるかを證するものである。自然主義は決して單純なものではない。

（二）我が國に於ける自然主義文學運動を概觀する爲に、田山花袋の「明治の小說」（新潮社「日本文學講座」）中その部分を抄錄する。

國を賭した日露戰役が曙然として起つて來たので、一時新しい文藝の運動が屏息したやうに見えたが、しかしそれは外形だけで、內部には新興の氣運が蠢勃として巴渦を卷きつゝあつたのである。私は從軍の船の中で、鷗外漁史をその船室に訪うて、メイテルリンクやダンヌンチオやハウプトマンの話を聞いたことを覺えてゐる。又その年に島崎藤村は從軍しようと思つて東京に出て來て見たが、恰好な從軍記者の口がなかつたので、再び信州の山の中に歸つて從軍したつもりで『破戒』の筆を執つたと言つてゐる。やはり國が大きいセンセイションに動かされてゐる時代には誰の心にもそれに伴つた深い衝動を感ぜずにはゐられなかつたのである。

外國でもこのナチユラリズム――ナチユラリズムと言つて了つてはいけない、それよりももつと大きい思潮――デカダン、個人主義、超人、天才、かと思ふと平凡な日常生活の高調、惡魔的な朶頤が近い性慾、主觀の高調、自己の高調、さういふものの網でもなつたやうに細かに堅く結ばれたひとつの思潮、それはかなりいろいろなものを破壞したのであつた。もうそんな道德は舊い。そんなロマンチシズムはしやうがない。プラトニツク・ラブなんて何だ。もつと深く深く掘り下げろ。自分で自分を俎の上に上げろ。人間といふものは何んなものだかといふことをもつともつと明かに見ろ。一時代前の人達のやうに眼を塞いではいけない。それに打突かるのが怖くつてぐづぐづしてゐるやうではいけない。そのためには、科學が眞面目で、しかも足どり堅固に、びくともしないでその行く道を示してゐるではないか。昔のやうに宗敎などにたよつてゐる必要はない。信仰なんか何だ！　贖罪なんか何だ！　死んだら死んだで、その死んだのが人類に於ける一つの眞面目な爲事ではないか。それは人間には善もあれば惡もある。靈もあれば肉もある。しかしそれは今までのやうに離れ離れにするのではない、ひとつにするのだ。惡が卽ち善だ。靈が卽ち肉だ。惡を恐れてゐては善も出て來ない。肉を緣つてゐては靈も出て來ない。まア說明すればこんなやうなものだが、そんなにはつきりしたものではなしに、もつと混雜したもの、懷疑と信仰とが裏表を見せ、泣くのと笑ふのとが一緖に出て來たやうなもの、メスを振つて解剖をしながらその解剖をするものがやつぱり人間で、神でないのを恐れるやうな心持、今までのやうな平凡な客觀ではなしに、他を、第三者を傍觀的に見て笑つたり批評したりするものではなしに自己をも客觀の俎に乘せて、火と水との中にゐながら猶それをぢつと見てゐるといふやうな心持、さういふものが混沌として渦を卷いた。だから、それは外國でもさういふ時代が來たからさうなつたといふより他に言ひやうのないやうな不整、不安、不道理の思潮が一かたまりになつて Sturm und Drang をやつたのである。それは今日から見れば隔世の感があるだらう。今日はよかれあしかれ、さういふ混亂の中から一步を踏み出して來たのである。ロシアの革命などはことに大きな一步である。だから、さういふ混亂した思潮の曾て存在したことなどは、今日では不思議に思へる。何うしてそんな風だつたらうと思はれる。しかし實行してゐる

中はその本體はわからない。たゞその要求がいろいろな形をしてそこにその姿をあらはして見せるだけである。

ナチユラリズムの思潮などと言つたつて、だから說明は出來ない。かう言ふものだと言つて說明をした時には、それは一部はつかまへてゐるとは言へても、その全體は蹤か何かのやうにつるりと拔けて行つて了つてゐる。全く違つたものになつて了つてゐる。だから、あの世紀末の風潮を日本がはじめて受けた時には、雜然、紛然、轟然としてその歸着するところを知らなかつたのである。

外國でもあの思潮は非常に大きかつた。文藝上から言へば、一フランスの一文學者の一宣傳にしか過ぎなかつたが、それが生活と雜り合ひ、實際と雜り合ひ、政治と交り合ひ、習慣と雜り合つて、いろいろな新しさをそこに持ち上げた。またたとへて見れば、長い間つかへてゐて何うにもならなかつた溝がその思潮の暴漲のためにすつかり綺麗に洗ひ流されたやうなものである。また更に言ひかへれば、さうした個人主義や超人や天才論があの大戰やあのロシアの革命を誘致する嚮導となつたとも言へるのである。

兎に角、さういふ大きな蹤のやうなものがそこに橫つてゐた。そしてそれにニイチエが觸り、トルストイが觸り、ゾラが觸り、イプセンが觸り、その他いろいろなやつが觸つて、そしていろいろなことを言つたり書いたりした。ダンヌンチオのやうな模倣性に富んだ作家の作品には、ことにさうした雜然とした傾向がはつきりと指さゝれた。

そしてその影響は國々に由つて違つた。フランスとドイツが一番その中心をなしてゐたであらうが、しかしロシアは一番純なだけそれだけ强くそれを感じたやうだつたし、また一番敎養に積んでゐただけそれだけイギリスはそれを感じなかつたと言つて好かつたと思ふ。ロシアのあの痛さ！　あの冷めたさ！　あの赤裸々さ！　あゝいふところからあゝした革命の一步は崩して行つてゐたのであらう。

それにしてもさうした得體のわからない世紀末の思潮をあの日露戰役と同時に劃時代的に日本が受けなければならなかつたといふことは、不思議なことである。靜に考へると、日本は內外共に隨分大きな危機に面して立つてゐたと言へる。そしてそれが同時に來ることが幸福であるとも言へる。今日になつて考へて見ると、あの日露戰役とあの世紀末の思潮の暴漲の侵入とは、全く日本を別なものにしたと言ふことが出來た。

恐らく今の若い人達がその以前の小說とその以後の小說とを並べて讀んで見たならば、いかにその差異の甚しいのに驚かずにはゐられないであらうと思ふ。私はつい最近『尾崎紅葉集』中の『紫』を讀んで見たが、今と昔とではあゝも違つてゐるかと驚かずにゐられなかつた。その辭、紅葉は私と歲がいくつも違つてゐるのではない。二つ三つしか違つてゐない。それでゐて、あの調子は！　あの文章は！　あの落語家そのまゝの口吻は！　隔世の感どころではない、百年も違つた時代の作者か何かのやうな氣がする。時代の變遷の早さ！　早さ！

抱月は外國から歸つて來て、『早稻田文學』をかれ自身管することゝなつた。それはかなりに文壇にセンセイションを與へた。

抱月は何う出て來るだらう。樗牛の死んだ後で、批評にかけて一番名聲があつたそのかれの行動には誰も注意を向けないものはなかつた。私などはことにそれに注意を拂つた。

その再生の『早稻田文學』第一號に出た『囚はれたる文藝』はかなりに問題になつた。勿論それは十分とは言へなかつた。あちこちに氣がねして言ひたいことが十分に言へなかつたやうな形もあれば、さうあまりに先きに出て行つて好いかわるいかに迷つたやうなところもあつた。『もう少し出て來れば好いにな』こんなことを私は國木田にも島崎君にも言つたことがあつたのを覺えてゐる。しかし抱月は外國の新歸朝者であるだけに、また流石にそつちの方も研究して來てゐただけに、新しい世紀末の思潮のことはかなりに深く知るには知つてゐたのである。たゞそれを思ひ切つて出すことを敢てしなかつたのである。

それは再生後の『早稻田文學』の二三號を見ればわかる。また抱月がいかにそれに滿足が出來ずに、次第に新しい方へ方へと出て來たかといふことも、それにつゞいた五六號を見ればわかる。いかな『早稻田文學』も十年前の平凡な客觀的文藝にはもはや甘んじてはゐられなくなつたのである。新しさに入つて行かなければ——どし〳〵ナチユラリズムに入つて行かなければ時世の氣運に伴ふことが出來ないといふことをはつきりと自覺したのである。

しかしこの抱月の態度には非常に反對があつたらしく思はれる。逍遙博士を始めとしていろいろな人達が面白く思はなかつたらしい。前に書いた高須、西村、佐野あたりのグルウプもそれに反對したらしい。そして島村君直系の相馬君だとか中村君（星湖）だとかがそ

の下で働くやうになつた。

私は抱月の觀照的な態度にはあきたらなかつた。それは私とてナチュラリズムがそのまゝ實行に移さるべきものだとは思つてはゐなかつたが、もう少し出て行つても好くはないかと思つた。あまりに傍觀的にすぎると思つた。その辯、抱月は後になつてその新しい心持をその實行に移した。（中略）

早稻田の人達は、あのナチュラリズムの運動は抱月が『早稻田文學』を振りかざしてそつちに向いて行つたので、それであの大きな運動が成り立つたやうに言ふが、それはさうではなくて、あゝいふ氣運がひとりでに曜然として起つて來たといふ方が、誰がやつたといふではなしに、また一人や二人の力といふではなしに、時代がさうなつて行つたからひとりでにさうならなければならなくなつた。ワツと言つていろいろな方面から新しい運動の旗幟が上つた。さういふ方が本當ではないか。尠くともさういふ方が事實に近くはないか。

それは個人々々から言へば、皆な抱持した主義もあれば傾向もある。私だつて一つの考へ方は持つてゐる。島崎君だつて島崎君特有の意見を持つてゐるだらう。ことに、岩野泡鳴などは新自然主義の大旆を翳して、俺の考へてゐることが一番新しいと自から言つてゐたくらゐだから、新しい運動は俺が中心だと思つてゐたかも知れない。しかしさういふ風には言ひたくない。やはり時代のおのづからなる要求がさういふ大きな巴渦を捲き起したといふ風に考へる方が文學史的考察に近いと思ふ。

だから獨歩の作の內部にナチュラリズムが目覺めてゐなくとも、その文體だけでもその時代の巴渦の中のひとりだといふことが出來るやうに、夏目漱石の小說も、高濱虛子の小說も、やはりその巴渦の中のものだと言つて差支なくはあるまいか。勿論、前に言つたやうに個々としては非常に差異がある。同じ系統として言はれ得べき漱石と虛子とでさへ全く別なものだと言はれ得るほどそれほど違つてゐる。私のものだつて岩野のものとは時には全く正反對だと思はれても差支ないくらゐ違つてゐる。しかしそれは一つ一つ取上げて來た時の議論だ。全體にその時代のものといふ感じ――三十年乃至三十二三年頃と四十年乃至四十二三年頃とでは、その文體に於ても、その感じに於ても、又その空氣に於ても全く別なものであるといふ點、その點に於て同じやうに論じらるべきものではないか。漱石のものなどにしても、ナチュラリズムに押されてゐる形にその同じ時代がありはしないか。ヨオロツパの他の諸國に雜り合はずにいつまでもその道德やその習慣を守らうとしてゐるイギリスの苦悶に似たやうなものがそこに發見されはしないか。また虛子のものにしても、わざとさういふ雜多な色あるものには觸れずに、あくまでも單色で行かうとしたところに、その新しさがありはしないか。

また、早稻田にしても、その觀照的なところは私自身としては甚だ不贊成で、その中にすら、あの平凡な客觀文藝が形をかへてその殘喘を保つてゐるのではないかと思はれるのだが、そのため、今日に至つても、そこから天才的な、人を眩惑させるやうな新しさが生れて來ないのだと思ふが、しかしさういふことは、一つ一つの個のあらはれで、もつと細かく言ふのなら言へるが、今回のやうな場合では、とてもそこまで入つて行くことは難かしいと思ふ。

兎にも角にも、あの潮流は大きかつたやうだ。壓倒的にやつて來たやうだ。それに一面實際生活と觸れ合つてゐるやうな點があつたので、政治方面からもかなりに大きな反響を來たしたやうである。何しろ新聞といふ新聞は大抵論說や社說でそれを攻擊したり何かしたのだから……。（中略）

兎に角にナチュラリズムといふものが、あの世紀末の苦悶の暴潮をそのまゝに持つて來て、前時代の文體やら言葉やら調子やら感じやらをすつかり綺麗に流して了つたのは愉快だつた。あれを境目にして人情も風俗も敎養もすべて變つて行つた。小說も丸で別なものになつた。

一五　肯定觀の文學

岩城準太郎

一　解題

一　本文

「增訂明治大正の國文學」中の一篇「近代文學の一生面」の抄錄である。「明治大正の國文學」は、初め大正十四年に刊行せられ、昭和六年增訂せられた。その凡例に作者自ら、「明治大正時代の國文學を研究する氣持は、自分みづからの經歷を回顧する氣持である。そこに明治以前の國文學を研究する時とちがつた特殊の感味がある。それは作品の優劣とか、作家の大小とかを比較することから起る判斷ではない。全く自分と連れ立つて生長して來たものを懷しむ情意の問題である。この親しさの心から、此の時代の國文學に關する追憶錄を書いて見たのが、卽ち本書である」と述べてゐる如く、明治大正時代の國文學の種々相を、半ば追憶的に、而も大體は系統的・組織的に記述・論評したもので、主として新しいものの誕生と成長とに關心が向けられてゐる。（增訂明治大正の國文學　一冊、昭和六年四月、成象堂發行）

二　作者

岩城準太郎（いはき じゅんたらう）。國文學者。明治十一年三月石川縣上新川郡大廣田村（現富山縣）に生まれた。富山中學校・第四高等學校を歷て、三十五年七月東京帝國大學文科大學國文學科を卒業、現に奈良女子高等師範學校敎授の職にある。明治文學研究の先驅者を以て目され、三十九年に出版せられたその著「明治文學史」（昭和二年增補改訂）は、最初の明治文學の體系的研究書として大きな歷史的價値をもつてゐる。著書には「明治大正の國文學」「明治文學史」の外、「表現と鑑賞」「新講日本文學史」「國文學史敎科書」「國文學の諸相」等がある。

三　採擇の趣旨

前課が現代文學に於ける自然主義の特色・意義の概觀であつた後を承け、本課には反自然主義文學の代表として、自然主義以後の文學に著しい發展を劃した漱石の文學に現れた人生觀の考察を掲げた。文化的敎材である。

二　敎材としての研究

一　註解

【肯定觀の文學】　コウテイクワンのブンガク　肯定觀に立脚してゐる文學。人生の價値を何等かの意味に於て肯定し、その肯定した意味の方向に於て生活の充實を求めようとする態度を基調とする文學。こゝでは、森鷗外・夏目漱石等の非自然主義の文學から、更に自然主義に對する反動・克服として擡頭した三田派・白樺派等の、所謂新浪曼主義・人道主義の文學を總稱してゐる。

【現實暴露】　ゲンジツバクロ　人生の現實の姿をありのままにさらけ出すこと。生活事實に於ける醜惡な側面を隱さず表し示すこと。長谷川天溪が明治四十一年雜誌「太陽」に「現實暴露の悲哀」と題する論文を掲げて、自然主義に關する根本思潮に就いて提唱して以來、自然主義文學の傾向を最もよく言ひ表した言葉として用ゐられた。

〔現實〕（三七九頁を見よ）

〔暴露〕「曝露」とも書く。（一）雨露・風雪にさらされること。（二）惡事・陰謀・祕密等の顯れること。ばれること。露見。

【標榜】　ヘウバウ　（三七六頁を見よ）

【自然主義文學】　シゼンシュギブンガク　（三七二頁「自然主義」の項を見よ）

【三田文學】　ミタブンガク　明治四十三年五月、永井荷風主宰の下に、慶應義塾大學文學部の機關雜誌として創刊せられた月刊の文藝雜誌で、大正十四年三月以後一時休刊、翌年四月水上瀧太郎を主幹として再刊せられ、今日に及んでゐる。

永井荷風は最初自然主義の洗禮を受けたが、明治四十一年歐米巡遊の旅から歸朝して以後、「あめりか物語」「ふらんす物語」等を經て「歡樂」「すみだ川」等にフランス藝術からの影響と江戸趣味への追慕とを盛つて、反自然主義の一旗幟を樹立した。隨つてその主宰の下に、更に學匠派ともいふべき森鷗外・上田敏等を顧問として生まれた「三田文學」には、當時の反自然主義の作家が多く集り、享樂的・耽美的な傾向と多彩な技巧とによつて所謂新浪曼主義の文學を擡頭せしめた。かくして前記の三氏竝びに義塾の教授小山内薫・馬場孤蝶・戸川秋骨等の外、與謝野寛・同晶子・吉井勇等の「スバル」に屬する人々、後藤末雄・谷崎潤一郎等の所謂新思潮派の人々、更に泉鏡花・薄田泣菫等も寄稿し、漸次三田派を形成するに至つた。但しその中純粋の三田派と名づくべきは荷風の推奬によつて輩出した塾出身の久保田万太郎・水上瀧太郎・佐藤春夫等である。大正五年荷風が塾を去り同時に主幹を辭して以後は、南部修太郎・小島政二郎・三宅周太郎等の作家を出したが、中心を失つた形で漸次衰へ、大正十四年には遂に休刊の已むなきに至つた。翌年水上瀧太郎を主幹として再刊せられ、以後主として塾出身者等の作品發表の任に當つて來たが、現在に於ては、前期三田派時代に於けるが如き鮮明な主義・色彩は見られない。

【白樺】　シラカバ　明治四十三年四月、武者小路實篤・有島武郎・有島生馬・志賀直哉・木下利玄・園池公致・兒島喜久雄・里見弴・柳宗悅・郡虎彦等（後、長與善郎も參加）の學習院出身の人々を同人として創刊せられた月刊の文藝雜誌で、大正十二年九月關東大震災以後廢刊せられた。

白樺派の文學運動は、西洋の新浪曼主義乃至新理想主義の哲學・藝術から多くの影響を受け、當時既に自然主義の無理想・無道德に對して漸次勃興しつゝあつた理想主義的氣運に乘じ、人道主義的な人間愛を基調として明るい希望に滿ちた文學の開拓に努め、大正初期には遂に文壇の主勢力となつた。同人のうち、最もよく白樺派の特色を代表し、且その中心として活躍したのは武者小路實篤で、トルストイ等の強い感化の下に人類愛を高唱し、單に作家としてのみならず思想家としても獨自の地歩を占め、長與善郎も亦その傾向を同じうした。有島武郎は同じ愛と理想とを說いたが、武者小路實篤の天上的・空想的傾向に對して地上的・寫實的傾向が多く、後年は更に社會主義的思想に傾き、志賀直哉・里見弴等は人道主義的正義觀を基調としつつより多く現實的な色彩を帶び、後年新現實主義の作家と目されるに至つた。かくしてこれ等の作家が强い內面的結束の下に約十年間、「白樺」を中心に文學的活動を續けたことは眞に文壇の盛觀と稱すべく、思想的に大きな影響を及したことは勿論、自由奔放な作品構成法や斬新・端的な表現法を確立して後繼文壇を稗益した。又ロダン・セザンヌ・ゴッホ等の泰西美術の紹介に努め、美術展覽會を催したこと等も大きな功績であり、更に新劇運動等にも貢獻するところがあつた。後、里見弴の脫退、有島武郎と他の同人との間に於ける意見の齟齬等を見、武者小路實篤も日向に去つて「新しき村」の事業に忙しく、且文壇に於ける主流も推移する等、種々の原因から、大正十二年遂に廢刊を見たが、その後も主たる舊同人の間には相當の連繫が保たれ、十三年四月には長與善郎を中心に雜誌「不二」が創刊せられ、新現實主義末期の文藝界混沌の時代に、白樺派的想念宣揚への努力が續けられた。

【享樂】　キャウラク　たのしみをうけること。たのしむこと。現在當面の生活に愉悅を求め、生活を豐富にしようとすること。

【耽美】　タンビ　美に耽りたのしむこと。人生の中から美の一面を抽出して、そこに悅樂を求め、生活を豐富にしようとすること。

【理想的】　リサウテキ　こゝでは、理想を尙ぶさま。理想の追求・實現に努力するさま。（二九頁參照）

【人道的】　ジンダウテキ　人道を尙ぶさま。人道を人生の究竟理念とし、その實現を念とするさま。

〔人道〕　humanity（英）　人間を人間たらしめる本質。人種・民族・國家・宗教の異同、老若・男女・貧富・貴賤・賢愚の差別等、一切の環境・素質に制限せられ全人類が普遍的に藏してゐると考へられる人間の本質であつて、一つの價値概念或は理念である。儒教に於ける仁、キリスト教に於ける愛、佛教に於ける慈悲等は人道の具體的表明である。

【享樂主義】　キャウラクシュギ　dilettantism（英）　享樂を以て人生究竟の目的となし、人生のあらゆる快樂を味はひ盡くすことによつて生活の充實を圖らうとする主義。

享樂主義は、既に古代ギリシヤに於けるアリスティッポス・エピクロス等の倫理說に現れたが、近代思潮としては耽美主義と相混じ、十九世紀の中葉以後科學文明・物質文明の行詰りから生じたもので、本能滿足說を唱へ、美的享樂を基礎とした個人主義を叫んでキリスト教思想に反抗したドイツのニーチェ等がその先唱者であるといはれる。爾來その思想に共鳴する者多く、遂に近代思潮の重要な一側面をなし、十九世紀末の文藝に深い影響を與へた。享樂主義の文藝の代表者としては、イギリスのオスカー・ワイルド、イタリアのダヌンツィオ、オーストリアのシュニッツラー等が擧げられ、我が國に於ては谷崎潤一郎・永井荷風等の文學に享樂主義的傾向が著しい。

【耽美主義】　タンビシュギ　aestheticism（英）　唯美主義ともいふ。美を以て人生に於ける唯一・至上のものとなし、美しきものの創造・鑑賞に生活の充實を求めようとする主義。

十九世紀中葉の合理主義・機械主義・凡俗主義に對する反動として同世紀の後半に起つた主義で、イギリスに於けるロゼッティ・スウィンバーン・モリス等の所謂ラファエル前派及びベータ等の主張に萌芽し、藝術の爲の藝術の旗幟を高く揭げたフランスのボードレール及びその影響を受けたイギリスのワイルド等を代表とする。然し、美を追求するの餘、人工的な美、不自然な美に趨り、所謂密室に香を炷きつゝ美の女神を禮拜する底の病的な美の崇拜に墮し、その不健全の故に自ら衰滅するに至つた。我が國では永井荷風・谷崎潤一郎・佐藤春夫等の文學にその特色が顯著である。

【人道主義】　ジンダウシュギ　humanism, humanitarism（英）　人道の實現を人生の究竟理想とする主義。人類全體の調和的向上を以て道德の最高目的となし、人格の平等を認め、同情・慈惠・獻身等の愛他的乃至博愛的精神を以て本義とする。

人道主義が文藝上の一主義として確立せられたのは、十九世紀の中葉、キリスト教精神を基調として愛他的・博愛的・無抵抗主義的思想を說いたロシアのトルストイに於てであり、同じくドストイェフスキーも亦別箇の人道主義的傾向を發揮した。次いで西曆一九一四年世界大戰の當初、フランスのロマン・ローランが戰爭の絕對反對を主張し、評論・小說等に人類愛に基づく平和論を强調したのを始として、大戰の半ばから以後にかけ世界各國に人道主義を中心とする戲曲・小說が多く現れた。我が國では既に明治三十年代に於て、德富蘆花等が深くトルストイの影響を受けたが、一つの文學運動として現れたのは勿論明治末期から大正前期にかけての白樺派のそれである。

【新理想主義】　シンリサウシュギ　neo-idealism（英）　十

九世紀後半の自然主義・實證主義の反動又は批判として現れた理想主義。十八世紀啓蒙思想の反動として勃興したドイツ浪曼主義、竝びにその影響を受けた英・獨の理想主義に對し、單に人間精神を尊重するのみにとゞまらず、科學的訓練を經、個人主義を通つた後に、科學を超越し、個人を宇宙に融合せしめようとする點に於て新しい發展を遂げた理想主義を意味する。

哲學上では、マーブル學派・バーデン學派（西南ドイツ學派）等の新カント學派、獨墺學派（ブレンタノ學派）、及びドイツのオイケン、フランスのベルグソン等の哲學を稱し、文藝上に於てはトルストイを最も熱烈な代辯者とし、その人道主義は新理想主義の別名とも考へられる。その他ロマン・ローランもこの派に屬し、更に進んでは積極的な理想の把持者であり、明るい人生の肯定者であるノルウェーのハムスン、又イタリアのパピニ・ピランデルロ等もこの派の代表作家と看做される。我が國に於ては、白樺の文學がその正流に屬する。

〔理想主義〕 idealism（英）（一）哲學上では、形而上學的意味に於ては唯心論（宇宙の本體を精神的なものとする哲學說）、認識論的意味に於ては觀念論（客觀的なものを主觀的なものから說明する哲學說）に同じ。（二）倫理學上では、道德的理想の絕對性を認め、それによつて生活を規定して行かうとする主義。現實主義に對立する。（三）美學上では、藝術的活動の理想化の作用を重んじ、作者の懷く理想を標準として題材の取捨・選擇をなし、これを表現しようとする立場。寫實主義・現實主義等に對立する。

【攝せられる】 とりいれられる。すべくゝられる。

〔攝する〕 セツする （一）その人に代つて事を行ふ。後見する。代攝する。攝行する。（二）兼ねて行ふ。兼務する。（三）をさめる。すべる。とりいれる。（四）もてなす。接持する。

【通觀】 ツウクワン 全體を見わたすこと。總てに互つて目を通すこと。通覽。

【切抜け】 キリヌけ

〔切抜ける〕（一）敵の圍みを切り破つて抜け出る。（二）辛うじて難儀の場處を脱れ出る。苦境を脱する。（三）むづかしい仕事をうまく果す。こゝは（二）。

【揆を一にしたもの】 ゆきかたの同じなもの。

〔揆を一にする〕 やりかた又はゆきかたが同じである。「揆」は「軌」とも書く。

〔揆〕 キ （一）はかり知る。（二）はかりごと。のり。みち。（三）大臣。宰相。（四）人民が黨を結んで上に反抗する運動。

【どす黑い】 氣味惡く黑い。毒々しく黑い。こゝでは、暗澹とした、陰鬱な、光明のない、といふほどの意。

〔どす〕 色・聲などの、濁つて鮮でない意を表す接頭語。

【厭世觀】 エンセイクワン pessimism（英） 人生に善や美の存在を認めず、又は認めつゝも惡や苦が壓倒的に多いと考へ、世界及び人生に對し失望・嫌忌の情をもつ精神的態度。その根據によつて氣分的厭世觀と理論的厭世觀とに分たれる。先天的憂鬱性、不幸の經驗、他人の裏切等の主觀的原因に基づくものが前者であり、快樂主義の立場から苦痛の多い人生を逃避しようとする一般の快樂論的厭世觀、世界を盲目的意志の所產と見、その世界意志の一部である人間意志も隨つて盲目的な活動で常に飽くなき欲望に驅られてやまないものであるとするドイツのショーペンハウエルの形而上學的厭世觀、人性の根本を惡と見て善や正は迷妄に過ぎないと說く道德的厭世觀、歷史的根據から文化發展は肉體的・道德的惡を增すのみであると說くルソーの歷史哲學的厭世觀等が後者の代表的なものである。

厭世觀的傾向は、早くイギリスのバイロン、ドイツのハイネ・ゲーテ、フランスのラマルティーヌ・ヴィニー、イタリアのレオパルディ等の浪曼主義文藝にも現れ、その他ゴリキー・ツルゲーネフ等のロシア文學にも見られる。我が國に於ては、古くから佛教思想から

來た厭世文學が相當多く現れてゐるが、明治に入つては、「文學界」（二十七年一月創刊三十一年一月廢刊）派の作家、殊に北村透谷等が、現實と理想との乖離に苦しんで深刻な厭世主義に陷つた。更に、人生の醜惡な面をより多く暴露した自然主義の文學に、厭世觀的傾向が現れてゐるのは勿論である。（次項參照）

【決定觀】　ケッテイクヮン　determinism（英）　決定論的な人生觀。我々の意志及び行爲は、何等かの原因によつて豫め規定・制約せられ、我々は決してこれを選擇・變更する意志の自由をもたないとする精神的態度。その規定・制約となる原因を如何に觀るかによつて、物理的因子又は環境の作用とする機械的・自然科學的決定觀、內的な意志・動機・性格等の作用と見る心理學的決定觀、神とする神學的決定觀、超感性的實體とする形而上學的決定觀等がある。

自然主義文學は、十九世紀文化の主要な精神をなすところの科學的精神に立脚して、意志や靈魂を否定し、

人間を一個の自然物乃至生物と看做し、萬般の人事現象を自然現象と同樣、或は物質と運動との物理的法則により、或は遺傳と環境との生理的法則によつて必然的に生起するものとした。その結果厭世的な考へ方の生じたのは勿論であるが、それを解脫とか自殺とかの方法によつて解決しようとはせず、絕望的ながらも生に執著して、無理想・無解決のまゝに生きようとするのが一般的傾向であつた。かゝる精神的態度が卽ち厭世觀・宿命觀・決定觀・虛無觀等と呼ばれるものである。

【血路】　ケツロ　（一）獵に傷ついた獸が逃げた、血痕のある路筋。（二）敵の圍みを切り開いて逃げる路。（三）困難な場合をきりぬける道。活路。こゝは（三）。

【樂天觀】　ラクテンクヮン　optimism（英）　人生に惡や苦の存在を認めず、又は認めつゝも兎に角この世界を可能なる最良のものとする　生觀。その根據によつて氣分的樂天觀と理論的樂天觀とに分たれる。幸福な惠まれた境遇に在る人や、青春の眞中に在つて總べてのものの輝かしく見える人等の、懷き易い感情的・主觀的なものが前者であり、人性の善を根據に人生の善を說くイギリスのシャフツベリの倫理的樂天觀や、この世界は一切世界中の最良の世界として神の創造したものであるとするドイツのライブニッツの神學的樂天觀等は後者の代表的なものである。

【通有】　ツウイウ　廣く通じて有すること。總べてのものに共通して具ること。

【空想的】　クウサウテキ　空想を喜ぶ。空想に耽りがちな。現實からかけ離れた考へ方をする。

【夢幻的】　ゆめまぼろしのやうな趣をもつた。夢でもみてゐるやうな。現實世界を遊離した。

【回避的】　クヮイヒテキ　現實の人生を嫌惡・恐怖して、それを避け脫れようとするやうな。

【世路】　セイロ・セロ　世を渡つて行くみち。又、渡つて行く世の中。世途。

【辛酸】　シンサン　いたみ苦しむこと。くるしみ。辛楚。酸辛。

【心境】　シンキャウ　心の有樣。精神の狀態。

【否定觀】　ヒテイクヮン　否定的な人生觀。人生の價値を否定して捨鉢な氣持になり、無解決・無理想のまゝで生き、又は自殺等の方法によつて生活を棄却しようとするやうな人生觀。厭世觀や決定觀の如きもの。

【實相】　ジツサウ　（一）實際の有樣。まことのすがた。眞相。（二）佛語。萬有の生滅の相を離れた眞實の相。如實の相。こゝは（一）。

【明治文學の大道に云々】

現實尊重の精神、實相直寫の態度を、あらゆる近代文學の主潮とし、我が國の明治文學も亦その潮流に棹さすものであるとする作者の所說は、「明治大正の國文學」中の隨所に散見するが、その中の「青年の文學から壯年の文學へ」の章中に於ても、「明治以來の文學の進んで來た道を顧みると、大體に於いて現實描寫の

一筋に集まつてゐる。逍遙の提唱した摸寫、紅葉等の作風である寫實、子規等の標語である寫生、四十年以後の文學に於ける現實、これらは總べて略同一の歸趣を有つもので、之を一語に約して現實の道といへるなら、明治文學の大道は卽ち現實描寫であるといへる」と述べてゐる。

【甘い】こゝでは、感傷的で理知を經たり意志に徹したりしてゐない、の意。

【人生觀】ジンセイクワン　人間生活の目的・價値等の全體に關する根本的・究極的・統一的な見解又は信念。世界の根本組織又は性質に關する哲學的解釋である。世界觀と密接不離の關係をもち、厭世觀・樂天觀等の外、この世は惡も苦も多いが、我々の努力によつて惡・苦を征服し、善・快を次第に增し得るとする改善觀等がある。世界觀との關係に就いては、人生觀の中に世界觀を含める場合もあり、反對に世界觀の中に人生觀を含める場合もあるが、概して人生觀は情緒的直觀を根柢とするに對し、世界觀は科學的認識や哲學的直觀を根柢とするといふことが出來る。

【夏目漱石及び其の一派の文學】所謂「餘裕派」の文學をさす。

「餘裕派」は、自然主義全盛の時代に於て、自然主義に對して傍觀的な態度を持し、森鷗外・上田敏等の一派と同樣、當時の文壇の一方に超然と存在してゐた一派で、夏目漱石・高濱虛子・伊藤左千夫・長塚節・鈴木三重吉・寺田寅彥等の一團をいふ。名稱は、漱石が虛子の短篇小說集「雞頭」（明治四十一年刊行）に寄せた序文に、所謂「餘裕のある小說」を唱へたのに由來するものであるが、その一派は何れも正岡子規の門流であるホトトギス派から出た人々で、俳人的な寫生文から小說に發展した文學であるところから、時に俳諧派又は寫生文派等とも呼ばれた。就中漱石はその中心で、自然主義に對して積極的な反對こそしなかつたが、その矯激に不滿を抱いて自ら別箇の世界を開き、人生の明暗を併

せ容れようとする東洋的な態度を根柢とし、一面英文學殊にジョージ・メレディス等の文學に學ぶところ多く、その東洋趣味と英文學趣味との渾融の上に獨自の風格を成した。その人生觀乃至藝術觀は、「草枕」に披瀝せられた「非人情」の說、晚年に到達した「則天去私」の境地等によつて端的に窺はれる。（四一三頁「低徊的」の項參照）

〔夏目漱石〕　ナツメソウセキ　（四二九頁作者を見よ）

【子規派】　シキハ　正岡子規によつて復興・革新せられた俳句・和歌の流派。一般に、俳句の方面では日本派、和歌の方面では根岸派等とも呼ばれる。

子規はまづ新聞「日本」に據つて、明治二十五年「獺祭書屋俳話」を、翌年三月に自作の俳句を發表したのをはじめとし、爾來俳論に句作に俳句の革新に努めて次第に勢力を獲得し、更に三十一年一月、前年松山で創刊せられてまもなく廢刊になつてゐた俳誌「ホトトギス」が、高濱虛子等によつて東京に移されるに及び、愈〻その陣容を擴大・整備した。かくしてその門下には內藤鳴雪・河東碧梧桐・高濱虛子等をはじめとして多くの新進を網羅し、鬱然として俳壇の中心勢力を成し、寫生主義を唱道し、芭蕉・蕪村等先人の藝術的價値を檢討・闡明し、俳句の文學的價値の闡明・確立に努めた。子規の歿後まもなく分裂して雜誌「日本及日本人」に據つた碧梧桐の一派と、「ホトトギス」に據る虛子の一派とに分れたが、更に明治四十一年頃から前者が新傾向の運動を起すに及び、この二派は全く相反する藝術觀に立つに至つた。

子規は更に、三十一年三月新聞「日本」に「歌よみに與ふる書」を揭げ、爾來與謝野寬等と反對の立場に立ち、萬葉調寫生主義を根本として更に短歌革新の叫を上げた。その流派は三十一年子規を中心に香取秀眞・岡麓等によつて組織せられた根岸短歌會を本として次第に隆盛に赴き、更に伊藤左千夫・長塚節等によつて發展せしめられ、子規の歿後は殊に左千夫を中心とし

て三十六年には雜誌「馬酔木」が、四十一年には雜誌「アカネ」が發刊せられ、更に同年雜誌「アララギ」が創刊せられるに及んで、子規の正流は所謂アララギ派として歌壇の中心勢力を成すに至つた。

〔子規〕　正岡子規。俳人・歌人。本名は常規。別に獺祭書屋主人・竹の里人等と號した。慶應三年九月伊豫國松山新玉町に生まれた。明治十六年松山中學を中途退學して上京、十八年大學豫備門（第一高等中學校の前身）に入り、又この頃から俳句・和歌等を學んだ。二十二年（三十歳）始めて喀血してから子規と號し、翌年第一高等中學校（第一高等學校の前身）を歴て帝國大學文科大學に入り、二十五年中途退學して日本新聞社に入社し、爾來新俳句を唱道して、俳句の革新を呼號した。二十八年從軍記者として渡滿したが、病に冒されてまもなく歸國、神戸・須磨等に病を養ひ、又歸省して當時松山中學に教鞭をとつてゐた夏目漱石の家に寄寓し、松山に俳風を起した。同年の秋東京に歸り、爾後終焉に至るまで下谷區上根岸町の根岸庵（子規庵）に病苦と戰ひながら、俳句の革新に傾倒し、更に三十一年には和歌革新の烽火を擧げ、翌年には寫生小品文を作つて文章革新を志す等、旺盛な活動を續けた。三十五年九月歿。享年三十六。

その著作は「獺祭書屋俳話」「俳諧大要」「俳句問答」「寒山落木」「墨汁一滴」「病牀六尺」「仰臥漫錄」等極めて多く、總べて「子規全集」（全二十二卷）に收められてゐる。その外古來の俳句を網羅・排列した「分類俳句全集」（全十二卷）も昭和三年から四年にかけて上梓せられた。

【散文】　サンブン　韻文が循環的律動を有するのに對して、直線的で、顯著でない律動を有する文をいひ、又詩が創造の文學であるのに對して、存在の敍說をいふこともある。種々に分類せられるが、記述・表白・自照の三種に分つのを適當とする。その他我が國の文章のみに就いていへば、用語の上から口語文・文語文・書簡文（候文）に分ち、或は書簡文に對して他を總べて普通文と稱

する場合もある。

【吾輩は猫である】　夏目漱石の長篇小說。明治三十八年一月から翌年九月にかけて前後十一回に亙り、雜誌「ホトトギス」に連載せられ、三十八年から四十年に亙り、上・中・下の三卷として刊行せられた。作者は當時英文學者として、又俳人として知られてゐたが、この作によつて忽ち世間の視聽を集め、文壇的地歩を獲得した。

內容は、自ら「吾輩」と稱する一匹の猫の第一人稱的敍述によつて、その飼主である中學校教師苦沙彌先生とその家庭及び若干の交友を描き、隨所に猫の觀察に假託して作者の社會觀・文明批評等を加へたもので、全體に亙り筋の統一には缺けてゐるが、任意に雜多の事件を配列してゆく間に輕い皮肉と諧謔とを連發し、世間の粗、人間の粗を穿つて獨特の妙味を發揮してゐる。描寫・敍述の方面に於ては、幾分寫生文式の諄さと冗慢さとが見えるけれども、上品で新味のあるユーモアの味は、讀者を甘美な笑の世界に引入れるに十分の力をもつてゐる。

【小說】　セウセツ　世態・人心等の觀察を背景として現實の世界に於て起り得るやうな事實を構成し、自由な散文の形式によつて表現する文學。大別して架空的な傳奇小說（romance（英））と現實的な寫實小說（novel（英））の二つに分けられるが、近代文學としては寫實小說が主流をなし、現代に於ける最も有力な文學形態を成してゐる。更に量の上から長篇小說・中篇小說・短篇小說等に、題材の上から宗教小說・農民小說・探偵小說・冒險小說・家庭小說・戀愛小說・滑稽小說・科學小說等に、夫々分類せられ、その他本格小說・私小說・心境小說・通俗小說・純粹小說等種々の名稱が行はれてゐる。

小說の語はもと支那から起り、我が國の文獻では夙に「弘仁私記」の序に見え、巷談・世說の類をさしたものと解せられるが、古くは物語・お伽草子・浮世草子・讀本・洒落本・人情本・滑稽本・草雙紙（假名本・青本・黑本・赤本・黃表紙・合卷）等の名稱によつて行

はれ、一般に用ゐられるやうになつたのは明治十年頃からで、十八年に出た坪内逍遙の「小說神髓」によつて、始めて今日使用してゐるやうな內容を確實に與へられるに至つた。

【隨筆】　ズヰヒツ　自己の見聞・體驗・感想等を隨意に書き集めたもの。日記・紀行に似てゐるが、それらのやうに、時日や場所の制約がない點で一層隨意であり得る。古くは漫錄・漫筆・漫記ともいひ、近くは隨想錄・隨感錄等とも呼ばれ、特に essay（英）の意に用ゐられる場合が多い。內容上の傾向を主として類別すれば、（一）知識的方面を主とした記錄的・考證的なもの、（二）情趣的方面を主とした文藝的なもの、（三）以上の二者を包攝し、且批判的・內省的傾向の濃厚な、所謂哲學的隨筆ともいふべきもの、等が主要なものに屬する。

隨筆の語は、支那では宋の洪範の「容齋隨筆」、我が國では室町時代に出た一條兼良の「東齋隨筆」に始るといはれてゐるが、隨筆の體を成してゐるものはそれ以前にもあり、我が國では「枕草子」「徒然草」等が古く、それ以後各時代を通じて作られた。殊に大正末年頃からは文學の一形態として正しく價値づけられ、昭和に入つて益〻多くの隨筆が現れてゐる。

【長篇】　チャウヘン　篇章の長い詩又は小說。長篇小說は、量を主として分類せられた小說の一體で、短篇小說に對し、比較的長いものをいふ。複雜にして廣大な事件を取扱ひ、作品の中に人生全體を示現するやうな構想を用ゐ、又一篇の中に多くの問題を含む場合が多い。

【文壇】　ブンダン　文學者等が關係する活動範圍を漠然といふ語。文學者の社會。文學界。

【坊ちやん】　夏目漱石の短篇小說。明治三十九年四月雜誌「ホトトギス」に發表せられ、四十年一月「草枕」「二百十日」等と共に「鶉籠」と題して刊行せられた。「草枕」と相對して、作者初期の二つの相反する作風を代表した作品であるといはれる。

內容は、渾名を坊ちやんと呼ばれる物理學校出の青年教師を主人公に、四國邊のある中學校に於ける教員生活の種々相を描き出したもので、坊ちやんと山嵐といふ渾名のある男とが、赤シャツといふ渾名のある教頭の隱謀に對して正義感から反抗するといふ場面が中心になつてゐる。全體ユーモラスな氣分と描寫とに滿ちた作品で、一見殆ど無技巧とも見えるやうな、直線的な、齒切れのよい表現によつて江戸つ子風の生一本な主人公の性格を如實に浮き出させ、一氣に快讀させる。蓋し漱石の作品としては、最も大衆性の勝れたもので、市川猿之助等によつて上演もせられ、又映畫にもなつた。因みに、本作は、明治二十八年四月から約一箇年教鞭をとつた愛媛縣松山中學校に於ける作者の經驗や印象、並びに幼時の追憶等が主な材料となつたといはれる。

【草枕】　クサマクラ　夏目漱石の短篇小說。明治三十九年九月雜誌「新小說」に發表せられ、翌年一月「坊ちやん」「二百十日」と共に「鶉籠」と題して刊行せられた。當時の文壇を驚歎せしめた才氣縱橫の創作で、作者の初期の一つの作風を代表するものである。

內容は、一人の青年畫家が春の山路を越えて或る溫泉場に辿り著き、逗留中に奈美さんといふ才氣の鋭い一女性と親しくなる、畫家は女から顏を描くやうに頼まれたが、どことなく物足りないところがあつて、そのまゝでは描く氣になれない、ところが或る日、女は停車場に人を送りに來て、零落した元の夫が、過ぎ去つてゆく汽車の窓から顏を出したのにぶつかつて、茫然と見送る、その顏に今まで見たことのない憐れの表情が浮かぶ、それを見逃さなかつた畫家の頭にも始めて一つの畫が出來上る、といふ簡單な筋を中心に、種々の人物や事件を描いたもので、非人情の境地を主とする作者の人生觀・藝術觀に具體的表現を與へてゐる。

單純で直線的な「坊ちやん」の表現に比し、曲折が多く線の細かい點に於て著しい對照をなし、文章は、歐

文脈の句法と俗語と漢語の成句とが巧みに調和されてゐる。因みに本作は、作者が第五高等學校在職中、明治三十年の冬季休暇を利用して熊本縣玉名郡小天温泉に越年した時の旅行を素材としてゐるといふ。（卷一、六「峠の茶屋」及び卷八、四「東洋の詩境」參照）

【短篇】　タンペン　篇章の短い詩又は小說。

短篇小說は、量を主として分類せられた小說の一體で、長篇小說に對し、比較的短いものをいふ。單一な出來事と單一にして主要な人物とを出來るだけ壓縮的・有機的に取扱ひ、人生の比較的際立つた一角度を鋭敏に把握することによつて、その底に潛む人生の全圖を反照するやうな構想が用ゐられることが多い。

【それから】　夏目漱石の長篇小說。明治四十二年六月二十七日から十月十四日まで、東京及び大阪朝日新聞に連載せられ、四十三年一月單行せられた。作者自ら本作の豫告に於て、「色々な意味に於て、それからである。『三四郎』には大學生の事を描いたが、此小說にはそれから先の事を書いたからそれからである。『三四郎』の主人公はあの通り單純であるが、此主人公はそれから後の男であるから此點に於ても、それからである。此主人公は最後に、妙な運命に陷る。それからさき何うなるかは書いてない。此意味に於ても亦それからである」といつてゐるやうに、ある意味に於て「三四郎」を前篇とし、「門」を後篇とする三部作の中篇を成すものである。

內容は、長井代助と呼ぶ主人公が、一緒に學校を卒業して以來數年間、兄弟のやうに親しく交際して來た友人平岡常次郎の妻三千代と眞劍な戀愛に陷り、平岡にも絕交され、父からも兄からも見放され、半狂亂の體で電車に飛び乘る、といふ筋で、作者にとつては戀愛問題を正面的に取扱つた最初の作である。明治四十年代の代表的知識階級を素材とし、肉體も精神も纖細な主人公の、周圍のあらゆる良識に對する服從を拒否してひたすらに自己の感受性の成育に餘念のない姿が、感覺的・印象的な表現によつて緻密に描かれてゐる。

【明暗】　メイアン　夏目漱石の長篇小說。大正五年五月二十六日から東京及び大阪朝日新聞社に連載せられたが、作者の死によつて中斷し、百十八回までで未完成のまゝ殘され、翌年一月單行せられた。從來の作者の總べての作品はこの一篇の大成の準備として用意せられたものであるといはれるほど、集大成的・企畫的・野心的な創作であり、寬容な心を以てあらゆる人間の自然を認めようとする創作態度に、晩年の作者が人生觀・藝術觀として思念した則天去私の境地を窺ふことが出來る。

內容は、津田由雄といふ主人公を中心に、お延といふその妻と清子といふ女性との三角關係を描き、津田が入院して手術を受ける頃から妻の夫に對する疑惑が生じ、その未解決のまゝに津田はある溫泉場に轉地して、偶然そこに湯治に來てゐた清子に遭ふといふところで中斷せられてゐる。主人公のエゴイズムを中心に、登場する總べての人間の裡に見出されたそれ〴〵の流儀に於ける利己主義の樣相と、その交錯・反撥・引牽する姿を、鋭敏な觀察と自由な想像と精確な描寫とを以て表現し、讀者の深刻な自己批判を促すやうな趣をもつてゐる。

【境界】　キャウガイ　佛語。（一）主觀が活動する區域の意で、總べて認識作用に於ける對象或は對境をいふ。（二）轉じて、人の到達した人格的地位・分限・果報等をいふ。こゝは（二）。

キャウカイと讀む場合には區域、範圍、の意。

【客觀し得る心境】　客體として冷靜に相對することの出來るやうな精神の狀態。

〔客觀〕　カククワン　object（英）　自己以外のもの。意識の目的物。主觀即ち自己の精神作用の對象となる一切の外物。主觀の對象となるものであれば、物的と心的、實在的であると觀念的であるとを問はず客觀である。（主觀の對）。

【超越】　テウエツ　こゝでは、世俗を超えた一段の高所に立ち、しかも世俗に在ること。離れてゐることでもなけ

れば、卽いてゐることでもなく、離れて卽き、卽いて離れてゐること。

【拘泥】コウデイ　かゝはりなづむこと。一つの事に執著して變通を知らないこと。とらはれること。

【異彩を放つて】きはだつて見えて。

〔異彩〕イサイ　(一)異なつた色どり。かはつた光。(二)特別の光彩。すぐれた色彩。

【俳諧的】ハイカイテキ　俳諧者の對人生の態度、卽ち現實に對して不卽不離の立場に立つこと。(四一三頁「低徊的」の項參照)

〔俳諧〕「誹諧」とも書く。たはむれ、滑稽、の義。廣義には、發句(俳句)・連句(長篇の俳諧)の總稱として用ゐられ、狹義には、連句のみをさす。こゝは廣義。

俳諧は元來、「俳諧連歌」の略で、連歌の滑稽なものを稱したが、室町時代の末期に山崎宗鑑・荒木田守武等によつて獨立の機運を與へられ、江戸時代に入つて松永貞德を宗とする古風の俳諧、西山宗因を宗とする談林の俳諧等を生み、貞享・元祿の頃に於て、遂に松尾芭蕉によつて純粹藝術の域に高められ、幽玄・閑寂な趣のものとなつた。以後幾多の變遷・消長があつたが、谷口蕪村・久村曉臺等を中心とする安永・天明の俳壇に再興し、明治時代に入つて正岡子規の革新運動となり、連句が衰へて俳句の發展となり、新生命を吹込まれて今日の隆盛を招來するに至つた。

【困憊】コンパイ　くるしみつかれること。難儀して氣力がないこと。困弊。

【文學的解脫】ブンガクテキゲダツ　文學によつて人間的苦惱を解脫すること。文學を創作し又は鑑賞することによつて、私情の桎梏を離れ、人生を靜觀し得るやうな境地に入ること。

〔解脫〕梵語 Vimukta 又は Vimokṣa, Vimuti の譯語。繫縛を離れる意。煩惱と業との束縛を離れて自在を得、迷界の苦を脫すること。

【正義感】セイギカン　正義を要求する氣持。

〔正義〕「公正」ともいふ。正しい道義。道德法に基づき、各人をしてその當然享け又は負ふべき權利・義務・褒賞・刑罰等を享け又は負はしめること。

【利欲の肉塊】リヨクのニククワイ　利欲のかたまりのやうな人間。自分の利益を貪ることに汲々としてゐる人間。

〔肉塊〕(一)肉のかたまり。肉のきれ。(二)身體。肉體。

【名聞の臭骸】ミヤウモンのシウガイ　名聞を求めるのに汲々としてゐる人間。ひたすら名聞を求める俗臭芬々たる人間。

〔名聞〕世上に聞える名譽。世間へのきこえ。ほまれ。

〔臭骸〕臭いからだ。見苦しいからだ。

【喜劇】キゲキ　comedy (英)　滑稽・諧謔・機智・諷刺・揶揄等によつて笑を喚起するやうに面白く仕組んだ劇。好笑的な明るい人生の一局面を主題とするか、或は全體が眞面目でも幸福な落著を告げるやうに仕組まれ、主題の擇び方、題材の取扱ひ方等によつて、境遇喜劇・性格喜劇・社會喜劇・政治喜劇・幻想喜劇等に細別せられる。

【江戸時代】エドジダイ　(二二頁「近世の文學」の項を見よ)

【芭蕉】バセヲ　(一一七頁作者を見よ)

【近代的】キンダイテキ　こゝでは、文藝復興期以後の自我の解放に基づく個性の尊重、思想の自由、自然的現實的傾向の重視等の特色をいふ。

〔近代〕西洋史學に於ける歷史の時代區劃の一。上古(古代)・中古(中世)・近古(近世上)・近世(近世下)・現代(最近世)の五期を置く場合の、近古・近世・現代、卽ちアメリカ發見(西暦一四九二年)以後の總稱。但し文學史上、近代文學等と稱する場合には、一般に小說に於ては自然主義以後、劇に於てはイブセン以後、詩に於ては印象主義・象徵主義以後の文學をさす。

【低徊的】テイクワイテキ　低徊趣味を帶びてゐること。

餘裕ある氣分で、こせつかずに、人生や社會を觀察しようとする傾向・態度。

「低徊趣味」は夏目漱石が高濱虚子の小說の作風を論ずるに當つて創始した言葉で、當時の文壇を風靡した自然主義作家の趣味とは正反對な趣味を意味する。即ち虚子の小說「鷄頭」の漱石の序文に於て、小說を二種に區別して餘裕のある文學と餘裕のない文學とし、その餘裕のある文學のもつものを低徊趣味と名づけ、「先づ一と口に云ふと一事に即し一物に倒して、獨特もしくは連想の興味を起して、左から眺めたり右から眺めたりして容易に去り難いと云ふ風な趣味を指すのである。（中略）所が此趣味は名前のあらはす如く出來る丈長く一つ所に佇立する趣味であるから一方から云へば容易に進行せぬ趣味である。換言すれば餘裕がある人でなければ出來ない趣味である」とある。この趣味は實は虚子に限らずホトトギス一派の人々の作風に共通するもので、漱石は虚子に就いて語ると共に、又自らに就いて語つたのであつた。故に世間からは虚子・漱石をはじめ、ホトトギス關係の小說作家の作風として認め、これを餘裕派又は俳諧派と稱したのである。

〔低徊〕「低徊」「低佪」「低回」とも書く。首を垂れて、ふりかへりみること。行きつ戻りつ、立ち去りかねること。思案しつゝ歩きまはること。

【門】　モン　夏目漱石の長篇小說。明治四十三年三月一日から六月十二日まで、東京及び大阪朝日新聞に連載せられ、翌年一月刊行せられた。「三四郎」「それから」と共に三部作をなし、その中の後篇に當るものである。

内容は、皆て世間の義理に背き高い犠牲を拂つて結婚し、京都・廣島・福岡等到る所で生活に苦しみ、再び東京へ戻つて來て腰拂生活をしてゐる宗助とお米とよぶ二人の、さゝやかなつましい生活を描いたもので、極めて地味なものわびしい作である。

因みに、「三四郎」「それから」「門」の三作が、主人公も生活條件もそれ〴〵異なつてゐながら、三部作と見られるのは、「三四郎」に於ては青年期の夢幻的な戀愛を、「それから」に於ては壯年期の自覺的な深刻な戀愛を、「門」に於ては生活的な戀愛を描くといふやうに、その主題とするところのものに聯絡があり、發展があるからである。

【東洋風】　トウヤウフウ　東洋的。東洋の特質・傾向・風習等をそなへてゐること。

普通、西洋的と東洋的とには、知的と情的、分析的と直觀的、論理的と實踐的などの傾向が對照して考へられ、日本的なものはその東洋的なものの純粹なものとせられる。

〔東洋〕（一）印度・支那・日本その他、アジア諸國の汎稱。（歐米諸國を西洋といふのに對する。）（二）アジアの東方、即ち支那・日本等の稱。（三）支那から見て、日本の特稱。

【日本的】　ニホンテキ　日本の特質・傾向・風習をそなへてゐること。日本風。

【新浪漫主義】　シンラウマンシュギ　neo-romanticism（英）「浪漫」は「曼」とも書く。十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、自然主義乃至現實主義の反動として起つた文學思潮。種々な要素を混入してゐるが、機械主義的・唯物主義的な自然主義に對する反動思潮の中、新理想主義が精神生活を高調し、人間性の光明、理想の靈光等を求めることに努めたのに對し、藝術至上主義・享樂主義・耽美主義・神祕主義等の所謂デカダン的傾向を有するのを著しい特徴とする。十九世紀末に於けるフランスの頽廢派・象徴派を先驅とし、二十世紀の初頭ドイツ・オーストリア等に著しく擡頭し、世界大戰前まで一勢力を有してゐた。その代表的作家としては、ドイツのハウプトマン・ゲオルゲ、チェッコスロヴァキアのリルケ、オーストリアのホフマンシュタール等が擧げられる。

我が國の文學に於ける新浪曼主義は、新理想主義に先んじて明治末年に擡頭し、大正三四年まで文壇に一勢

力をなした。その代表的作家としては、享樂的傾向の強い永井荷風、耽美的・惡魔主義的傾向の濃厚な谷崎潤一郎、富瞻・瑰麗な幻覺的表現の中に世紀末的な頽廢と異國情調への憧憬を歌つた北原白秋等が擧げられ、小山内薫・木下杢太郎・長田秀雄・高村光太郎等にも享樂的・耽美的傾向が多く、その他森田草平・鈴木三重吉・小川未明等も主觀的・情緒的傾向の故に大體この派に屬する。

〔浪漫主義〕 romanticism（英） 十八世紀末葉から十九世紀初頭にかけて、古典主義の煩瑣な傳統に對する反動としてヨーロッパに起つた、主として藝術上の主義。自由と個性を尊重し、現實以上のある何等かの新しい世界、あるべき世界を憧憬し、隨つて憧憬的・展望的・空想的・主觀的・傳奇的・情熱的・破壞的・飛躍的の特色をもつてゐる。代表的作家としては、文學にドイツのシュレーゲル兄弟・ノヴァーリス・ティーク・ホフマン、イギリスのワーズワース・コールリッヂ・スコット・バイロン・シェリー・キーツ、フランスのシャトーブリアン・ユーゴー・スタンダール等があり、音樂にドイツのシューベルト、繪畫にフランスのジェリコー・ドラクロア等を生んだが、十九世紀の後半、自然主義が勃興するに及んで終熄した。我が國に於ては、明治の中期、即ち二十年頃から三十四五年頃までの時期の文學が、大體浪曼主義的傾向を主潮とし、就中北村透谷・島崎藤村等の文學界派の人々によつて純粹な浪曼主義の文學が育まれた。

【イズム】 ism（英） 一般に「主義」と譯される生活原理をいふ。

【やけ】 事物が意のまゝにならぬ爲に、前後を辨へず亂暴な行をすること。やけくそ。すてばち。自暴。自棄。

【見どたへ】 見或は讀んで見て、心に響くもの又はしつかりとした底力の感じられること。

【擯斥】 ヒンセキ しりぞけて遠ざけること。

〔擯〕 しりぞける。のけものにする。外へ斥け棄てる。

二　解釋

1　主題　反自然主義文學として出現した夏目漱石の文學。

2　構想

(1)　自然主義の否定觀に對して擡頭し來つた肯定觀の文學（初―一一一ノ九）。

(2)　肯定觀に立脚した夏目漱石の文學（一一一ノ一〇―一一六ノ三）。

イ　漱石の作品に見える超越の態度。

ロ　漱石の作品に見える超越の態度に對する批評の批評。

(3)　漱石文學の成長（一一六ノ四―終）。

3　敍述

〔明治の末年所謂現實暴露を標榜する自然主義文學が盛に行はれてゐた頃〕――日露戰爭の頃勃興し來つた所謂後期自然主義文學は、島村抱月・長谷川天溪・岩野泡鳴等の評論と國木田獨歩・島崎藤村・田山花袋・正宗白鳥・德田秋聲その他の作品によつて、日露戰爭當時から明治末年にかけて著しい活動を示した頃をいつてゐるのである。

〔何れも人生を肯定して、どうにか現在の狀態を切拔け、生活の意義を見つけようとしてゐる點に於ては揆を一にしたものであつた〕――自然主義文學が人生の價値を否定する人生觀に立脚したものであつたのに對して、人生の價値を肯定する人生觀に立脚した文學が樣々な形で擡頭し來つたのである。

〔人生を肯定するといつても、昔からの所謂樂天觀に通有の空想的・夢幻的・回避的な肯定なら何の珍しいこともないのであるが、一旦否定しなければならないやうな世相に面接して、其の暴露された醜さに戰慄した後に、それでもこれ

をどうにかしようと立上つて來る肯定觀なら、眞に世路の辛酸を嘗めたものだけが持ち得る心境であつて、かなり複雜微妙な味に到達してゐるのである」――人生の價値肯定に於ける二段階を述べたものであるが、結局その差異は否定觀通過の有無に外ならない。そしてそれは歷史的發展の段階であることはいふまでもない。

〔一度は此の境界を脫却してこれを客觀し得る心境を作り、更に此の世の中に歸り住んで、其の超越の態度で人生を味はうとするのである」――否定觀を通過した肯定觀の文學としての漱石文學に於ける人生觀の構造を示した章で、一言にしていへば超越の態度といふことであり、更にいへば過程として、隨つてその立場に於て客觀を含む態度に外ならない。これが世人から餘裕派・高踏派等の稱を與へられ、俳諧的といはれ回避的と批難せられた所以であつた。

〔人間の生死問題や自己の煩悶・苦患をも、月・花と同じに眺め得る點は俳諧的である」――「心頭滅却すれば火も亦涼し」といふ境界であらう。俳諧にいふ、不卽不離の態度に外ならない。

〔例へば重病に苦しむ、困憊の極に達する、其の心持を文學に作る、其の瞬間に文學的解脫の境に入るのである」――超越の態度、不卽不離の態度の例說であるが、恐らく正岡子規の臨終を念頭に置いて書いたものであらう。

〔又例へば、世の中は不合理に出來てゐて、持つて生まれた正義感を滿足せしめない。利欲の肉塊、名聞の臭骸、何れを見てもいやになる。これを舞臺上の喜劇を見る氣持で眺める。其の刹那其のいやな味から解放せられるのである」――夏目漱石の「坊ちやん」を念頭に置いた例說であらう。正義感の爆發と喜劇化とはたしかに「坊ちやん」の中心思想である。

〔江戸時代の俳諧に比べると甚だしく嚴肅味を加へてはゐるが、やはり芭蕉の建立した世界を近代的にしたものといふことが出來る」――こゝで「江戸時代の俳諧」といふのは、蕉風の末流が諧謔を弄し、幇間的宗匠に墮した傾向をさしたものであらう。漱石の俳諧的と呼ばれる態度には可笑味が發揮せられてゐるけれども、その底には人生の苦悶や悲痛が潛んでゐる。こゝで「芭蕉の建立した世界」といふのは俳諧的といふことであり、不卽不離の態度といふことであらう。「近代的にしたもの」といふことは、人生の苦悶に直面し、悲痛な現實を體驗してゐるものといつても遠くはないであらう。

〔恐れず、憎まず、一段の高所からこれを包容愛撫しようといふのである」――漱石の態度は回避ではなくて包容であるといつてゐる。苦悶を恐れるのでもなく、苦悶を回避するのでもなく、これを包容して、その眞意義に徹しようといふのであるといつてゐる。

〔これは東洋風の、特に日本的の對人生の態度であつて、……絕望せず、やけにならず、靜かに生の味はひに徹しようとするところは、正に肯定觀の文學である」――所謂自然隨順の態度であつて、苦悶の中に、悲痛の底に何等かの意義が存在することを信じて行く行き方に外ならない。

三　批評

漱石の文學を肯定觀の文學となし、その意義を考察して歷史的地位を闡明した論であつて、漱石文學の價値的定位を主とした考察である。

考察の過程に稍論旨の脆弱を感ぜしめるやうな箇處がないわけではない。例へば漱石文學の肯定的態度を歷史的に定位しようとして「人生の實相は醜であるにしても、これを醜として暴露することはもう濟んでゐる」といつてゐる如き、うつかりすると漱石の文學が自然主義の殘滓を嘗めたものであるかのやうにいつてゐるともとれる。そして漱石の文學意識に存した自然主義に對する反撥的なものが出てゐない。又漱石の文學が同じ肯定觀の文學の中にあつても「最も見ごたへ

のあるものであつた」ことをいふ場合でも、「それは現實のどん底を見極めて來てから、さてこれを振返つて眺める境地に立つてゐるからで」としてゐる如き、やはり自然主義を經過した文學と定位しながら、「さて振返つて眺める程度」ではその經過の仕方に必然性が認められてゐないやうに受取れる。自然主義に對する否定的發展の境地ではないやうにも解せられる。むしろそれが作者のいはうとした趣旨であるかもしれないが、さうならば、それは論旨の脆弱に匂はせて置く程度ではなく、一言批判の言葉を加へるべき問題であらうと思はれる。漱石文學に對する好意的批評として考へると、さういふ點が多少問題にせられて來る。

三　備　考

一　指導の問題

（一）當時の文壇の事情を知らず、漱石の作品を讀み通してゐない生徒には、この文の理解に必要な事實の知識が十分でない筈である。この二點については指導者が補說するか、圖書室に於ける自習を課するか、何等かの適切な指導が必要である。生徒の自習に任せてよいだけの圖書室の設備がある場合は格別として、指導者の補說に俟たなくてはならない場合には、この文をみ、この文を解釋する上の必要から要求せられた箇處で、簡明的確に補說するのが、最も弊害の少い學習の指導であらう。

哲學又は文學批評の術語として用ゐられてゐる語の註解は、指導者に於て十分な用意の下に、平明適切な答解が與へられなくてはならないと思ふ。

（二）解釋として力を用ゐなくてはならない點は、構想を明らかにし、主題を確認することである。敍述の問題は比較的多くはない。大體は註解を精しく行ふことに附帶して果されるであらう。

論旨を明確にする爲に肝要な點は、一一二頁から一一三頁にかけて述べられてゐる超越の態度の構造とその史的地位の理解である。これが根柢になつて、俳諧的・回避的といはれた世評の批判が行はれ、餘裕・徒徊の理解が可能にせられてゐることは見逃しがたい。この箇處が明らかになれば、構想も見え、主題も確認せられて來る。この點の理解が十分に成立しなければ、他の箇處も表面的理解にとゞまるであらう。本課學習指導の成否を決定すべき箇處として、十分な理解に達せしめなくてはならないと思はれる。

（三）前課が自然主義文學理論であつたのに對して、本課はその否定的發展として現れた反自然主義文學の評論であるところに學習の一問題が存立する。そして自然主義文學が如何なるものとして、如何に出現したか、又それの否定的發展としての肯定觀の文學が如何なるものとして、如何に出現したかといふことは、日本文藝の史的展開の問題たるのみではなく、當時文藝があらゆる文化の主動的地位を占めてゐただけに、日本文化史上、精神史上の重大な問題である。そしてこゝにも日本的なるものの實現が存することを學ばせなくてはならないであらう。

二　參考資料

（一）作者の所謂人生肯定の文學の特色に關する考察を、「明治大正の國文學」中の「人生肯定の文學」と題する章から抄錄する。

此の類の文學は、自然主義的の文學に對する反動の性質を有つてゐる。其の出現は必ずしもそればかりに因るのではないが、出てからは反動の勢に乘つた氣味が無いではない。此の點で、これらの文學は、西洋文學史上二十世紀の初めに出た新文學の性質に似てゐる。日本文學の變遷は、西洋文學の歷史と同一の徑路を取るとは定まつてゐないが、自然主義以後の文學の潮流は、會々似通つた狀勢に在

るのである。蓋しナチュラリズムの文學は、事物の眞相を表出するに遺憾は無かつたが、どうもいやに學術的で、殺風景で、味もそつけも無いものが出來たりした。中には人生の眞相を描寫しようとしながら、却つて人情の自然に遠いものが出來たりしたのである。極端まで推して行つて行詰つて、こゝに反動が起つたのである。こゝで又西洋文學とのパラレルが引かれる。

ナチュラリズムがどうして行詰まつたか。そは第一に、科學的の人生觀が世の中の不思議の滅絶しないのに閉口して身代限りをした事に由るのである。第二に、この種の文學作品に取扱ふ題材は、確實なファクトに相違ないが、人間といふものは現に在る通りの事實では滿足しないもので、日常平凡の事物以外に、偉大な事、英雄的な物を要求し、醜惡暗黑な事物の外に光明的な快美な事物が欲しく、現實的なものばかりでなくて理想的なものも有りたく思ふのであるから、文學の題材にも之を要求するやうになつたのである。第三に、科學的研究法で精細に探求しようとはしたが、人生には他の生物や自然界の事物のやうに實驗といふ方法を適用することの不可能であることが分つて來たのである。同時に描寫法に就いても、人格を沒した客觀寫實は到底出來ない相談であつて、心を明鏡止水にするの、無念無想になるのといふけれども、それは畢竟論理的の遊戯だといふことが分つて來たのである。

此の行詰りから反動を引起したのが、西洋では大略一八八九年前後といはれる。それはフランスやベルギーで、理想主義、唯心說、自由意志論に關する著書や創作が頻りに出初めた時を指していふのである。此年あたりを回轉軸として新しい世界が開けて來て、フランスは勿論、ロシヤ、イタリヤ、ドイツ、オーストリヤ、ベルギー、デンマーク、ノルウエー、スウエーデンなどの大陸諸國は、すべて此の仲間入りをなし、ナチュラリズムの流行に外れてゐたイギリス、アメリカまでも此の新潮を汲むやうになつた。

大體においてナチュラリズムの反動であるから、主觀唯心の思潮の復活となつて現はれるはずである。卽ちナチュラリズム以前に榮えたロマンチシズムの復興となるわけである。然しながら以前のロマンチシズムがそのまゝ再興するのでないことは言ふまでもない。むしろナチュラリズムを併合した新しいロマンチシズムの興起といふ方が適當である。卽ちナチュラリズムの破壞的精神や、消極的悲觀的人生觀や、無理想無信仰の生活や、醜惡病的な事物の描寫などを拔きにして、ロマンチシズムの理想主義、情緒主義、內容主義、獨創主義、直觀主義などを取入れたものと見てよろしい。此のイズムを Neo-Romanticism 又は Neo-Idealism と名づけるのは、これらの特質からである。

此のイズムの人生に對する態度は、何よりも先づ之を肯定することである。この生を愛し、この生を創り、生ほし立てて行かうとすることである。卽ちすべてナチュラリズムの否定憎惡破壞の反動である。「生れ、現はれ、滅ぶ、此の中の一番後の語を忘れてしまへ、人間は死なないものと考へて生活し、唯今の刹那が永遠に續くものと考へて之を味ふが善い」といふのは、卽ち此の人生觀を端的に言現はしたものである。（中略）

次に、此の人生觀の特色とするところは、唯心唯物の混一、靈と肉との一致といふ點にあつて、ナチュラリズムのが專ら唯物的肉體的であつたのと違ふのである。これには色々種類があつて、一概に考へると誤解の起る虞がある。此の世は無趣味であり、不愉快であり、醜惡であるから、せめて自己の快樂だけでも求めて、それに生きがひのある人生を見つけようと努力するのも、其の一つである。これは一寸見ると安つぽい樂天觀のやうであるが、實は絶望的な世の中でも直ぐに見切りをつけないで、一度は見直して行かうとする根氣な努力があるのである。又一寸見ると怖ろしい世の中に面と向ふのがこはくて逃廻る卑怯な觀方と考へられるけれども、よく檢べて見ると、死ぬかヤケになるかの瀨戸際をやつと踏みこらへて此の世にへばりつき、飽くまで快樂を貪つて、一刻の油斷なく新たな刺擊を求め、自分に與へられる總べての快味を吸取らうとする積極的な見方である。

又、心靈界の神祕は不可知なものだとして諦めるにも及ばず、神祕は無いものだと多寡をくゝるにも及ばない。人間には肉の世界から靈の世界を覗きこむ直觀といふ力がある。これによつて夢幻と事物の本體を見ることが出來ると觀ずるのも其の一つである。之を見るのは無論科學的の明晰さからでなく、縹渺たる情調の中からである。無形の實相を有形の事物に寄せて見るのである。肉の中に靈を見るのである。卽ち靈肉の合致した觀方である。

又、科學的研究を尊重して生物進化の學說を承認はするが、それがために宿命觀に陷らないで、更に人間以上のものに進化しようと心がける行き方もその一つである。人間は進んで現在のものよりも優越な健康と頭腦とを有するものに爲らねばならぬ、少くとも人の中の英俊になり、更に進んでは人の中の神にならねばならぬといふのである。

又、唯物的宿命的の人生觀では、自己を否定してその生滅を蟲けらの生死と同樣に見てゐたが、生命は捨てたくない、生きられるだけ生きたいから、生活を改造し人生をより善くしてその中に長らへ住まうといふのもその一つである。之はナチュラリズムが捨てた理想といふものを、復た拾ひ上げたのである。生命の愛、人間の愛、人類愛、人生愛、すべて歌道に對する人道を行かうとする人生觀である。

（二）漱石の文學觀を見る爲に、漱石自ら高濱虚子氏の小說「鷄頭」（明治四十一年刊）に寄せた序文を抄錄する。（決定版「漱石全集」第十三卷に據る。）

餘裕のある小說と云ふのは、名の示す如く過らない小說である。「非常」と云ふ字を避けた小說である。不斷着の小說である。此間中流行つた言葉を拜借すると、ある人の所謂觸れるとか觸れぬとか云ふうちで、觸れない小說である。無論觸れるとか觸れないとか云ふ字が曖昧であつて、しかも余は世間の人の用ゐる通り好加減な意味で用ゐて居るのだから、此字に對して明かな責任は持たない積りである。只ある人々の唱へる意味に於て觸れない小說と云つたら一番はや分りがするだらうと思つて、曖昧ながらわざ〳〵此字面を拜借したのである。と云ふものは、まづ字の定義は御互の間に默契があるとして、ある人々は觸れなければ小說にならないと考へて居る。だから余はとくに觸れない小說と云ふ一種の範圍を拵らへて、觸れない小說も亦、觸れた小說と同じく存在の權利があるのみならず、同等の成功を收め得るものだと主張するのである。

觸れない小說の意味をもう少し說明しないと余の所存が貫徹しまいと思ふ。余は自己の考を述べて、こんな風にも小說は解釋が出來るものだと讀者から認めて貰へば好い。喧嘩を賣る料簡でもなし、賣られた喧嘩を買ふ氣もない。從がつて思ふ通りを思ふ通りに述べて誤解のないやうに力めて置かなければならない。

個人の身の上でも、一國の歷史でも相互の關係（利害問題にせよ、德義問題にせよ、其他種々な問題）から死活の大事件が起ることがある。すると渾身全國悉く其事件になり切つて仕舞ふ。普通の人間の樣に行屎走尿の用は足して居るが、用を足して居るか、居らぬか氣が付かぬ位に逆上せて仕舞ふ。先達て友人が來てこんな話をした。小田原で暴風雨があつた時、村の漁船が二三杯沖へ出て居て、どうしても濤を凌いで磯へ歸る事が出來ない。村中一人殘らず渚へ出て焚火をして浮きつ沈みつする船を眺めて居る許りである。此方から繩を持つて波を切つて、向うの船へ投げ込んで、其繩を引いて陸へ上げるのが彼等の目的である。がさう思ふ樣に目的は達せられんので晩からかけて翌日の午後の三時頃迄は村中濱へ總出の儘風の中、雨の中を立ち盡して居た。所が其長時間のうち誰一人として口を利いたものがない又誰一人として握り飯一つ食つたものがないとの事である。かうなると行屎走尿すら便じなくなる。餘裕のない極端になる。大いに觸れてくる。同時に眼前焦眉の事件以外何にも眼に這入らなくなる。世界が一本筋になる。平面になる。寢返りも出來ない樣に窮屈になる。なつても構はないがそれ許りが小說になると云ふ議論がどうして出來る。世の中は廣い。廣い世の中に住み方も色々ある。其住み方の色々を隨緣臨機に樂しむのも餘裕である。觀察するのも餘裕である。味はうのも餘裕である。此等の餘裕を待つて始めて生ずる事件なり事件に對する情緒なりは矢張依然として人生である。活潑々地の人生である。描く價値もあるし、讀む價値もある。觸れた小說と同じく小說になる。或人は淺いと云ふかも知れない。淺いと云ふ點に於ては余も同感である。然し價値がないと云ふ意味に於て淺いと云ふなら問違つて居る。此場合に於ける深いとか淺いとか云ふのは色の濃いとか薄いとか云ふのと一般で、濃いから上等で薄いから下等と云ふ評價のつけられる譯のものでは勿論ない如く毫も作物を高下する索引にはならないのである。

護謨を延ばして、今少し引つ張ると切れると云ふ所迄構はず持つて行く。惡いとは云はない。然し此所迄引つ張つてびんとさせなくつちや駄目だよと云ふに至つては、緊張の趣は解して居るが痕容の味は解し得ない人だと云はれても仕方がない。のびない護謨もゆとりがあつて面白いと云ふ人を屈服させる譯には行かない。

茶を品し花に灌ぐのも餘裕である。冗談を云ふのも餘裕である。繪畫彫刻に閒を遣るのも餘裕である。釣も謠も芝居も避暑も湯治も餘裕である。日露戰爭の永續せざる限り、世間がボルクマンの樣な人間で充滿しない限りは餘裕だらけである。而して吾人も已を得ざる場合の外は此餘裕を喜ぶものである。從つて此等の餘裕より生ずる材料は皆小說となつて適當である。（喜ぶから小說になると云ふと小說は娛樂の爲めと云ふ意味になる。此を詳しく說明しやうとすると小說の目的と云ふ議論になる。機會を見て余は此點に關する自己の意見を述べたいと思ふが、今は詳說する遑がないから別に云はぬ。只小說は娛樂を目的にしてはならぬと云ふ議論は成立せぬ。從つて娛樂も亦小說の一目的として存在し得るものだと許り一言して置く。）

以上は餘裕ある小說の說明である。既に餘裕ある小說を說明した以上は餘裕なき小說も大概其意味が分つた筈であるが。一言にして云ふとセツパ詰つた小說を云ふのである。息の塞る樣な小說を云ふのである。一毫も道草を食つたり寄道をして油を賣つてはならぬ小說を云ふのである。呑氣な分子、氣樂な要素のない小說を云ふのである。たとへばイプセンの脚本を小說に直した樣なものを云ふのである。大いに觸れたものを云ふのである。所謂イプセンの書いたもの抔は先づ吾人の一生の浮沈に關する樣な非常な大問題をつらまへて來て其問題の解決がしてある。しかも其解決が普通の我々が解決する樣な月並でなくつてへえと驚ろく樣な解決をさせる事がある。人は之を稱して第一義の道念に觸れるとも、人生の根元に徹するとも評して居る。成程吾々凡人より高く一隻眼を具して居ないとあんな御手際は覺束ない。只此點丈でも敬服の至りである。然し斯樣に百尺竿頭に一歩を進めた解決をさせたり、月並を離れた活動を演出させたり、篇中の性格を裏返しにして人間の腹の底にはこんな妙なものが潛んで居ると云ふ事を讀者に示さうとするには勞ひ篇中の人物を度外れな境界に置かねばならない。餘裕をなくなさなくつてはならない。セツパ詰らせなくつてはいけない。そこで大抵は死活問題が出てくる。一世の浮沈問題が持ち上がつて來る。（必ずとは云へない。人間は一寸風を引いたのが動機になつて內的生活に一革命を起さぬとは限らぬ。然し大體の傾向はと云ふと以上の如くである。）（中略）

余は小說を區別して餘裕派と非餘裕派としてイプセンを後者の例に引いた。で前云つた通り此種の小說の特色としては人生の死活問題を拉し來つて、切實なる運命の極致を寫すのを特色とする。讀者は此點を擧げて此種の作物を謳歌し、余も亦此點に於て此種の作物に敬服する。所で此種の作物に對する賞讃の辭を聞くと第一義とか、意味が深いとか、痛切とか、深刻とか云つて居る。余は此賞讃の辭に對して是非を爭ふ料簡はない。ないがこれが小說の極致であるかと問はれると、さうさなと首を傾けざるを得ない。成程是等の作物は第一義の道念に觸れて居るかも知れぬ。然し其第一義といふのは生死界中に在つての第一義である。どうしても生死を脫離し得ぬ煩惱底の第一義である。人生觀が是より以上に上れぬとすると是が絕對的に第一義かも知れぬが、もし生死の關門を打破して二者を眼中に措かぬ人生觀が成立し得るとすると今の所謂第一義は却つて第二義に墮在するかも知れぬ。俳味禪味の論がこゝで生ずる。

余は禪といふものを知らない。昔し鎌倉の宗演和尙に參して父母未生以前本來の面目はなんだと聞かれてぐわんと參つたきりまだ本來の面目に御目に懸つた事のない門外漢である。だからここに禪味抔といふ問題を出すのは自分が禪を心得て居るから云ふのではない。智識のかいたものに悟とはこんなものであるとあるから果してそんなものなら、かう云ふ人生觀が出來るならば小說もこんな態度にかけるだらうと論ずるまでゝある。

禪坊主の書いた法語とか語錄とか云ふものを見ると魚が木に登つたり牛が水底をあるいたり怪しからん事許りであるうちに、一貫して斯ふ云ふ事がある。着衣喫飯の主人公たる我は何物ぞと考へ〳〵て瞑じ詰めてくると、仕舞には、自分と世界との障壁がなくなつて天地が一枚で出來た樣な虛靈皎潔な心持になる。それでも構はず元來吾輩は何だと考へて行くと、もう絕體絕命につちもさつちも行かなくなる、其所を無理にぐい〳〵考へると突然と爆發して自分が判然と分る。分るとかうなる。自分は元來生れたのでもなかつた。又死ぬものでもなかつた。增しもせぬ、減りもせぬ何んだか譯の分らないものだ。

しばらく彼等の云ふ事を事實として見ると、所謂生死の現象は夢の樣なものである。生きて居たとて夢である。死んだとて夢である。生死とも夢である以上は生死界中に起る問題は如何に重要な問題でも如何に痛切な問題でも夢の樣な問題以上には登らぬ譯である。從つて生死界中にあつて最も意味の深い、最も第一義なる問題は悉く其光輝を失つてくる。殺されても怖くなくなる。金を貰つても難有くなくなる。辱しめられても恥とは思はなくなる。と云ふものは凡て是等の現象界の奧に自己の本體はあつて、此流俗と浮沈するのは徹底に浮沈するのではない。しばらく冗談半分に浮沈して居るのである。いくら猛烈に怒つても、いくらひい〳〵泣いても、怒りが行き留りではない、涙が突き當りではない。奧にちやんと立ち退き場がある。いざとなれば此立退場へいつでも歸られる。しかも此立退場は不增である、不減である。いくら天下樣の御威光でも手のつけ樣のない安全な立退場である。此立退場を有つて居る人の喜怒哀樂と、有たない人の喜怒哀樂とは人から見たら一樣かも知れないが之を起す人之を受ける人から云ふと莫大な相違がある。從つて流俗で云ふ第一義の問題も此見地に住する人から云ふと第二義以下に墮ちて仕舞ふ。從がつて我等から云つてセツパ詰つた問題も此人等から云ふと餘裕のある問題になる。

所謂禪味と云ふものを解釋した人があるかないか知らないが、禪坊主の趣味だから禪味と云ふのだらう。さうして禪坊主の悟りと云

ふものが彼等の云ふ通りのものであつたら余の解釋に間違はなからうと思ふ。して見ると禪味と云ふ事は暗に餘裕のある文學と云ふ意味に一致する。さうしてその餘裕は生死以上に第一義を置くから出てくる。

一六　秋露

夏目漱石

一　解題

一　本文

「思ひ出す事など」全三十三節のうち、第二十四節及び第三十節を抄錄した。「思ひ出す事など」は、明治四十三年八月修善寺に於て胃潰瘍の爲に病臥した時の思ひ出を中心とした作者の隨筆で、同年十月から翌年二月まで大阪及び東京朝日新聞に掲載せられた。後、四十四年八月に刊行せられた作者の隨筆評論集「切拔帖」に收める際、嘗て東京朝日新聞に掲載した「病院の春」と題する一文を最後の一節として附加へた。大正四年九月には春陽堂から單行もせられた。漱石全集第九卷・同普及版第十三卷等に收められてゐる。（漱石全集（普及版）　全二十卷、漱石全集刊行會發行）

二　作者

夏目漱石（なつめそうせき）。英文學者・小說家。本名は金之助。慶應三年正月江戸馬場下（現東京市牛込區喜久井町一番地）に、名主夏目小兵衞直克の末子として生まれた。三歲の時養子に遣られたが數年後實家に歸つた。一ツ橋中學校（東京府立第一中學校の前身）を半途退學後、二松學舍・成立學舍に學び、明治十七年東京大學豫備門豫科（第一高等學校の前身）に入り、途中一回原級に留つて、二十一年本科に入り、二十三年卒業。帝國大學文科大學に入學し、英文學を專攻して特待生となり、又學費補給の爲早稻田專門學校に教鞭をとつた。二十六年英文學科卒業、更に大學院に入學し、次いで高等師範學校（東京高等師範學校の前身）・松山中學校・第五高等學校に教へ、三十三年

文部省の命により英語研究の爲英國に留學。三十六年歸朝、第一高等學校教授に任じ、東京帝國大學講師となり、三十七年から明治大學にも出講したが、四十年一切の教職を辭し、朝日新聞社員となり、出勤せずして文藝的述作を掲載することとなつた。四十二年滿洲遊行、翌年胃潰瘍の爲吐血して重態に陷つたが、この大患によつて人及び藝術上に一轉機を來した。四十四年博士號辭退。大正五年十一月胃潰瘍の爲大出血二回、十二月永眠した。享年五十。明治二十四年頃から句作に專念して子規と交遊が厚く、俳壇にも一地位を占めてゐた。三十八年一月から雜誌「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載して一躍文名を轟かした。三十六年頃からは繪筆を弄び、歿年なる大正五年頃も頻りに書畫をものしてゐる。又五年夏から秋にかけては漢詩を作ることが多かつた。著作には「吾輩は猫である」「倫敦塔」「薤露行」「坊ちやん」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「それから」「門」「彼岸過迄」「行人」「心」「硝子戸の中」「道草」等があり、絶筆「明暗」は未完のまゝ遺された。小說・俳句・書簡・紀行・文學論・文學評論・隨筆等すべて漱石全集に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

「肯定觀の文學」の一例として揭げた。死に直面して生きかへつた、その喜の眼に映つた自然美で、深い肯定觀から生まれた一語一句である。文藝的教材であり、文化的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【秋露】　シウロ　秋にむすぶつゆ。

【五六十幅】　〔幅〕　フク　こゝでは、掛物を數へるに用ゐる接尾語。

【床の間】　トコのマ　日本建築に於て、座敷の上座の床を一段高くしたところ。正面の壁に書畫の幅等をかけ、床板の上に置物・花瓶を飾る。

もと禪家の風であつたが、足利時代に書院造の建築の創成後武家に取入れられたものである。當初は佛像を安置し或は佛畫を掛け、その前に燭臺・香爐・花瓶の所謂三具足を飾つたが、後代佛畫に代つて花鳥・山水等の軸が掛けられるやうになり、單なる座敷の裝飾として取扱はれるに至つた。豐臣・德川時代に發達大成し、特に德川の泰平期、茶道・生花の流行に伴なつて種々に變形せられ、多くの種類を生じた。

【藏】　クラ　貨物・商品・家財等の火災・濕氣・盜難を防ぎ、これを安全に保管・貯藏する目的を以て造られた建物。構造により土藏・石藏・煉瓦藏・鐵筋コンクリート藏・校倉・穴倉等がある。こゝでは、土藏であらう。

我が國の土藏造は、壁は木舞（壁の下地にわたす竹）に土を厚く塗りつけたもので、防火・防濕・防盜の效果著しく、近代まで行はれたが、石造・煉瓦造の輸入により次第に廢れ、現在では多く鐵筋コンクリート造が建てられるやうになつた。

【蟲干】　ムシボシ　夏の土用の頃に、書畫・衣類・調度等を日に乾したり、風にさらしたりして黴や蟲などを防ぐこと。蟲拂。土用干。

【懸物】　カケモノ　「掛物」とも書く。書畫を表裝して軸物とし、床間・壁などにかけて室の飾とし、又賞玩するもの。掛軸。

掛軸・軸・軸物・幅などといふのは桃山時代以後の稱で、室町時代には本尊或は單に繪又は掛繪、書の場合には掛字といつた。（本尊といふのは佛畫等から出た名であらう。）室町時代以前未だ床の間のなかつた時代には山水・花鳥・書等の掛物はなく、高僧の畫像・佛畫の類のみであつた。（佛畫をかけることは古く奈良朝頃から行はれてゐた。）

【默然】　モクネン・モクゼン　口をつぐんで言はないさま。

【南畫】　ナングワ　東洋畫の一。南宗畫・文人畫等ともいふ。明の董几昌が南北の別を論じて以來北畫（北宗畫・院體畫ともいふ）と相對して支那繪畫史の二大傾向を代表する名稱となつた。この別は南・北支那の歷史的・地理的その他文化的の條件の相違を反映するもので、北畫が好んで靜止的永久相を描き、客觀的・寫形的・楷書的で、描寫の精細、色彩の絢爛、筆致の剛健を特徴とするに對し、南畫は多く流動的瞬間相を捉へ、主觀的・寫意的・草書的で、描寫の簡素、色彩の沖淡（多くは墨色の變化によつて諧調の色彩に對する情趣を表し、色彩を用ゐるにも青綠・淺絳の如き淡彩を用ゐた）、筆致の雅潤を特徴とした。北畫は散文的・建築的、南畫は詩的・音樂的ともいふべく、南畫家が常に繪畫を以て「無聲之詩」とする所以もこゝにあり、繪畫に好んで詩を題するのもこの派の一特色である。

南畫の根本思想をなす隱逸幽雅の風懷は老莊以來支那思想上の最も有力な傳統の一で、繪畫に於ても唐の吳道元等に夙にその傾向を認め得るが、普通には董几昌に從つて王維（詩）を以て南畫の鼻祖とする。爾來五代及び宋の荊浩・關同・李成・董源・巨然・郭忠恕・米芾・米友仁等を經て、元の四大家黃公望（久子）・王蒙（明叔）・吳鎭（仲圭）・倪雲林（元鎭）によつて完成せられ、明に沈石田・文徵明・董几昌・唐白虎、清に王時敏・王鑑・王原祁・王石谷・吳歷・惲南田（以上を四王吳惲といふ）・八大山人・石濤等が輩出して遂に北畫を壓倒するに至つた。我が國に於ても、既に室町時代の釋梵芳（玉）・相阿彌等にその傾向を見得るが、江戸中期に至り、逸然・隱元等黃檗の緇徒、沈南頻・伊孚九等舶客の感化により、祇園南海・彭城百川等に次いで池大雅・與謝蕪村・桑山玉洲等の出づるに及んで南畫の獨立性が認められ、化政以降浦上玉堂・田能村竹田・谷文晁・渡邊崋山・立原杏所・中林竹洞・椿椿山・山本梅逸・岡本秋暉・鐵翁祖門等によつてその最盛期が現出された。維新以後は西洋畫の輸入に伴なひ複雜な發展を示したが、野口幽谷・長井雲坪・瀧和亭・寺崎廣業・富岡鐵齋・小室翠雲・橋本關雪等はその傾向を代表する作家である。

尙、南畫は本來形似よりも精神を尙ぶ結果概念的に墮することもあるが、北畫の緊密な寫形的手法が往々作爲的硬直を示すに對し、却つてその率意的な寫意的表現に脈々たる自然觀を湛へるものもある。又概して水墨を主とし色彩に淡白であるが、惲南田以來花鳥には色彩の顯著なるものがあり、我が國でも椿山・梅逸・秋暉・和亭など華やかな傳彩法を發達せしめ、富岡鐵齋の山水は大膽な色調を以て人に迫るものがある。

【藏幅】　ザウフク　所藏の掛物。

〔幅〕　こゝでは、軸物、掛物、の意。

【構圖】　コウヅ　英語の composition に當る。主として繪畫に於ける、描寫せられるべき物體や色彩や光などの排列。

普通には單に視覺的概念として扱はれ、特に繪畫のみに關するもののやうに考へられてゐるが、美學上ではその概念は更に擴大して用ゐられる。卽ち、藝術的表現の要素を（相互關係に於て、又全體に對する關係に於て）種々に配合・按排し、作品に於ける所謂形式上の美的效果を大ならしめようとする手段である。造形美術中でも、彫刻にあつては、盛上げや線の配合を意味する。このやうな繪畫や彫刻等の表現的藝術では、構圖は、要するに單にその形式的側面に關する手段となるべきものであるが、音樂などの純粹な形式的藝術の場合には、樂曲の制作手續は全然この手段に歸著すべきものであるから、結局、所謂作曲を意味することになる。また文學に於ては、作品全體中に於ける箇々の要素の排列卽ち所謂構想に相當する。構圖は繪畫なり、彫刻なり、圖案なりの最初の印象に重きをなし、極めて重大な要素である。イタリア十五六世紀の繪畫には構圖上の典型を示すものが多い。

【鑑識】　カンシキ　こゝでは、見分けさとる力、鑑定する眼識、めきゝ、の意。

【山水によつて畫を愛するの弊】　繪畫そのものの藝術的價値よりも素材としての山水の如何によつて畫の好惡を決

めるといふ弊害。畫の觀賞法として幼稚なのをいつた。

〔山水〕　サンスヰ　(一)山と水と。(二)山と水とを備へた景色。又、その畫。(三)山間の水。(四)築山と池水。(五)ものさびしいこと。

〔弊〕　ヘイ　(一)つひえ。つかれ。やぶれ。(二)惡いくせ。弊害。惡習。惡弊。こゝは(二)。

【名前によつて畫を論ずるの譏】　繪畫そのものの藝術的價値よりも畫家の有名・無名によつて價値を決めるといふ非難。

〔譏〕　ソシリ　そしること。あしざまにいふこと。けなすこと。又、その言。非難。

【詩】　シ　こゝでは、漢詩卽ち支那固有の詩。「やまとうた」に對して「からうた」ともいふ。

漢詩の起源は甚だ古く、周代にはすでに大いに盛行して體裁も備り、更に唐代に入つて絕句・律詩の體が起つた。これを近體詩といひ、古體詩と區別する。古體詩は短篇・長篇・短句・長句に制限なく、轉韻も自由

で、文字の平仄にも拘らなかつたが、近體詩になると字數・句數・平仄・韻法に嚴格な法則が出來た。我が國にも早くから傳はつて廷臣の間に流行し、奈良朝及び平安朝初期には甚だ盛であつたが、後次第に衰へ、室町時代には、總かに五山の僧によつて勝れた作が遺された。德川時代に入つて再び盛になつたが、明治以後、西洋詩歌の影響等によつて衰へた。

【的皪】　テキレキ　「的歷」とも書く。あざやかなさま。鮮明なさま。

〔的〕　あきらかなさま。あざやかなさま。

〔皪〕　あきらかなさま。

【春に照る】　春の季節の象徵として輝かしく咲いてゐる。

【柴門】　サイモン　しばのと。柴扉。

【畫絹】　エギヌ　書畫の揮毫に用ゐる平織の白い生絹。精選した生絲を使用して織り、絲目正しく極めて美しい光澤を有する。使用する時は多く先づ枠を張り礬水(礬と水とを合はせ煮て布で濾し、それに明礬を加へたもの)を引いて用ゐる。(礬め礬水を引いた「與絹」といふのもある。)その地

質が厚く平滑で織斑のないのを上等品とし、織方によつて一丁杼(杼(製織の際、緯絲を通すに用ゐられる舟形の具)一丁のみで織つたもの)と二丁杼(杼を替へて織つたもの)とに分ける。大きさは幅一尺乃至四尺(〇・三米乃至一・三米)、丈六尺(一八米)位が普通である。

【しけ〳〵】　つく〳〵。よく〳〵。しげ〳〵。

【迂闊】　ウクヮツ　まはりどほいこと。事情にうといこと。注意の行き屆かないこと。

【泥を塗つた】　ドロをヌつた　こゝでは、汚した、の意。普通は、恥辱を被らせた、面目を失はせた、の意であるが、やゝ誇張してユーモラスにいつた。

【實際的】　ジッサイテキ　こゝでは、風流を解せず、實生活の問題にのみ關心をもつてゐる、の意。

【水道を引く】　水道を家に引き入れる。水道を敷設する。

〔水道〕　スヰダウ　飲料水・使用水等に供すべき水を導き來つて適當の淨水方法を行ひ、都邑の住民等に配給する施設。上水道。

水道の水源には通常、山間の淸水或は深鑿井の水を用ゐ、これを淨水池に集め、沈澱・濾過・消毒等により衞生上有害な物質を除去した後、水に一定の壓力を附け、鐵管・鉛管等を用ゐて各所に配給する。

【空が空の底に沈み切つた樣に澄んだ】

空が深く澄んでゐるさまをいつた。

【射返し】　イカへし　こゝでは、太陽の光線の反射。照返し。

【浴き】　アマネき

【溫もつた】　ヌクもつた　あたゝまつた。

【赤蜻蛉】　アカトンボ　蜻蛉目、蜻蛉科中、主としてあかねとんぼ屬のものの俗稱。なつあかね・あきあかね・みやまあかね・まゆたてあかね・のしめとんぼ等はその主なるもので、赤色美麗な種が多く、晩夏より仲秋にかけて我が國各地の人家附近・原野・水田・池沼等、殆ど到る處に群をなして現れ、古來詩畫・歌俳の題材に供せられてゐる。

赤蜻蛉の代表的なものとして古來文人に愛好されてゐ

るのは、主としてなつあかね（夏茜）及びあきあかね（秋茜）で、前者は八月から九月、後者は九月から十月の頃現れ、いづれも雄は赤色乃至暗赤色、雌は黄色を呈し、腹背の兩側に黒紋がある。翅は透明で、體長四〇粍、翅長六五粍内外である。

【人よりも空】　ヒトよりもソラ　人に對してゐるよりも空に對してゐる方が望ましい、の意。

【語よりも默】　ゴよりもモク　ものをいふよりは默つてゐる方がよい、の意。

【肩に來ての句】　肩に來てとまつて、いかにも親しさうにしてゐることよ、この赤蜻蛉は、の意。作者はそれをじつと見つめてゐるのである。

季は「赤蜻蛉」で秋。

【東京へ歸つた】

作者は明治四十三年八月六日轉地療養のため修善寺に向かつたが、二十四日同地に於て胃潰瘍の爲に吐血し、約三箇月後の十月十一日東京に歸り、直ちに麹町區内幸町の長與專齋氏の胃腸病院に入院した。

【秋露下南磵】　シウロナンカンニオリ　秋の露が南の谷に下りて。

〔磵〕「澗」に同じ。

「澗」は、山と山との間に在る水流。谷川。谷。

【黄花粲照顏】　クワウクワサントシテカホヲテラス　谷間に咲いた菊の花が燦爛と照り輝いて顏を照らすばかりである。

〔黄花〕（一）黄色な花。（二）菊。

〔粲〕「燦」に通じて用ゐられる。あきらか。あざやか。

【欲行沿澗遠】　ユキテカンニソウテトホカラントホッシテ　谷川づたひに遠く行かうと思つて。

【却得與雲還】　カヘッテクモトカヘルヲエタリ　ところが雲と一緒に身は元のところに歸つてゐた。雲に心をとられて何となくそれと一緒に動いてゐるさまをいつた。

〔却〕　反對に。逆に。あべこべに。

〔得〕　こゝでは、輕い意味の語で、さういふ風な成行になつた、といふほどの意。

【百合】　ユリ　百合科、ゆり屬の植物の總稱。（廣義には百合科全體をさしていふこともあるが、一般には主としてゆり屬のものに就いていふ。）多年生草本で、地下に俗に百合根と呼ばれる球狀の鱗莖（小形の地下莖の上に多肉の鱗片葉の群生したもので多くは食用に供せられる）を有し、春日〇・三乃至一米位の地上莖を出して披針形乃至長橢圓形の葉を互生又は輪生せしめ、夏の頃莖頭に一箇又は數箇の美花（白色・淡紅色・赤色・帶黄・稀に紫黑色）をつける。花は六花被から成る離瓣花又は合瓣花で、六雄蕊・一雌蕊を具へ、花被内面に蜜槽がある。果實は長橢圓形の蒴果で、種類によつては葉腋に珠芽を生ずる。てつぱうゆり・かのこゆり・おにゆり・やまゆり・ひめゆり・すかしゆり・ささゆり・くるまゆりその他種類が頗る多く、園藝品種も夥しく作られてゐるが、こゝでは、恐らくやまゆりをさしてゐるのであらう。

「やまゆり」（山百合）は、山野の向陽の地に自生し、鱗莖は球形、地上莖は一米餘にも達する。葉は先端の尖つた卵狀披針形乃至披針形で、柄短く互生し、夏日莖頂に一箇乃至十數箇の大形（徑一二糎）の美花を開く。花被は六枚で反捲し、白色の地に黄赤色の斑點を布き、雄蕊の葯は紅く、全體に強い香氣を發する。本州北中部の山地に多く、觀賞用として賞美せられ、鱗莖は食用に供せられる。異名―れうりゆり・ほうらいじゆり・よしのゆり・えいざんゆり。

【碁石】　ゴイシ　圍碁に用ゐる黑・白の石。碁盤が地に象どつて四角く平面に作つてあるのに對し、天の圓いのに象どつて扁圓形に作られ、黑碁石は陰に、白碁石は陽に象どつてある。

白碁石には蛤の貝殼を用ゐ、日向産のものが第一とせられ、黑碁石には那智黑と稱する粘板岩を用ゐ、御濱（三重縣）産のものが最も珍重せられる。

【重い香が沈んで】　豊な香が風に吹かれることもなくこもり漂つてゐて、の意。

【瓶】　ヘイ　かめ。徳利。こゝでは、花瓶、の意。

【聖書にある野の百合】

新約聖書、馬太傳第六章二十八節―三十節に「又なにゆゑ衣のことを思ひ煩ふや。野の百合は如何して育つかを思へ、勞せず、紡がざるなり。然れど我なんぢらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服裝この花の一つにも及かざりき。今日ありて明日、爐に投げ入れらるる野の草をも、神はかく裝ひ給へば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ」とある。

尙、この「野の百合」については種々說があるが、我が國の所謂百合でないことは確であるらしい。理學博士大賀一郎氏は「野の百合の花について」といふ講演（東京女子大學學友會雜誌第十二號所揭）に於て次のやうにいはれてゐる。

次に馬太傳六ノ二八及路加傳一二ノ二七に見えた人々に膾炙されてゐる Krinon（野の百合花）である。

主基督はアラミ語で說敎された。其アラミ語のギリシヤ譯をマタイもルカも Krinon としてゐる。聖句から見て此花は聽衆等に極めてわかり易い野生の雜草で、其色はソロモン王の紫の王服に比べらるゝ程に鮮やかであり、又刈りとられて爐中に薪の料となるものである事が考へられる。

此所謂「野の百合花」が野生の Krina（Krinon の變形）の意ならば春のガリラヤに咲き競ふ百合に似た數多の雜草を意味するであらう。然しもし此言語が何か一つの花を指すものとすれば何れの花を以て此代表とすべきかといふ問題となる。カノン・トリストラム（Canon Tristrum）は幾回かパレスチナに旅した英國の學者であるが、野生のアネモネ（Anemone）が此「野の百合花」であると稱してゐる。氏はアネモネには紫や白や紅や、中でも桃色が最多く、此花は早春のゲネサレの湖畔、橄欖山、エフライム、ナザレ、シャロンの野など至る所に一面に野生してゐて、實にユダヤの春の代表的植物と見なされる。そして主基督が春の野を過ぎ又小丘に坐し給ひし時、其周圍に最普通に見られる此花を例として斯の大說敎をなされた事は當然であり、從つて又雅歌にも斯く屢屢記されてゐるのである。又アネモネは現今アラビヤ人に Surgan と呼ばれてゐる一植物であるからアネモネは「野の百合の花」に相違ないと稱へてゐる。（聖書註―Susan はアラビア語の聖書で「百合」に當てられた語。）

然し現に小亞細亞マールートの American College の生物學敎授ポスト（Dr. Post）氏はトリストラムのアネモネ說に反對して、アネモネは主基督の御言語の「今日ありて明日、爐に投げ入れらるゝ野の草」といふ事からアネモネは草丈が短かくて薪炭の料とはならない事を主張し、且アネモネは其特有の名を有してゐるから、もし Susan とよばるゝものゝ中から唯一種の草を擇ぶならばグラジオラス（Gladiolus）であらうといつてゐる。

此二說の何れが正しいかは斷言し難いが、ソロモンの榮華を極めた衣裳を野傍に牧場に丘陵に野生してゐる此アネモネ又はグラヂオラスと比し給ふた事については多大の興味を覺えねばならない。そしてパレスチナ植物や、聖書植物について記した幾つかの文獻及旅行者の手記や說話に從へばアネモネは聖地に極めて普通で、グラジオラスは比較的少ないからポスト氏以外にグラジオラスを主張するものが無い。依つてもし「野の百合花」を一植物で代表させるとすればアネモネとする方が寧ろ穩當でないかと思はれる。

〔聖書〕　セイショ　こゝでは、Holy Bible の譯語。キリスト敎の經典。舊約聖書と新約聖書とがある。（「約」は約束の義で、神が人類と取交した敎の約束を意味する。）

舊約聖書はユダヤ敎の聖典を受けついで聖書の第一部としたもので、律法と豫言者によつて啓示された神の契約を記してある。全部で三十九卷あり、大別して歷史書十七卷・豫言書十七卷・詩歌書五篇から成つてゐる。新約聖書は聖書の第二部をなすもので、キリストによつて啓示された福音を記した書。全部で二十七卷あり、大別すれば歷史書五卷（四福音書及び使徒行傳）・書翰二十一卷・默示錄一卷から成つてゐる。

【唐菖蒲】　カラシャウブ（原文振假名）「たうしやうぶ」卽ち「グラヂオラス」（gladiolus）に同じ。（「唐」はタウと音讀するのが普通。Gladiolus は木蘭の學名（屬名）。）　鳶尾科、たうしやうぶ屬の多年生草本。地下にやゝ扁平な球莖を有し、これより劍狀の葉を二列に生じ、夏日葉間に長く花莖を抽いて、多數の不齊漏斗形の花を、一方に偏した穗狀花序に綴る。（花は下方から咲き始めて漸次上方に及ぶ。）花は普通短い花筒を有して六裂し、花柱長くその先端三裂する。花色は紅色・淡紅色その他種々。果實は長楕圓形

の蒴果。舶來の栽植種で、原種は約二百を算へる。（うち約百種は南アフリカ產、餘は地中海地方から西アジアにかけて產するが、現在園藝するものは南アジア原產の種から導かれたものであるといふ。）園藝品種は一千以上にも上り、各國にグラヂオラス協會があつて改善を計つてゐるが、大別して大輪種・プリムリナス種・早咲種の三つに分類せられる。最も普通なのは大輪種で、花には平瓣と波狀瓣とがあり、花色は白・赤・桃・黃等である。異名―おらんだしやうぶ・だんだんばな・ナーガルブルーム。

【芥舟君】　カイシウクン　畔柳都太郎（くろやなぎくにたろう）。芥舟はその號。英文學者。明治四年五月現山形市に生まれた。第二高等學校を經て二十九年帝國大學文科大學文學科卒業。三十一年第一高等學校教授に任ぜられ、大正十年には歐洲各地に遊んだ。十二年二月歿。享年五十三。高山樗牛とは少年時代からの友人で、一時は「帝國文學」等に盛に文藝評論を發表し、また文學に現れた植物を研究して、英文學界に貢獻するところが多かつた。編著には「文談花談」「向陵より社會」「邦語英文典」「英文典語句慣用」「英和大辭典」（三省堂刊）等がある。

作者のやゝ後輩の友人で、作者の第一高等學校講師時代以來、同僚として親しく交つた。

【檜扇】　ヒアフギ　「射干」とも書く。鳶尾（あやめ）科、ひあふぎ屬の多年生草本。高さ六〇―九〇糎。葉は廣劍形で密に互生し、二縱列に配列して扁平となり、恰も檜扇を開いた如き觀を呈する。（その名も恐らくこれに出たものであらうといふ。）夏日葉間に一莖を抽き、稍上で多數分枝して數箇の花をつける。花被は六片で同形、花色は黃赤・黃・淡紅等で、これに濃紫色の斑點がある。果實は長さ三糎許の橢圓形の蒴果で、うちに黑色の種子を藏する。これを射干玉（ぬばたま）と稱し、古來「黑」の枕詞に用ゐられる。本州中南部・九州・琉球・臺灣等に自生し、觀賞用としても栽植せられる。異名―からすあふぎ（烏扇）・へんちく（扁竹）。

【熱帶的に派手に仕立てた】　熱帶風にはなやかに飾りたてた。

熱帶植物は一般に溫帶に產するものよりも大形で、丈が高く、幹が太く、葉・花などに珍奇美麗なものが多いのでかういつたのであらう。

【深い沈んだ趣】　おも〳〵しい落著いた趣。

聖書に見える野の百合から聯想される感じをいつた。

【幽かな花】　カスかなハナ　想像に描かれた、幽玄神祕な花。

【立秋】　リッシウ　曆の語で、二十四節氣の一。陰曆では七月節、陽曆では八月八日頃に當る。

【摧けた】　クダけた（原文振假名）

〔摧〕　サイ　（一）くだく。くじく。いためる。とりひしぐ。はじむ。ほろぼす。又、その自動詞又は受身。

（二）まぐさ。又、まぐさかふ。

【欄間】　ランマ　建築用語。室と室との間若しくは室と廊・緣側との間の、天井と鴨居又は長押との間を拔いて、格子・小障子又は透彫（すかしぼり）のある板などを嵌めたもの。裝飾を兼ねて換氣又は採光の爲に設ける。

欄間は日本建築では室內裝飾上重要な役割をなすものとして安土桃山時代以降大いに發達した。板欄間・透彫欄間・組子欄間・筬（をさ）欄間・障子欄間・竹の節欄間・櫛形欄間等の種類が多い。洋風建築でも出入口及び窓の上部の背の低い開き口を欄間といふが、これは裝飾よりもむしろ採光・換氣を主として設けられるもので、多く廻轉窓になつてゐる。

【迂回】　ウクヮイ　遠路をまはること。まはり道をすること。

【視線】　シセン　物體と眼とを結ぶ直線。

網膜の中心窩を通る視線を凝視線といひ、この線上の點が最も鮮明に網膜に映じ、これを中心として外界の物象の狀態が眼にうつるのであるが、實際には、視線と凝視線とは多くの場合同一視して差支がない。

【疎い】　ウトい　ぼんやりした。

【岨道】　ソハミチ・ソバミチ　けはしいみち。嶮路。

【薄】　ススキ　「芒」とも書く。禾本科、すすき屬の多年生草本。北海道から臺灣に至る我が國各地の山野に叢生

し、高さ一・二―一・五米。葉は剛硬で線形をなし、緣邊極めて粗糙。秋日莖頭に穗を拔き、分枝して多數の黃褐色の小花穗を房狀圓錐花序に綴る。總苞毛は白色、穎は長芒を有する。この花を尾花といふ。尾花は又すすきの異名にも用ゐられる。秋の七草の一。

【疊に伏さる】疊の上にうつぶす。疊に向かつてうつむく。

〔伏さる〕フさる　(一)うつむく。うつぶす。(二)いねる。ねる。ふす。

【蟋蟀】キリギリス（原文振假名）「螽蟖」「蛬」とも書く。直翅目、螽蟖科、きりぎりす屬の昆蟲。體長三〇―四〇耗。體は肥え、翅は短く辛うじて尾端に達する。前翅は腹部と殆ど同長であるか、又は退化して短い。體色は綠色又は褐色。翅は屋根形に腹背上に重ねられ、その背面は褐色、側面は綠に黑斑を縱列する。觸角は鞭毛狀で體長より少しく長い。雌の產卵管は劍狀をなし、長さは二四粍內外。八月頃地上に出現し、日中叢間にあつてチ゠ンギースと鳴く。その聲が地獄の鼓の音に似てゐるので「はたおり」の異名がある。我が國內地に最も普通の種で、同屬のものとしてはやゝ北方種に、てうせんきりぎりすがある。又、別屬（ねぶき屬）にやぶきり（きりぎりすよりも大形で、全體綠色、翅背は褐色。樹上にあつてジリジリと連鳴する）があり、廣義にはこれらを總稱してきりぎりすといふ。

尙、現在では「蟋蟀」の字は多く「こほろぎ」（直翅目、蟋蟀科に所屬）に用ゐられるが、往時はこれを「きりぎりす」とも「こほろぎ」とも訓んだ。又、晚秋の夜の景物として歌句によまれた「きりぎりす」は、實は今の「こほろぎ」であつたらしい。

【宿つて】トマつて（原文振假名）

【撓ひ】シナひ

【袋戶】フクロド　袋棚（たくろだな）のふすま戶。

「袋棚」―(一)床の間・書院等の脇に造りつけた棚で、普通には中部に一文字の棚又は違棚（ちがひだな）があり、その上下に戶のついた小棚があるもの。(二)茶道に於て用ゐる茶棚で、志野棚（棚に櫛干がついてをり、鼠色に塗つてあるもの）を摸して桐・桑等で作り、薄塗を施したもの。紹鷗棚（ぜうおうだな）。志野袋棚。利休袋

棚。こゝは(一)。

【綠】ミドリ　薄の葉の色をいつた。

【暈した】ボカした

【不分明に】フブンミャウに　ぼんやりと。はつきりしないで。

【眸】ヒトミ　「瞳」とも書く。眼球の角膜の後に於て、紅彩に圍まれた小孔。光はこの小孔を通じて水晶體に達し、集結されて後壁の網膜に像を結ぶ。尙、瞳孔は虹彩の伸縮に應じて擴大又は縮小する。

【運動の感覺】ウンドウのカンカク　「運動感覺」に同じ。運動感覺は深部知覺の一種で、廣義には位置感覺をも含めていふが、狹義には特に身體各部の運動を知覺せしめる感覺をさす。普通これを、感覺の起る場所によつて筋肉感覺・關節感覺・腱覺の三つに分類する。

〔感覺〕生理學的には、內外の刺激が我々の身體各部に分布してゐる神經纖維の末端に求心性の衝擊を與へ、その衝擊が神經を通じて中樞に運ばれ、大腦皮質の神經細胞を興奮させた時に感覺を生ずるのであつて、視覺・聽覺・味覺・嗅覺・皮膚感覺の如く、外部よりの刺激によつて生ずるものの外、體內器官の作用や狀態それ自身が刺激となつて起るものがある。卽ち、筋肉・關節・腱等に起る位置・運動の感覺、耳の三半規管及び前庭に由來するといはれる平衡感覺、及び消化・血行・呼吸・排泄等の內臟諸器官の生理的狀態又は變化に基づく臟器感覺（一般感覺）などがそれである。（四頁參照）

【女郎花】ヲミナヘシ　敗醬科（をみなへし）、をみなへし屬の多年生草本。莖高一米內外。全株に疎に毛茸を布く。根葉は長柄を具へ、卵形乃至長楕圓形で緣邊に粗鋸齒があり、莖葉は概ね羽狀に深裂し、その裂片は線形・長楕圓形・披針形等で、全緣若しくは粗鋸齒緣。秋日花梗を抽いて淡黃色の小合瓣花（先端五裂）を複房狀花序に綴る。果實は楕圓形の乾果。我が國各地の山野に自生し、古來秋の七草の一に算へられ、可憐な風姿を愛せられる。異名―をみなべ

し・をみなめし・ちめぐさ。

【色素】　シキソ　あらゆる物體に對して色相を付與するもの。

色素は、原料からいへば天然色素と人造色素に大別され、前者は更に動物性色素（膠脂・烏賊墨の類）・植物性色素（藍・紅花・茜根の類）・鑛物性色素（辰砂・雌黃・代赭の類）に分類され、後者は無機性色素（朱・鉛丹・群青・亞鉛華の類）と有機性色素（マゼンタ・メチルヴアイオレット・アリザリンの類）に分けられ、その數極めて多く、千數百種に及んでゐる。應用上からいへば、顏料（印刷用インク・塗料・繪具・陶磁器著色劑の類）と染料（纖物・紙・羽毛・飲料等の著色原料の類）とに大別される。

【蜀紅葵】　ショクコウアフヒ（原文振假名）　「紅蜀葵」（こうしよくき）即ち「もみぢあふひ」に同じ。「紅蜀葵」は「茨蜀葵」即ち「とろろあふひ」に對して名づけられた呼名。「蜀葵」は「たちあふひ」に宛てた漢字である。錦葵（あふひ）科、ふよう屬の多年生草本。高さは一乃至三米に達し、全株無毛・滑澤で木本狀を呈する。葉は掌狀に深く五裂乃至七裂し、裂片は線狀披針形で緣邊に疎鋸齒を具へ、長い葉柄を有して互生する。（その狀が紅葉の葉に類するので「もみぢあふひ」の名がある。）夏日莖上に大形（徑一二―一五糎位）・緋紅色の美花を開く。花瓣は四枚で、瓣片は狹脚の倒卵形をなし、離落しやすい。雌蕊の花柱（子房の上に連なる狹長の部分）は極めて長く、蕚は花後も宿存する。果實は蒴果。北米の原產で、觀賞用として栽培せられる。

【花瓣】　ハナビラ（原文振假名）

【燃えながら】　眞赤な色をしたまゝ、の意。

【桂川】　カツラガハ　修善寺川ともいふ。達磨山東麓の福射谷に發源し、東流して修善寺町（静岡縣田方郡）を貫ぬき、下田街道附近で狩野川に合流する。長さ約二粁。河床に露出する角閃安山岩の大岩脈に沿つて數箇所に溫泉が涌出し、溪流の眞中の所謂獨鈷の湯は弘法大師の開鑿にかゝると傳へられて最も名高い。修善寺溫泉はこの流を挾んで東西に長く發達し、浴樓軒を列ねて櫛比し、南北は木立茂つた丘陵を控へて山水雙美の溫泉境をなしてゐる。

【コスモス】　cosmos（英）　和名「おほばるしや」。菊科、おほばるしや屬の一年生草本。高さ二―三米。全株無毛で、梢上で數回分枝する。葉は再三羽狀に深裂し、裂片は細線形で全緣。秋の頃梢頭・枝端に多數の頭上花を頂生せしめる。心花は黃色で、これをかこむ邊花（舌狀花）は白・淡紅・紅などの諸色を呈し、可憐な姿を具へる。果實は無毛・短嘴の瘦果。メキシコ南部地方原產の栽植種で明治初年頃我が國に渡來し、普く庭園に栽培せられるに至つた。異名―おほはるしやぎく・あきのはるしやぎく・あきざくら。

因みに、コスモスの名はもとギリシヤ語の kosmos（秩序「裝飾」「整美」等の意）から來たもので、その花が美しく、且根が四方に正しく張つてゐるので名づけたものであらうといふ。學名（屬名）も Cosmos である。

【單簡】　タンカン　「短簡」とも書く。てみじか。簡單。ここでは、花のさまのあつさりしてゐるのをいつたのであらう。

【空に浮かんだ樣に】　何にたよることもなく、何にわづらはされることもないやうに。

〔空〕　クウ　そら。虛空（こくう）。天と地との間。空間。

【超然と】　テウゼンと　超然として。他の事には無頓著な樣子をして。

〔超然〕　(一)かけはなれたさま。(二)普通の人に超越したさま。(三)他と關係しないさま。

【取合はぬ】　トリアはぬ　對手にしない。應じない。

【干菓子】　ヒグワシ　乾製の菓子の總稱。製法の上から有平（あるへい）・雲平（うんぺい）・打物・燒物・種物・粔籹（おこし）の六種に大別せられる。（生菓子の對。）

干菓子は米又は麥の粉と砂糖とを主なる材料として作るが、現今は大部分は食用としてよりも、むしろ鑑賞用として作られる。殊に有平・雲平は全くの飾菓子として神佛の供物・雛菓子・本膳料理等に用ゐられる。

【範頼】　ノリヨリ　源範頼。左馬頭義朝の第六子。母は遠江池田宿の遊女で、同國蒲生御廚（みくりや）で生まれたので蒲冠者と稱した。幼時藤原範季に養はれたが、治承四年兄頼朝の兵を擧ぐるや、馳せてこれに從ひ、壽永三年頼朝の命を奉じて、弟義經とともに義仲を滅し、次いで平氏を一

の谷に破つて山陽を從へ、更に豐後に渡つて九州を鎭め、弟義經をして平氏を壇の浦に殲滅せしめ、功によつて從五位下に敍し參河守に任ぜられた。後頼朝の忌むところとなり、伊豆の修禪寺に幽閉せられ、建久四年（一八五三）梶原景時等に攻められ火を放つて自殺した。

【菊】　キク　菊科、きく屬の多年生草本。廣く觀賞用として栽培せられ、種々の園藝品種が作られてゐる。莖の下部はやゝ木質で、高さ〇・八―二米。葉は卵形で缺刻及び鋸齒を有し、基底は心臟形で有柄、互生する。秋日莖頭に分枝して頭狀花を開く。花は心花が管狀花、邊花が舌狀花であるのを原則とするが、その形狀・大小・色彩等は種々雜多であつて一定しない。食用菊と觀賞用菊とがあり、後者は大菊・中菊・小菊に大別される。

菊は支那の原產で、我が國には奈良朝末期に已に渡來したといはれてゐる。尙、古來我が國に自生して野菊と呼ばれてゐるのは、のぢぎく・よめな・あぶらぎくその他の總稱である。

【畠山の城趾】　ハタケヤマのジャウシ　修善寺町の北方城山に在る畠山道誓の城趾をさす。

城山は金山ともいひ、往時金を採鑛したといふ。山は狩野川と桂川に挾まれ、峻險な要害の地であつた。

〔畠山〕　畠山道誓。太平記によれば、足利義詮に仕へ一時權勢をふるつたが、勢をたのんで專橫な行が多かつたので義詮に追はれ、弟尾張守義深、同式部大輔と共に伊豆に逃げ下り、三津・金山・修善寺の三城を構へて稽籠つた。然るに味方する者が少く勢ふるはず、最後に三津・金山の城を燒き修善寺城に據つたが、兵糧盡きて遂に降伏した。

【あけび】　通草・木通　「燕覆子」「烏覆子」などとも書く。木通科、あけび屬の蔓性落葉灌木。葉は長柄を有する掌狀複葉で、五箇の小葉より成り、各小葉は有柄・長橢圓形・全緣。雌雄一家で、四月頃葉腋に花軸を出し、多數の紅紫色の小雄花と少數の紫褐色の大雌花とを總狀花序に綴る。花被片は三箇。果實は長橢圓形（長さ六―一〇糎位）の漿果で、熟すれば暗紫色を呈し、縱に開裂して白い果肉を露す。本州・九州等の山野に自生し、果肉は甘くて食用となる。異名―はだつかづら・はんだつかづら・おめかづら。類種にみつばあけび・どえふあけび等があり、廣義にはこれらを總稱してあけびといふ。

【色の褪めた茄子の色】

こゝでは、あけびの實のうすい紫色なのをいつた。

【空洞】　ウツロ　中の空しいこと。內に物がなくて空なこと。から。うつほ。うろ。

【日似三春永】　ヒハサンシュンニニテナガシ　太陽は春のやうにのどかである。

〔三春〕　（一）春季の三箇月、卽ち、初春・仲春・晩春の稱。（二）三つの春秋を經過すること。卽ち三箇年の稱。三秋。こゝは（一）。

〔永〕　こゝでは、長閑、の意。永日。

二　解釋

一

一六　秋露

【心隨二野水一空】　ココロハヤスキニシタガッテムナシ　心は野水の赴くまゝに何の思ふこともない。野邊の水の動くともなくのんびりしてゐるのと一體になつて何も心に思ふことがない、の意。

〔野水〕　野の中をながれるみづ。野邊のながれ。

【牀頭花一片】　シャウトウノハナイッペン　牀の邊に活けてある一輪の花。

〔牀頭〕　ねどこのほとり。

〔牀〕　人の坐臥する所。ねどこ。ねだい。

【閑落二小眠中一】　シヅカニセウミンノウチニオツ　少し眠に入つたと思ふと、その花が夢の中でしづかに音もなく散つておちた、の意。

插圖「夏目漱石筆蹟」　大正五年筆。紙本掛軸。小宮豐隆氏藏。

1　主題　絶えず余を支配して來た美しい自然の畫。

2　構想

(1)　子供の時面白かつた彩色南畫（初―一一七ノ九）。

(2)　青年の頃にも新しい變化を受けなかつた南畫趣味（一一七ノ一〇―一一九ノ三）。

(3)　修善寺の病中絶えず胸に描かれた美しい空（一一九ノ四―一二〇ノ三）。

(4)　東京へ歸つた後も暫くは余を支配した美しい自然の畫（一二〇ノ四―終）。

3　敍述

〔好き嫌ひと云つた所で、構圖の上に自分の氣に入つた天然の色と形が表れてゐれば、それで嬉しかつたのである〕――子供の頃、彩色南畫を面白がつた心理の分析である。構圖の上に表れた素材を喜んだのみであるといつてゐるのである。素材によつて藝術を考へるのは少年期の通性であるが、そこに漱石その人の一生を貫く嗜好が既に示されてゐるのも面白い。

〔山水によつて畫を愛するの弊はあつたらうが、名前によつて畫を論ずるの譏も犯さずに濟んだ〕――素材である自然美を鑑賞の對象とすることは、繪畫鑑賞としては未熟である。しかし作家の名前によつて繪畫の價値を定める骨董趣味の比ではない。何となれば、そこには既に眞實があり、隨つて進歩が豫想せられるから。

〔友人は余の眞面目な顏をしけ〳〵眺めて、「君こんな所に住むと、どの位不便なものだか知つてゐるか」と、さも氣の毒さうに云つた。此の友人は山國の生まれであつた。余は成程と始めて自分の迂闊を愧づると共に、余の風流心に泥を塗つた友人の實際的なのを惡んだ〕――南畫の家を見て、「生涯に一遍で好いからこんな所に住んで見たい」といつた漱石に答へた一友人の言葉と、それについての漱石の感想であるが、この友人の言葉には、漱石の感慨に引き込まれなかつた自由な態度が出てゐて愉快である。更にいへば友人の言葉にも、漱石の感歎にも、その生活からの規定があり、親しい間柄にのみ許された銘々勝手な氣分が誇張を伴なつて披瀝せられてゐて面白い。「始めて自分の迂闊を愧ぢたといふ漱石の感想には、一途に思ひ込んでゐる人の陷りがちな傾向とその反省がよく現れてゐる。「余の風流心に泥を塗つた」と斷言してゐる反撥力も氣持がいゝ。

〔崖を降りて溪川の水を汲みに行くよりも、豪所へ水道を引く方が好くなつた〕――年と共に實際的になつたことを表現する譬喩であるが、こゝに適切であることはいふまでもなく、具體的でユーモラスで輕妙を極めてゐる。

〔殊に病氣になつて仰向に寢てからは、絶えず美しい雲と空が胸に描かれた。其の位病中の余は自然を懐かしく思つてゐた〕――病氣になつて少年時代からあつた南畫的な自然愛が復活して來たのである。しかもその胸に描くものが、空と雲であつたところに、讀者の心を深く誘ふものがある。

〔空が空の底に沈み切つた樣に澄んだ。高い日が蒼い所を目の屆くかぎり照らした。余は其の射返しの大地に洽き內に、しんとして獨り溫もつた。さうして眼の前に群がる無數の赤蜻蛉を見た〕――澄んだ秋の空の深さ輝かしさの中に群がり飛ぶ赤蜻蛉を見ながら、しんとしてそれと一體になつてゐるやうな感銘に浸つてゐた心境が鮮かに描かれてゐる。

「獨り溫もつた」といふ語にも秋の天地に包まれてひつそりと感謝に浸つてゐる趣が現れてゐる。

〔人よりも空、語よりも默。……「肩に來て人懐かしや赤蜻蛉。」〕――病中日記らしい簡潔さであるが、深く澄んで輝かしい秋の日ざしの中に五體を投げ出し、赤蜻蛉のとまるに任せてゐる作者の姿が、人間離れのした存在として思ひ浮かべられる。

〔東京へ歸つたあとも、暫くは、絶えず美しい自然の畫が、子供の時と同じ樣に、余を支配してゐたのである〕――上の敍述をうけて、一語一語にその境地が示現せられてゐる。即ち、「も」には、修善寺に在る間は固よりの意が、「暫くは」には、日常のそれと異なつた程度であつたことが、「絶えず」には、その持續性の强さが、「子供の時と同じ樣に」には、性癖として深い根柢を有するものであることが、「支配してゐた」には、迫力の强さが現れてゐる。又「美しい自然が」とのみいはず、「美しい自然の畫が」といつたところにも、その性質が語られてゐる。

〔秋露下南磵。黃花粲照顏。欲行沿澗遠。却得與雲還〕――修善寺大患の當時を歸京して胃腸病院の一室に在つて詠んだものであらう。十月十五日の日記には起句の「秋露」が「清露」になつてゐる。起句には、露しげくなつた南磵の秋の朝が思ひ浮かばれ、承句には、澄んだ空氣の中に秋の陽光を浴びて咲いた秋草の花が見える。轉句には、さういふ秋の澗に沿うてどこまでも行かうとする憧憬が詠まれ、結局には、さういふ我をも忘れて雲と共にその境に遊んだ恍惚が現れてゐる。

二

1 主題　病中の余を慰めた牀頭の花と深まる秋。

2 構想

(1) 病床で想像に描いた幽かな花（一二〇ノ八―一二一ノ一一）。

(2) 裏山に入つて病床を慰めるべく手折つて來てくれる野の秋草（一二一ノ一二―一二三ノ三）。

(3) 牀頭の薄・蜀紅葵・コスモス・菊・あけびの實（一二三ノ四―終）。

3 敍述

〔想像は、其の時、限りなく咲き續く白い花を碁石の樣に點々と見た。それを小暗く包まうとする綠の奧には、重い香が沈んで、風に搖られる折々を待つ程に、葉は息苦しく重り合つた〕――病床に仆れてゐての想像である。沈鬱な、深玄な光景である。病中の生理狀態と關聯がありさうに思はれる想像である。

〔余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見る機會のないうちに立秋に入つた。百合は露と共に摧けた〕――想像に描いた花は想像として失せ、その想像を誘つた百合は立秋と共に散つたといふのであるが、その最後の句の響は、何となく、作者の當時をそれとなく示現してゐるやうに感じられる。

〔人は病むものの爲に裏の山に入つて、此處彼處から手の屆く幾莖の草花を折つて來た〕――客觀的に、平坦に書いてゐるけれども、溫かい人情を感じて書いてゐることがよく感銘せられる。

〔彼等の採つて來て與れるものは、色彩の極めて乏しい野生の秋草であつた〕――季節や土地が髣髴として來る。それと共に色彩に對する作者の嗜好が語られてゐる。

〔或日、しんとした眞晝に、長い薄が壘に伏さる樣に活けてあつたら、何時何處から來たとも知れない蟋蟀がたつた一つ、おとなしく中程に宿つてゐた。其の時薄は蟲の重みで撓ひさうに見えた。さうして袋戸に張つた新しい銀の上に映る幾分かの綠が、暈した樣に淡く且不分明に眸を誘ふので、猶更運動の感覺を刺戟した〕――時は「しんとした眞晝」である。背景は新しく張つた袋戸の銀である。構圖は床に活けた長い薄とその中程にとまつた一つの蟋蟀である。しかもその薄は蟋蟀の重みで撓ひ、銀上の綠と共に動いてゐるのである。畫題としては新しいものではないかも知れないが、作者の瞳に映つたこの畫趣には氣韻の清澄と生動がある。

〔薄は大概すぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花さへ、眺めるには餘り色素が足りなかつた〕――萬物流轉のあわたゞしさ

がある。秋の自然の淡如たる趣と寂寥たる氣分とが感じられる。

〔蜀紅葵の花瓣は燃えながら翌日散つて仕舞つた〕――あまりに淡い秋草を物憂く思つてゐる所へ齎された花であり、見たくて堪らなかつたやうな留守居の婆さんに頒けて貰つたこの花である。それも萬物流轉のあわたゞしさを免れるものではなかつた。

〔瓶に插す草と花が次第に變るうちに、季節は漸く深い秋に入つた〕――牀頭に眺め、心に描いて來たいろ〳〵な草花の上に感じて來たものを、一度にこゝに吐露したのである。「漸く深い秋に入つた」と結んだ句には底を貫くものの閃きがある。

〔日似三春永。心隨野水空。牀頭花一片。閑落小眠中。〕――病者にのみ許されてゐる平和と至樂とが遺憾なく表現せられてゐる。地上に營々として働いてゐる健康者の思ひも及ばない境界である。

三　批評

當時の日記があり、更にそれを資料として筆を執つたのがこの「思ひ出すことなど」であるが、執筆の動機が既に病中の漱石に對して朝日新聞社が寄せた好意に酬いたい氣持もあれば、知友・讀者の寄せた見舞に答へようとする氣持もある。しかも編輯長の池邊三山は「餘計な事だ」と叱る中で、漱石自身は「退屈凌ぎ位な所と見たらよからう」と辯解しつゝ筆を執つたものである。そして漱石の藝術及び生活に於ける一大分水嶺を成したものがこの大吐血であつたとすれば、前期から後期への轉機を傳へるものはこの「思ひ出す事など」に外ならない。恰もそれまで偉大な頭腦の力で觀照し、批判し、分析し、構成し來つたのがその藝術であつたのに、この大患によつてさういふものが一度根柢から覆されてしまつて、一層生命の底深く互つてゐた眞實が迸湧し來つたといふ趣を呈してゐる。

一たび死に直面し、そして生き還つた歡びを感謝しつゝ振返つた人の世の美しく、人の情の溫かいのにまどついてゐるのが「思ひ出す事など」の漱石である。死の事實に直面して生き還つた漱石の心には、人も自然もなつかしくてたまらなかつた。さうした運命に對する衷心からの感謝と、あらゆる一事一物に對する濃やかなつかしさの披瀝である點に於て、ひとり漱石文學の上のみではなく、人類の記錄の上にも稀なものの一であるといつてもよいのではあるまいか。

三　備考

一　指導の問題

（一）註解を要する語はそんなに多くはない。しかし讀みによつて作者の觀照を觀照することは中々困難な課であらう。最初にはわかりやすくて印象の鮮明な箇處に集中し、漸次に他に及すといふやうにして、讀みによる觀照を全文の上に果すことが學習の第一歩であらう。

全文の觀照が終つた所で、作者が四十四歳の夏修善寺に病を養つてゐて大吐血のことがあつたこと、それが如何に作者の生活と藝術の上に重大な事件であつたかといふことを補說し、「思ひ出す事など」がその記念として書かれた動機及びその意義（參考資料）を簡單に說明した上に解釋に入らしめるのが效果の多い指導かと思はれる。

（二）讀みによる觀照の後に補說をすれば、文そのものから離れた感を生ずるから、文に歸らしめるためにも、又補說を學習の上に生かさせる上からも、解釋の一著手としては、敍述の問題として、この文の書かれた時の作者の身上又は心境がそれとして披瀝せられてゐる箇處を指摘することを課題して一讀させ、それを中心として、作者の表現・描寫のすぐれた點に及ぶのが適當な指導であらう。

小品であるだけに、といふよりも巨匠の作であるだけに、構想も主題も徹つてゐて、しかも微妙な、陰影に富んだ關聯が成立つてゐる。その微妙さに溺れて大局が見えなくなつてはいけないし、大局に囚れて、微妙な陰影を見失つてもいけない。しかしこの程度の生徒にとつては、その微妙さの總べてを會得することは困難な筈であるから、まづその大局を把握した上に、微妙さの一端を取扱ひ、その他は將來の鑑賞と理解に殘すのが適當な方法であらう。

（三）「思ひ出す事など」が彼の後期の作品に新しい出發點を成してゐるものは、人間生活に於ける死との格闘であり、死との格闘を經て振りかへつた時の、自然や人情のなつかしさであるといへるならば、こゝに抄出した二篇は、その自然への親愛の表現を主としたものであるといへよう。隨つて又、これは漱石の畫にも關聯を有してゐる小品であるといへよう。卷頭の「閑來放鶴」もその心でよく鑑賞させたいものと思ふ。この小品は前課「肯定觀の文學」のよき一作例として扱ふことが出來るであらう。

二　參考資料

（一）漱石全集（決定版）第十卷の卷末に附せられた小宮豐隆氏の「小品」解說のうち、本文に關係のある部分を左に摘錄する。

明治四十三年八月二十四日、漱石は韓地先の修善寺で、胃潰瘍の爲に、八百グラムの鮮血を吐き、凡そ三十分の間人事不省に陷り、專門の醫師から、命をとりとめる事が、到底不可能なのではないかとまで危ぶまれた。仕合な事に漱石は、この時は命をとりとめた。然しその爲め漱石は、それから凡そ四十日近く、床の上で寢たきりで、身動きも出來ない狀態に置かれなければならなかつた。十月十一日漱石は東京に歸つて來たが、然し東京に歸つて來ても、すぐ胃腸病院に擔ぎ込まれ、翌四十四年の二月二十六日までは其所にゐて、自宅に歸る事を許されなかつた。その修善寺の大吐血と大吐血前後の自分の心身の變化とを、具に報告したものが、この『思ひ出す事など』である。（中略）

然も漱石はその後、大正五年の十二月に、竟にその爲に永久に倒れてしまふまで、殆んど毎年のやうにこの病氣に見舞はれ、その都度床の上に、一月ぐらゐは、釘付けにされてゐなければならなかつた。從つて漱石にとつて死は、普通健康な人が、どうせ人間は一度は死ななければならないと考へるやうな、抽象的な、生ぬるい死ではなく、次第に不可避な、現實の事實として、眼に視、手で觸れる事が出來るほど目睫の間に迫り、漱石をして行住坐臥それを閑却する事を許さない、生きた死になつて來た。漱石は爾後、自分の考へ方、感じ方を、常にその事實の認識によつて、規定されなければならなかつた。この事が當然漱石の小說の相貌を、この大吐血を中心として、前期と後期とに、截然と區別する。然もその相貌の相違をまづ我我に示すものが――換言すれば、漱石が、必至な深刻な、現實の事實としての死と、必至な深刻な折衝を始める第一步が、卽ちこの『思ひ出す事など』なのである。この意味で『思ひ出す事など』は、漱石の藝術のみならず、漱石の生活の、分水嶺を形づくるものであるに外ならなかつた。（中略）

漱石にとつて、社會に生きる事は――多くの青年をして「自我の主張」を「敢てして憚かる所なき迄に押し詰めた」やうな社會、殊に特殊な「經濟事情」の下に喘がなければならないやうな社會に生きる事は――「甚だぎごちなく感じ」られ、住み辛く感じられる事であつた。そのぎごちない、住み辛い社會の中から漱石を救ひ出してくれたものが、漱石の病氣である。漱石の病氣を取り卷いて、あらゆる人が漱石に示した、暖かな、美しい、親切と好意とである。漱石は、世界がかういふ親切と好意とに充ちてゐる限り、この世界は、住み心地の良い、たのもしい、幸福な世界であると感じなければならなかつた。漱石の『思ひ出す事など』は、漱石のその悅びと感謝の念とからのみ書かれたものであるときへ、言つても可いのである。（中略）

『思ひ出す事など』の中で漱石は、三つのあれかこれかの前に置かれてゐるやうに見える。一つは言ふまでもなく、この「自然」に對するあれかこれかである。一つの「自然」を漱石は怖れた。他の「自然」を漱石は愛した。「自然」を愛すべきものとしてのみ見るべきであるか、怖るべきものとしてのみ見るべきであるか、漱石は恐らく迷はざるを得なかつたに違ひない。第二のあれかこれかは、その愛すべき「自然」と「人間」との間の、それである。漱石は、自分の病氣を取り卷いて、人人が自分に示した親切と好意とに、無

限の感謝を捧げる事を忘れなかつた。さうしてその暖い人情によつて、「心に生き返つた」とさへも言つてゐる。然しそれとともに漱石は、「十分と縺けて人と話をする」事を「煩はし」く感じ、「口を閉ぢて黄金なりといふ古い言葉を思ひ出し」つつ、「秋の露に洗はれつゝ次第に高くな」つて行く空を眺めて、「人よりも空、語よりも默」と感じた。暖い美しい人情でも、それが人情である限り、それを受ける者に、煩はしさ息苦しさを與へる場合がないとは言はれない。透明な平靜な「自然」でも、それが「自然」である限りは、餘りに透明で餘りに平靜で、手徹えがないと感じられる場合も、屢ある筈である。押し詰めて考へる場合、そのいづれを取り、いづれを重んずべきであるかに、恐らく漱石は迷はざるを得なかつたに相違ない。第三のあれかこれかは、恐るべき「自然」と「人間」との間の、それである。もし自然が、漱石の想像したやうに、「無慈悲に運行し、情義なく發展する」だけのものであるならば、「人間の生死も」「たゞ至當の成行で、そこに喜びそこに悲しむ理窟は毫も存在し」ない事になり、「人間」相互を結ぶ愛とまことといふやうな問題に頭を惱まし、「人間」の文化の發展に寄與しようと心肝を碎くなどといふ事も、凡そ意味のない無駄骨折になつて仕舞はなければならないであらう。然も漱石は、「人間」相互を結ぶ愛とまことなしには、生きて行けないと感じ、且つその愛とまことこそ、「人間」をして永遠に生きしめるものであると、信じてゐたいのである。然し、宇宙的な立場から見た「人間」が、ほんの偶然な、無意味な、一微生物に過ぎないならば、愛もまことも純潔も高貴も、同じやうに偶然な、無意味なものになつてしまはなければならないに違ひない。其所にも漱石の迷ひは、あつた筈であると思はれる。

勿論これらのあれかこれかは『思ひ出す事など』に於いて、漱石の心を戰場として摩擦し合ふほどの、偉大な勢力を持たされてはゐなかつた。その點で『思ひ出す事など』の中には、漱石が死と格闘し、もしくは神を叫ぶ、悲痛な聲は響き出てゐないには相違ないが、然しこれらのものは、『思ひ出す事など』に於いて、漱石を苗床として育ちつつ、次第に漱石にその選擇を、もしくはその綜合を、要求して行かうとしてゐるのである。言ふまでもなく、漱石の中に、その胚子が藏されてゐるのでなければ、これらのものが漱石の中に芽を吹く筈がない。然しその胚子は亦、その發芽を刺激する特別な機緣がなかつたら、跡形もなく消え失せなかつたとも限られない。その特別な機緣とは、言ふまでもなく、漱石の修善寺に於ける大患である。並びにその後毎年のやうに漱石を苦づれた、潰瘍である。潰瘍は寔に漱石の命を奪ひ去つたが、然し潰瘍といふ機緣がなかつたら、是ほど早く漱石に、漱石の生活を深め、漱石の藝術を深める大轉回が來得たかどうかは、分からないといふ氣さへする。

(二)　漱石門下として親しく伊豆にあつて師の病床を護りつゝものされた小宮豐隆氏の「修善寺日記」(雜誌「文學」昭和十一年十二月號)を、本文に關係ある部分を中心に抄錄する。

八月三十一日　〔水〕

先生の顏は、昨日初めて見た時ほど、劇しい印象を與へなかつた。色も昨日よりは、少しはよくなつてゐるのかも知れない。然し、こけた頰や、痩せ細つた手脚を見てゐると、先生が可哀想で堪らなくなつて來るが、どうして上げる譯にも行かない。

默つて能成と二人で坐つてゐると、坂元が上の山に行つて見ないかと言つて、誘ひに來た。上の山に上がつて、女郎花だの桔梗だのを折つて來る。栗の毬が二つばかり喰つついてゐる枝が見つかつたから、それも一緒に折つて來る。坂元が根を燒いて、それを先生の眼の屆く、地袋の隅の花瓶に插した。

奥さんは朝から鷄肉を烱德利に入れて、それを鐵瓶に插し込み、湯煎にかけてゐる。かうしてスープを拵らへるのださうである。先生も今日からスープが許されたのだと思ふと、甚だ心强い。(中略)

先生が指を出して、花活の方をさされる。栗でも見たいのかと思つて、花活の傍に行き、向きを換へようとすると、先生は頭を振る。向けやうが違つたのかと思つて、更に花活を反對の方に向けようとすると、先生は更に劇しく頭を振つた。病人に神經を使はせるのは氣の毒である。どうしてその一擧手一投足で病人の意志を讀みとる事が出來ないのかと、自分の遲鈍を情なく思ひながら、先生の傍へ行くと、先生は、あの花は何だといふ。然し花はみんな分りきつた花計りである。先生が訊きたいのがどれであるか、見當がつかないので、いい加減に、あの黄色いのはと言ひかけると、先生は又頭を振つて、はじの方のだと言ふ。端のは萩である。萩が分からない筈はない。然し花がまだ少ししかついてゐないのだから、或は分からないのかとも思ひ、あれは萩ですと答へたが、それではあんまり平

凡すぎる、或は萩の上に出てゐる、鮮に紅い栗粒がくつついたやうな花の事なのではないかと氣がついたので、あれは萩ですが、あの萩の横に出てゐる、小さい赤い花は、何といふのか、名前は知りませんと、附け加へた。すると三重吉が、あれは水引草ですと言つてくれたので、ほつとする。暫くたつてから引き下がる。

午飯後能成と一緒に三重吉の宿に遊びに行き、夕飯まで喰つて歸つて來る。先生のそばにゐなかつた事を、心苦しく思ふ。先生はさぞ淋しかつたらうと思ふ。奥さんはどういふものか、始終先生のそばに附いてゐない。せめて自分でも始終そばについてゐなければ、先生が可哀想だと思ふ。

九月一日〔木〕

先生の所へ行つたら、先生は元氣がよかつた。朝の内は、元氣がいいらしい。此所へ來て初めて、稍長い話をする。先生が藥を飲んでから、お茶で口を濱ぐ。お茶がいかにも旨さうに見える。お茶は旨いなあと、先生が言ふ。

昨日山からとつて來た栗を見て先生が、もう栗があんなになる頃かなあ、栗の實が落ちるかしらんと、言ふ。それから、もう柿の實が赤くなつてゐるだらうかとも、訊かれた。先生はあの赤い柿の色が大好きである。郷里の、お盆にはもう眞赤になる、木練柿の話をする。霜が降るまで澁くて、霜が降ると甘くもなるし赤くもなる柿があるぢやないか、と言はれるから、あれは郷里では霜木練と言つてゐる旨を答へる。（中略）

先生のそばにゐないと、いらいらする。然し先生のそばにゐると、あんまり長くゐては悪いだらうと思ふ。仕方がないから、立つて、新井の三重吉の所へ行く。然し三重吉の所にゐても落つかない。三重吉を誘ひ出して、梅林といふ所へ行く。

山へ六町ほど上ぼるといふ話だつたが、その六町が大變だつた。然し上ぼつて見ると、大變景色が好い。富士山も少しは見える。然し何だか先生の事が氣になるので、景色を十分眺める氣にならず、そこそこにして、また駈け下りる。三重吉が、どうも君はイリタブルになつてゐていけないと、言つた。

途に白萩の咲いてゐるうちがあつたから、摘んで二枝もらひ、それを持つて宿に歸り、鳥打をかぶつたまま、先生の部屋へ飛び込むやうにして道入つて行く。先生は靜かに寢てゐる。安心して萩の根を拔いて、花瓶の枯れたのと插し換へる。

九月三日〔土〕

先生は顏の色も爪の色も、段段よくなつて來る。是なら十分生き得ると思ふ。ただ生き得た後の先生がどうなるか。本は讀めても、筆を執る事が出來ないといふやうな事になりはしないか。もしさうなつたら先生はどうするか。どうしてさういふ生活を堪へ通す事が出來るか。（中略）

晝飯後野間さんと花を探しに行く。女郎花や萩は、もう單調である。コスモスかダーリアのやうなものでもないだらうかと、野間さんと三重吉の所へ寄つて見る。然し三重吉の言ふ所によると、三重吉は今朝そこいらを探して見たが、見つからなかつたのださうである。然しまあ探して見ようといふので、見晴しの方へ行つて見る。

途中に小さい家があつて、若い女が機を織つてゐる。その裏の畑に、赤や白の鳳仙花や花魁草の咲いてゐるのが、目にとまつたので、あの花を少し讓つて下さいといふと、女は機から下りて、勝手へ行き、薄刃庖丁を持つて來てくれた。裏の方へ廻つて見ると、鳳仙花や花魁草の外に、葵の花を大きくした、眞つ赤な花が咲いてゐる。それも一緒にもらふ事にして、金を五錢つけて庖丁を返したら、その女は、私は留守番なんだから、そんなものは頂けませんと、わざわざ機を下りて返しに來た。

それを先生の部屋に活けて、この赤い花は刺激が强すぎやしませんかと訊いたら、いいえと言はれた。花の名を訊かれたから、紅葵といふのださうですと、三重吉から教はつた通りを教へた。何所にあつたと言はれるから、さつきの一件始終を話したら、女が機を下りて金を返しに來た所になつて、急に微笑された。

九月五日〔月〕

一六　秋　露

朝阿部と先生の部屋に行く。途中の事、水の事など、先生が開いて居られた。

先生の部屋を出てから、一緒に梅林に上ぼる。上のあづまやに婆さんが四人と娘一人とがかけてゐて、我我が行つたら、まあこつちへおかけなさいと、席を讓つてくれた。此所から見る伊豆の山は、感じが柔らかで、ファミリアリティを懷かせる。婆さん達が、梨と芋煎餅とをくれた。

あづまやから少し奥に這入ると、二三軒家が並んでゐて、花畑などを拵らへてゐる。さうして其所には、ダーリアが四五輪綺麗に咲いてゐる。分けてもらはうと思つて、其所の人に交渉したが、ダーリアはどうしても分けてくれない。その代り外のものをいろいろくれた。大抵は名前を知らない花許りである。然し中にはなかなか綺麗な花もあつた。朝鮮菊も一本くれたが、是はカサカサして不愉快な花だから、途中で捨てた。その代り途みち露草の花を摘んで歸る。是はコップに水を戴つて、莖を短くして、その中に投げ込んだ。片方は花瓶に插した。露草の方は先生の氣に入らない樣子だつたが、花瓶の花は、綺麗でいいと言つて、先生は喜ばれた。

病人でなくても日の暮れ方は淋しい。殊に秋である。奥さんに、日の暮れ方は、先生のそばについてておあげなさいと言ふ。

先生の手が勢よく動くやうになつた。口の利き方にも、聲にも、力が籠つて來たやうである。

九月七日〔水〕

奥さんと散歩する。修禪寺でおみくじをひいたら、凶とあつて、病人は治ほらないとか、夫婦親子はちりぢりになつて離散するとか、緣喜の惡い事が書いてある。奥さんが驚ぎ込む。自分もいい心持ではない。然し自分までが悲觀しちやいけないと思つて、大に奥さんの迷信をからかつてやつた。さうしてそのおみくじを引きちぎつて、虎溪橋の上から桂川に流した。

野上が來る

九月十日〔土〕

病床日誌に、今朝空腹時に膨滿の感があつたと書いてある。森成君に訊いて見ると、今まで長い間冷やしてゐたのを、一昨日の夜十時から朝までと、昨日の夜十時から今朝までと、二回氷嚢をあてないで見た爲と、胃液が澤山出だした爲で、何心配な事はありませんといふ事だつた。然しそれでも倚氣になるから、あとで自分の部屋に歸つて、もう一度森成君に訊き直して見ると、森成君は、實は幽門の閉塞が段段大きくなる傾向があるから、心配なのだといふ。その結果どうなるのかと問へば、癌になるのだといふ。癌になつたら、まづ半年以上三年以内の命だといふ。先生の胃病は元からたちがよくなかつたのだから、どうも心配だといふ。急に眼の前が暗くなる。然し今驚いだつて仕方がないから、奥さんには素知らぬ顏をしてゐる。

朝飯後奥さんと一緒に花をとりに行く。梅林の先きまで行かうと思つたが、奥さんが苦しくつてあるけないと言ふから、撫子と露草だけを摘んで、引き返す。途でだんどくに似て、もつとパツとした色の花を、雜物師匠のうちでもらふ。前に一度もらつたうちで、又白萩をもらふ。それを花瓶に插して上げたら、先生は喜ばれた。木槿がお好きなら、木槿は澤山あるが、どうですかといふと、木槿はあんまり好かないねといふ返事である。自分も木槿はあまり好かないから、もらつて來なかつた。

九月十二日〔月〕

今日は起こされない内に起きようと思つてゐたら、とんでもない時刻に眼がさめて困つた。なんでも三時頃だつたと思ふ。時計を見たけれども、眠いので忘れてしまつた。もう一度寢る。今度眼が覺めたのは六時半である。

八時頃からかりとした秋晴の天氣になる。いい氣持だなあと、先生が言ふ。髯が邪魔になると、先生が言ふ。それだからこの間から剃りませう剃りませうつて言つてるぢやありませんかといふ。剃つてもいいねと言はれる。それぢやすぐやりませうと、立ち上がる。なんだ、君が剃るのかいと訊かれるから、ええ、安全剃刀があるんだから、譯なく剃れますと答へる。君にこんな長い髯が剃れるもんか、やつぱり黑人でなくつちやと、先生が言ふ。それで女中に、髮結床の親方を呼んでもらふ事にする。

温泉宿で大病人が病後を養つてゐる。その病人の健康がよほど回復して、ある秋晴の午前に、髮結床の親方を呼んで、髯を剃らせる

——如何にも爽やかな、朗らかな感じである。霧を剃つたら、先生の顔が急に綺麗に、病人らしくなくなつた。それで自分も縁側に椅子を持ち出して、顔をあたつてもらつた。縁側には午前の日がさしこんで、足の先きがほかほかする。いかにも秋の温泉宿に來てゐる氣がする。初めて秋の温泉宿にとまつてゐるといふ心持になつた。

九月十六日〔金〕

明日立つ事にしたので、今日はなるべく先生の所へ行かないやうにする。東が行つても、自分は行かない。

それでも夜になつてから行つて、暫く話をした。和亭の畫譜が來たけれども、彩色畫が這入つてゐないので、先生は當てが外れたやうだつた。極彩色のものかと思つてゐたのにと、先生が言つた。もつとも山なら山のかき方をいろいろに違へてかいてある、其處に面白味があるとも、先生が言つた。落款がなかなか面白い、歸つたら印譜でも買つて送りませうからと言つたら、あゝ『蘇氏印略』といふのがあるね、あれを買つて送つておくれよと、先生が言つた。なんでも十圓くらゐのものだらうといふ事である。

一七　高瀬舟

森鷗外

一　解題

一　本文

「高瀬舟」の前半を採錄した。「高瀬舟」は大正五年一月雜誌「中央公論」に發表せられた作者の短篇で、神澤杜口の隨筆「翁草」の「流人の話」に取材したもの。大正七年「寒山拾得」「山椒大夫」その他の短篇と共に、創作集「高瀬舟」と題して刊行せられた。尙、鷗外全集第四卷・現代日本文學全集第三篇・明治大正文學全集第七卷にも收められてゐる。（鷗外全集　全十八卷、鷗外全集刊行會發行）

二　作者

森鷗外（もりおうがい）。醫學者・文學者。本名は林太郎。文久二年一月島根縣鹿足（あのあし）郡津和野町横堀に生まれた。家は累世藩主亀井侯の典醫で、五歳から漢學を、九歳から蘭學を學んだ。明治五年（十一歳）父に從つて上京し、翌年第一大學區醫學校（翌年東京醫學校と改稱）に入學（年齢不足の爲、嘉永元年生まれとして假りに二歳を增して入學を許されたといふ）、十年同校が東京大學醫學部となると共に、豫科から本科に進み、十四年二十歳で卒業。陸軍軍醫副（中尉相當官）に任ぜられて軍醫生活に入つた。十七年ドイツに留學、ライプチヒ大學に入り、在留約四年、英・佛を歴遊して二十一年歸朝。二十四年醫學博士の學位を得、二十六年一等軍醫正に任じて軍醫學校長となつた。日清・日露の兩役には軍醫として出征、四十年軍醫總監（中將相當官）に任命せられ、陸軍省醫務局長となり、四十二年には文學博士の學位を

も授けられた。大正五年願に依り豫備役仰付けられ、翌年帝室博物館長兼圖書頭となり、後また帝國美術院長・臨時國語調査會長を兼ねた。十一年七月、東京市本郷區駒込千駄木町の自邸に於て永眠。享年六十一。文學的の活動はドイツより歸朝後で、明治二十一年七月雜誌「國民之友」夏季附錄に譯詩集「於母影」を發表、十月雜誌「しがらみ草紙」を創刊してこれに據り、飜譯に紹介に評論に、殆ど超人的精力を以て活躍した。「水沫集」「月草」はその記念である。二十三年「國民之友」誌上に處女作「舞姫」を發表、續いて「うたかたの記」「文づかひ」を出して一躍文壇の巨擘となつた。日露戰役出征後は一時沈默狀態にあつたが、四十二年再び勇姿を文壇に現し、自然主義全盛の時流をよそに獨自の藝術境を闊歩すると共に、泰西文藝の紹介に努め、晩年には歷史小說又は考證史傳方面にも筆を執つた。多才多能・博學宏識、常に文壇の指導者・先覺者として重きをなした。主な著作としては上記の外、飜譯に「卽興詩人」「黃金杯」「寂しき人々」「ファウスト」「戀愛三昧」「マクベス」「蛙」等、創作集に「涓滴」「意地」「走馬燈」「分身」「天保物語」「かのやうに」「堺事件」「雁」「塵泥」「高瀨舟」「山房札記」等、評論隨筆集に「ファウスト考」「妄人妄語」、詩歌集に「うた日記」「沙羅の木」、史傳に「澁江抽齋傳」「伊澤蘭軒傳」「北條霞亭傳」等があり、醫學上の述作と共に總べて鷗外全集に收められてゐる。

三　採擇の趣旨

人生の苦悶のどん底にも生き甲斐を見出し得てゐる作品である點に於て、前課と共に否定觀を通過した肯定觀の文學の有力な一作例である。作家は明治大正期の巨匠であり、作品は來るべき日本文學の新しい出發點をなしてゐるとさへ考へられるものである。しかもそこには東洋的・日本的生活精神の有力な具現が認められる。文藝的教材であり、文化的教材であり、且國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【高瀨舟】　タカセブネ　川船の一種。古くは船體が小さくて底深く、後世のは大型で、淺瀨をも漕ぎゆけるやうに底を平たく淺くしてある。「たかせ」は「高瀨」の義で、もと舟の形から名付けられたともいふ。後世これに「高瀨」の字をあてたのは、高瀨（淺瀨）を行く舟の意かと思はれる。

高瀨舟の名は「三代實錄」の元慶八年（一五四四）の條に見えるのが最初で、はじめは遊船の一種であつたらしいが、後には主として貨物の運輸に使用されるやうになつた。江戸時代に至り、角倉了以（すみのくらりょうい）が慶長十年に大井川、十二年に富士川、十九年に高瀨川を夫々開鑿して高瀨舟を通じた。高瀨川のそれに關しては「京都御役所向大概覺書」に次のやうにある。

賀茂川高瀨船　但京より伏見迄之事　　支配人　角倉與一

一高瀨船數百八拾八艘　有船
　但　船長七間　船幅六尺六寸五分　但船數印無之
　登り舟壹艘ニ、荷物拾五石積、但川水少キ節有、船足緩申候、○中略
　下り舟壹艘ニ、荷物七石五斗積、但川水少キ節有、船足緩申候、○中略

尙、同種の舟は各地にあり、前記の諸川のものの外、吉野川（伊紀）・加古川（播磨）等をはじめ、安房・上野などにもあり、多く山川に用ゐられた。

【高瀨川】　タカセガハ　賀茂川の一分流。京都二條木屋町樋（ひ）の口（くち）から西に分岐して直に南下し、途中竹田附近で賀茂川を橫斷してその東に出、伏見の西を流れて京橋で宇治川に注ぐ。古來京都・伏見間の交通・運輸上、重要な運河であつた。その名は、たゝに用ゐた高瀨舟から名付けられたといふ。

高瀨川は江戸時代のはじめ角倉了以が幕府の許可を得て開鑿したもので、慶長十六年起工し同十九年竣工し

た。以來大阪・伏見との連絡が容易となり、所謂高瀬舟によつて物資を輸送し、京都の發展に貢獻する所が多かつた。明治時代に疏水運河が開通してからは、運河としての利用價値は乏しくなつた。

【遠島】　エンタウ　江戸時代の刑罰の一。犯罪者を遠島に送り、その家財・田畑を沒收する刑。追放より重く、死罪よりは輕い。

古への「遠流」に當るもので、「御定書百箇條」によれば、博奕をなした者、破戒の僧、誤つて人を殺した者等に對してこの刑を行ひ、死罪以上に處せられた武士の子もこれに處せられた。流す場所は、江戸よりするものは主として伊豆七島（大島・八丈島・三宅島・新島・神津島・御藏島・利島）時に甲斐・信濃・陸奥・出羽・蝦夷等へ、京・大阪及び中國・四國からは薩摩五島・隱岐・壹岐・天草等へ流すのが例であつた。中古の流罪とは異なり、妻子を同伴したり、衣服・貨財を携帶することを許さなかつた。罪人は島に到著すれば、島守に請うて數十歩の地を借り、茅舍を營んで雨露を凌いだ。身體强壯のものは島民の漁業の手傳等をして纔かに生活することができたが、虛弱なものは往々にして餓死することもあつた。流人が脫島し、又は死罪以上の罪を犯すときは罪の輕重により死罪もしくは磔刑に處し、遠島相當罪以下の罪を犯すときは島替に處した。

因みに、江戸時代の刑罰には敲（輕敲・）・追放（所拂・江戸拂・江戸十里四方拂・輕追放・中追放・重追放等）・遠島（前記各地に便宜放流し、無籍の徒で再犯の嫌ある者は佐渡・御島に苦役せしめた）・死罪（斬罪・火刑・磔・鋸・獄門・梟・銅挽の五等あり、その屬罪として晒・入墨・闕所・非人手下の四種があつた）の四種があり、別に士人の閏刑として逼塞（遠慮等）・閉門（五十日・百日等）・蟄居（謹慎・居屋敷等）・改易・切腹、僧徒のそれに晒・追院・構（一所構・宗構）、婦女のそれに剃髮・奴、庶人のそれに叱・過料・戸閉・手鎖等があつた。

【申し渡される】　申渡（まうしわたし）を宣告される。

「申渡」―（一）まうしわたすこと。いひわたし。（二）江戸時代に、裁判が決定して原・被兩告もしくは罪人にこれを宣告したこと。こゝは（二）。

因みに、徳川時代の刑事裁判での處刑の申渡は刑の輕重によつて異なり、死刑の申渡は、檢使與力が牢屋敷に臨んでこれを行ひ、遠島以下は、奉行自ら吟味席で申渡した。

【牢屋敷】　ラウヤシキ　牢屋を構へた一區域の土地。牢屋の構內。

牢屋は、江戸時代には多く町奉行の配下に屬し、與力格の牢屋奉行（囚獄）の管理の下に、書役・當番・鍵役・打役・調役・賄方役等の同心數十人を置き、既決囚及び未決囚を禁獄・監督した。最も著名なのは江戸小傳馬町にあつた牢屋敷で、敷地凡そ三千四百八十坪あり、中に揚座敷（上り座鋪）・揚屋（上り場）・大牢・二間牢（無宿牢）・百姓牢等の外、役宅・詰所等の諸建物があつた。（囚人のうち、旗本五百石以下・御目見得以上の者は揚座敷へ、御目見得以下及び陪臣・僧侶・醫師は揚屋へ入れられた。これを揚座敷入又は揚屋入といひ、未決囚もこゝへ收容せられた。）

因みに、寶永六年三條新地に造られた京都の牢屋敷は、東西三十八間・南北二十九間で、面積千百二坪あり、中に本牢・切死丹牢・女牢・上り場・上り座鋪の外、囚人御詮議所・役人詰所等の建物があつたといふ。

【護送】　ゴソウ　（一）附添つて護り送ること。（二）囚徒及び刑事被告人を監視し、一の場所から他の場所に送致すること。押送。こゝは（二）。

【京都町奉行】　キャウトマチブギャウ　江戸幕府の職名。老中の支配をうけて京都市中一般の政務を執り、又、五畿內・丹波・播磨・近江八箇國に於ける幕府直領の租稅の徵集、訴訟の裁斷、寺社の管理等を司どつた。（但し、享保七年以後は、摂津・河內・和泉・播磨四箇國の租稅徵收は大阪町奉行の手に基つた。）定員は二名で、東西に分れ、俗に東御役所・西御役所と呼ばれ、月番（一月・文舞）で政務を執つた。多くは十人目付・奈良奉行・堺奉行・駿府町奉行等より擧用せられ、從五位下に敍し、芙蓉間詰を仰付けられ、役高千五百石、役料六百石を給せられた。配下に與力二十騎・同心五十人が屬する。（與力・同心の數は時代により增減があつた。）

この職は、慶長五年に始めて置かれ、京都郡代と稱して一員であつたが、寛文五年一員を增して京都町奉行

と改稱せられた。元祿九年更に一員を加へて三名となり、月番で伏見奉行を幾ねたが、十一年兼職を停止、十五年再び二名に復した。爾來幕末に至るまで變ることなく、慶應三年に至つて廢せられた。

因みに、德川時代に「町奉行」の名を以て呼ばれたのは、江戸町奉行の外、大阪・京都・駿府の各奉行であつた。（他にも、俗稱として町奉行と呼ばれたもの（伏見奉行・奈良奉行等）があるが、正式の稱ではなかつた。）

【配下】　ハイカ　支配の下。手下（てした）。組下（くみした）。

【同心】　ドウシン　こゝでは、江戸幕府の役名。諸奉行・所司代・城代・大番頭・書院番頭等の配下に屬し、多くは與力の下にあつて、各種の雜務に服した下級の役人。町奉行の配下に屬するものは、町方同心と呼ばれ、町與力の指揮を受けて保安・警察の事に從つた。

同心はもと與力と共に「同意して力を合はせる」意に用ゐられ、轉じて、すべて人の家に附庸する被官の士の稱となり、後には自己に附庸する大名を與力、その小身なるものを同心と稱し、更に織豐時代には侍大

將・足輕大將等に附屬する騎馬の士を與力（又は寄騎）、步行の輕士を同心といつたが、江戸時代以後は幕府の役名となり、各奉行その他の重要な職員を佐ける與力と、その屬吏たる同心との別が判然とするに至つた。

町奉行の配下には町與力と町方同心とがあり、その員數は時代により一定しないが、與力は大體二十五人、同心は七十五人乃至百三十人位であり、その俸祿は、與力は普通二百石、同心は普通三十俵二人扶持（多きは三十五俵二人扶持、少きは二十俵二人扶持）であつた。町方同心には、年番方（奉行所の會計・組内の監督等を掌る）・赦帳方（罪囚の特赦・大赦等を管する）・例繰方（刑科に關する例例調査を行ふ）・隱密廻（密偵探索等を掌とする）・火附盜賊改（あらためと）・牢屋見廻・町火消改・町會所見廻・定町廻・臨時町廻等の職掌があり、非違の檢斷や罪人の逮捕などは常に與力と協力してこれに當り、すべて、事の重きは與力自らこれに與り、同心はその補助として輕律を處斷するのを常とした。

尙、同心は、犯罪搜査や犯人捕縛の爲に目明（めあかし）・岡引（おかひき）な

どと呼ばれる小者を手先に使ふのが常であつたが、その弊が漸く甚だしかつたので、文久二年に至つて廢禁せられた。

【上へ通つた】　當局から公認された、公に許された、の意。

〔上〕　カミ　こゝでは、お上、官廳、の意。

【科】　トガ　こゝでは、罪となるべき行爲、罪科、仕置、の意。

【獰惡】　ダウアク　わるづよいこと。兇惡。

〔獰〕　惡い。容貌がにく〳〵しい。性質が惡くきつい。

【心得違】　ココロエチガヒ　（一）思ひあやまり。考へちがひ。（二）道理にちがつた行爲。こゝは（一）で、思慮の足らないこと、あさはかな心、といふほどの意。

【入相の鐘】　イリアヒノカネ　暮方に撞く鐘。又、その音。いりあひ。晚鐘。

〔入相〕　（一）日の入る時。くれがた。黃昏。日沒。

（二）「入相の鐘」の略。

【賀茂川】　カモガハ　「鴨川」とも書く。京都府愛宕郡棧敷ケ嶽の南麓に發源し、南東して鞍馬川を合はせ、上賀茂・下鴨を經て南下し、糺河原に至つて高野川を合し、上京區・中京區と左京區・東山區との間を流れ、紀伊郡下鳥羽村に至つて桂川に合し淀川に注ぐ。古來清流として名があるが現在は水量が少い。出町・荒神・丸太・二條・三條・四條・五條・七條等の長橋が架けられ、四條附近は納涼を以て著れてゐる。

【繰言】　クリゴト　同じことを繰り返していふこと。くだくだしくいふこと。又、その言葉。

【眷族】　ケンゾク　「眷屬」とも書く。（一）うから。やから。みうち。親族。（二）常に恩顧を受ける者。家子（いへこ）。從者。配下。手下。（三）梵語「跋儒嚕羅」（Parivara）の譯語。天性親愛し且臣順するもの、の意。こゝは（一）。

〔眷〕　（一）かへりみる。いつくしむ。めをかける。（二）みうち。親類。

【所詮】ショセン　(一)詮ずる所。つまる所。つまり。畢竟。到底。(二)とても。いかにしても。こゝは(二)。

【白洲】シラス　こゝでは、江戸時代に訴訟を裁斷し、又は罪人を糺問した場所。奉行所。法廷。

各奉行所ではいづれも庭上に礫を布き、裁判を受ける足輕以下庶人をこゝに著坐せしめ、裁判官の座席を三尺ばかり高い床上に設けて取調を行つたので、この名がある。

【口供】コウキョウ　(一)口頭で事實又は意見を陳述すること。(二)罪人の口からその罪狀を述べたのを筆記したもの。口がき。供述書。こゝは(一)。

【口書】クチガキ　こゝでは、江戸時代裁判の際、法廷に於て口供したものの筆記をさす。

被裁判者が足輕以下百姓・町人等の場合にのみ口書といひ、寺社侍以上の士人の場合は口上書(くちうへがき)といつた。裁判が民事關係の場合には、普通その端に訴訟方及び相手方の住所・身分・姓名・年齢等を書き、次に各〻の申分を箇條書として擧げ、終に右の通り相違のない旨を認め、名主等連署の上、原・被兩告が署名捺印して奉行に屆ける形式をとつた。刑事裁判の場合には、詰問又は拷問の結果罪人が白狀に及ぶ時は、その口供を書き記し、その罪狀の相違なき旨を認めさせて日附・姓名を記し、重罪の場合(主として死罪・遠島等になる見込の場合)には、罪人に手錠のまゝ拇指の爪判を捺させた。なほこれには「口書詰文」と稱する上司の評罪の言葉を書き添へ、どく輕微な罪には「御叱り」又は「急度御叱り」、手鎖・過料等になるべき見込のあるものには「不束」「不埒」、所拂・追放には「不屆之旨」、死罪にも及ぶものは「不屆之旨、奉請御吟味候而ハ無申披、奉誤入候」等と記した。これを白狀書ともいひ、刑罰判決の重要調書となつた。

【役柄】ヤクガラ　役目ある身分。又、勤める役目の筋。役向。

【宰領】サイリャウ　荷物を運搬する人夫などに附添つて、これを支配・監督すること。又、その役。こゝでは、罪人の護送・監督をいつた。

【不覺の涙】フカクのナミダ　思はず知らず儻すなみだ。

【白河樂翁】シラカハラクヲウ　松平定信。陸奥白河(十萬石)城主。幼名賢丸。字は貞卿。號は旭峯、後また樂翁と號した。寶曆八年(二四一八)田安宗武の子として江戸に生まれた。安永三年白河城主松平定邦の養嗣子となり、天明三年家督を繼ぎ越中守を稱し、夙に治績の見るべきものが多かつた。安永七年、家齊の將軍となるに及び、老中の首座に推され、翌年更に將軍輔佐の大任を蒙り、挺身幕政の改革に當つて、學者を擢用し、財政を整理し、風俗を匡正し、節儉を奬勵し、文教を興し、武備を嚴にして、所謂寛政の治をなした。執政七年、寛政五年老中職を退き、文化九年(五十五歳)致仕して樂翁と號し、爾來文墨を樂しんで餘生を送り、文政十二年(二四八九)七十二歳で歿した。德川幕府季世の賢相として知られると共に、文學を好み、和歌・雅文に秀で、書畫を能くして、當時の文界に重んぜられた。著書は、政治・歷史・有職故實・隨筆等に亘り、その名の傳はるもの百三十餘種、殊に「國本論」「退閑雜記」「花月草紙」等が著れてゐる。

【政柄を執つて】セイヘイをトつて　政權をにぎつて。政を行つて。

〔政柄〕政治の權柄。政權。

〔柄〕こゝでは、ちから、いきほひ、の意。

【寛政】クワンセイ　光格天皇の御代(將軍德川家齊の治世)の年號。天明九年(二四四九)一月二十五日改元。十三年(二四六一)二月五日享和と改元。

【知恩院】チオンキン　華頂山大谷寺。現京都市東山區林下町にある淨土宗の總本山。高倉天皇の安元元年(一八三五)法然が比叡山を辭して庵をこの境内に結び、他力易行の專修念佛を唱へて、後こゝに寂した。文曆元年(一八九四)勢觀房源智が再興し、四條天皇より勅願寺

（勅願によつて建立又は供養あらせられる寺）の綸旨を賜ひ、華頂山知恩敎院大谷寺の勅額を下された。その後屢〻火災に罹つたが、江戸時代に入り英祐滿譽尊照が寺主となり、大いに寺勢を伸張させた。慶長十二年には奏請によつて宮門跡が置かれ、後陽成天皇の皇子良純法親王がその第一世となられた。寛永十年火災にかゝり十六年再興した。これが現存の堂宇である。その建築物中、御影堂（本堂）・三門・經藏・勢至堂・大方丈・小方丈・唐門はいづれも國寶建造物に指定せられ、寺寶には「法然上人繪傳」「阿彌陀二十五菩薩來迎圖」の如き國寶をはじめ、名什逸品の藏せられるものが甚だ多い。本堂と集會堂との間にある「鶯張り」の廊下は特に有名である。

【喜助】　キスケ　「高瀨舟」の主人公。

作中の身上話によれば、幼少の時流行病のため兩親を失ひ、弟と共に町内の人の情で走使などをして育ち、成人してからは一緒に西陣の織場で働いてゐた。その中弟は病氣にかゝり、兄に迷惑をかけるに忍びず自殺したが、その際弟の最後の願によつて突さした剃刀を拔いてやり、苦を輕くして死なせてやつた。そこを近所の者に見付けられ、弟殺の罪に問はれて、遠島の刑に處せられた。當時三十歲前後。

作者がこの創作の原據とした「翁草」卷百十七「流人の話」には、たゞ「一人の流人」となつてゐる。

【羽田庄兵衞】　ハネダシャウベエ　「高瀨舟」の副主人公。京都町奉行配下の同心。

これも「翁草」にはたゞ「守護の同心」とだけある。

【弟殺の罪人】

德川時代、親族を殺傷した者に對する刑罪は、「御定書百箇條」によれば、親を殺傷し又は打擲した者は磔、舅・伯父母・兄姉を殺した者は獄門、親に危害を加へんとした者、又は舅・伯父母・兄姉を負傷せしめた者は死罪、罪なき實子・養子を殺した者、又は弟妹・甥姪を殺した者は遠島に處せられた。（但し、最後の二つの場合に於て、その行爲が刑罰を目的として行はれた場合は死罪。）

【棧橋】　サンバシ　人又は貨物を船に上下させる爲に、岸から水上に突き出した橋。

【痩肉】　ヤセジシ　痩せた肉體。身體の痩せてゐること。

【神妙】　シンメウ・シンベウ　（一）奇しく妙なること。靈妙不可思議なこと。（二）健氣な所法を褒める語。殊勝。奇特。（三）おとなしいこと。すなほ。こゝは（三）。

【公儀】　コウギ　（一）おもてむき。おほやけざま。（二）朝廷又は政府。公家。おほやけ。朝家。（三）幕府。將軍家。こゝは（三）。

【權勢】　ケンセイ　權力と威勢と。權力を握つて威勢の高いこと。他人を制御する威力。權力。

【媚びる】　コびる　（一）他によく思はれようとふるまふ。相手の顏色を窺つて機嫌をとる。へつらふ。（二）やさしい姿をする。なまめいたさまをする。こゝは（一）。

【役目の表】　役目上。職務上。公職上。

【川床】　カハドコ　「河床」に同じ。河の水の流れる地面。河水の底の地盤。

【霧】　モヤ　霧或は煙霧などが空を覆ふ現象の俗稱。また海霧に用ゐられることもある。普通靜穩な日に發生し、高氣壓の域内に發現することが多い。

【下京】　シモキャウ　ほゞ現京都市下京區の地。古來一般に京都の市街を南北に二分して上京・下京と稱したが、明治十二年三月、郡區町村編制法により、三條通を界として上京區・下京區に區分されるまでは正確な限界はなかつた。しかし大體やはり三條通を界としてゐたやうである。隨つて德川時代の下京の町は、大凡北は三條通、南は七條通、東は東山の麓、西は千本通を限界とした、京都市街の南半部をさしたものとみてよからう。（現在では、四條通以北は中京區へ、賀茂川以東は東山區へ編入されてゐる。（卷九、一三〇頁參照））

【舳】　ヘサキ　船の先首。みよし。（艫の對。）

【氣兼】　キガネ　他人に對する心遣ひ。遠慮。

【遊山船】　ユサンブネ　船遊山をする船。船遊びの船。近世では主として屋形船をいふ。

「屋形船」は、屋形（屋根の形をした船上の設備）を設けた遊山用の船。

多くは河船で、時に海船作りのものもあつた。大小・形狀等は種々で、水夫の多少によつて一人乘・二人乘などと呼ばれた。御座船・屋根船などともいひ、又、主として納涼に用ゐられたところから涼船ともいふ。

因みに、舟に乘つて遊樂することは古くから行はれたが、所謂屋形船による船遊びが一般化したのは江戸時代以後で、最も盛なのは隅田川のそれであつた。

【行掛り】　ユキガカリ　(一)行きかゝるついで。行きがけ。(二)すでに事に著手して中止の出來ないこと。餘勢にかられて中途でやめられないこと。こゝは(二)。

【辻褄】　ツジツマ　(一)始と終と。結局の處。はしゞ。すぢみち。(二)計算。こゝは(一)。

【居ずまひ】　居住　すわつた樣子。ゐざま。ゐすがた。

【二百文の鳥目】　錢二百文。

本文の當時(寛永)は兩四貫の法定相場が著しく亂れて、兩六七貫卽ち金一兩が錢六七貫(卽ち六千文乃至七千文)になつてゐたやうである。假りに兩六貫相場とすれば、二百文は

一兩の三十分の一に當るわけであるが、當時の一兩はその實際の通用價値からいへば今の二十五圓位或はそれ以上にも當つたのではないかと思はれ、隨つて二百文はまづ今の八九十錢位に通用したかと想像せられる。(六九頁「お錢三筋」の項參照)

〔文〕　モン　こゝでは、德川時代の錢貨の單位。その貨幣としては、中央に孔のある圓形の銅錢・眞鍮錢或は鐵錢が用ゐられたが、本文當時は眞鍮の四文錢が專ら行はれてゐたもののやうである。

〔鳥目〕　テウモク　錢貨の異名。圓くて中央に孔のあるその形が、鳥の目に似てゐるから名づけられたのであらうといふ。

尙、「塵添壒囊抄」には「錢ヲ鳥目、鵝眼ト云ハ何ノ謂ソ。鳥目、鵝眼、青鬼(せいき)ナンド、皆是料足(錢)ノ異名也。鳥ノ目ハ圓キ故ニ爾云。鳥ノ大小同ク圓ナル樣ニ錢モ其品異ナレドモ、其形共圓キガ故也云々」とある。

【當時の掟】

「翁草」の「流人の話」の註に「流人に鳥目二百銅づゝ賜事古來より定例なり」とある。

但し「刑罪大祕錄」の「遠島御仕置之事」の條には次のやうにある。

掛り〳〵ニ而遠島申渡、出帆迄在牢、出帆以前、囚人身寄より扶物書付を以、掛り〳〵江願出、右書付計、出帆世話役町奉行江達、町奉行より牢屋敷江差遣、身寄より扶錢無之ものは掛り〳〵より手當錢遣す。雜人ハ壹人江金貳分、揚屋者ハ金壹兩、揚座敷者ハ金貳兩、何れも錢ニ兩渡ス。

〔掟〕　オキテ　(一)定め。とりきめ。(二)規程。法度。法制。(三)處置。計畫。經營。(四)心だて。心ばへ。(五)しきたり。こゝは(二)。

【仕事に取附きたい】　何とかして仕事を得たい、の意。

【右から左へ】　人から受取つたものを直ちに他の人に渡して、暫くも自分の手元に留めておかないこと。

【工面】　クメン　(一)才覺。算段。工夫。(二)金錢の工面の義より轉じて、身代。身上。かねまはり。くらし。こ

こは(二)。

【元手】　モトデ　(一)商工業を營む爲に要する資本金。もときん。もと。資本。(二)事をして利益を生じるもと。こゝは(一)。

【口を噤んだ】　だまつてしまつた。沈默した。

〔噤む〕　ツグむ　口を閉ぢて物をいはない。口をきかない。もだす。だまる。

【意表に出た】　考の外に出た。考へてもないことだつた。

〔意表〕　イヘウ　思の外。計らざること。意外。案外。

【かれこれ初老に手の屆く】　そろ〳〵四十にならうとする、の意。

〔初老〕　ショラウ　四十歲の異稱。

【吝嗇】　リンショク　過度に金錢や物品を愛惜すること。やぶさかなこと。しはいこと。

【身代】　シンダイ　その身に屬する一切の財產。みのしろ。しんしやう。家產。資產。

【扶持米】　フチマイ　扶持として給與する米。一人一日の

食料を標準として米で毎月給する祿。扶持。俸米。
江戸時代幕府では一人一日の食料を玄米五合の割合として藏米を毎月一斗五升支給し、これを一人扶持とした。（故に一人扶持一年の全收入は約五俵にあたるわけである。）但し各藩に於ける一人扶持一日分は必ずしも五合とは定つて居らず、或は四合、或は二合五勺のものもあつた。尙、扶持には別に、職掌に附屬した「役扶持」（例へば作事奉行の役扶持は五十人扶持、匠頭の役扶持は二十人扶持と定まつてゐた）や、專ら下級官吏に加給した「足扶持」「加扶持」等があつた。

【善意】ゼンイ　(一)よいこゝろ。このましい心。(二)他人の爲を思ふ心。好意。こゝは(二)。

【手元を引締めて】こゝでは、日常生活に無駄のないやうにして、財政を緊縮して、の意。

〔手元〕テモト　「手許」とも書く。(一)てぢかい所。手の屆くほどの所。(二)物のもちにぎる所。(三)物を取扱ふ手つき。てなみ。うでまへ。(四)「手本金」の略。手もとに貯へ置く金錢。

【内證】ナイショウ　こゝでは、内密、秘密、の意。（七四頁參照）

【帳尻を合はせる】收支決算の合ふやうにする。

〔帳尻〕チャウジリ　(一)帳面の末。(二)帳簿の精算の結果。

【五節供】ゴセック　「五節句」とも書く。古くから行はれた五つの節句。卽ち、人日（正月七日）・上巳（三月三日）・端午（五月五日）・七夕（七月七日）・重陽（九月九日）の稱。

【七五三の祝】シチゴサンのイハヒ　兒女が七歲・五歲・三歲になつた時、その成長を喜び將來を祈つて行ふ祝儀。男兒は三歲と五歲、女兒は三歲と七歲に當る年の十一月十五日にこれを行ふのが普通で、江戸時代には男女三歲の祝は髮置（始めて髮を伸ばす儀式）、男兒五歲の祝は袴著（始めて袴を穿かせる儀式）、女兒七歲の祝は帶解（附紐を除いて帶を締めさせる儀式）といひ、それぞれ特殊な儀式が行はれたが、現在では一律に新衣を著飾らせて產土神その他の神社に參詣せしめ、これを「七五三の祝」又は「七五三」と稱するに至つた。（「七五三」の呼稱は昔時にはなかつたやうである。）且近年は、男兒三歲の祝は普通これを略し、女兒のそれもまた略することがある。

【暮しの穴を塡めて】生計の缺損をつぐなつて。くちすぎの不足を補つて。

〔穴〕アナ　こゝでは、會計などの缺損、の意。「穴があく」

〔塡める〕ウめる

【波風】ナミカゼ　こゝでは、いさかひ、あらそひ、ごたごた、もめ、の意。

【境界】キャウガイ　佛語。(一)主觀が活動する區域の義で、總べて認識作用に於ける對象或は對境をいふ。(二)轉じて、人の到達した人格的地位・分限・果報等の意。（人間としての位によつて、各人の所知・所覺の程度・限界は不同である故にいふ。）「佛の境界」こゝは(二)。

【一轉して】轉じて。視點を變へて。ふりかへつて。

【算盤の桁が違つてゐる】位取が違つてゐる、標準になる單位が違つてゐる、の意。

〔算盤の桁〕ソロバンのケタ　算盤の珠を貫ぬいてゐる竪の串。

【足ることを知つてゐる】分に安んじて滿足してゐる。老子に「知足者富」「知足不辱、知止不殆」とあり、また遺敎經には「不知足者雖富而貧。知足之人雖貧而富」とある。

【出納】スヰタフ　(一)出すと入れると。だしいれ。(二)金錢又は物品の收入と支出と。(三)昔、藏人所の公事を奉行した下司。こゝは(二)。

【手一ぱい】力のかぎり。なしうるかぎり。できるだけ。餘裕のない。

【御免】ゴメン　(一)免許の意の敬語。おゆるし。(二)免官・免職の意の敬語。(三)容赦・寬容の意の敬語。こゝは(二)。

【意識の閾】イシキのシキキ　識閾をいつた。

「識閾」は threshold of conciousness (英), Bewusst-

seinsschwelle（獨）の譯語。初めヘルバルトの心理學に於て用ゐられた語。ヘルバルトによれば、種々の表象は互に相爭ひ、勝つたものは現實表象の狀態に留り、負けたものは單なる表象努力の狀態に陷る。この兩狀態の境界が卽ち意識閾又は識閾である。但し今日では、單に便宜的に、ある意識作用の生起と消失との境界をいふ場合が多い。

〔意識〕心の醒めて、おぼえのある狀態。心理學的にいへば、感覺・知覺・感情・表象・情緒・意欲等の心的體驗の一切が意味ある統一をなしてゐること。

〔閾〕（一）門戸の內外をしきり、又は室の區劃を設ける爲に敷く橫木。多くは戸・障子・襖を設け、溝を穿つて開閉を便にする。敷居。鴨居。（二）內外の限界。

【係累】ケイルヰ　（一）つなぎ縛ること。つながれること。（二）心のつながれること。思ひきりにくいこと。

二　解釋

一　主題

高瀨舟で護送せられながら、いかにも樂しさうにしてゐて、護送の役人に不思議に思はれた喜助の身の上話。

2　構想

(1)　高瀨舟の護送（初―一二八ノ九）。

(2)　高瀨舟の護送に當つた羽田庄兵衞を不思議がらせた、弟殺の罪人喜助の樂しさうな態度（一二八ノ一〇―一三二ノ八）。

(3)　庄兵衞の問に答へた喜助の身の上話（一三二ノ九―一三七ノ四）。

(4)　喜助の身の上話を聞いて、我が身の上を省み、人の一生といふことを思つて喜助の覺悟に打たれた庄兵衞（一三七ノ五―終）。

3　敍述

〔此の舟の中で、罪人と其の親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。いつも〳〵悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚・眷族の悲慘な境遇を細かに知ることが出來た〕――高瀨舟護送の同心の特殊な任務であり境遇であることを語つてゐる。

〔同心を勤める人にもいろ〳〵の性質があるから、云々〕――「冷淡な同心」「私かに胸を痛める同心」「不覺の涙を禁じ得ぬ同心」といふやうに、三樣の性質に書きわけられてゐる。護送される罪人とその一族の狀態と相應じて高瀨舟護送といふ當時の事實の一斑が髣髴せられて來る。

〔知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕に、これまで類の無い、珍しい罪人が高瀨舟に載せられた〕――話の背景としての季節や地理が簡潔に美しく描かれてゐる。

（三）身につながるわづらひ。妻子・眷屬などの煩累。ほだし。足手まとひ。こゝは（三）。

【謔】ウソ（原文振假名）

【蹈み止る】老子に「知止不殆」とある。（四七七頁「足ることを知つてゐる」の項參照）

【驚異】キャウイ　驚きいぶかること。物事の不思議さに驚くこと。物事の目ざましさに打たれること。

【毫光】ガウクワウ　佛の眉間の白毫から發する光で、佛の智慧を表す。

「白毫」は、白毫相ともいひ、佛三十二相の一。佛の兩眉の間にある清淨・柔軟な白い毛。內外映徹白瑠璃の如く、右に旋つて宛轉し、常に光を放つ。初生の時長さ五尺、成道の時は一丈五尺といふ。佛像には額に珠玉を鏤めて、この相を表す。

〔毫〕毛。細毛。

〔いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けられるやうな、温順を裝つて權勢に媚びる態度ではない〕――喜助護送の同心羽田庄兵衛の注意を惹いた最初の印象である。

〔其の日は暮方から風が歇んで、……あたりがひつそりとして、唯舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである〕――再び背景の季節と土地を描き、ひつそりとした夜舟に乘つた罪人と護送の同心との二人ぎりの世界を展開させてゐる。

〔喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に隨つて光の增したり減じたりする月を仰いで、默つてゐる。其の額は晴やかで、目には微な輝がある〕――護送の同心庄兵衛の眼に映じた喜助の姿であるが、それは平和と感謝と希望との充ち溢れてゐる心境の發露に外ならない。作者のいつもの筆法で、心境の彫刻的表現とでもいつてよいやうな敍法である。

〔喜助の顏が縱から見ても横から見ても、いかにも樂しさうで、若し役人に對する氣兼が無かつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである〕――それが護送せられてゐる罪人の顏だから驚く。庄兵衛でなくても、「不思議だ、不思議だ」を繰返さざるを得ないわけである。「遊山船にでも乘つたやうな顏をしてゐる」といふ次の一句もよくこれに應じてゐる。

〔なるほど島へ往くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。……しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます〕――遠島の舟が遊山の舟に思へるらしい理由はこゝに示され始めてゐる。喜助のやうにどん底生活をしてゐたものにとつては、遠島が却つて救でさへあるとは驚くべき人生の幅である。

〔其のゐろと仰しやる所に落著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも有難い事でございます〕――どん底生活から握つて來た生活觀は徹底したものである。

〔お牢に入つてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ〕――誰でもが悲しみ、慨き、苦しみ、悶へるやうな生活を感謝してゐる喜助の心境は大悟の人であつて始めて到り得る境界である。どん底生活の徹底が齎した驚くべき心境である。

〔おあしを自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございます〕――人間といふものは、不平をいへば限がない。感謝の念を以て生きる者にとつては、どこにも感謝の事實は存するものである。

〔しかしいかに桁を違へて考へて見ても不思議なのは、喜助の慾の無いこと、足ることを知つてゐることである〕――庄兵衛はあまりの驚きに、自分の生活で理解しようとして見たのである。そしてこゝに至つて喜助の喜助たる所以の一端が見つかつたのである。

〔此の根柢はもつと深い所にあるやうだと庄兵衛は思つた〕――喜助と自分との懸隔が何によつて生じたかは更に大きい問題でなければならぬ。しかしそれは庄兵衛の解き得る範圍を超えた問題であるらしい。

〔人はどこまで往つて踏み止ることが出來るものやら分らない。それを今目の前で踏み止つて見せてくれるのが此の喜助だと、庄兵衛は氣が附いた〕――喜助と自分との違ひから人の一生に考へ及び、そこでもまた喜助の一通りならぬ偉さが新しく見出されて來たのである。「踏み止る」といつた語には體驗的なものが出てゐる。「今目の前で」といつてゐることも注意せられる。頭で考へてゐる者、口に說く者は多いが、目の前でそれをやつて見せてくれる者は稀であることを思ふと、この一語には力がある。

〔此の時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた〕――喜助の話に感動した庄兵衛の眼に映じた喜助の姿である。何か超自然的存在ででもあるかのやうな神々しさを感じてゐる。

三　批評

「高瀬舟緣起」によれば、この作の題材は「翁草」にある話の一つで、作者がその話から見出された問題の一つは財產に對する考方であり、一つはユウタナジイ卽ち樂往生の可否に關する醫學上・道德上の問題であつたといふ。こゝに採錄したのは財產に對する考方を示した部分だけであるが、この小說の價値はさういふ問題を體現した喜助といふ人物を創造し得たところに存する。

これ以上の不幸も悲慘もあり得ない程、身も心も落しきつた境界から生ひ立つて來た生活觀の底力を表現し得てゐると共に、作者その人の自畫像的性質を帶び、明治の末年以來個性の自由解放の叫ばれた新しい時代に對する作者の時代批判を示してゐることに思ひ及ぶと、この作の歷史的價値は絕大である。時代と共にその眞價が理解せられることも遠くはないであらう。

三　備考

一　指導の問題

(一)　註解の負擔は誠に輕い。そのために中學初年級にこの文を敎材としてゐる向きもある文である。しかし註解の要が少いといふことは決して初年級向きといふ理由にはならない。解釋のわけても敍述の問題は、相當な年齡の生徒でなくては理解することの出來ないものがある。そのためには、心を集中した讀みの反復を以て出發することが肝要である。

(二)　讀みが平易に行はれ得る課であるから、解釋はいきなり主題を問題として指導に入つて見るのが適切かと思はれる。しかしそれはまだ整頓した表現には達し難いであらう。唯大よその方向づけに止めて、構想に入るべきであることはいふまでもない。

構想に於ては、(1)は背景的由來ともいふべきもの、(2)は話の由來ともいふべきもの、(3)は話そのもの、(4)はそれを聞いた人の感銘であつて、結局に於ては、(3)に中心があるわけであるから、こゝはわけても意をとめて熟讀の要があらう。敍述については中々問題が深い。どん底生活から握つて來た生活觀は一見平凡であつてその實は深い。それだけに理解が困難である。十分心を潛めて一語一句を讀みぬかせなくてはならない。

(三)　樂往生の醫學上・道德上の問題にせられてゐる部分は省略せられてゐる。問題も困難な問題である上に、弟の悲慘な最後の場面はあまりにも生々と描かれてゐて敎材とする上には困難がある。唯、全體の關聯上簡單に補說を試みることが學習の便宜であらう。

この作が如何に鷗外の自畫像的性質を有してゐるかについては、鷗外傳と關係して略說することが適當であらうが、この時代に於ける意義位置に關しては、それが漱石の文學と共に、反自然主義の立場をとつて、それを超越した著しい作家の一人であることに止める外はないであらう。

二　參考資料

(一)　「高瀬舟」制作の動機に就いて作者自ら註記した「高瀬舟緣起」の全文を左に引用する。（これは、はじめ「高瀬舟と寒山拾得（近業解題）」として、雜誌「心の花」大正五年一月號に掲載されたもので、後に創作集「高瀬舟」刊行の際、二つに分けて夫々本文に附記せられたものである。）

京都の高瀬川は、五條から南は天正十五年に、二條から五條までは慶長十七年に、角倉了以が掘つたものださうである。そこを通ふ舟は曳舟である。原來たかせは舟の名で、其舟の通ふ川を高瀬川と云ふのだから、同名の川は諸國にある。しかし舟は曳舟には限らぬので、和名鈔には釋名の「艇小而深者曰艇（ていすなわちこぶねでふかきものをさをさとにふ）」とある艇の字をたかせに當ててある。竹柏園文庫の和漢船用集を借覽するに、「おも

て高く、とも、よこともにて、低く平なるものなり」と云つてある。そして圖には篙で行る舟がかいてある。

徳川時代には京都の罪人が遠島を言ひ渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたさうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞せられる。或るとき此舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがつてゐなかつた。其仔細を尋ねると、これまで食を得ることに困つてゐたのに、遠島を言ひ渡された時、銅錢二百文を貰つたが、錢を使はずに持つてゐるのは始だと答へた。又人殺しの科はどうして犯したかと問へば、兄弟で西陣に傭はれて、空引と云ふことをしてゐたが、給料が少くて暮しが立ち兼ねた、其内同胞が自殺を謀つたが、死に切れなかつた、そこで同胞が所詮助からぬから殺してくれと頼むので、殺して遣つたと云つた。

此話は翁草に出てゐる。池邊義象さんの校訂した活字本で一ページエジ餘に書いてある。私はこれを讀んで、其中に二つの大きい問題が含まれてゐると思つた。一つは財産と云ふものの觀念である。錢を持つたことのない人の錢を持つた喜は、錢の多少には關せない。人の欲には限がないから、錢を持つて見るといくらあればよいといふ限界は見出されないのである。二百文を財産として喜んだのが面白い。今一つは死に掛かつてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ると云ふ事である。人を死なせて遣れば、卽ち殺すと云ふことになる。どんな場合にも人を殺してはならない。翁草にも、敎のない民だから、惡意がないのに人殺しになつたと云ふやうな、批評の詞があつたやうに記憶する。しかしこれはさう容易に判子定木で決してしまはれる問題ではない。こゝに病人があつて死に瀕して苦んでゐる。それを救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縱令敎のある人でも、どうせ死なくてはならぬものなら、あの苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る。こゝに麻醉藥を與へて好いか惡いかと云ふ疑が生ずるのである。其藥は致死量でないにしても、藥を與へれば、多少死期を早くするかも知れない。それゆゑ遣らずに置いて苦ませてゐなくてはならない。從來の道德は苦ませて置けと命じてゐる。しかし醫學社會には、これを非とする論がある。卽ち死に瀕して苦むものがあつたら、樂に死なせて、其苦を救つて遣るが好いと云ふのである。これをユウタナジイといふ。樂に死なせると云ふ意味である。高瀬舟の罪人は、丁度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。

かう思つて私は「高瀬舟」と云ふ話を書いた。中央公論で公にしたのがそれである。

（二）「高瀬舟」の素材になつたといふ「翁草」卷百十七、雜話中の「流人の話」の全文を左に引用する。

流人を大阪へ渡さるに、高瀬より船にて、町奉行の同心之を守護して下る事なり。凡流人は前にも記す如く、賊の類は希にして、多くは親妻子もてる平人の幸に遇るなり。罪科決して島へ遣はさるゝ節、牢屋敷に於て、親戚の者を呼出し引合せて、暇乞をさせらるゝ定法なり。故に親戚長別して舊里を出る道途なれば、己がどち、船中にて夜と倶に起方行末の事を悔て愁涙悲嘆して、かきくどくを、守護の同心終夜聞につけ、哀傷起り、心を痛ましむる事なるに、或時一人の流人、公命を承ると否、世に嬉しげに、船へ乘てもいさゝか愁へる色不見。守護の同心是を見て、卑賤の者ながらよく覺悟せりと感心して、船中にて彼者に對して稱嘆するに、彼云く常に僅の書に、湯々粥を啜りて、露命をつなぎしに、此御吟味に逢候てより、久々在牢の内、結構なる御美ひを戴き、いたづらに遊び暮し冥加なき上に、剩此度島目二百文を下され（流人に島目二百文づゝ、是事古來より定例なり）て、島へ遣はさる事、如何なる果報にて如此なりや、是迄二百文の錢をかため持たる事、生涯に覺え申さず、加程過分の元手有之候へば、たとへ鬼有る島なりとも、一つ身の凌ぎはいか樣にも出來可申候、素より妻子親類とてもなく、苦しき世をわたり兼候へば、都に名殘は更になく候とて、悦ぶ事限りなし。此者西陣高機の空引に傭れありきし者なるが、其罪蹟は、兄弟の者、同く其日を過し兼ね、貧因に迫りて自害をしかゝり、死兼居けるを、此者見付て、迚も助かるまじき體なれば、苦痛をさせんよりはと、手傳ひて殺しぬる其科に仍り、島へ遣はさるゝなりけらし。其所行もとも惡心なく、下愚の者の辨へなき仕業なる事、吟味の上にて、明白なりしまゝ死罪一等を宥められし物なりとぞ、彼守護の同心の物語なり。

（三）「高瀬舟」に關する編者（西尾實）の鑑賞を嘗て雜誌「國文敎育」（第六卷第九號、第七卷第一號）に掲載した「鷗外晩年の作品」から抄錄する。

作者がこの作の由來を說いてゐる「高瀬舟緣起」によれば、この作の素材は「翁草」に見出された話の一つで、作者がそこに心を惹かれた問題は、一つは財産に對する考方であり、一つは所謂ユウタナジイ、卽ちどうせ死なねばならぬ病者をその苦悶から救つて、樂に往生させてやることの可否に關する醫學道德上の問題であつた。

これによつてこの作の意圖は明瞭である。しかしそれは意圖であり問題である。更にさういふ意圖を作品に生かし、さういふ問題を具象化し得た、もつと深い作者の主題感動そのものは、何よりも直接な鑑賞によつて求められなくてはならぬ。何となればさういふ意圖、さういふ問題は一個の論文にもなり、又一篇の感想文學にもなり得る筈なのに、これがその何れにもならないで、ユニークな一箇の短篇小說を成したのには、それだけの根基が主題感動そのものの中に含まれてゐなければならないからである。

作者は「高瀨舟緣起」に於て、一つには財產といふものの觀念、一つには樂死の問題について書かうとしたというてゐることは上に述べた所であるが、その財產に對する觀念といふのは、この篇の主人公喜助が遠島に處せられるに際し、當時の挽によつて島目二百文を與へられ、生れて始めての喜びを覺えつつ、島へ護送される舟の中にあり乍ら、口笛を吹き始めるか鼻歌でも歌ひ出しさうな樣子で島での生活を樂しんでゐるといふ事實についてであるが、かういふ觀念なり思想なりを描くためには、さういふ思想を必然ならしめるべき人物の創造がその基礎を成さなくてはならぬ。喜助はまさにこの要求から創造された人物に外ならぬ。

作によれば、喜助は住所不定の貧しい機織職工であつた。そして「これまでわたしのいたして參つたやうな苦しみは、どこへ參つてもなからうと存じます」と自らもいひ、今遠島に處せられるに當つても、誰一人見送る者もない程孤獨の身の上である。しかもこの眼前の不幸を不幸とせず、僅かの財貨を寶のやうに感謝する外、何の悲しみも不平も不安もなく、煌々として輝きわたるやうな愉悅の心境にゐる。それが今護送されつつある罪人なのである。（中略）

この如き諦念と安心とは一體どこから來たか。その生立境遇から見て、それだけの宗教的修行なり道德的鍛練なりをもつてゐる喜助でないことはいふまでもない。故にそれは畢竟彼の境遇によつて鍛成せられた心境に外ならぬ。彼は今まで人生のどん底ばかりを歩いて來た。これ以上の不幸も悲慘もあり得ない程身も心も落しきつた境界にゐた。かくて彼の强さは何物をも持たぬ所から來た强さであり、彼の安心は墮ち切つて最早墮ちる懼を知らないものの安心である。喜助はいふ、

そのゐろと仰やる所に落ち著いてゐることが出來ますのが、先づ何よりも難有い事でございます。

と。いかにも喜助らしい言ひぶりである。しかし乍らそこに含まれてゐる意味には、人生を悟り盡した者のみの言ひ得る眞理の深さがある。所謂個性と自由とのために「解放」の叫びの喧しかつた當年に於て、喜助にこの一句を吐かしめてゐる作者その人に私は打たれる。（中略）

ここまで考へて來て思ひ及ぼさざるを得ないのは、玆に著しく作者その人の示現があるといふ一事である。醫學博士軍醫總監として令名の高かつた作者、文學博士として作家評論家として文壇の重鎭であつた作者、又帝室博物館長として文展審査委員として、我國文化の進展上に貢獻される所の尠くなかつたこの著者を、住所不定、窮乏の底に沈んで、つひには弟殺しの犯人として護送されつつある喜助に準へることの不當なのはもとよりであるが、しかし喜助の人生に對する態度には作者のそれと一脈の相通ずるものがないであらうか。私には、喜助の人生に於ける地盤はやがて作者のそれであるやうにさへ思はれる。

作者は二十歲大學卒業と共に、陸軍省に入つて軍醫となつた。そして四十六歲軍醫總監に進み、陸軍省醫務局長に補せられて、大正五年五十五歲で退官するに至るまで、一方には創作に評論に文壇上重要な位置を占め乍ら、吏として醫學者として忠實熱誠その任を完うしてゐる。更に退官と共に宮內省に圖書頭となり、帝室博物館長となつて、大正十一年六十一歲で、萎縮腎に罹つてその一生を終るまで、稀に見る社會的實務の人として終始せられた。しかも圖書頭としての在任中にも、帝鑑考元號考等の考證に學的研究を怠らなかつたことは、前官の場合幾多衞生學上の研究に於て、論文に著述に貢獻されたのと同樣であつた。ここにこの作者の作者としての特質が窺はれると共に、又その文學が如何なる意義性質を有するものであるかを見ることが出來る。

卽ち作者の文學は、文學的天分に甘へて、自己を特殊なもののやうに考へる安易な生活から産まれたものではなくて――いひかへれば制作といふものに社會生活上一種の特權あるもののやうに考へる、所謂文壇人的生活の中からではなく、あくまで社會の一員としての義務を負ひ拔かうとする、あらゆる「文學者的氣分」や贅澤を捨てた生活の中から成就されたものであつた。作者が人として經驗した忍苦は決して制作上の苦役のみではなかつた筈である。しかもかくの如き、作者としては極めて拘束の多い生活を送りつつ、その餘裕の乏しい生活の間から、あれだけの作品を成してゐる作者を考へると、流罪の生活の中にさへ希望を抱き喜びを感じて進んで行かうとする喜助の人物が決して偶然に創造されたものでないことが肯かれる。

社會を改造して合理的な生活を打建てようとするのが現代思潮の大勢である。しかしその合理といふことが欲望を基礎としての合理である以上、それは果して何時の世に實現せられることが出來るであらうか。人間の欲望を肯定し、その滿足を求めた改造は、その欲望に限りなき以上、どこまで行つても目的に達することは難い筈ではないか。この方向を辿る進歩は、結局同一面上の運轉であつて、人生の更に深い生面を開拓する努力ではあり得ない。ここに社會的現世的事象に對する欲求を出來るだけ否定しようとする宗教の意義が存立する。

現世的欲望の否定といへばいかにも消極的に聞えるけれども、實は更に深い人生開拓の必然的な要求の結果であつて、これより積極的向上的な生活態度はあり得ない。そしてここに却つて現世的環境に對する知足と感謝が可能になる。喜助はこの如き欲求の否定とこれに伴ふ安心とを境遇上餘儀なく體驗させられた。古來の修道者達が長い苦練によつて到達することを得た「我」の否定を、喜助は汲汲として露命をつながんが爲に働く極貧の生活によつて把握すると共に、又所有なく、要求なき人の自由さ安らかさをも體得した。卽ち何等の欲望を抱くことも許されない程惨めに窮迫した生活のどん底にあつてそこから宗教的諦念に等しいものが拓かれたといふのが作者の見た喜助である。この間の消息は、何よりも、この作者が、運命論者のやうに與へられた任務を負ひ、しかも完全に負ひ拔かうとする沒我的態度によつて把握せられたものでなくてはならぬ。ここに宗教を語らず、宗教に沒交渉なるが如くにして、深くたしかに宗教の本質を握り、默々としてこれを實現し生活しつつある作者の姿がある。かくて古い時代の人らしい喜助が描き出されると共に、永遠に新しい時代を批判して立つべき人生が創造されたのであつた。

（四）鷗外の文學が將來の日本文學に對してもつべき意義に關し、佐藤春夫氏はその著「日本文學の傳統を思ふ」（雜誌中央公論一昭和十二年一月號）に於て次の如き所論を試みてゐる。

「もののあはれ」が將に高閣に束ね去り終らうとする時代に當つて、玆に新文學の權化とも見知るべき全く見られない文學上の面魂を具へた一文豪の出現を見たのは史上最も有意義で興味の盡きぬところである。博識多讀を以て知られた彼の書架に平安朝文學に關する藏書は多く見るところがなく馬琴の遺作の方が見られたと傳聞して、自分は私に是ある哉の感を抱いたものであつた。彼は長敬すべき大人物であり不世出の大才ではあつたが、その文學には奇異なばかり「もののあはれ」的な何物をも見せてゐなかつた。馬琴の如く彼も亦忠孝節義の東洋人であつたとしても、日本民族らしい精神的風貌は甚だ乏しい。彼の產地が偶裏日本の邊陬の地であるのと、その精神的風貌の大陸的なのとを思ひ合して聊か奇異の思ひがする程である。彼とは何人であるか森鷗外その人を指すのである。筆者は鷗外崇拜と追慕とにかけては人後に落ちぬ一人たることは自他ともに知るところである。ただ彼が決して「もののあはれ」的文學者でなかつたといふだけである。理知的で强靭な意志を藏した彼は、「もののあはれ」の如きを恐らくは兒女の態として喜ばなかつたに相違ないと思ふ。痛烈な性格にとつてもののあはれの微温的なのは堪へがたい、恕しがたいものであつたかとも考へられる。鷗外の初期の作を評してその書簡中に沈痛奇雅と評した漱石の用字四文字はさすがに鷗外の文學を評し得て面白く、言ひ盡してゐるかの觀がある。沈痛奇雅は凡そ「もののあはれ」とは殆んど風馬牛の趣であらう。鷗外の諸作、例へば「雁」の如きを見て鷗外の僞人を知り、そのえらさの種類が西歐の哲人の如き面影を示してゐるのに氣がついたら自分の語らんとする所の眞意の大半は多分了解されるであらう。思ふに彼こそ正に最初の新しい日本人であつた。さうして、新しい日本文明の心臟、日本文學はこの新日本人によつて創設された。さうしてこの新日本人を新日本文學を民衆の大部分は半世紀を經て未だまるで理解しないでゐる。先驅者の運命といふよりは寧ろ異邦人の待遇に似てゐる。自分はそれを甚だ不滿には思ふが、しかし鷗外の文學を見て無理もないといふ氣もしないではない。その藝術の一般にとつての難解は單に作者と讀者との教養の差違や、その作風の高踏的などの問題よりも少し深いところに横はつてゐるのではないかと思はれるからである。彼の文學精神が民族的に見て斬新なあまりに奇異なために、一般には理解の手がかりを發見しがたいためではなからうか。あまりに奇異なものから美を發見するためには人は先づそれを見慣れるまでに相當な時間を要する筈である。その上に彼の心情、彼の文學精神は民族の魂と簡單には融合しない面を持つてゐるのではあるまいか。自分は近時この疑を持つて鷗外全集を、重ねて重ねて熟讀點檢しつつある。彼の心情の機密と民族性とを考察するのに深い興味を覺えはじめたからである。彼が冷徹な科學的精神、妥協を許さぬ秋霜烈日の氣魄、皆「もののあはれ」族と氷炭相容れぬものであらう。もののあはれ族をして言はしめれば「いや

に理くつぽい、冷酷な一こくな無あいそな」などと片づけてしまふものであらう。尠くも彼の虚無感や彼の心情の氷のやうな透明さ、また寒氷の下の水のやうな一種の温かさ――なじみさへすれば不思議に温く快くさへあるものも、一般にはなじみ難い不氣味なものであるかも知れない。漱石が多數の門人を擁して見るから和氣藹然たるにくらべて、鷗外が血族の異樣な程深い愛慕の代りには他には多く友のないやうな形も亦この場合思ひ合される事ではないか。

又彼が終生渝らぬ外國文學の熱愛者、紹介者であつたのに、漱石はその學才には不拘英文學の研究を早く放棄して惜まず欣然として東海文人の風を帶びた事實や、漱石の文學が一般に理解され歡迎されるのと鷗外の場合なども對比して思ひ合される。漱石とても單純な「もののあはれ」族ではないまでも、鷗外のそばに置く場合には遙に日本民族的である。非人情、則天去私の漱石はもののあはれの側の日本人ではないとしても、風流の或は「さびしをり」を通じてもののあはれにつながるもののある日本の文學者であらう。鷗外はその教養の深さ、その才能の高さを以てして、遂に十七文字三十一文字の在來の詩形には成功しなかつた。然らば鷗外は詩魂を持たなかつたかといふに、否々、大に否である。一度新日本の詩形たる新體詩の世界に入ると、和歌俳句の世界のペンギンは正に天馬であつた。彼はこの方面でも正に第一人者である。併しその新體詩は決して藤村のそれの如く「もののあはれ」の脈をひいた或はそれを新形體としたものとは全然別個のものである。尙鷗外は俳句は別として、和歌に於ても趣を具へて佳調を成したものは決して絶無ではない。ただその趣が飽くまでも新らしいのである。ただ在來の和歌とは相似てゐないのである。似ても似つかないのである。

歌もかかれ氷を盛れる玻璃の盤ほがらに透きてみえぬ隅なき（うた日記）

一首よく自家が吟詠の理想を語るものである。宛然幽玄や餘情の排除にも似て、「もののあはれ」族の三十一文字とは全然別個の詩境を目ざしてゐるのが窺はれるであらう。新詩社同人等の努力によつて新體詩の一體として傳統から解放されて、國際的な抒情詩の一種となり得た新派和歌には、まだしも鷗外の詩魂を托すべきものがあつたが、飽くまで民族的に傳統的な、徹頭徹尾民族性から成つた俳句は鷗外の能を以てして遂に手に負へなかつた。鷗外もこれは自ら承認してゐたとか。門外漢ながら漱石の句は鷗外に比べるまでもなく堂に入つて、さびもしをりもあるもののやうに思ふ。

漱石鷗外の對比はどうでもいいが、要は鷗外の文學がもののあはれとは關聯の少い新文學であることを指摘し、その一般的に迎へられない理由をこの點に置き、又新日本文學の紀元を鷗外に置かうといふ意を洩すまでである。

鷗外の文學の深さと大きさと、その健全で淸淸な美とは將來必ずや日本文學史上一の大きな流と成るであらう。鷗外の文學がまだ一般民衆から了解されず、尊重されない間にも識見あり才能ある幾多の文學者が彼に指導者を見出した。就中、永井荷風は鷗外の爲人に對する敬慕と、さうして多分その深い虚無觀に對する同感とから鷗外に傾倒し師事してゐる。自らモウパツサンと人情本との奇妙な合流と自家の藝術を說明してゐる荷風が鷗外の文學へ合流することは鷗外文學の流れの將來の發展のために面白い指示を持つやうに思はれる。芥川龍之介も亦その共通な理智的にアポロン型の傾向のために鷗外の藝術に範を見出した。芥川は「もののあはれ」の藝術に關して多大の理解と關心とを持つてゐたから彼が鷗外の文學を學んでゐる間に鷗外の新文學と「もののあはれ」的の文學との融和合流の上に使命を果すところがあつたらうと思ふのに彼の夭折は遂に鷗外文學の流れに殆んど何物をも加へなかつた。しかし將來前記の二家の如き有爲の大才が多くこの文學の流を掬みこの流に棹さす事は多く疑ふを須ひぬ。ただそれが在來の國文學とどんな交渉を以つて進展するかの問題に自分は多大の興味と希望とを抱く者である。もし鷗外の文學と「もののあはれ」の傳統とが全然絶緣體のものならばも早、問題なく絶望であるが、たとひ全然別個の靈であるにしろ、鷗外が無論「もののあはれ」を知らぬ筈もなかつた。第一義とすべき他の物を抱いてゐたために、「もののあはれ」を二の次に置いたまでの事であつたらう。それ故鷗外文學が一見相容れぬが如くでも結局は傳統と抵觸するわけではあるまい。適當な人材がこれを融和合流させるであらう。鷗外自身にしても例へば「山椒太夫」の場合の如き必要さへあらば、もののあはれの古典美と傳統的精神とをその藝術のなかに存分に生かし得てゐるのだから、この一事だけでも鷗外を源泉とする新日本文學が「もののあはれ」の傳統との融和合體は考へ得る。尤もその二つは本質的に可なり相違したものを持つだけに困難を伴なひ歲月をも要するものであらう。併しまたそれだけに、その二つのうち消滅することなく兩立して進展する場合は、傳統的な文學は可なり重大な變貌を呈するであらうと思ふ。鷗外をして馬琴の運命の如き史上孤立の苦杯を嘗めさせたくないといふのはたゞ鷗外のためではなく祖國の文學の進步發達のためである。

一八　愚禿親鸞

西田幾多郎

一　解題

一　本文

「思索と體驗」に收められてある「愚禿親鸞」の全文で、明治四十四年四月に執筆せられたものである。「思索と體驗」は、作者の論文集で、大正四年千章館から刊行せられ、後岩波書店によつて再版せられた。その序文に作者自ら、「『思索と體驗』と題したのは單に余が思索したもの、體驗したものといふ意に過ぎない。京都に來たはじめ、余の思想を動かしたものはリッケルトなどの所謂純論理派の主張とベルグソンの純粹持續の說とであつた。後者は之と同感することによつて、前者は之から反省を得ることによつて、共に多大の利益を得た。併し余はベルグソンをその儘に信ずるものでもなければ、またリッケルトの所論を犯し難しと考へるものでもない、現今哲學の要求は寧ろ此等の思想の總合にあるのではないかと思ふ」と述べてゐる如く、新カント學派の論理主義とベルグソンの純粹持續の說とを、それ等の綜合の上に新しい哲學を樹立しようとの意圖の下に、理解・敍說した諸論文が主な內容をなしてゐる。（思索と體驗　一冊、大正八年五月、岩波書店發行）

二　作者

西田幾多郎（にしだきたらう）。哲學者。明治三年四月石川縣河北郡宇ノ氣村森に、西田得登（とくの）の長男として生まれた。第四高等中學校（後の第四高等學校）を中途に退き、二十四年帝國大學（後の東京帝國大學）文科大學哲學科選科に入り、二十七年卒業。翌年石川縣立七尾中學校教諭、次いで第四高等學校講師となり、更に山口高等學校（山口高等商業學校の前身）・第四高等學校・學習院等の教授を歷任、四十三年京都帝國大學文科大學助教授に轉じ、大正二年教授に進み、同年文學博士の學位を授けられた。爾來、同大學哲學科の中軸としてその發展に寄與すること特に著しく、昭和三年九月退官後は名譽教授の稱號を與へられ、又、昭和二年以來帝國學士院會員として現在に至つてゐる。明治四十四年「善の研究」を刊行して以來二十有餘年、天才的な思索と不撓の精進とによつて、「西田哲學」の名を以て呼ばれる、世界的意義を有する獨創的な哲學體系を樹立し、我が國哲學界の第一人者として重きをなしてゐる。著書には「善の研究」「思索と體驗」「自覺に於ける直觀と反省」「意識の問題」「藝術と道德」「働くものから見るものへ」「一般者の自覺的體系」「無の自覺的限定」「哲學の根本問題（行爲の世界）」「同（辯證法的世界）」「哲學論文集　第一」等がある。

三　採擇の趣旨

前二課が人生の苦悶に徹した上に見出された肯定觀の具體的表現であつた後を承けて、本課には同じ肯定觀の宗教的徹底である眞宗に對し、又その宗祖に對して考察を加へた哲學的試論を揭げた。作者が現代日本の有する世界的哲學者の一人であることも教材としての意義を高からしめるであらう。文化的教材であり、國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【愚禿親鸞】グトクシンラン　親鸞聖人。愚禿はその自稱。淨土眞宗の祖。諡號見眞大師。その傳記には猶未詳

の點が多い。承安三年（一八三三）四月京都に生まれ、父は藤原氏の末流日野有範、母は源氏、幼名を松若丸といつた。少くして叡山に登り慈鎭（慈圓）の室に投じて薙髮し、法名を範宴といつた。爾來只管眞實道を求めんとして苦心したが、自力聖道の敎は竟にその心を滿足せしめることが出來なかつた。建仁元年（二十九歳）比叡山を下り、京都の六角堂（現下京區六角通り東洞院西入）に百日間參籠して度脫を祈つたが、法然上人を吉水の禪室に訪ひ（その九十五日目に聖德太子によつて示現せられたものと傳へられる）、飜然自力難行を捨てて他力易行の道に入り、名を綽空と改めた。元久二年法然からその著「選擇本願念佛集」の書寫竝びに眞影の圖畫を許され（當時法然圓授の弟子は、選擇集の內覽、竝びに親影の圖畫を許されたことを以て、直弟子たる資格の證明とした）、名を善信と改めたが、偶〻承元元年（三十五歳）念佛停止の事に連坐し、俗名を藤井善信（ふじのぶ）と賜はつて越後の國府に配流せられた。謫居七年（從來勅免の年を以て五年といはれてゐた）、惠信尼を娶り、數子をあげた。（但し、これより先、親鸞は一度妻帶したものの如く、罪過に陷つた時鸞はその先妻の子であると推定されてゐる。）愚禿と號し、また名を親鸞と改めたのもこの越後滯留の間であるといはれる。建曆元年勅免を蒙り、建保二年（四十歳）妻子を伴なつて常陸に入り、下妻（現茨城縣眞壁郡下妻町）に暫く居を占め、後、稻田（現茨城縣西茨城郡西山內村稻田）に草庵を結んで化導に力めた。（後年門侶によつてその跡に西念寺が創建された。）元仁元年（五十一歳）「顯淨土眞實敎行證文類」（略して「敎行信證」といふ）を撰述して淨土眞宗の本義を開闡した。後、出でて下野國高田（現栃木縣芳賀郡物部村高田）に暫く足を留めたが（後年弟子眞佛の門流がとゝに今の專修寺を開いた）、更に妻子を稻田に殘したまゝ（但し惠信は後に、子供と共に越後に歸つた）歸洛の途につき、相模・三河・近江等を經て遠近の僧俗を敎化しつゝ、嘉禎二年（一説に三年）京都に入つた。しかし、終始物質的には惠まれず、家庭的にも一家の離散、我が子善鸞の反逆等、あらゆる人間苦を體驗し、轉々として居を移しつゝ、僅かに同信同朋達の合力によつて貧苦の生を支へた。しかも歸洛後は專ら書寫竝びに撰述に全力を注いで老を知らざる精神力を示したが、弘長二年（一九二二）十一月萬里小路の一坊舍に寂した。享年九十。「敎行信證」の外、「淨土文類聚鈔」「愚禿鈔」「淨土和讃」「高僧和讃」「正像末和讃」「入出二門偈頌」「三經往生文類」「尊號眞像銘文」「一念多念文意」「唯心鈔文意」等の著作多く、後人の編にかゝるものに「末燈鈔」「親鸞聖人御消息集」の外「歎異鈔」「口傳鈔」等の聞書がある、收めて「眞宗法要」にあり、その他「眞宗聖典」「親鸞聖人全集」等各種の遺文集も刊行せられてゐる。

〔愚禿〕「愚」は愚惡・愚癡等の義で、謙辭。「禿」は「はげ」（無髮）の意にも用ゐるが、こゝは「かむろ」（結髮にしないこと）の意。「愚禿」の語は、當時淨土敎信奉者の間に、その自稱として用ゐられたものの如く、傳聖覺作の「黑谷源空上人傳」（一名「十六門記」）に「愚禿此篇を記するに身毛爲竪て、雙眼に淚を浮ぶ」とある。しかし、親鸞が自ら愚禿と稱したことについては、「敎行信證」卷末に前項に述べた念佛停止の事に言及し「これによりて眞宗興隆の太祖源空法師、ならびに門徒數輩罪科をかんがへず、みだりがはしく死罪につみす。あるひは僧儀をあらため、姓名（しやうみやう）をたまふて遠流に處す。予はそのひとつなり。しかればすでに僧にあらず、俗にあらず、このゆゑに禿の字をもて姓とす」（敎行信證文類、顯淨土眞實敎行證文類）とあつて、聖覺の場合に於けるとは著しく異なつた意識に於て用ゐられてゐる。卽ちそれは旣に消極的な謙辭ではなく、積極的に非僧非俗の沙彌生活を標榜するもので、更に「賢者の信を聞いて愚禿が心を顯はす。賢者の信は、內は賢にして外は愚なり。愚禿が心は、內は愚にして外は賢なり」の語に始る「愚禿鈔」撰述の精神や最晩年の「愚禿悲歎述懷和讃」等に徵すれば、それは親鸞の生涯を一貫する痛感と體驗と信念とをこめた言葉であり、また宗敎一般の本質的契機を示すものであることが知られる。（參考資料一・二參照）

尙、「禿」の字はもと外道等が剃髮の沙門を罵り、又は佛敎中に於て破戒等の僧を貶するに用ゐたもので、中阿含第十二韓婆陵耆經には「我不欲見禿頭沙門」とあり、涅槃經卷三には「破戒不護法者名禿居士」「爲飢餓故發心出家、如是之人名爲禿人」等とある。

〔親鸞〕七祖（次項參照）中の天親及び曇鸞の名に因むもの

であるといふ。（この二祖が口稱念佛よりも憶念の信を重んじた點に傾倒せることを示したものであらう。）

【眞宗】　シンシュウ　「淨土眞宗」の略。俗に一向宗・門徒宗等ともいふ。親鸞を祖師と仰ぐ、我が國淨土門の一派で、無量壽經（康僧會譯）・觀無量壽經・阿彌陀經を所依の經典とし、三國七祖（印度の龍樹・天親、支那の曇鸞・道綽・善導、日本の源信・眞空）を祖承とし、淨土宗と同樣、凡夫たる自己の行によらず、ひたへに彌陀の絕大な慈悲を信じ、その本願に乘じて往生を期することを以て本旨とするが、淨土宗が稱名念佛を以て往生の正因とするに對し、それすらも猶自力を交へたものとして絕對の他力を主張し、他力廻向の信心こそ往生の正因であるとなし、稱名念佛はその信心の發動としての佛恩報謝の行業であるとする點に於て、一層他力に徹してゐる。即ち、教（無量壽經に說く眞實敎）・行（念佛、即ち南無阿彌陀佛）・信（彌陀の本願を信受して疑はざる心）・證（眞實信心に攝り、煩惱を斷ぜずして涅槃の證果を得ること）の四法を立て、餘宗が敎・行・證の三法のみを立てて信を輕視するのに對し、特に信の一法を重視し、しかもこの信は自己の起す信ではなく、彌陀の本願そのものの衆生に於ける顯現であるとして、願・信の一體を說き、その獲信（ぎやくしん）によつて往生は臨終を待たずに平生に決定するものであり、隨つてこの一念が相續してその後に出る多念の稱名は皆報恩行であるとする。かくして信心正因・稱名報恩を以て實踐の要諦となし、更に世間に處しては、王法を本とし、仁義を先とし、能く己が分を思量して全體生活の秩序に隨順することを以て敎旨とする。宗規としては、肉食・妻帶を認めて、專ら在家往生の門を開き、殊更な持戒を必要としない。（但し、それを放縱の認容と誤る非違に對しては親鸞自ら「親あればとて惡をこのむべからず」と深く戒しめた。）

「弟子一人ももたず」といつた親鸞は、伽藍佛敎を排して一寺の建立も肯てせず、その敎團も僅々四十名內外の同朋同行の集りで、「淨土眞宗」の語もその確信を示すものに過ぎなかつたが、彼の歿後はそこに統一の中心を作る必要が生じて、文永九年覺信尼（親鸞の孝女・覺信の孫女）等の大谷本廟草創となり、その孫覺如はこゝに「本願寺」號を揭げて、本願寺中心主義をとり、爾來宗勢時に消長あつたが、足利時代の末期に本願寺第八世の法主蓮如によつて隆盛し、後の盛運の基をなした。（十一世顯如の歿後本願寺は東西に分裂し、その他高田派・佛光寺派・木辻派等地方門侶の傳統を汲む各派を含めて現在は十派に分れてゐるが、就中西本願寺を本山とする本願寺派、東本願寺を本山とする大谷派の敎權が最も盛である。）

【上人】　シャウニン　（三一〇頁を見よ）

【敎義】　ケウギ　こゝでは、をしへの趣意。宗門の主義。

【標榜】　ヘウバウ　（三七六頁を見よ）

【宗敎そのものの本質】

作者自らその著「善の研究」第三編に於て、「善」の考察に關係して宗敎の本質を次の如く述べてゐる。

善を學問的に說明すれば色々の說明はできるが、實地上眞の善とは唯一つあるのみである。即ち眞の自己を知るといふに盡きて居る。我々の眞の自己は宇宙の本體である、眞の自己を知れば直に人類一般の善と合するばかりでなく、宇宙の本體を融合し神意と冥合するのである。宗敎も道德も實に此處に盡きて居る。而して眞の自己を知り神と合する法は、唯主客合一の力を自得するにあるのみである。而して此力を得るのは我々の此僞我を殺し盡して一たび此世の欲より死して後蘇るのである。（マホメットがいつた樣に天國は劍の影にある）。此の如くにして始めて眞に主客合一の境に到ることができる。これが宗敎道德美術の極意である。基督敎では之を再生といひ佛敎では之を見性といふ。

〔宗敎〕　シュウケウ　（三七八頁「宗敎問題の項」を見よ）

〔本質〕　ホンシツ　（一）本來の性質。根本の性質。（二）現象に對して形而上學的實在、即ち本體。（三）時間的・空間的存在をして然あらしめる所以の客觀的存立。事物の事物たる姿を保つに缺くことの出來ぬ要素。こゝは（一）。

【翻身一回】　心機に一大回轉を行ふこと。

〔翻身〕　ホンシン　身をひるがへすこと。

【神髓】　シンズキ　「眞髓」とも書く。その道の奧義。蘊奧。

【コペルニクス】　Nicholas Copernicus (Koppernigk)　ポーランドの天文學者。西曆一四七三年二月プロシャ領ポーランドのトルンに生まれた。一四九一年クラカウ大學に入り、牧師を志して神學・醫學等を學び、又數學・天

文學等を修めた。次いでイタリアに遊學、殊に天文學・數學に對する愛好を深くした。一五〇五年イタリアから歸つて僧籍に入り、次いでフラウエンブルクの僧院長となつて生涯を過した。聖職の傍ら天文の研究に勵み、一五一〇年頃から天動說を疑ひ、種々の觀測・計算の結果遂に地動說を確信し、天動說を支持するキリスト敎徒の非難・迫害に對して敢然自說を主張し、近世に於ける科學界・思想界に大革命を生み出した。西曆一五四三年五月、七十歲を以て歿した。その宇宙觀の全貌を示す「天體の回轉運動」(De Revolutionibus Orbium Coelestium)は一五三〇年に完成、十三年間公表を見合はせたが、遂に意を決して印刷に附し、その第一本が彼の手に屆けられた時には、既に臨終の床に在つたといふ。

【地動說】　チドウセツ　heliocentric theory（英）　太陽中心說ともいふ。總べて日月星辰の日週運行及び年週運行は、地球の自轉及び公轉によつて相對的に起るものであるとする學說。

古くギリシヤのピタゴラスによつて主張せられたが、十六世紀に至つてコペルニクスの研究の結果科學的に立證せられた。勿論當時は、聖書の敎說と矛盾するの故を以て宗敎界から壓迫せられ、一般にも信ぜられるには至らず、その後も論爭が續けられたが、十七世紀の初頭、ドイツのケプラーによつて遊星運動の法則が發見せられるに及んで確立せられ、更に十九世紀の初頭恆星の視差が實測せられるに及んで、最後の勝利を得た。

【眞理】　シンリ　眞實の道理。論理學的には、論理の法則に一致する吾人の知識。哲學的には、何人にも、いつ如何なる場合にも妥當なりと認め得られる知識。

【トレミ】　Ptolemy　又、プトレマイオス・クラウディオス(Ptolemaios Klaudios)ともいふ。ギリシヤの天文學者・地理學者。生歿年未詳。その經歷に關しても、西曆一五〇年前後アレクサンドリアで活躍したといふこと以外、餘り傳へられてゐない。古代に於ける最も卓越した科學者の一人で、地球・太陽・月・恆星・惑星等の位置及び運動を研究してギリシヤ時代の宇宙構造說を大成し、有名な天動說を完成した。又、地球が球形であることを科學的に說明し、北半球に見える恆星の目錄を作り、先人及び自己の觀測資料を集成して有名な天文學書 Megale Syntaxis（後アラビア語に飜譯せられて Almagest と改題）を作つた。又、地理學にはじめて科學としての基礎を與へ、數學的方法を用ゐて地球上の位置を緯度・經度によつて表すことを考へ、地理學書 Geographike Syntaxis 及び地圖 Cosmographia 等を作つた。その他、光學・音樂等に關する著述がある。

【天動說】　テンドウセツ　geocentric theory（英）　地球は宇宙の中心に靜止し、天球上に於ける日月星辰の運動は總べて地球を中心として行はれる實際の運動であるとする說。

素樸的な天文觀察によつて何れの古代民族にも共通に認められた原始的宇宙觀である。西洋では二世紀の頃トレミによつて大成せられ、キリスト敎理の支持を得て中世の思想界を風靡したが、文藝復興期頃から學界の一部に疑はれ、遂にコペルニクスの地動說によつて大打擊を受けた。その後デンマルクの天文學者ティコ・ブラーエによつて一種の天動說が唱へられたが、ケプラー等によつて力學的基礎に基づいた地動說が唱へられるに及んで全く終熄した。

【融禪師】　ユウゼンジ　法融禪師。支那（唐代初唐）の高僧。俗姓は韋氏。支那潤州延陵の人。隋文帝の開皇十四年（推古天皇二年　皇紀一二五四年）生。初め儒敎を學び十九歲で經史に通じたが、後、大般若經をよんで儒道を糠粃に等しとし、遂に茅山に入り、三論炅法師について落髮し、空靜林中に坐禪して二十年間懈らず、遂に妙門に入り、後牛頭山幽棲寺に住し、時に佛窟寺に到り經書を閱し、日夕これを抄略すること凡そ八年、五十歲の頃幽棲寺北巖の下に茅茨の禪室を構へ、宴坐觀心した。禽獸馴れ來つて、師の手中に集つて食し、數年の中に業徒の來り投ずるもの百

餘人、時に四祖道信が遙に牛頭山を望み、中に異人あるを知つて、自ら山に入り、師に會ひ、機緣契合して之に法を付したといふ。爾來獨特の禪風を宣揚して、道信の正嫡たる五祖弘忍と竝稱せられ、問法の衆が頗る多かつた。師は山を去る八十里の丹陽に行化し、躬ら米一石八斗を負ひ、朝に往き暮に歸つて僧に供養したといふ。五十九歲の時、邑宰蕭元善の切望により建康の建初寺に下つて大品經を講じ、遂に建初寺に住し、唐高宗の顯慶二年（齊明天皇三年皇紀一三一七年）六十四歲で歿した。その山を下るや禽獸別を惜しみ、月を逾ゆるも哀號が止まなかつたといふ。その禪は牛頭禪と稱せられ、支那に於ける禪宗分派の嚆矢をなした。傳敎大師はこの禪法を我が國に傳へた。

〔禪師〕「禪に通達する師」の義。本來禪觀を修し、證悟を得た人の稱とせられたが、禪宗が勃興するに及び、主として同宗に於ける師家の通稱として用ゐられ、又死後或は生前の勅號となるに至つた。明治以後は曹洞宗水平・總持兩寺の貫主にのみ生前に贈はる例となつた。

【牛頭山】ゴヅサン・ゴヅセン　現中華民國江蘇省建康の近くに在る山。その形が牛頭に似てゐるからの名であるといふ。法融禪師禪居の地として名高く、現に牛頭山幽棲寺が在る。

【色々の鳥が花を銜んで來て供養したが云々】鳥が、その人間業とも思はれないやうな崇高な修行振を讃歎して花をくはへて來て供養したが、四祖に參じて眞の道を得て後は、既に鳥の讃歎されるやうな境界を超越した爲に、却つてさういふ奇瑞は現れなくなつた、といふ意。この話の出典は未だ見當らない。

これに似た趣の話は少くなく、正法眼藏行持篇にも「雲居山弘覺大師、そのかみ三峯庵に住せしとき、天厨（天人の厨の意）送食す。大師あるとき、洞山に參じて、大道を決擇してさらに庵にかへる、天使また食を再送して師を尋見するに、三日をへて師をみることを得ず、天厨をまつことなし、大道を所宗とす、辨肉の志氣おもひやるべし」「三平山義忠禪師、そのかみ天厨送食す、天顏をみてのちに、天神また師をもとむるにみることあたはず」等とあり、更に、得道の時は天眼もおよばず、鬼神も近づくたよりのないもので、修行のない鬼神などに覷見せられるのは未だ修行の力が充實してゐないのであるといふ意のことが見えてゐる。

〔銜む〕フクむ　口にくはへる。半ば外に出してくはへる。

〔供養〕クヤウ　（一九五頁を見よ）

【四祖大師】シソダイシ　大醫道信。初唐の禪僧で、支那禪宗第四世の祖。法を僧璨（三祖）に嗣ぐ。姓は司馬氏。支那蘄州廣濟縣の人。幼にして空宗（くうしゅう）の諸解脫門を慕ひ、祖風を嗣いで後も睡眠しないこと六十年に及んだといふ。隋煬帝の大業十三年（推古天皇二十五年皇紀一二七七年）衆を率ゐて吉州に到り、萬民の苦を救ひ、高祖の武德七年蘄州に歸り破頭山に住んだ。學徒踵を繼いで湊つた。一日黃梅縣に行く途次骨相奇異の一小兒に遇ひ父母に請うて出家させた。これが五祖弘忍であつて後これに衣法を附した。太宗の貞觀十七年太宗その道風を聞き、三度詔して入京を促したが、上表謝辭して赴かないので、帝は使を遣はし、若し起たずんば首を取り來れと命じた。使者は山に至つて其の旨を諭したが、師は頸を伸べて刃を待ち神色自若としてゐるので、使者がその旨を還り奏するや帝益〻欽慕を加へ珍繪を賜はつた。高宗の永徽二年（孝德天皇白雉二年皇紀一三一一年）閏九月歿。享年七十二。代宗の時大醫禪師の謚號を賜はつた。

〔大師〕（一）佛の尊號で、佛十號の一。（二）人師中盛德あるものの稱。（三）朝廷から高僧に賜はる號。こゝは（二）。

我が朝では專ら謚號として用ゐられ、淸和天皇の貞觀八年（一五二六）最澄に傳敎大師、圓仁に慈覺大師と賜はつたのを始とする。

【參じてからは】こゝでは、參禪してからは、の意。

「參禪」とは、參學坐禪すること。師家についてその敎を參問し、又自ら端坐功夫すること。

【智そのものを知り】　人間が人間の智を、又は絶對の智を用ゐるのではなく、絶對の智そのものがその必然性によつて、人間の活動に卽し、又あらゆる事物に卽して顯現するのをいつた。

【德そのものを用ひる】　絶對の德そのものがその必然性によつて顯現するのをいつた。

【心靈上の】　心靈に關する。精神上の。

〔心靈〕　シンレイ　意識の本體。精神の根元。哲學的には、肉體を離れて別箇に存在すると考へられる心の主體。たましひ。心理學的には、精神科學で說明することの出來ない神祕不可思議な心的現象。

【匹夫・匹婦】　ヒップ・ヒップ　道理に暗い庶人の男女。庶人。

【頭出頭沒する】　頭が出たり入つたりする。出入してゐる。とゞまつてゐる。

【本體】　ホンタイ　(一)まことのかたち。眞の身。(二)哲學上では思惟の對象で、理性によつて把握されるもの。(知覺によつて接受される現象卽ち感覺界の對。)こゝは(一)。

【懸崖に手を撒して】　ケンガイにテをサッして　進退きはまつた場合に、生きようとするあせりを捨て死を覺悟して、の意。

「懸崖撒手」は、禪語。懸崖から手を放して落ちる義。

〔懸崖〕　きり立つたがけ。斷崖。絶壁。

〔撒〕　(一)ちらす。まきちらす。(二)放つ。(三)なげうつ。

【絶後に蘇つた者】　ゼツゴにヨミガへつたモノ　死中に活を得た者。

【他力】　タリキ　佛語。佛・菩薩等個我以上のはたらきによつて淨土往生の目的を達すること。その敎を他力敎又は他力宗、その法門を他力門又は淨土門、その道を易行道と稱し、淨土敎は總べてこれに攝せられる。諸經論に現れた他力の語は、一般に佛及び菩薩の加被・加護を示すものであるが、往生思想の發達に伴なひ、多く他力解釋の根源を阿彌陀佛の願力に求めるに至つた。

【自力】　ジリキ　佛語。自己の作修・修德の力によつて解脫・成佛の目的を達すること。その敎を自力敎又は自力宗、その法門を自力門又は聖道門、その道を難行道と稱し、天台宗・眞言宗・禪宗等がこれに攝せられる。

【愚人・惡人を正因とした】　自ら惡人・愚人なりと痛感慚愧する眞實信心こそ往生の眞の契機であるとした。

これについては「善人なほもて往生をとぐ、いはんや惡人をや云々」といふ歎異鈔三の語が思ひ合はされるが、この語の原據は、旣に法然以前にあつたものの如く、「法然上人傳記」にも見えてゐるが、こゝでは親鸞の直接表現として左の如き末燈鈔の言葉等によつてゐるものとするのが適當であらう。

かまへて學匠沙汰せさせたまひさふらはで、往生をとげさせたまひ候べし。故法然聖人は、淨土宗の人は、愚者になりて往生すと候しことを、たしかにうけたまはり候しうへに、ものもおぼえぬあさましき人々のまいりたるを御覽じては、往生必定すべしとて、えませたまひしをみまいらせさふらひき。文沙汰して、さか〳〵しきひとのまいりたるをば、往生いかんかあらんずらんと、たしかにうけたまはりき。いまにいたるまで、おもひあはせられ候なり。(文應元年十一月十三日、乘信房宛)

はじめて佛のちかひをきゝはじむる人々の、わが身のわろくこゝろのわろきをおもひしりて、この身のやうにてはなんぞ往生せんずるといふ人にこそ、煩惱具足したる身なれば、わがこゝろの善惡をばさたせずむかへたまふぞとは申候へ。(建長四年二月廿四日)

〔正因〕　シャウイン　正しく法を生じる因種。阿彌陀佛の淨土に往生する正しい因。(「緣因」の對。)

〔因〕　事物の成果を招く直接の力。(これに對してそれを助ける力を「緣」といふ。)

【絶對的愛】　ゼッタイテキアイ　何物にも制限されず何等の條件も附帶しない廣大無邊な愛情。

〔絶對〕（一）對立するもののないこと。比較すべきもののないこと。（二）條件附でないこと。何等の條件も附帶せられぬこと。（三）何物にも制限せられないこと。何物にもよらずに獨立すること。（四）一切の現象に超越すること。（五）哲學上では、他から全く獨立にそれ自身に於て存立し、他によつて制約せられないもの。絶對者。

【絶對的他力】　自力的な餘行を修せずひたすらに彌陀本願を信じ、その力によつて淨土往生を期すること。

親鸞は、その絶對他力の信念を、「自然法爾章」（八十八歳筆）に、左の如く最も端的に表白してゐる。

自然といふは、自はおのづからといふ。行者のはからひにあらず、しからしむといふことばなり。然といふは、しからしむといふことば、行者のはからひにあらず、如來のちかひにてあるがゆへに。法爾といふは、如來の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふ。この法爾は御ちかひなりけるゆへに、すべて行者のはからひなきをもちて、このゆへに他力には義なきを義とすとしるべきなり。

自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。彌陀佛の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿彌陀佛とのたませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞと、きゝてさふらふ。

【彌陀】　ミダ（一二一頁を見よ）

「阿彌陀佛」に對する實體觀を打破した親鸞は、その獨自の信念を「自然法爾章」中、前掲の文につゞけて左の如く表白してゐる。（參考資料三(四)參照）

ちかひのやうは、無上佛にならしめんと、ちかひたまへるなり。無上佛とまをすは、かたちもなくましまします。かたちもましまさぬゆへに自然とはまをすなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはまふさず、かたちましまさぬやうをしらせんとて、はじめに彌陀佛とぞきゝならひてさふらふ。彌陀佛は自然のやうをしらせんれうなり。

【粉骨碎身】　フンコツサイシン　「骨を粉にし身を碎く」義で、力のつゞく限り骨を折つてつくすこと。

【歎異鈔】　タンイセウ・タンニセウ　一卷。著者は、異說があるが恐らく親鸞の直弟唯圓であらうといはれる。著者の耳底に留る親鸞の語を本として、親鸞滅後の異議を批判しつゝ作者の信仰を敍述したもので、全篇和語十八條より成る。前半は專ら親鸞の言葉を雜へてはゐるが作者の異議批判卽ち歎異で、智に偏する誓名別信計と、行に偏する專修賢善計とを、如來の本願に相應せずとして、信の意義を顯さうとしたものである。

因みに唯圓については、宗誓の「遺德法輪集」卷三に「常陸國茨城郡河和田村報佛寺、當寺開基唯圓房は俗名平次郎とて平太郎舍弟なり、聖人の御弟子となり如信上人の御代まで給仕せり」と傳へられてゐる以外には明らかでない。（如信は反逆兒善鸞の子（卽ち親鸞の孫）であるが、父と異なり、篤信よく門侶の信頼を集め親鸞の法燈を相續してこれを覺如に傳へた。）

【彌陀の五劫思惟の願を云々】

煩惱具足、罪惡深重の痛感から廣大無邊の本願にめざめた時の內的感激を告白していつた。歎異鈔後跋中の語で、その一節は次の如くである。

聖人のつねのおほせには、「彌陀の五劫思惟の願を、よくよく案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と、御述懷さふらひしことを、いままた案ずるに、善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみつねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言にすこしもたがはせおはしまさず。されば、かたじけなくも、わが御身にひきかけて、われらが身の罪惡のふかきほどをもしらず、如來の御恩のたかきことをもしらずして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり。

【五劫思惟の願】　ゴコフシユイのグワン　彌陀がその修行時代に五劫の間思惟して建立した四十八の誓願。

無量壽經上によれば、そのかみ世自在王佛の說法を聞き、國王の位をも拋つて沙門となつた法藏比丘は、一切衆生濟度の爲、二百一十億の諸佛の國土を觀見し、諸佛淨土の因、國土人天の善惡を見さだめ、五劫の間

思惟し選擇し攝取して無上殊勝の四十八願を立て、希有の大弘誓を發した。そして、その一々の願に、それが成就されぬうちは、自ら「正覺は取らじ」と誓つたが、更に十劫を經て願成り、遂に正覺を成じて無量壽佛（阿彌陀如來）となつた、といふ、彌陀の誓願の深遠無量なるを讃歎した說話である。就中その第十八願「設我佛を得たらんに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生まれんと欲し、乃至十念せんに、若生まれずば正覺をとらじ、唯五逆と正法を誹謗するをば除く」を以て最勝深妙の本願とするのが選擇本願である。

〔五劫〕　劫を五回繰返すほどの長久な時間。

〔劫〕　梵語「劫簸」（Kalpa）の略。「分別時節」（通常の年月日時を以ては算し能はざる遠大の時節を分別すること）「長時」「大時」等と譯す。智度論に「佛、譬喩を以て劫の義を說く。四十里の石山を長壽の人ありて百歲ごとに一たび來りて細軟の衣を以て拂拭し、此の大石を盡くすも、劫は未だ盡きざるなり。また四十里の大城に芥子を滿たし、長壽の人ありて百歲に一たび來りて一の芥子を取り、芥子盡くるも劫はなほ盡きざるなり」とある。

〔願〕　梵語 Pranidhāna の譯語。所期の目的を誓願・希求すること。

【極意】　ゴクイ　（一）至極の意味。終極の意味。（二）おくのて。奥儀。奥旨。こゝは（一）。

【宗祖】　シュウソ　一宗を開いた人。祖師。

【日蓮上人】　ニチレンシャウニン　日蓮宗の開祖。諡號立正大師。貞應元年（一八八二）二月安房國長狹郡東條鄕市河村小湊（現千葉縣安房郡小湊町小湊）に、貫名重忠の第四子（一說第三子）として生まれた。幼名善日麿。天福元年十二歲の時、清澄寺（天台宗の名刹）に入り、諸佛房道善に侍して名を藥王麿と改め、嘉禎三年（十六歲）得度して是生房蓮長といつた。次いで鎌倉に出で、當時の新佛敎たる念佛宗・禪宗を研究し、更に笈を叡山に負ひ、天台の敎觀を研き、又南都・高野山等の各宗諸寺に遊んで悉く八宗を究め、愈〻開覺立宗に決意、遂に叡山を辭して（三十歲）建長五年清澄に歸り、新法門を開いた。が、忽ち地頭東條景信の激怒に觸れ、去つて自ら日蓮と名告り、鎌倉名越松葉ケ谷に庵を構へた。そして翌六年以來、鎌倉小町の街頭に現れて法華經の唯一無二の妙法たるを說き、在來の諸宗を排擊して毀謗迫害と鬪ひながら、漸く歸依者を集めた。恰も天變地災が頻りに起つたので、文應元年その最初の國諫たる「立正安國論」を前執權北條時頼に獻じ、今にして悟らずんば自界叛逆・他國侵逼の兩難必至なるを警告した。こゝに於て、益〻要路・諸宗の憤激を招き、遂に暴徒の爲に庵を燒かれ、身を以て下總に避難、翌弘長元年捕へられて伊豆に配流せられた。居ること二年、地頭伊東氏を歸伏せしめ、三年赦免せられて鎌倉に歸り、次いで安房に遊行、東條景信の要擊に遭つて、刀傷纔かに免れた。文永五年蒙古の牒狀始めて到り、翌年また使節來朝、先年の豫言漸く適中し來つたので、要路及び諸大寺に前後二回の激書を投じて公場對決を促したが、幕府は諸宗聯合の訴を容れて日蓮を評定所に召致、次いで龍ノ口に斬らうとした。そして日蓮が奇蹟的に免れるに及び、八年これを佐渡に遠流した。同地の日蓮は甚だしい虐遇裡に屢〻死地に臨んだが、次第に周圍を敎化して「開目鈔」「觀心本尊鈔」（自ら一期の大事と稱した二大著）以下の書を撰し、「末法法華經の行者」たる新自覺の下に弘法に努めた。この間鎌倉・京都に北條氏一門の亂があり、蒙古の來襲は目睫に迫り、日蓮の豫言は悉く實現され始めたので、十一年幕府も遂に赦免に決した。かくて日蓮は、三月鎌倉に歸著、幕府の請に應じて第三次國諫を試みたが、その用ゐられざるを知ると共に、宗門免狀を與へんとする幕府の申出を一蹴して、甲斐の身延山に遯れた。爾來「撰時鈔」「報恩鈔」その他を撰し、自ら「一閻浮提第一の聖人」として布敎に從つたが、弘安五年（一九四二）山を出でて武藏の池上に赴き、十月同地に寂した。享年六十一。上記五大部（立正安國論・開目鈔・本尊鈔・撰時鈔・報恩鈔）の外、現存の眞蹟遺文約八十篇に及び、收めて「高祖遺文錄」（三十卷）にあり、その他「日蓮聖人御遺文」「類纂高祖遺文錄」等各種の遺文集が

刊行されてゐる。

【意氣沖天】　イキチュウテン　意氣が盛で、天にものぼるほどであること。甚だ意氣の盛なこと。

〔沖〕　こゝでは、ひゝる、高く飛び上がる、の意。

【他宗を罵倒し】

日蓮は、法華一乘（法華經を以て釋尊出世の本懷を說いた最深勝の經王となし、專らこれに乘托すること）の確信から南無妙法蓮華經の唱題を以て末法を救ふ唯一の法となし、他宗他經の論難折伏にこれ努めたが、それは他宗が教主釋尊を措いて他佛を本尊とするは本末顚倒であるとし、又無量義經に「四十餘年未顯眞實」といひ、法華經寶塔品に「皆是眞實」とある文言等に據つて法華三部（無量義經・法華經・普賢經）のみ實大乘で、他經は悉く小乘・權大乘即ち方便經であるとする論理的な大義名分論から出發してゐる所に、彼の性格がよく現れてゐる。かくて「日本國に此をしれる者は但日蓮一人なり」（開目鈔）といふ抱負の下に「國主の用給ふ禪は天魔なる由、鎌倉殿の用給ふ眞言の法は亡國の由、極樂寺の良觀坊は國賊なる由、淨土宗の無間大阿鼻獄に墮べき由、其外餘宗皆地獄に可墮由」（波木井殿御書）と、所謂四箇格言（念佛無間・禪天魔・眞言亡國・律國賊）を携げ、時には「故最明寺の入道殿（時頼）、極樂寺の入道殿（時章）を無間地獄に墮ちたりと申し、建長寺、壽福寺、極樂寺、長樂寺、大佛寺等をやきはらへと申し、道隆上人、良觀上人等を頸をはねよ」とまで極言した（種種御振舞御書）。

特に前記四宗を掲げたのは、念佛・禪は當時の新宗教として既に武士・庶民階級の間に壓倒的な勢力があり、眞言（高野山）・律（南都）は法華爲木の天台（叡山）を除いては舊宗教中朝廷に最も勢力を得てゐたからであらう。

【北條氏】　ホウデウシ　こゝでは、鎌倉執權家としての北條氏をさす。これに對し、伊勢氏茂（北條早雲）を祖とする戰國時代の北條氏は、後北條氏と呼ばれることが多い。桓武平氏の支流で、貞盛の子維時（貞盛の子維將の生むところで、貞盛に養はれた）より出で、その子孫時方が伊豆介となつて以來、伊豆國北條に土著して北條を氏とした。時方の子時政は、外舅を以て源頼朝の霸業をたすけて權柄を執り、その子義時の時遂に源氏を滅して、執權（二代）として天下の權を掌握、又承久の變に乘じて朝廷を抑壓し奉つたが、その子泰時（三代執權）善政を布き、時頼（五代執權）また民心を得て、天下大いに治つた。（はじめ源氏の絕えるや、藤原氏を迎へて將軍としたが、時頼以來、京都より皇族を迎へ奉つた。）後時宗（八代執權）は元寇の國難に處して大功を立てたが、この頃より皇位繼承に容喙し奉るの僭上を敢へてし、又元寇以來の國費膨大に惱んで治政漸く振るはず、高時（十四代執權）に至つては弊政その極に達し、つひに後醍醐天皇の中興によつて擧族伏誅、執權十六代（時政・義時・泰時・經時・時頼・長時・政村・時宗・貞時・師時・宗宣・熙時・基時・高時・貞顯・守時）にして滅びた。

因みに、日蓮が蒙古からの來牒に當つて曩に提出したところの立正安國論の趣旨を以て迫つた當時の鎌倉幕府は、執權が北條時宗、連署が北條政村であつた。

【小島の主等が云々】

文永五年蒙古來牒の事あつて以來、幕府竝びに諸宗に對する日蓮の憤激・痛罵愈〻甚だしく、爲に幕府に於て日蓮一門を斷首・遠流・追放等の極刑に處すべしとの詮議さへ行はれるに至つた際に、日蓮が弟子達を激勵した言葉で、建治二年日蓮が光日尼に與へた、所謂「種種御振舞御書」の中に次の如くある。

一八　畏禿親鸞

日蓮悅んで云く、本より存知の旨なり。（中略）各各我弟子となのらん人人は、一人もをく（臆）しをもわるべからず。をや（親）ををもひ、めこ（妻子）ををもひ、所領をかへりみることなかれ。無量劫よりこのかたをやこ（親子）のため、所領に命すてたる事は大地微塵よりもをほし。法華經のゆへにはいまだ一度もすてず。法華經をばそこばく行ぜしかども、かゝる事出來せしかば退轉してやみにき。譬へばゆ（湯）をわかして水に入れ、火を切にとげざるがごとし。各各思ひ切り給へ、此身を法華經にかうる（替）は石に金をかへ糞に米をかうるなり。佛滅後二千二百二十餘年が間迦葉、阿難等、馬鳴、龍樹等、南岳、天台等、妙樂、傳敎等だにも、いまだひろめ給はぬ法華經の肝心、諸佛の眼目たる妙法蓮華經の五字、末法の始めに一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に日蓮さきがけ（魁）したり。わたうども（和黨共）二陣三陣つづきて、迦葉、阿難にも勝ぐれ、天台、傳敎にもこへよかし。わづかの小島のぬしら（主等）がをどさん（威嚇）ををぢ（恐）ては、閻魔王のせめ（責）をばいかんがすべき。佛の御使と名のりながらをく（臆）せんは無下の人人なりと申しふくめぬ。

【壯語】　サウゴ　勇壯なものがたり。意氣の盛な言葉。豪

語。壯言。

【吉水一門の奇禍】建永二年（一八六七）二月、朝議によつて專修念佛が停止せられ、法然（源空）をはじめ、一門の諸高弟それ〴〵罪科に處せられた、淨土宗の法難をさす。

承安五年（一八三五）の立宗以來淨土宗は次第に勢力を得るに至つたが、教團の增大に伴なひ、多數門下の中には念佛の眞義を解することなくして徒に戒律を破り、他宗を誹謗し、延いては風俗を壞亂する如き者さへ生じ、他方南都・北嶺等既成教團からの壓迫も漸く深刻を加へるに至つた。かくして、元久元年（一二〇四）法然七十二歲の冬には、山徒（叡山三塔の大衆）が大講堂に會して專修念佛禁止の件を議決し、翌二年には南都興福寺の衆徒が法然の新義に對する九箇條の非難を列擧して念佛禁斷を朝廷に訴へるまでに表面化し、法然自らも元久元年七箇條の起請文を作つて、山門の憤を鎭め、門徒を戒めようとしたが、衆徒の壓迫

は愈〻甚だしく、門徒の流弊も容易に改らなかつた。偶〻建永元年法然の門徒安樂・住蓮が東山の鹿ケ谷に聽衆を多く集めて別時念佛（特別に時期を限つて勤行する念佛）を修し六時禮讚（晝夜六時に彌陀を讃歎する佛頌）を勤めるに及んで、衆徒の嗷訴愈〻熾烈を加へ、朝廷に於かせられても種々詮議の結果、遂に翌年二月念佛停止の宣旨を下し、安樂・住蓮を斬罪に處し、法然をも根本責任者の故を以て土佐に遠流した。その他の諸高弟もそれ〴〵流謫せられ、親鸞もそのうちの一人として越後に遠流されたのである。

〔吉水一門〕ヨシミヅイチモン　法然の門下一統。法然が東山の吉水に草庵を結んで貴賤男女を化導したのでいふ。

法然は、淨土宗の開祖。諱は源空。光照大師・圓光大師・東漸大師・慧成大師・弘覺大師・慈敎大師・明照大師等の諡號が多い。長承二年（一七九三）四月美作國久米南條稻岡の北庄（現岡山縣久米郡稻岡南村北庄里方誕生寺の地）に、久米の押領使漆間時國の子として生まれ、幼名を勢至丸といつた。保延七年九歲の時父の橫死に遭ひ、その遺誡により同國菩提寺（淨土宗）の觀覺の下に薙髮し、天養二年（十三歲）比叡山に上つて天台の教學を極めた。（以上種々の異說があるが姑く通說による。）保元元年（二十四歲）下山して嵯峨清涼寺（淨土宗）に度脫を祈願し、南都及び京都の諸學僧を歷訪したが得る所少く、再び黑谷に退いて一切經を披閱すること五回、「智慧第一の法然房」といはれた。しかもなほ衆生解脫の易行に遠く出離生死の道を求め得ないで懊惱したが、源信の「往生要集」、唐の善導が觀無量壽經の註疏「散善義」を熱讀するに及び、末法の凡夫も阿彌陀佛の名號を專念すればその本願に助けられて往生淨土の目的を達し得るとの確信を得、遂に承安五年四十三歲の時專修念佛の法門を開いた。爾來新宗教の弘通に力め、東山吉水に草庵を結んで多くの貴賤男女を接化した。殊に文治二年所謂大原談義（又は大原問答）に叡山の座主顯眞をはじめとして一代の高僧・碩學を信伏させて以來、名聲愈〻四方に喧傳せられ、天皇をはじめ奉り貴顯・名門の士より賤民・浮浪の徒に至るまで歸依する者極めて多く、且門下にも多くの駿足を出し、教義一世を風靡するに至つた。然るに南都・北嶺の壓迫漸く深刻を加へ、偶〻建永二年遂に專修念佛を停止せられ、七十五歲の老軀を土佐に遠謫せられた。（但し實際には讃岐にとどまつた。）同年十二月勅免せられて攝津に留り、建曆元年七十九歲の時更に許されて歸洛し、青蓮院の慈鎭（慈圓）に大谷山上の南禪院を與へられてこゝに居り、翌二年（一八七二）寂した。享年八十。「選擇本願念佛集」「淨土三部經釋」「往生要集綱」等の著書（多く門弟の記錄したものといはれる）があり、法語・消息と共に「黑谷上人語燈錄」（建曆元年頃の「漢語燈錄」と和語燈錄」の二部より成る）の中に收められ、近時「法然上人全集」も刊行せられた。

〔吉水〕現京都市東山區林下町知恩院の地で、法然の草庵の在つた所。その草庵草創の年時は詳でないが、法然は比叡山を下つて後、こゝに住して弘法に力めたが、その遠謫の後は荒廢に歸した。知恩院の所傳に據ると、舊房の遺址に三所あつて、その中法然常住の舊

址は今の知恩院御影堂の地であるといふ。「拾遺古德傳」には感神院（今の祇園社）の東邊、北斗堂（今の大通附近）の北表を吉水の地とし、「山城名勝志」には、圓山安養寺をその遺跡としてゐる。

安養寺は、知恩院鐘樓の南に在つて、慈鎭和尙舊住の地と傳へ、境內に一池があり吉水の名はこれからおこつたのであらうといふ。

〔奇禍〕　キクワ　思ひがけない禍。意外な不幸。

【北國の隅】　ホクコクのスミ

越後の國府の在つた地は、現新潟縣中頸城郡春日村五智國分で、現に國分寺がある。（親鸞の越後に於ける生活については殆ど信憑すべき資料がない。）

【若し我配所に赴かずんば、云々】

本願寺第三世の法主覺如（親鸞の外曾孫）の著「御傳鈔」（親鸞一代の事蹟を書いた「本願寺聖人親鸞傳絵」から別書だけを獨立させたもの）上第三段に、「聖人後のときおほせられて云（たまはく）、佛敎むかし西天より興つて、經論いま東土に傳る。是偏に、上宮太子の廣德、山よりもたかく海よりもふかし。（中略）抑又、大師聖人（親鸞）もし、流刑に處せられたまはずば、我又配所におもむかんや。もしわれ配所におもむかずんば、何によつてか邊鄙の群類を化せん。是なを師敎の恩致なり。大師聖人、すなはち勢至の化身、太子又觀音の垂迹なり。このゆへに、われ二菩薩の引導に順じて、如來の本願をひろむるにあり。眞宗これによつて興し、念佛これによりて煽（さか）んなり。云々」とある。

〔群類〕　グンルキ　多くの生類。衆生。群生。

〔化す〕　ケす　惡を轉化して善となす。敎化する。

【法を見て人を見なかつた】

遠流せられながらも、さうした事態に至らせた人々を云爲することなく却つてそれによつて佛法の實現せられたことをよろこんでゐた態度をいつた。

〔法〕　ホフ　佛語。梵語 Dharma（達磨）の譯語。自性を保持して改變しないものの義。佛典中では種々の意味に用ゐられる。（一）佛所說の敎示。（出家修道に到達すべき不變の軌範で、その性が永く改らない爲。）（二）佛の敎示の聚集たる聖典。（不改の規範の爲。）（三）善行卽ち煩惱の伴なはない行爲。（道德的規則の爲。）（四）行法。（規定によつた儀式の爲。）（五）吾人の思考の對象となり得る有形無形の一切のもの。こゝは（一）。

【號び】　サケび

【澎湃】　ハウハイ　水の漲り逆卷くさま。又、その聲。

〔澎〕　水の盛なさま。又、その聲。

〔湃〕　波の逆卷く勢。又、その聲。

【煙波】　エンパ　濛氣等の爲に霞んで見える水面。煙浪。

【渺茫】　べウバウ　ひろくてみきはめがたいさま。ひろびろとしてはてのないさま。渺々。

〔渺〕〔茫〕　ひろい。はるか。

【胸懷】　キョウクワイ　胸のうち。こゝろ。胸中。

【奥床しい】　オクユカしい　（一）おくぶかくて慕はしい。（二）輕薄・野卑でなく、思慮深さうに見える。沈重で何となく慕はしい。こゝは（二）。

挿圖「親鸞上人筆蹟」「敎行信證」信卷の一部。原本は、東京淺草報恩寺藏。

善行卽ち煩惱の伴なはない行爲。（道德的規則の爲。）（四）行法。（規定によつた儀式の爲。）（五）吾人の思考の對象となり得る有形無形の一切のもの。こゝは（一）。

【號び】　サケび

【澎湃】　ハウハイ　水の漲り逆卷くさま。又、その聲。

〔澎〕　水の盛なさま。又、その聲。

〔湃〕　波の逆卷く勢。又、その聲。

【煙波】　エンパ　濛氣等の爲に霞んで見える水面。煙浪。

【渺茫】　べウバウ　ひろくてみきはめがたいさま。ひろびろとしてはてのないさま。渺々。

〔渺〕〔茫〕　ひろい。はるか。

【胸懷】　キョウクワイ　胸のうち。こゝろ。胸中。

【奥床しい】　オクユカしい　（一）おくぶかくて慕はしい。（二）輕薄・野卑でなく、思慮深さうに見える。沈重で何となく慕はしい。こゝは（二）。

挿圖「親鸞上人筆蹟」「敎行信證」信卷の一部。原本は、東京淺草報恩寺藏。

二　解釋

1　主題　愚禿の意義と親鸞上人の宗敎及び人となり。

2　構想

(1)　愚禿の二字（初―一四三ノ七）。

(2)　愚禿の意義と眞宗の本旨（一四三ノ八―一四六ノ一一）。

(3)　愚禿の體現者親鸞上人の人となり（一四六ノ一二―終）。

3　敎述

〔余の知る所を以て推すと、愚禿の二字は能く上人の人となりを表すと共に、眞宗の敎義を標榜し、兼ねて宗敎そのもの

の本質を示すものではなからうか〕――愚禿の歴史的・言語的説明ではなく、作者によつて把握せられてゐる意義からの考察であることを、嚴密に斷つてゐるのである。そしてこの二字の意義の考察がどういふ事實を闡明するものであるか、先づこゝに問題を提示したのである。

〔併しいかに大なりとも人間の智は人間の智であり、人間の德は人間の德である〕――智とか德とかいふものを人間の上のこととしてのみ考へてゐる者には理解しにくい思想であるが、神の智とか佛の德とかいふやうな智德に比較することによつて理解せられるであらう。つゞいて引かれてゐる三角形の譬喩によつてもよく納得せられる筈である。

〔たゞ翻身一回、此の智、此の德を捨てた所に、新な智を得、新な德を具へ、新な生命に入ることができるのである。これが宗教の神髓である〕――「此の智」は人間の智であり、「此の德」は人間の德である。それを捨てるにはたしかに翻身一回が必要である。人間の智德に囚れてゐる間は、新な生命に入ることは覺束ない。

〔宗教の智は智そのものを知り、宗教の德は德そのものを用ひるのである〕――宗教の智德は、智そのもの德そのものの働きで、それを知り、それを用ゐる人間の如何などによるものではないといふのであつて、畢竟宗教の智德の絶對性を指したものである。

〔此の智、此の德の間に頭出頭沒する者は、此の智、此の德を知ることは出來ぬ〕――持合はせの人間の智德にのみ囚れてゐる間はその持合はせの人間の智德を知り得ないといふのであつて、さういふ智德を捨て去つて始めてさういふ智德も働いて來るといつてゐるのである。

〔他力といはず、自力といはず、一切の宗教は此の愚禿の二字を味はふことに外ならぬのである〕――人間的智德の價値否定、換言すれば愚禿の自覺こそ宗教の宗教たる所以であることを斷言したのである。

〔いかなる愚人、いかなる罪人に對しても、彌陀はたゞ汝の爲に我は粉骨碎身せりといつてこれを迎へられるのが、眞宗の本旨である〕――「たゞ汝の爲に」といふ一句こそ眞に自己の罪深きを識る者に、直ちに溫かな血が通つて來るのを覺えしめるものであらう。そして人間の智德の大小有無を絶した、絶對愛の發現が實感せられて來るであらう。

〔若し我配所に赴かずんば、何によりてか邊鄙の群類を化せん〕――我を立てなければ敵もなく味方もない。唯大法あるのみである。配所も物かは。唯大法の實現を喜ぶのみである。

〔煙波渺茫、風靜かに波動かざる親鸞上人の胸懷はまた何となく奥床しいではないか〕――日蓮上人との比較が親鸞上人の人となりを明らかにする適切な一つの方法である。そして日蓮上人を怒濤の前の巖に、親鸞上人を渺茫たる大海に比することも、洵に當を得た譬喩である。そして又、烈しく動くものの力を感ずると共に、靜かに湛へたものの底力に打たれるものであることを思ひ合はせれば、親鸞上人の人となりが髣髴せられて來る。

三　批評

言葉は短く、言ふ所は簡であるが、言はれてゐる問題は大きく、含む所は深い。隅から隅まで作者の氣魄が徹つてゐて、凜として襟を正さしめるものがある。唯愚禿の二字の意味を考察することによつて、宗教の本質を解明し、眞宗の本旨を闡明し、親鸞上人の人となりをかくの如く髣髴させるといふやうなことは、凡手の企て及ぶべからざる所である。

三　備考

一　指導の問題

（一）讀んで註解を要するものが少くないであらう。文脈を正した理解、一文から一文への發展の跡づけといふやうな

點が、容易ならぬ苦心でなくてはならない。結局各自の自習として讀んだ末にどれだけの疑問が殘されるかを明らかに整理させることが、本課指導の第一歩であらう。

（二）讀みから成立する理解を充實させ、疑問を疑問として追求・發展させることによつて、敍述の問題が指導せられてゆくに違ひない。しかしその追求の過程に混亂が生じた場合に於ては、むしろ構想問題を取上げ、それを概觀した上に敍述問題に歸ることが、有效の指導法である。主題の如き、假定的に想定することは解釋の初頭に行ふことも可能であり、便宜であるけれども、決定的な主題の言表は構想が見え、敍述が究められた後でなくては出來難い文であると思はれる。

主題・構想共に確立し、敍述の結晶も十分な篇であるから、學習を精しくすればするにつれて、夫々が分明になつて來る。指導は各自の學習を十分ならしめた上に行はなくてはならない教材であると思ふ。

日本佛教の一である眞宗の本旨や宗祖親鸞上人を知らしめると共に、宗教の本質を窺はせ、哲學することの一端に觸れさせ得る點に於て、又現代の日本が有する世界的哲學者としての作者を知らしめる點に於て、學ばせることの多い課でなくてはならない。

二　參考資料

（一）親鸞の宗教的生涯に關する松本彦次郎氏の研究を、その「鎌倉時代に於ける宗教改革の問題」（第八回）（史學雜誌、昭和二年一月號）より抄出する。

承元二年二月專修念佛の人々を處罰した際に、法然を始め多くの門徒は死罪に流罪に追放の刑を受けた。若し第二回目の隆寛、幸西の流されたことを細かに書いた民經記の如き記錄があつたら法然の迫害された時の重なる人々の交名を知ることが出來たらう。親鸞の越後に移つたのは專修念佛の一人として京都を追放されたからであらう。

この際の親鸞の言葉として「禿者已非僧非俗、是故以禿字爲姓」とあることである。禿字は親鸞自ら「カフロ」とよませてゐる所から髮を被ること則ち有髮と解すべきであらう。この禿に對する無住の解釋は沙石集第四卷に見えてゐる。曰く

マシテ破戒無慚ニシテ出家ノ形トシテ、解脫ヲ期セザルガ、空ク供養ヲウクルヲバ、賊分齊トテ、賊分トイヘリ、或ハ禿髮（カフロ）ト名ケ、袈裟ヲ被タル獵師トモイヘリ、悲カルベキ末代也。

破戒無慚なる愚禿を常に名乘る親鸞は、當時一部の專修念佛の徒の如く、破戒を誇りとしたり、又舊式戒律の人々に冷笑の態度をとつたりしてゐない。彼は聖道の諸教は像末法滅の時機に適せないから、濁惡群萌の一人として、實人生に順應して眞の宗教を求めやうとした。彼は一般民衆と同一の水平に立つて自分の信を告白し、自分に共鳴せる人々の一團と行動を共にしたのである。であるから彼の教團はたゞ彌陀の名號の下に集る簡素なものに過ぎなかつた。（中略）

既に日蓮が天台法華宗の復興を主義とし、自分の宗教に名稱を附することすら考へない。親鸞も念佛成佛是眞宗とよぶ際は眞宗を抽象的によんでゐるので、法然の宗教を指した譯でもない。親鸞は宗名より事實團體そのものを重んじた。親鸞が寺院と一般民屋とに差別を立てることを欲際あつた淨土宗を指した譯でもない。親鸞は宗名より事實團體そのものを重んじた。親鸞が寺院と一般民屋とに差別を立てることを欲しなかつたと云ふことも彼の教會は全く自由のもので同一信の集りを目的としたからである。（中略）

であるから親鸞の教團は此時代の他教團に比べると餘程異つてゐたに相違ない。愚禿を名乘る親鸞の生活はこの時代の他の教會にくらべたら極めて簡素なものであつたらう。貧乏生活になれた彼は、六十歳前後に歸洛してもその身すらよせる所なく、その女の彌女についても

いやおむなのこと、ふみかきて、まいらせられ候めり、いまだゐどころもなくて、わびてゐて候なり、あさましく、もてあつかひて、いかにすべしともなくて候なり、あなかしこ

と嘆息せざるを得なかつた。彼はその愛する妻惠信尼を遠く越後に住はせ、京都ではその女すら人身を束縛さるべき奉公に出す程の窮境に陷つたらしい。けれども遠く下野高田より京都の親鸞を慕ひ、病を押して上洛の途に倒れた弟子の覺信もあり、又親鸞の像を拉い

て寫した信實の子の專阿彌陀佛をも有してあつた。親鸞は疊信に同情した言葉として彼の傍に侍つた蓮位の手紙の一節に「ことに疊信坊のところに、御なみだをながさせたまひて候也、よにあはれにもおもはせたまひて候也」とある。我々は宗教家である親鸞に彼の道徳的逸話を集めてその德をたゝへることをやめる。その最愛の女すら年期奉公に出さねばならず、一家のものが離散の間に暮さねばならぬ親鸞の晩年は悲しみそのものであらねばならぬ。「悲哉愚禿鸞、沈没於愛欲廣海、迷惑於名利大山、不喜入定聚之數、不快近眞證之證、可亾可傷矣」との告白は僞りのない悲痛の叫びであらねばならぬ。彼は關東を去つて京都生活をしてからも常にその弟子等を思うて手紙での布教を怠らなかつた。親鸞の消息の大部分は布教そのものであつたのである。（中略）

親鸞は決して念佛萬能主義より持戒を排斥してゐない。親鸞は更に突っ込んで「以此虛假雜毒之善、欲生無量光明土、此必不可也」と、永劫無限の世界に、有限の道德を積むことによつて生きることの出來ないことを力說してゐる。そして親鸞は自分の人生觀をその著唯信鈔文意に示して

また自はおのづからといふ、おのづからといふは自然といふ、自然といふはしからしむといふ。しからしむといふは行者はじめて、ともかくもはからはざるに、過去今生未來の一切のつみを善に轉じかへなすといふなり、轉ずといふは罪をけしうしなはずして善になすなり、よろづのみづ大海にいりぬれば、すなはち潮となるがごとし。

と、親鸞は善惡を相對せしむる修養主義には滿足してゐない。彼は自己の罪惡に對する反省と回顧とをいつも忘れてゐない。隨つて彼は悲しみの心を常に味つてゐる。彼は善を以て惡の債務を相殺し得るものとは毫も考へない。彼は信に生くることのみに自然に道德的が内より光つてくるものと信じてゐる。（中略）

親鸞は自分と同一時代の人の著書について自ら註釋を試みた謙遜な態度をとつてゐる。彼の批判は著書そのものを目指し、著者は自分と同一の法然の門下であらうか、自分と同列の人であらうかと云ふことに頓著をしない。親鸞の内心は自分の教團の人々の誤つた信仰に陷ることを救ふ一念に燃えてゐる。我々は親鸞を研究するに當つて注意しなければならぬことは、親鸞自身は愚禿の生活に一貫してをることであつて、彼れ自身が宗祖となる考もなく、世間的に自分の宗教を無理に宣傳しようともしない。（中略）消息は親鸞の直接表現であり、教行信證と相俟つて眞の親鸞を闡明すべき尊い史料である。教行信證作者についてその疑問を解くべき唯一の鍵は消息文に握られてあると云うてもよい。概念よりも生命に、虛僞の世界よりも現實に、德目よりも內心の愛に、偶像よりも直接の佛に、殿堂伽藍よりも信の集に、貴族よりも民衆に、外國の祖師よりも日本の宗教に、梵漢讃よりも倭讃に、權威への盲よりも自己の覺醒に、外國崇拜よりも國民的自覺への推移は鎌倉時代の特色である。この意義ある時代の新運動の數あるうちに宗教の問題は確かに中心をなしてゐる。

（二）親鸞に於ける「愚禿」の歷史的・宗教的意味について、山田文昭氏の所說を、その「眞宗史稿」第二編「親鸞聖人及その教團」本論一「親鸞聖人傳」第七章「沙彌生活」より抄出する。

配流の後、聖人自ら愚禿と名のり、非僧非俗と呼ばれたことは後序の上に明かである。愚禿の稱は聖覺の作と傳ふる「十六門記」第十二門の下に「愚禿此篇を記するに身毛爲竪て雙眼に淚を浮ぶ」とあり、證忍の觀經義賢問愚答鈔の奥書に「弘安八年二月十四日欣淨愚禿證忍」とあるから、必ずしも聖人獨特の稱でなくして、當時の淨土教の信奉者の間に用ひられてゐたことが知らるゝ。けれども、その內容は聖人獨特の意義を持つてゐたことは愚禿鈔・述懷和讃等によつて知ることが出來るが、これを外的生活の上からいへば、正しく非僧非俗がそれであつたらう。非僧非俗とは上に述べたやうに眞實の生活、卽ち在家出家の對立を超えて、兩も在家であると同時に出家である生活で、所謂半僧半俗の生活でない。この生活を今しばらく名づけて沙彌生活といふ。（中略）

もとより聖人の在家生活が後世の規範となつたことは言ふまでもないが、それは自然になつたのであつて、聖人がなしたるものではない。而して古來これを以て聖人が佛教史上破天荒のことをなしたやうに傳へ來り、宗外のものは之を以て聖人を佛教の反逆者のやうに貶し、宗內のものは聖人の英斷に歸して居る。然れども聖人自身としては當時教界にあり觸れたる沙彌生活に從はれたるに過ぎない。されば改邪鈔にいへる如く「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」とは常の持言であつて、沙彌生活とは當時の教界を超脫して自然の人生に歸つた生活である。沙彌は梵語、譯して息慈といふ。息世染情、慈濟群生の義である。されば元來沙彌の稱は戒律の上に用ふる語で、薙髮して未だ具足戒を受けないものゝ稱で比丘に至るべき一階段である。然るに我國中古より一種特別なる意義に用ひられ、元

享釋書に「國俗剃髮、不全覺儀、有妻子者、在家稱沙彌」とある如く剃髮染衣して而も在家生活をなすものに名づけ、平安中期以後沙彌の風漸く勃興し自ら沙彌某と稱するものが多くなつた。中に於て最も有名なのが沙彌教信である。教信の事蹟の現はれて居るのは現存せる史料では日本往生極樂記が最初で、往生十因がこれに次いでゐる。これによれば教信は播州賀古驛の北に住んで、僧形にして而も妻子を帶し、他に傭はれて生活の費を得つゝ念佛を事としたものである。（中略）

「われはこれ賀古の教信沙彌の定なり」とは平安朝の貴族佛教を簡ぶと共にその反動として現はれたこれらの遁世者をも簡んだ言葉である。卽ち眞實の意味の沙彌生活とは現世の肯定、否定を超えて而も現世のうちに安住する凡夫さながらの生活である。

(三)　親鸞自身その思想信念を表白した直接表現の中から、特に本文の理解に參考となるべき節々を左に抄出する。

(一)　淨土眞宗

來迎は諸行往生にあり、自力の行者なるがゆへに。臨終といふことは諸行往生のひとにいふべし。いまだ眞實の信心をえざるがゆへなり。また十惡五逆の罪人のはじめて善知識にあふて、すゝめらるゝときにいふことなり。眞實信心の行人は摂取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終まつことなし。來迎たのむこととなし。信心のさだまるとき、往生またさだまるなり。來迎の儀式をまたず。正念といふは、本弘誓願の信樂さだまるをいふなり。この信心をうるゆへにかならず無上涅槃にいたるなり。この信心を一心といふ。この一心を金剛心といふ。この金剛心を大菩提心といふなり。これすなはち他力のなかの他力なり。又正念といふにつきて二あり。一には定心の行人の正念、二には散心の行人の正念あるべし。この二の正念は他力のなかの自力の正念なり。定散の善は諸行往生のことばにおさまるなり。この善は他力のなかの自力の善なり。（中略）選擇本願は有念にあらず、無念にあらず。有念は、すなはち色形をおもふにつきていふことなり。無念といふは、かたちをこゝろにかけず、色をこゝろにおもはずして念もなきをいふなり。これみな聖道のをしへなり。聖道といふは、すでに佛になりたまへる人のわれらがこゝろをすゝめんがために、佛心宗、眞言宗、法華宗、華嚴宗、三論宗等の大乘至極の教なり。佛心宗といふは、この世にひろまる禪宗これなり。また法相宗、成實宗、倶舍宗等の權教、小乘等の教なり。これみな聖道門なり。（中略）淨土宗にまた有念あり、無念あり。有念は散善の義、無念は定善の義なり。（中略）淨土宗のなかに眞あり假あり。眞といふは選擇本願なり。假といふは定散二善なり。選擇本願は淨土眞宗なり。定散二善は方便假門なり。淨土眞宗は大乘のなかの至極なり。（末燈鈔―有念无念事）

(二)　愚禿の痛感

外に賢善の相を現ずることを得ざれ、內に虛假を懷けばなり。（愚禿鈔）

淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし。虛假不實のわが身にて、淸淨の心もさらになし。

外儀のすがたはひとごとに、賢善精進現ぜしむ。貪瞋邪僞おほきゆへ、奸詐もゝはし身にみてり。

惡性さらにやめがたし。こゝろは蛇蝎のごとくなり。修善も雜毒なるゆへに、虛假の行とぞなづけたる。（正像末和讃、愚禿悲歎述懷）

よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりがほは、おほそらごとのかたちなり。

是非しらず邪正もわかぬこのみなり。小慈小悲もなけれども、名利に人師をこのむなり。（正像末和讃、奥書）

(三)　煩惱を斷ぜずして涅槃を得（罪業救濟觀）

能く一念喜愛の心を發すれば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得。凡聖逆謗齊しく廻入すれば、衆水海に入りて一味なるが如し。摂取の心光常に照護したまふ。已に能く無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋慢の雲霧、常に眞實信心の天に覆へり。譬へば日光の雲霧に覆るれども、雲霧の下闇無きがごとし。信を獲て見て敬ひ大きに慶喜すれば、卽ち横に五惡趣を超截す。一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、佛廣大勝解の者とのたまへり。是の人を分陀利華と名づく。（教行信證、行卷、正信念佛偈）

自然といふはしからしむといふ。しからしむといふは、行者はじめてともかくもはからはざるに、過去今生未來の一切のつみを、善に轉じかへなすといふなり。轉ずといふは、つみをけしうしなはずして、善になすなり。よろづのみづ大海にいりぬれば、すなはちうしほとなるがごとし。彌陀の願力を信ずるがゆへに、如來の功德をえしむるが故に、しからしむといふ。はじめて功德をえんとはからはざれば自然といふなり。（唯信鈔文意）

罪障功德の體となる、こほりとみづのごとくにて、こほりおほきにみづおほし、さはりおほきに德おほし。

名號不思議の海水は、逆謗の屍體もとゞまらず。衆惡の萬川歸しぬれば、功德のうしほに一味なり。

盡十方無碍光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり。（曇鸞大師和讃）

無明長夜の燈炬なり。智眼くらしとかなしむな。生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ。

願力無窮にましませば、罪業深重もおもからず、佛智無邊にましませば、散亂放逸もすてられず。（正像末和讃）

（四）阿彌陀佛（盡十方無碍光如來）

涅槃すなはち法性なり。法性すなはち如來なり。實海とまうすは、よろづの衆生をきらはずさはりなくへだてずみちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり。この一如實海よりかたちをあらはして、法藏菩薩となのりたまひて、無碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに、報身如來とまうすなり。これを盡十方無碍光佛となづけたてまつれるなり。この如來を南無不可思議光佛ともまうすなり。この如來を方便法身とはまうすなり。方便とまうすは、かたちをあらはし、御なをしめして衆生にしらしめたまふをまうすなり。すなはち阿彌陀佛なり。この如來は光明なり。光明は智慧なり。智慧はひかりのかたちなり。智慧またかたちなければ不可思議光佛とまうすなり。この如來十方微塵世界にみちゝたまへるがゆへに、無邊光佛とまうす。しかれば世親菩薩は、盡十方無碍光如來となづけたてまつりたまへり。（一念多念證文）

（五）くすりあればとて毒をこのむべからず（道德の問題）

われ往生すべければとて、すまじきことをもし、おもふまじきことをもおもひ、いふまじきことをもいひなどすることはあるべくも候はず。（中略）善知識をろかにおもひ、師をそしるものをば誘法のものと申なり。親をそしるものをば五逆のものと申なり。同座せざれと候なり。（中略）京にもこゝろえずして、やう〳〵にまどひあふて候めり。國々にもおほくきこえ候。法然聖人の御弟子のなかにも、われはゆゝしき學生などゝおもひあひたる人々も、この世にはみなやう〳〵に法文をいひかへて、身もまどひひとをもまどはして、わづらひあふて候めり。（中略）もとは無明の酒に𦾔ひて貪慾瞋恚愚痴の三毒をのみこのみめしあふて候つるに、佛の御ちかひをきゝはじめしより、無明の醉もやう〳〵すこしづゝさめ、三毒をもすこしづゝこのまずして、阿彌陀佛のくすりをつねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし。しかるにな𦾔ひもさめやらぬに、かさねて醉をすゝめ、毒もきえやらぬにな𦾔毒をすゝめられ候らんこそ、あさましく候へ。（中略）くすりあり毒をこのめと候らんことは、あるべくもさふらはずとこそおぼえ候。

（六）世のなか安穩なれ佛法ひろまれとおぼしめすべし（現實生活隨順）

六月一日の御文、くわしくみさふらひぬ。さては鎌倉にての御うたへのやうは、をろ〳〵うけたまはりてさふらふ。（中略）をほかたは、このうたへのやうは、御身ひとりのことにはあらずさふらふ。すべて淨土の念佛者のことなり。（中略）母姉妹なんど、やう〳〵にまふさるゝことは、ふるごとにてさふらふ。（中略）御文のやう、おほかたの陣狀、よく御はからひどもさふらひけり。うれしくさふらふ。詮じさふらふところは、御身にかぎらず、念佛まふさん人々は、わが御身の料は、おぼしめさずとも、朝家の御ため、國民のために、念佛をまふしあはせたまひさふらはゞ、めでたふさふらふべし。往生を不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念佛さふらふへし。わが御身の往生一定とおぼしめさん人は、佛の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために、御念佛こゝろにいれてまふして、世のなか安穩なれ、佛法ひろまれと、おぼしめすべしとぞおぼえさふらふ。よく〳〵御案さふらふべし。このほかは別の御はからひあるべしとはおぼえずさふらふ。（御消息集—性信宛）

（七）餘宗餘教、謗法の人をもそしるべからず（信心弘布の問題）

世々生々に無量無邊の諸佛菩薩の利益によりて、よろづの善を修行せしかども、自力にては生死をいでずありしゆへに、曠劫多生のあひだ、諸佛菩薩の御すゝめによりて、いままうあひがたき彌陀の御ちかひにあひまいらせてさふらふ御恩をしらずして、よろづの佛菩薩をあだにまふさんは、ふかき御恩をしらずさふらふべし。佛法をふかく信ずるひとをば、天地におはしますよろづのかみは、かげのかたちにそへるがごとくして、まもらせたまふことにてさふらへば、念佛を信じたる身にて、天地の神をすてまふさんとおもふこと、ゆめ〳〵なきことなり。神祇等だにもすてられたまはず、いかにいはんやよろづの佛菩薩をあだにもまふし、をろかにおもひまいらせさふらふべしや。よろづの佛ををろかにまふさば、念佛信ぜず、彌陀の御名をとなへぬ身にてこそさふらはんずれ。（御消息集——念佛人々宛）

詮ずるところ、そのところの緣ぞつきさせたまひさふらふらん。念佛をさへらるなんどまふさんことに、ともかくもなげきおぼしめすべからずさふらふ。念佛とゞめんひとこそ、いかにもなりさふらはめ。まふしたまふひとは、なにかくるしくさふらふべき。餘のひとびとを緣として、念佛をひろめんとはからひあはせたまふこと、ゆめ〳〵あるべからずさふらふ。（中略）そのところの緣つきておはしましさふらはゞ、いづれのところにても、うつらせたまひさふらふておはしますやうに、御はからひさふらふべし。（御消息集——眞淨宛）

いまはよく〳〵念佛もひろまりさふらはんずらんと、よろこびいりてさふらふ。これにつけても御身のれうはいまさだまらせたまひたり。念佛を御こゝろにいれて、つねにまふして念佛そしらんひと〴〵、この世のちの世までのことをいのりあはせたまふべくさふらふ。御身どものれうは、御念佛はいまはなにかはせさせたまふべき。たゞひがふたる世のひと〴〵をいのり、彌陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはゞ、佛の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし。よく〳〵御こゝろにいれてまふしあはせたまふべくさふらふ。（御消息集——性信宛）

一九　國文學の精神

久松潛一

一　解題

一　本文

「上代日本文學の研究」の序說として收められてある「日本文學の精神」中の「國文學を流れる三の精神」の抄錄である。「國文學の精神」は雜誌「觀想」（大正十五年十月號）に發表せられたものであり、「上代日本文學の研究」は、その他各種の雜誌に發表せられた上代文學（上古文學及び中古文學）とその研究史とに關する作者の研究を集めて整理したものである。（上代日本文學の研究　一冊、昭和三年十二月、至文堂發行）

二　作者

久松潛一（ひさまつせんいち）。國文學者。明治二十七年十二月愛知縣知多郡東浦村藤江に生まれた。愛知縣第一中學校・第八高等學校を歷て東京帝國大學文學部文學科に入り、大正八年七月卒業。更に大學院に進み、傍ら「校本萬葉集」の一部を擔任、後女子學習院講師・第一高等學校教授を經て、十三年東京帝國大學助教授となり、昭和十年歐米に遊んで翌十一年歸朝、次いで教授に任ぜられ、以て今日に及んでゐる。又、昭和九年文學博士の學位を得た。著書には「上代日本文學の研究」の外、「萬葉集の新研究」「萬葉集考說」「日本文學評論史」「明治文學史序說」（藤村作と共著）等がある。

本學年度の教材が國文學史的選擇と排列を行つたものであつたことに關聯して、一種の美學的觀點による國文學の概觀を行つてゐる本篇をこゝに掲げた。殊にその美的範疇語は國文學の作品性の上から歸納せられ意味構造に於て把握せられ、更にその一つ〳〵は日本的なるものの展開として跡づけられてゐる點に於て、文化的教材であり、又國民的教材である。

二　教材としての研究

一　註解

【國文學】　コクブンガク　(一)國文の學。國文を研究する學問。廣義には國文で記された一切の文獻を研究資料とする學問、即ち國語・國文・國史・律令・制度・有職・故實等に關する學を含み、狹義には日本文學を研究對象とする學(近來これを特に日本文藝學と稱する見解もある)をいふ。(二)我が國の文學。日本文學。こゝは(二)。

海洋に面した太古の時代から、山間・平地の靜かな天地を樂んだ中古・近古、さては都會殷賑の巷に泰平の夢を弄んだ近世を通じて、世界的發展を遂げた現代に至るまで、言靈の幸を稱へる日本民族によつて展開せしめられた日本文學は、量の上からも質の上からも世界諸國の文學に匹敵するは勿論、嘗に日本文化のみならず廣く東洋文化の自敍傳として獨自の價値を有してゐる。勿論東洋の先進國たる印度や支那の影響を蒙つた點も多く、更に明治以後に於ては泰西文學の影響を受けたことも尠くなかつたが、日本特有の國體・國民性・風土等を背景として獨自の發展をなし、近來は特に傳統的精神を支持しようとする傾向を生じ、世界文學の中に民族的特質を發揮せしめようとする新しい國民文學への意圖が勃興しつゝある。

文學精神としては「まこと」「もののあはれ」「幽玄」「さび」等の外に「をかしみ」「粋」「通」「いき」等が、思潮としては神と國家の精神、武士道の精神、義理の精神等の如きものが、形態としては、和歌・連歌・俳諧・俳句・川柳・狂歌・歌謠・浮瑠璃・脚本・戲曲・物語・小說・日記・紀行・隨筆・評論等が擧げられる。日本人の創作に成る漢詩・漢文は嚴密には國文學の範圍から除外せられるが、普通に準國文學として取扱はれる。

【月・花を玩ぶ】　月や花の如き優美なものを、自然美を賞玩する。風流・韻事を事とする。

【生活的意味】　セイクヮツテキイミ　生活に卽した意味。

生活といふ根據の上に立つてゐる意味。

作者は、「まこと」「もののあはれ」「幽玄」等の國文學の精神が生活的根據の上に立つてゐることに就いて、「日本文學概說」(岩波講座「日本文學」)に、「世界の文學に共通して、文學を生み出す根源的なものは文學の精神よりは文學以外の生活の精神であつた。(中略)かくの如き生活の精神から、文學の精神への發展が見えるのである。(中略)『まこと』の如きは生活の精神として出發したもので、それが文學的に反省される時文學の精神となるのである。その反省に理性的な性質がより多く加はると勸善懲惡思想の如き性質をとる。『もののあはれ』にしても文學の精神であるとともに生活の精神でもあつた。それだけ『もののあはれ』は生活的根據の上にたつてゐたのであるが、この『もののあはれ』が文學的に反省される時、『やさしみ』といふ如き精神となるのである。云々」と述べてゐる。

【まこと】　眞・實・誠　日本文學を貫ぬいて流れ、殊に上代文學に於て著しい發展を示し、その根本となつた文學精神。ありのまゝであること。虛僞・虛飾のないこと。眞實性。

作者は「日本文學概說」に次の如くにも述べてゐる。

「まこと」は誠であるが、意味からいふと眞實といふことにもなる。眞實といふ事はありのまゝといふ點もあるが、至誠と同じ道德的理想的性質も加はつて居る。この語の成立に

就いて富士谷御杖は眞事、もしくは眞言から來て居ると見る。言に出すことが、事として實現される點は言靈の信仰によつても信ぜられて居つたから兩者の密接な關係は言ふまでもない。眞は眞實でもあり、至誠でもある。これは日本の古代道德でもあつた、神道に於ては、純粹感情のまゝに生きることが、道であると考へ所謂道のない所に道があるといふのと同一である。理智的に規定された道德ではなく感情が自ら定めた道德であるとも言はれる。それはまた古代に於ける神を中心とする神ながらの道とも一致する。同時に戀愛生活に於ける純粹感情の境地とも一致するのである。この「まこと」の精神はそれ故に文學發生の根源となる精神であるとともにまた上代文學の精神ともなつて居るのである。さうして「まこと」を出發點とする文學の上に次第に文學意識が現れ、それが完成し爛熟する時、「まこと」を中心とする精神が文藝復興の精神となつて現れ、再び素樸なる新生の文學が生れるのである。それは眞實といふ言葉がありのまゝといふ事と、自然道德的な點とを含むが故に、文學としては素樸なる點、寫實的なる點、理想的なる點をそれ〴〵含んで居るのである。

【もののあはれ】　平安朝時代に於て著しい發展を示した生活理想で、同時にその文學の核心をなし、且それ以後の日本文學の重要な精神の一となつてゐるもの。物事に卽して起るしみ〴〵とした情趣。「もの」といふ客觀的存在態によつて觸發せられる歡喜・憐憫・哀愁・讃歎等の生々しい感情が、洗練せられ情趣化せられて調和・中庸を得たもの。

作者は、日本文學大辭典の「もののあはれ」の項に於て、次の如くにも述べてゐる。

「もののあはれ」の語義は本居宣長が「源氏物語玉の小櫛」で言つた如く、「あはれ」を主なる要素とする。「あはれ」は本來感動であつて、すべての感動をさすのであるが、「あはれ」が美の領域として意識されるに從つて、すべての感動から感動の調和された狀態を重んずるやうになり、この點から情趣的性質を有してくる。かつ「あはれ」とともに平安文學に常に用ひられる「をかし」とを比較すると、「をかし」が同じ情趣的性質であり、調和的感情であつても、明るい朗かな性質を有するに對して、「あはれの」方がしみ〴〵とした

情趣となつてゐる。「源氏物語」に「あはれ」の語が多く、「枕草子」に「をかし」の語が多いのも、この點から說明される。かくの如き「あはれ」の性質は明瞭であるが、「もの」の性質に就いては、種々の見解が見られる。（中略）「もの」を對象と見て對象としての「もの」によつて起る「あはれ」と見る立場と「もの」をより一般的な普遍的な「もの」と見る立場とがある。和辻哲郎氏が「日本精神史研究」の中に、「意味と物とのすべてを含んだ一般的な限定せられざるもの」とされるのは後者の見解である。「もののあはれ」を生ずる對象といふ點から進んで、「あはれ」そのものの一般的な形象といふ點を現はしてゐると見ることも出來る。かくて「もの」と「あはれ」とが相互に限定されつゝ、情趣の形象といふべき境地を構成し、更にそれをより高次な段階に進展せしめる。かくの如き構成を有する「もののあはれ」はその內容に於て理性と感情との調和を求むる精神であり、調和的である故に、優美な性質を有すると見られる。この調和的な優美な性質を主とする所から、「あはれ」を生ずる對象も限定され、植物にしても梅・櫻・卯の花・山吹といふ如きものを主とし、動物にしても鶯や時鳥等に限定され、季節にしても春と秋とが主となり、夏にしても青葉の夏、冬にしても花とみまがふ雪のふる冬に美を見出して、炎熱の夏や嚴寒の冬は「もののあはれ」的な美の領域ではないのである。感情にしても調和的でない激情の如きは、「もののあはれ」的ではないのである。

【幽玄】　イウゲン　平安朝時代の末期藤原俊成によつて文學精神として定立せられて以來、日本文學の重要な一精神として流れ、殊に室町時代に於て禪學精神や無常觀等の影響を受けて宗敎的・內省的に深められ、その生活及び藝術の基調をなしたもの。趣の深くて味はひの盡きないこと。言葉や姿に現れぬ奧深い情趣。餘韻。餘情。

作者は「日本文學概說」に次のやうにも述べてゐる。

「もののあはれ」は「まこと」の上に建設された日本文學の重要な精神であつたが、それが浪漫主義から古典主義的になつた時、この內容形式の調和の上にたつて、更に一步進めて餘情、情調を尊重して、象徵主義的となつたのが、中世の幽玄の精神であり、その發展としての「さび」の精神である。この幽玄は「もののあはれ」と異なつて、東洋精神から入つ

て、それが日本化されたと自分は考へる。或は東洋的な精神と「もののあはれ」の精神が融合したとも見られる。その融合の程度によつて幽玄そのものの內容にも變遷が起つた。卽ち支那に於ける幽玄は唐駱賓王の螢火賦にも「委性命兮幽玄、任物理兮推遷」とあつて物理に對して性命を考へ、推遷に對して幽玄を考へた如く、物の本質的なものをさしたのであるが、日本にこの語が入つてからは幾度かの意味の變化が行はれたと思ふ。この語の初めて見られるのは古今集の眞名序であり、それから忠岑十體、作文大體、續千字文等にも見られるが、未だ文學の精神となるまでには至らなかつた。それが平安後期になるに至つて餘情をさすやうになつた。卽ち文學の要素として、形式、內容を擧げるならば內容と形式との調和から來る情調的な性質である。こゝに中心をおく所から象徵的性質が生ずるのである。この象徵的性質は幽玄に一貫する所であるが、その象徵內容には變遷がある。殊に後成のやうな靜寂美を重んずる傾向、正徹、世阿彌のやうに艶麗美や妖艶美を重んずる傾向、心敬、禪竹のやうな平淡美を重んずる傾向とは三の著しき見解である。定家は有心美を重んじたが、その象徵的性質に於て幽玄に一致し、內容に於て妖

艶を重んじた所に後成等と異なる。しかしこの定家の有心美の有する妖艶美は正徹、世阿彌に至つてそのまゝ幽玄の內容に置き換へられたのである。さうして幽玄に於ける艶麗美は「もののあはれ」の性質の派生とも見られるのである。「もののあはれ」と幽玄とがより多く融合する時、艶麗美や花やかな美が多くなり「もののあはれ」からより多く離れる時靜寂や平淡の美が多くなる。この點は中世の文學作品にも見られる所である。

【上古文學】　ジャウコブンガク　我が國の上古、卽ち原始時代から奈良時代に亙つて發達した文學。上代文學とも呼ばれ、又文化の中心が概ね大和の國に在つたところから大和時代文學とも稱せられる。

我が國上古の文學としては、祭典・儀禮の文學である祝詞・壽詞・宣命、說話文學である神話及び傳說、詩歌文學である記紀歌謠及び萬葉集の長歌・短歌・旋頭歌、その他漢詩・漢文等が擧げられ、それ等の記載文獻としては、古事記・日本書紀・風土記・萬葉集・懷風藻・日本靈異記・古語拾遺等が數へられる。而してその作品の制作と文獻の成立との間には時代の隔りがある爲、これを幾つかの時代に分つて考察することは困難であるが、大體我が國最古の文獻の遺存する推古朝頃を界として、それ以前を古事記・日本書紀等の神話・傳說・歌謠等によつて代表せられる傳承文學の時代、それ以後を萬葉集によつて代表せられる記載文學の時代とし、或は更に細かく純粹口誦時代（太古から應神天皇の御代まで）・記錄發生時代（仁德天皇の御代から文武天皇の御代まで）・文筆文學時代（奈良朝時代）等とする。要するに、未だ文字のなかつた時代に始り、記錄發達時代を經て記載文學の時代に入り、貴族文學の擡頭期に及んでゐるのが、この時代の文學である。素樸・眞實・雄健等の精神を表現した文學として、又日本文學の母胎として獨自の價値をもつてゐる。

〔上古〕　歷史の時代區劃の一。文獻的資料を有する限での最古の時代で、一般に、西洋史ではゲルマン民族の大移動（西曆三七五年開始）まで、東洋史では秦の統一（皇紀四一一年（西曆前二二〇））まで、國史では蘇我氏の滅亡（一三〇五）までをいふ。但し日本文學史の上では、太古から奈良朝時代の終までを含めるのが一般である。

【國家的な精神】　國家を立場とする精神。國家そのものに重點を置き、國家の統一・發展を以て目的とする精神。作者は同じ「上代日本文學の研究」その他に於て、人間性の眞實なる一面として、個人的精神とともに國家的精神を考へ、日本文學史上國家的精神の特に高まつた焦點として古事記とその研究史とも見られる近世國學とを擧げ、神と英雄とを中心とした國家的精神によつて統一せられたものが古事記であるとしてゐる。

（次頁「古事記」の項參照）

【個人的な精神】　個人を立場とする精神。個人そのものの意義を重視し、その完成・純化を以て目標とする精神。作者は、「萬葉集考說」その他に於て、人間性の眞實なる一面として悲喜・哀樂等の個人的感情、卽ち抒情的精神を認め、それを以て心理的に詩歌發生の重要な動機であるとともに詩歌の中心をなすものであるとし、

隨つてそこに、萬葉集の歌を生み出し且その全體を貫ぬく精神を考へてゐる。（五三五頁「萬葉集」の項參照）

【古事記】　コジキ　（二一九頁を見よ）

古事記に於ける國家的精神に就いては、作者自らその著「萬葉集考說」第一編に於ても、「古代文學の中で我々は古事記に於て神や英雄を見る事が出來る。神は超人間的な存在であり、英雄は偉大なる人格である。かういふ神や英雄を行爲者として行はれる事件は天地や國土や人類の創造といふ偉大なる事件や國家の平安、怪物や賊徒の退治といふ英雄的な花々しき事件である。かくの如き偉大なる事件や花々しき行動を通して我々は國家的精神や英雄的精神を認めることが出來る。それは眞實なる人間の一面である。この精神が敍事文學を生んだのであらう」といひ、「上代日本文學の研究」に於ても、その第一篇「上古文學の完成」中の「古事記と國家的精神」と題する章下に於て委しく述べてゐる。

【宇宙】　ウチウ　cosmos（英）の譯語。世界。天地。原語kosmos（希）はもと「秩序」「裝飾」の義。哲學的には「渾沌」（chaos）に對し、法則的統一ある組織體として考へられた存在の總體、即ち世界の意。物理學的及び天文學的には、實在的として思考し得られる全空間及びこれに包含せられる天體竝びに全物質を含めていふ。

【人類】　ジンルヰ　地球上に於ける最高度の發達を遂げた生物。即ち、吾人の同類を自餘の生物と區別していふ語であり、又、民族若しくは國民に對して、廣く世界の人間全般についていふ場合に用ゐられる。こゝでは、後者の意。

【神】　カミ　超人間的な威力のあるもの。超越的な人格的存在。古くは總べて超人間的靈異力の發源體に神を認め、次いでこれが支配靈の神觀に進み、終に統合的な至高神靈の認識に達した。我が國に於ても、最初は巨木・巨石・瑞珠・案山子等に對する庶物崇拜、山岳・河海・風雨・雷鳴等に對する自然崇拜、蛇・狼・虎・兎・鰐等に對する動物崇拜等が行はれたが、これ等は自然に農業神・狩獵神等に進化し、凶惡神は淘汰せられて守護職能に於ての神々が專ら尊崇の對象となり、これ等の各職能を統攝總攬する中心主體としての天照大神信仰が民族的に形成せられた。

語源に關しては、「かんがみ」（忌部正通）「かゞみ」（度會延佳・吉川惟足・山崎闇齋・契沖）「かしこみ」（荒木田久老）「かくりみ」（齋藤彦麿）「かくりくしび」（八田知紀）「かくれみつる」（堀秀成）等の轉約とする說もあるが、上位の存在を意味する「かみ」（上）と同一語とする說（新井白石・伊勢貞丈等）が最も有力である。

【アニミズム的な精靈】

原文中、本文に省略せられた部分に、「此の山や川やさういふものそれ自身を精靈と見る、もしくは山や川に精靈があると見るのであつて、所謂神といふ觀念に未だ至らない原始的の觀念である」とある。

〔アニミズム〕　animism（英）　精靈崇拜。人間・動物・山川・草木・自然現象の威力のうちに靈魂の存在を認めてこれを崇拜する未開人の思考態度をいふ。總べての現象・事物に生命を認め、無生物をも人間と同じやうに生きたものとして考へることと、人又は事物の中に存在し而もそれから自由に遊離・徘徊して時々人又は事物に憑く靈が天地の間に多數あつて、それ等の靈が全生命活動を掌ると考へることとの兩樣の意義に解せられる。何れにしても未開人の重要且眞實な宗教的觀念又は表現の一樣式である。

〔精靈〕　セイレイ　すべて、もののたましひをさす語で、森羅萬象は、その中に籠る靈力の顯れであると見做す原始人的な思想に基づくものであるが、普通には、その靈が種々の姿に權化・化身して現れたものをさす場合が多く、隨つてその姿は殆ど常にその物の性質を具象化してゐる。精。靈。精魂。

【神人同格的な自然神】

原文中、本文に省略せられた部分に、「たとへば天照大神は一面に於て太陽神として崇められるが、太陽そのまゝではなく、人間の形をした神として崇められるのであつて、神人同格的な自然神である」とある。

〔自然神〕　シゼンシン　自然崇拜から發達した神。天地・日月・星辰・風雨・山川・岩石・動植物等の自然物又は自然現象の神。天照大神や素盞嗚尊等は中心は人格神であらせられるが、一面には陽神・暴風雨神といふ如き自然神的性質をも有せられる。

【英雄神的な人格神】【祖先神的な人格神】

原文中、本文に省略せられた部分に、「この人格神にも英雄神的な人格神と祖先神的な人格神とがある。英雄神的人格神は強い力を持ち、偉大なる功業をなすのであるが、一方の祖先神的人格神は國家の祖先として、或は氏族の祖先神として尊崇されるのである。前に記した天照大神は一面には自然神であり太陽神であるが、一面には國家の統一的祖先神として人格神でもあるのである。また素盞嗚尊は一面には暴風雨神といふ自然神であるが、一面には八岐大蛇を退治して奇稲田姫を得るといふ英雄神として見ることが出來るのである。また大國主命は自然神的性質のない純粹なる人格神である。兄とともに越の八上比賣に求婚して、兄神達と競爭した結果、慈悲深い大國主命が最後の勝利をしめられたのであり、また黃泉へいつて素盞嗚尊の女須勢理比賣を多くの試練の後得られるのである。そこに英雄神に見る力と愛とを備へられた神として見ることが出來る。純粹に英雄的人格神である」といつてゐる。

〔英雄神〕　エイユウシン　非凡な技量・才能・人格等を所有してゐる英雄としての神。その性質には超自然的要素の濃厚なものと然らざるものとがあり、その偉力にも外存的なものと內存的なものとがあるが、人文的であることに於ては一致してゐる。

〔人格神〕　ジンカクシン　人格的に考へられた神。人格として、卽ち人間同樣の意識と意志力とをもつてゐるものとして認められた神で、倫理性の多いものと少いもの、超人間性の濃厚なものと然らざるもの等、性質上の相違がある。英雄神・祖先神は何れも人格神である。

〔祖先神〕　ソセンシン　祖先として考へられた神。國家的祖先神と氏族的祖先神とがあり、天照大神は皇祖神として、同時に又國民の太古の遠祖として崇拜せられてをり、氏族的祖先神には中臣氏の祖天兒屋根命、齋部氏の祖太玉命、大伴氏の祖天忍日命等がある。

【古代】　コダイ　「上古」に同じ。（五三〇頁「上古文學」の項參照）

【萬葉集】　マンエフシフ　（二二二頁「萬葉」の項を見よ）

萬葉集に於ける個人的精神に就いては、作者自ら「萬葉集考說」中、「古事記」の項に揭げた引用文に續いて、「而して、かういふ國家的或は英雄的精神とともに、個人的な感情を主とした精神を一方に有するのである。悲哀や歡喜やさういふ感情のさながらに表れた生活を、一面に於て有するのである。賊徒の征伐や怪物退治のやうな外面的に花々しい事件とともに、その征伐の終つた後にしみ〳〵として蟲の聲をきき、木の葉のそよぎをながめるといふ情趣の世界をも有するのである。子供のために泣き戀愛のためにますらを心を失つてしまふ境地も、人間としてまた存する一面である。（中略）この精神は何人もが味ふ人間活動としては平凡なる境地であるかも知れないが、しかし何人も奪ふことの出來ない自己の眞實なる世界であり、人間の心が純化され淨化された境地であると思ふ。（中略）心理の上から見てこの人間の眞實性が詩歌の發生の重要なる動機であるとともに、詩歌の中心をなすものであると思ふ、而してこの生々とした感動の表現としての歌はすでに古事記や日本書紀の上にも見られるのである。（中略）さうしてはじめて單純に詠歎するに止まつた境地から次第に感情も複雜になり表現も洗煉されて

生々とした感動、眞實の精神の表現としての歌が最初に完成せられたのが萬葉集であると思ふ。かくて萬葉集を生出したものは眞實の精神が基調となつて居るのである」と述べてゐる。

【國家的な意識】　國家を立場とする意識。精神全體が國家を立場として統一せられた心的內容。

【人麿が皇子の薨去を悼み奉つた歌】

人麿が皇子の薨去を悼み奉つた歌には、萬葉集卷二にある「日並皇子尊の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌」と「高市皇子尊の城上の殯宮の時、柿本朝臣人麿の作れる歌一首并に短歌」とがあるが、參考の爲後者を引用する。（岩波文庫「新訓萬葉集」に據る）

かけまくも　ゆゆしきかも　一に云ふ、ゆしけんども　言はまくも　あやに
畏き　明日香の　眞神の原に　ひさかたの　天つ御門を　かし
こくも　定めたまひて　神さぶと　磐隱ります　やすみし
し　吾が王の　きこしめす　背面の國の　眞木立つ　不破山
越えて　高麗剣　和覆が原の　行宮に　天降り坐して　天の
下　治め給ひ　一に云ふ、神の盤ひて　食國を　定めたまふと　鳥が鳴く
吾妻の國の　御軍士を　召し給ひて　ちはやぶる　人を和せ
と　從服はぬ　國を治めと　一に云ふ、神へと　皇子ながら　任け給へ
ば　大御身に　太刀取り帶ばし　大御手に　弓取り持たし
御軍士を　率ひたまひ　齊ふる　鼓の音は　雷の　聲と聞く
まで　吹き響る　小角の音も　一に云ふ、笛の音は　敵見たる　虎か吼ゆ
ると　諸人の　おびゆるまでに　一に云ふ、諸人　一に云ふ、諸人まで　捧げたる　幡の靡
は　冬ごもり　春さり來れば　野ごとに　著きてある火の　一に云ふ、冬ごもり春野焼く火の　風の共　靡くがごとく　取り持たる　弓弭の騒
み雪降る　冬の林に　一に云ふ、木間の林、　飄風かも　い巻き渡ると　思ふ
まで　聞の恐く　一に云ふ、聞の見恐るまでに　引き放つ　箭の繁けく　大雪の
亂れて來たれ　一に云ふ、そちより來れば　從服はず　立ち向ひしも　霜
の　消なば消ぬべく　去く鳥の　進ぶ間に　一に云ふ、聞の消なば消ぬべくよりに見ると鳥ふはしに
渡會の　齋宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目
も見せず　常闇に　覆ひ給ひて　定めてし　瑞穗の國を　神
ながら　太敷き坐して　やすみしし　吾大王の　天の下　申
し給へば　萬代に　然しもあらむと　一に云ふ、かくもあらむと　木綿花の　榮
ゆる時に　わが大王　皇子の御門を　一に云ふ、皇子の御門を　神宮に
裝ひまつりて　つかはしし　御門の人も　白妙の　麻衣着

埴安の　御門の原に　あかねさす　日のことごと　鹿じもの
い伏し伏しつつ　ぬばたまの　夕に至れば　大殿を　ふり放
け見つつ　鶉なす　い伏ひもとほり　侍へど　侍ひ得ねば
春鳥の　さまよひぬれば　嘆も　いまだ過ぎぬに　憶も　い
まだ盡きねば　言喧く　百濟の原ゆ　神葬り　葬りいまして
麻裳よし　城上の宮を　常宮と　定めまつりて　神ながら
鎮りましぬ　然れども　わが大王の　萬代と　思ほしめして
作らしし　香具山の宮　萬代に　過ぎむと思へや　天の如
ふり放け見つつ　王魂　かけて偲ばむ　恐かれども

短歌二首

ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らに懸ひわたるかも

はにやすの池の堤の隱沼の行方を知らに舍人は惑ふ

〔人麿〕　ヒトマロ　柿本人麿。萬葉の歌人。柿本氏は、孝昭天皇の皇子天押帶日子命（古事記）又は天足彥國押人命（日本書紀）の子孫で、柿本臣と稱してゐたが、天武天皇が八姓を定められ給うた時、「朝臣」の姓を賜はつた。萬葉集には皆「柿本朝臣人麿」と記されてゐる。生年未詳。歿年に就いては和銅三年（一三七〇）三月の平城遷都以前で、それを溯ることさして遠くはないだらうと推測せられ、その歿處に就いては、萬葉集卷二の「柿本朝臣人麿、石見國に在りて死に臨みし時、自ら傷みて作れる歌一首」といふ題詞のある「鴨山の磐根し纏ける吾をかも知らにと妹が待ちつつあらむ」といふ歌によつて、大體石見國であらうと認められてゐる。日並皇子（草壁皇子）・高市皇子・明日香皇子等の殯宮に挽歌を奉り、又吉野・泊瀬・紀伊等へ天皇・諸皇子に扈從して赴いて歌を詠んでゐるところから、藤原の宮（持統・文武の兩朝）に仕へてゐたことが分り、又近江・筑紫・石見等の歌を殘してゐるところから地方官としてそれ等の國に旅行もしたであらうと推測せられる。その作品には題詞中に人麿の歌であることが明記されてゐるもの、左註に「或曰柿本朝臣人麿作歌」とあるもの、同じく「柿本朝臣人麿之歌集出」とあるものの三種あるが、人麿歌集のものは全部が人麿の作

品であるとはなし難く、又題詞中に人麿の作歌と明記されてあるものの中にも一部は人麿歌集から出たかの疑がある。隨つてその歌數も數へ方によつて異なるが、大體長歌十六首、短歌六十三首が擧げられ、全部卷一・卷二・卷三・卷四・卷十五に收錄せられてゐる。敍景歌よりも人事歌に勝れ、殊に長歌に於ては對句・繰返等の豐麗な修辭を用ゐながら强い情熱をうたひ、氣魄の力强さと格調の雄大さとを以て傑出してゐる。

〔皇子〕　ワウジ　こゝでは、草壁皇子及び高市皇子をさし奉る。

草壁皇子は、又日並知皇子とも申す。天武天皇の第一皇子。御母は持統天皇。天智天皇の元年（一三二二）御誕生。天武天皇の十年皇太子に立たせられ、持統天皇の朱鳥三年（一三四九）四月薨ぜられた。御年二十八。天平寶字二年追尊して岡宮御宇天皇と申し上げた。

高市皇子は、天武天皇の第八皇子。御母は胸形君德善の女尼子娘。孝德天皇の白雉五年（一三一四）御誕生。天武天皇が兵を擧げ給うた時父帝に代つて軍事を監せられ、持統天皇の朱鳥四年太政大臣とならせられ、十年（一三五六）七月薨ぜられた。御年四十三。

〔悼む〕　イタむ　人の死を悲しむ。

【國家的觀念】　コクカテキクワンネン　國家を立場とする意識。國家を生活の中心とする思想。

〔觀念〕　（一）佛語。心の散亂を靜めて佛體又は眞理を觀察し思念すること。（二）あきらめ。覺悟。決心。（三）哲學上、イデア（idea（希））に同じ。その意義は種々に解せられるが、代表的なプラトンの哲學に於ては、常住不變の實體、卽ち形而上學的實在をいふ。（四）心理學上、「表象」に同じ。但し「表象」は學術用語として特殊の意義を有することもあるが、「觀念」は通俗用語として一般にある對象を表示する意識內容の總稱として用ゐられ、隨つて「概念」と混用せられることが多い。こゝは（三）。

【抒情的精神】　ジョジャウテキセイシン　自己の感情を表現しようとする主觀的な精神。感情が中心になり、隨つて音樂的に高揚せられた精神。

【一方には自然に對してひたすらな愛を向け、云々】

萬葉集に於ける最も代表的な自然詩人は山部赤人である。「み吉野の象山の際の木末には幾許も騷ぐ鳥の聲かも」（卷六）、「春の野に菫採みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜宿にける」（卷八）等の歌によつて、自然の懷に深く觀入し得たその境地が窺はれ、理知等を交へることのない自然に對する純粹な愛情を見出すことが出來る。

〔境地〕　キャウチ　心の位。心の狀態。

【一方には又人生に對して情熱的な愛をうたひ、云々】

萬葉集に於ける代表的な人生詩人ともいふべき歌人には大伴旅人・山上憶良等がある。旅人は、「世の中は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり」（卷五）と人生に對する限ない悲歎を歌ひながら、「驗なき物を思はずは一坏の濁れる酒を飲むべく有らし」（卷三）、「生者遂にも死ぬるものにあればいまある間は樂しくをあらな」（卷三）等と、はかないが故に短い生のある限り享樂しようとする精神を懷いてゐた。憶良は、旅人と同じやうに人生の無常を感じつゝも、猶「水沫なす脆き命も拷縄の千尋にもがとねがひ暮らしつ」（卷五）と人生に對する限ない愛著をうたひ、宴席に侍りながらも「憶良らは今は罷らむ子哭くらむ其の彼の母も吾を待つらむぞ」（卷三）と妻子を思ひ、病に沈みながらも「士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして」（卷六）と功名的精神をうたつた點に於てあくまで現實を生きぬかうとする强い人生愛の詩人であつたといふことが出來る。

〔情熱的〕　ジャウネツテキ　情熱をもつてゐる。情熱の强い。

〔情熱〕　一つの物事に傾け注がれた感情の激しさ。物

事に熱中する感情。

【上代】ジャウダイ　「上古」「古代」に同じ。（五三〇頁「上古文學」の項を見よ）

【一元的】イチゲンテキ　事物の本元を唯一つのものとなすこと。（二元的・多元的に對する語。）

【綜合的】ソウガフテキ　總べてをすべ合はせた一全體とすること。（分析的に對する語。）

〔綜合〕「總合」とも書く。（一）箇々別々のものを一つに集めること。すべ合はせること。（二）論理學上、二箇以上の概念又は觀念を結合して、新たな一つの概念又は觀念を作ること。

【顯現】ケンゲン　明らかにあらはれること。明らかにあらはし示すこと。

【積極的】セキキョクテキ　（二九頁を見よ）

【迂餘曲折】ウヨキョクセツ　（一）まがりくねること。（二）事情が錯雜してゐること。こゝは（二）。

〔迂餘〕（一）まがりくねること。（二）まはり遠いこと。（三）遠まはしで露骨でないこと。

〔曲折〕（一）折れ曲ること。（二）變化のあること。平板でないこと。（三）委曲の次第。こみいつた事情。いちぶしじゆう。

【具象的】グシャウテキ　「具體的」に同じ。形象を具有するさま。箇體そのまゝを寫象するさま。實際の事物に即するさま。（抽象的に對する語。）

上古文學に於ける具象的表現に就いては作者自ら同じ「上代日本文學の研究」第一篇「上古文學の完成」中「記紀歌謠の具象性」と題する章中に次のやうにも述べてゐる。

こゝで具象的表現といつたのは現實の相をそのまゝに表現するのをいふのであつて、觀念的になつたり抽象的に現したりすることのないのをいふのである。古事記に於て國家創造のことをとくのに漁夫の日常に經驗する事柄を以てしたり、人間の出產の方法を以て天地の創造を說明しようとする中に見られるのであつて、かういふ態度は古今集以後に至つては次第に、失はれて自然を見ても之を理智的解釋を通して表さうとするのであるが、記紀時代の歌謠が全體として具象的であつたことは明らかであるのである。自己の生活そのものの上から素材をとり來るのであつて想像的な分子が極めて尠いのである。場所にしても記紀萬葉時代は自己のふんだ土地を必ずよむのに對して古今集以後では實際ふまない土地をよむことの多いのもそれを示すのである。

〔具象〕形象を具へてゐること。又、そのもの。特殊の形態・性質等を具有して、感官で知覺し得るもの。

【對象】タイシャウ　ある作用・進行に對してその行きあたりとして立つもの。總べて精神活動の目的物。欲求若しくは認識の目的物。

【直觀】チョククワン　判斷・推理等の思惟作用によらずに、對象を直接的に把握する精神の働。又、かくして把握せられた內容そのもの。

【直接的】チョクセツテキ　何等の媒介によることなく直接に物事をなすさま。

上古文學に於ける直接的表現に就いては、作者自ら「萬葉集考說」中「大和時代文學の特質」と題する章に次のやうにも述べてゐる。

たとへば同じ夜明けをうたつても、萬葉集の人麻呂の

ひんがしの野にかぎろひのたつ見えてかへりみすれば月傾きぬ

といふ歌を、新古今時代の藤原定家の

春の夜の夢のうき橋とだえして峯にわかるゝ横雲の空

と比較すると、人麻呂の歌は、（中略）夜明けの雄大な自然の眞實そのまゝがうたはれて目に見えるやうであるのに對して、定家の歌には（中略）眞實を想像化し美化し技巧化して居るのである。（中略）さうしてこの眞實性といふ事は、文學の表現に於ける直接性といふ事と密接なる關係があることを感ずる。或は自然を見た時、それを感じたまゝ見たまゝに表現するのである。前の人麻呂の歌にしても、平原で見た白みかかつた夜明の空、西の山の端にかたむく光のうすい月の姿を、そのまゝに表現して居る。少しも想像とか、感情を種々細工した所が見られないのである。自然をゆがめてゐない。

それだけに自然の眞實が見られるのである。夢の浮橋といふやうな幻想的な言葉を用ゐないのである。また古今集の歌のやうに散る花を見ては空に知られぬ雪が降るといふやうな想像を致さないのである。

【基調】　キテウ　こゝでは、根本、根柢、等の意。

【爛熟期】　ランジュクキ　ある時代の文化が既に最盛期を過ぎてやゝ下り坂になり、理智的・感傷的・回顧的な傾向が強くなつて、反面に素樸性・眞實性・發展性を失つた時期。

〔爛熟〕　(一)果實の熟しすぎること。實がいりすぎてうみたゞれること。熟爛。(二)度を超えた程に熟知すること。よくのみこむこと。(三)物事の熟達して、やや盛を過ぎること。こゝは(三)。

【廢頽期】　ハイタイキ　ある時代の文化が既にゆきづまつて凋落に近づき、その時代に於ける支配的精神の權威が失はれ、不安・動搖・分裂等の傾向が濃くなつた時期。

〔廢頽〕　すたれくづれること。頽廢。衰頽。凋落。

【復古的精神】　フクコテキセイシン　古代生活に理想を見出し、それに復り、それを實現しようとする精神。

原文中、本文に省略せられた部分に次の如くある。

復古的精神は單に字義的に古に復る事ではなく、あるがままに見るまことの精神が中心となつて居るのであつて、古代人の眞實性と素樸性とにかへることが復古的思潮の中心となると思ふ。この流れは中世のはじめに於ける實朝の精神に於て先づ見ることが出來るのである。平安末期に於て現實生活に頽廢とゆきつまりとを生じて、苦悶と憂愁とを感じた時に於て、實朝は、萬葉集に復つてその素樸性と眞實性とを求めたのであると思ふ。(中略)

而してこの實朝とならんで古に復らうとする精神の見られるものは仙覺であつて、そこに知的に古代の眞實なる世界を明らかにしようとする精神が見える。(中略)この實朝と仙覺とによつて見られる眞實を求める精神は、中世に於ては細い一線となつて存したに過ぎないが、近世になるとこの精神が強く現れて來た。先づ元祿時代の契沖等によつてこの精神が見られる。(中略)眞淵に至ると、萬葉研究とともに、歌の實際の批評の上にも、また歌の創作の上にも、この萬葉的精神が見出されるのである。而も眞淵に於ては、この萬葉集に見出でた精神は、未だ古の模倣といふ所から多く出でなかつたのであるが、近世の末期の良寛や橘曙覽等に至ると、萬葉的精神の模倣から一歩を進めて、萬葉的のまことの精神を體驗的にし、個性の上にたつて、この眞實なる精神を見出さうとしたのである。

【童心】　ドウシン　こどもごころ。をさなごころ。兒童のもつ素樸・純眞な心。

【文化】　ブンクヮ　世の中が進歩し文明になること。ひらけること。文明開化。哲學的には、自然に對する語で、與へられた自然を素材として人間が一定の目的卽ち價値に從つてその理想を實現しようとする過程の總稱。かゝる過程の所產としての學問・藝術・道德・宗敎・法律・經濟等を文化財又は單に文化と稱する。

猶、近年は「文明」が主として機械文明・物質文明を意味するに對し、特に精神的文明の意に用ゐられることが多い。

【ますらをぶりの精神】　率直・雄健な、男性的精神。

〔ますらをぶり〕　眞淵が多年の學究的沈潛と創作的精進との結果把握し得た萬葉歌風の眞髓を示す語で、中古以降の「眉のごと匂ひやかに、鋭なすたひらかなる樣をいひいづれば、みやびたることの極み」(萬葉考)である「たをやめぶり」に對して、眞情の流露した雄健な意調をいふ。かゝる眞淵の萬葉本質觀はその數多い著書の到るところに繰返されてゐるが、「にひまなび」卷頭の一節にも「古への歌は調を專とせり。歌ふ物なればなり。その調の大凡は、のどにも、あきらにも、さやにも、をぐらにも、己がじじ得たるまに〳〵なる物の、貫くに、高く直き心をもてす。その高き中にみやびあり。直き中に雄々しき心はある也」と述べられてある。これに就いては作者自ら「日本文學評論史」(近世世景 近世萬葉)に於て、次の如き解釋を下してゐる。

調とは後に景樹がぐはしく論じた所であるが、眞淵も歌は

うたふ物であるといふ考からうたふ上のリズムといふ事を重んじた物と思はれる。（中略）而してこの調の中に強く雄々しき精神を表すのである。彼は個性個性によつて、「のど」なる場合、卽ち靜かなる場合、「あきら」なる場合、卽ち明らなる場合、さやなる場合、をぐらなる場合があつても、それを高く直き心を以て貫ぬくべきであるとする。その高い中にみやびの心があり、直き中に雄々しき心があるのであつて、このみやびで雄々しい所にますらを振といふべきものがあるのである。かくて彼によれば和いだ中にも高く直き心が流れて居るとするのである。この點から彼の壯美といふ事に二の特質が見られる。一は雄々しく强いといふのも素材としてではなく、表現を通しての情調に於ての壯美であるといふ點である。或は調の中に見られる壯美といふ事である。他の一は高く直き心といふ點からも見られる如く、直接的表現といふことをさしたと思はれるのである。不自然な作爲のない自然のまゝにのびてゆくのが高き直き心であつてこゝに「ますらをぶり」があるのである。卽ち「ますらをぶり」もしくは强く雄々しいといふのは單に大きいといふのではなく、自然性といふ所に重要な要素があつたのである。

【情趣】　ジャウシュ　特定の內容又は對象の意味に關係しない漠然とした感情。おもむき。おもしろみ。あぢはひ。氣分。

【本居宣長は「もののあはれ」を云々】

「もののあはれ」論を窺ひ得る宣長の著書には「紫文要領」「石上私淑言」「源氏物語玉の小櫛」等があるが、いま「源氏物語玉の小櫛」によつてその概要を述べよう。宣長はまづ物語の意義・目的を規定して「大かた物がたりは、世の中に有とある、よき事あしき事、めづらしきことをかしきこと、おもしろき事あはれなる事などのさま〴〵を、書あらはして、そのさまを、繪にもかきまじへなどして、つれ〴〵なるほどの、もてあそびにし、又は心のむすぼゝれて、物おもはしきをりなどの、なぐさめにもし、世中のあるやうをも心得て、ものゝあはれをもしるものなり」といひ、源氏物語を以て或は天台の六十卷に擬へて作られたものであるとし、或は敎誡の意を含めた諷誡の書であるとする如き佛敎的・儒敎的な功利的見解を排した。そして「もののあはれ」の意義に關しては、まづ凡そ「あはれ」とは「見るものきく物ふるゝ事に、心の感じて出る、歎息の聲」で、元來は喜怒哀樂總べて感情の動くところをおしなべて「あはれ」といつたのであるが、次第に悲哀の感情に就いてのみいふやうになつたものであるとし、「もののあはれ」を知るとは「かならずあはれと感ずべき事にあたりては、その感ずべきこゝろばへをわきまへしりて、感ずる」ことで、畢竟それは人性の自然に根ざすものに外ならないとした。かくの如き宣長の「もののあはれ」論は俊成・定家の歌論、及びその系統を引いた契沖の文學論等に胚胎するところ多く、更に直接には宣長の師で、契沖に私淑してゐたといふ堀景山の影響を多く受けてゐるが、より以上に宣長自身の源氏物語に對する精緻な解釋の結果に成るものであり、單に物語論のみならずその歌論の根本思想をなし、更に文學論の原則たるにとゞまらずして、一方には人生觀上の人情主義となり、一方には一種の中古文明主義ともなつてゐる。（卷七、八「源氏物語論」參照）

〔本居宣長〕　モトヲリノリナガ　（二一五頁作者を見よ）

【源氏物語】　ゲンジノモノガタリ・ゲンジモノガタリ　平安朝時代の長篇小說。光源氏物語・紫の物語等とも稱せられ、略して源氏・源語・紫文・紫史等と呼ばれ、紫式部日記・更級日記等に源氏の物語とある如く「の」を入れるのがもとの呼び方であらう。作者に就いては異說もあるが、紫式部の述作にかゝり、後人によつて刪補せられたと見るのが穩當であらう。成立年代は、明星抄・紫式部日記・無名草子等によつて前半（藤裏葉まで）は長保三年春から寬弘三年冬までの六箇年間、卽ち式部寡居の中に作られ、若菜の卷以後、殊に宇治十帖の如きは少しおくれて紫式部日記の纒められる頃に成立したものと推定せられる。全篇五十四帖から成り、初の四十一帖は光源氏君の生立から死去までのはなやかな生涯を中心に

それをめぐる宮廷生活を描き、後の十三帖は源氏の遺子薫君とその親友匂宮との、宇治の浮舟の君を對象とする戀愛の關係を描き、特に薫君の失意の半生を主としてゐる。而して最後の十帖は場面を宇治にとつてゐるところから、「宇治十帖」と呼ばれる。元來平安朝の物語は傳奇物語と歌物語とが次第に合流して寫實主義と浪漫主義との融合に成る物語に發展するのであるが、源氏物語はその傾向を完成したもので、精細・明確な現實描寫が行はれてゐながらも、そこには一種の高い幻想が祕められてゐる。かく平安朝物語文學展開の上から重んずべきはもとより、日本小說史上に於ても最も重要な作品の一として、後世への影響も甚大であつた。（卷九、一〇「須磨の秋」參照）

〔物語〕「もの」を「かたる」意味と解せられる。文學史上、廣義には日記・隨筆をも含めるが、主としては平安朝から鎌倉時代に出た傳奇的な內容をもつた小說、和歌の詞書を敷衍したやうな歌物語、寫實的な戀愛物語、歷史上の事實を述べた歷史物語、戰爭を主題とした軍記物語等をさす。

【平安時代文學】　ヘイアンジダイブンガク　平安朝時代に發達した文學。王朝文學とも中古文學とも稱せられる。平安時代の文學は主として優美な平安京を舞臺とし、宮廷を中心とした平安貴族の間に發達した文學で、主情的である點に於ては、大和時代の文學と同一であるが、後者が素樸・純眞な力强い感情を表現してゐるのに對して、感情が纖細になり情趣化せられて所謂「もののあはれ」が主潮となり、表現も假名文の發達によつて優麗な文體を成し、形式・內容相俟つて渾然たるところにその特質が認められる。文學形態としては、和歌・歌謠・物語・日記・隨筆・漢詩・漢文等が擧げられ、これを發展的に見れば、刹那的抒情である詩歌から、感情を反省し客觀化した物語への展開を示し、隨つて物語は當代文學の中心として、浪漫的傾向から寫實的傾向に、更に頹廢的傾向に進んでゐる。時代區劃としては大體、前期（延武天皇の天應元年（一四四一）から花山天皇の寬和二年（一六四六）まで）・中期（一條天皇の永延元年（一六四七）から後朱雀天皇の寬德二年（一七〇五）まで）・後期（後冷泉天皇の永承元年（一七〇六）から後鳥羽天皇の文治元年（一八四五）まで）の三期に分けられる。（四期に分つ說もある。）前期は延喜・天曆頃を中心とする時代で、まづ最初は前代を繼承して、漢詩・漢文が隆盛を極め、凌雲集・文華秀麗集・經國集等の詩文集が勅撰せられたが、次第に日本的な詩歌への機運が熟し、その先驅として純粹感情の世界から理智的傾向に進んだ古今集が勅撰せられ、他方には歌から物語への展開を示す伊勢物語・大和物語等の歌物語、傳奇的傾向の著しい竹取物語・宇津保物語・落窪物語等が生まれ、又我が國最初の假名文の日記である土佐日記が現れた。中期は道長を中心とする時代で、當代文學の完成期とも稱すべく、傳統的・浪漫的傾向と現實的・寫實的傾向とを巧みに融合した源氏物語が完成せられ、枕草子・和泉式部日記・紫式部日記等の代表的作品が生まれ、和歌は漸く陳套に陷つて、拾遺集の如きも古今集を踏襲したに過ぎなかつた。後期は卽ち院政時代で、寫實的な態度から進んで說話の變化や奇拔な構想を求めるやうな傾向を示す狹衣物語・夜半の寢覺物語・濱松中納言物語・堤中納言物語・とりかへばや物語等が生まれ、純情な夢幻的憧憬を盛つた更級日記が殘され、道長の榮華生活を描いた榮花物語・大鏡等の史實を主とする歷史物語が現れ、更に進んで民衆生活への接近を示す今昔物語の如き說話文學が作られた。和歌の上では、新舊二派の對立・抗爭を生じたが、藤原俊成によつて靜寂・幽玄な境地が開かれ、千載集が撰せられるに及んで、新たな文學展開の道が示され、又新舊兩派の論爭と歌合の盛行とに伴なつて歌論が發達した。

〔平安時代〕　嚴密には、桓武天皇の延曆十三年（一四五四）平安奠都以後、後鳥羽天皇の文治元年（一八四五）平家滅亡に至るまでの約三百九十年間をいふが、普通には桓武天皇が卽位遊ばされた天應元年（一四四一）を以て初とすべきであらう。

【洗練】　センレン　(一)物を水で洗ひ、又ねり熟させるが如くに、思想・感情又は字句等の不純を去り、完成すること。(二)修養によつて人間をねりみがくこと。こゝは(一)。

【高天原の岩戸の前の神樂】

古語拾遺によれば、素盞嗚神の御所行を御覽になつて天照大神が天の石窟にお隱れになると天地は常闇となつたので、八百萬の神は思兼神の智謀によつて幣帛を奉り祝詞を奏し天鈿女命に歌舞をさせ、これを怪しまれて戸を細めに開けて外を窺はれた大神を天手力雄神が扉を引き啓けて新殿に遷し奉つた。かくて大神が石窟から出御遊ばされた時、天ははじめて晴れ、眼の覺めたやうに神々達が見合はせる面は皆白々とはつきり分つて來た。そこで神々は手を伸して踊り歌ひ、聲高く、「阿波禮　阿那於茂志呂　阿那多能志　阿那佐夜憩　飫憩」と歌はれたといふ。天岩戸の物語は古事記・日本書紀にも傳へられてゐるが、この神樂の歌は見えてゐない。恐らく神事を司どつた齋部氏にのみ傳はつた傳說であらう。

〔高天原〕　タカマノハラ　高い大空の平坦にして廣闊な場所の義。神代に於ける大和民族の發祥地。大和民族が、大和や日向に入る以前、即ち未だ各地に相分れなかつた時代の所在地。高天原が何處にあるかについては、(一)天上說、即ち天空にあるとする說、(二)地上說、即ちこの地上に求めて、或は國內(大和國・常陸國・伊勢國・朝鮮等)、或は國外(揚子江沿岸・滿洲・馬來半島・バビロン・アッカド・ヘブライ等)とする說等諸說紛々として定まらない。

〔岩戸〕　イハト　石の戸。岩窟の入口。岩窟。こゝでは、天岩戸。即ち天照大神が素盞嗚尊の飆暴をお怒りになつてお隱れになつたと傳へられる所。

〔神樂〕　カグラ　古くは神遊ともいつた。神意を慰め奉る爲、神前に奏せられる樂舞。禁中及び皇太神宮その他の大社に於て行はれる雅樂の神樂と民間に行はれる里神樂とに大別せられるが、その標準となるものは禁中に於て行はせられるものである。遠く天岩戸隱に奉られた歌舞に起原して、古くから國家の祖神を祭る際に奏せられたが、その大成せられたのは平安朝時代に入つてからで、桓武天皇の延曆頃から大陸音樂を取入れた雅樂の神樂が勃興し、淸和天皇の貞觀中にその制が完備し、當時は大嘗會に際し淸涼堂(大內裏に於ける樂院九堂の一)に於て行はれた。これを淸涼堂神樂といふ。その後、一條天皇の長保四年(一六六二)、十二月中の吉日を選んで內侍所(賢所)の庭前に於て神樂を奏する恆儀が創始せられ、白河天皇の承保頃から每年の恆例となつた。これを內侍所神樂といふ。應仁の亂以後は朝廷の御式微に伴なつて神樂の制も衰へ、天文中後奈良天皇がその制を極度に縮小して保存の途を講ぜられて僅かに廢滅を免れ、江戶時代幾分その制が改められて今日に及んだ。現在では紀元節(二月十一日)・賢所恆例御神樂(十二月中旬)・大正天皇祭(十二月二十五日)等に賢所大前に於て內侍所神樂が奏せられ、神嘗祭(十月十七日)には雅樂師が皇太神宮に參向して奉奏する。宮中に於ける神樂は必ず夕方から行はれて夜半に至り、庭上に神樂舍を設け、和琴・神樂笛・篳篥・笏拍子等によつて奏せられる。神樂に用ゐられる歌詞を神樂歌(又は神樂と略稱)と稱し、現存のものは貞觀中・延喜中に整理・改定せられ、更に圓融・花山兩朝の頃源雅信によつて大補修が加へられたもの。概ね短歌形式で、奈良朝以後の歌調である。

【あはれ、あなおもしろ、あなたのし】

古語拾遺の註には、「あはれ」の下に「言天晴也」、「あなおもしろ」の下に「古語、事ノ甚切、皆稱阿那。言衆面明白也」、「あなたのし」の下に「言、伸手而舞。今指樂事謂之多能志此意也」とあり、猶、「あなさやけ」の下には「竹葉聲也」、「をけ」の下には「木名也、振其葉之調也」とある。

【觀念化】　クワンネンクワ　觀念となること。單なる感情や情緒として經驗せられたものが、明瞭な一つの概念と

して確定せられること。

【中古文學】チュウコブンガク　「平安時代文學」に同じ。（五四六頁「平安時代文學」の項參照）

〔中古〕歴史の時代區劃の一。一般に、西洋史に於てはゲルマン民族の大移動（西曆三七五年開始）から東ローマ帝國の滅亡（西曆一四五三年）まで、東洋史では秦の統一（皇紀四四一年西曆前二二〇年）から唐の滅亡（皇紀一五六七年西曆九〇七年）まで、國史では大化改新（一三〇五）から平家の滅亡（一八四五）までをいふ。但し日本文學史上では普通平安朝時代と同義。

【中世文學】チュウセイブンガク　我が中世に發達した文學。近古文學又は鎌倉室町時代文學等とも稱せられる。中世は、武士階級とともに庶民階級の勃興を見、戰亂がうち續いて寧日尠く、佛教思想が著しく浸潤した時代であり、隨つて文藝もそれ等時代的特質を反映して、文學精神としては「幽玄」の樹立を見ると共に素樸・雄健な趣を生み、形式上の發展に於ては軍記物語・お伽草子・連歌・俳諧・謠曲及び狂言詞章等の分野を開拓した。時代區劃としては建武中興の頃を界として鎌倉時代・室町時代に大別せられ、吉野朝時代及び安土桃山時代は室町時代に攝せられるのが普通である。まづ鎌倉時代（およそ後鳥羽天皇の文治元年（一八四五）鎌倉幕府成立の端緒が開かれた頃から建武元年（一九九四）建武中興の頃まで）に於ては、衰退し行く王朝文化のあとを追ふ傳統的傾向が新古今集以下の和歌集、住吉物語・石清水物語・苔の衣・松浦宮物語・風につれなき物語等となつてあらはれ、他方當期の主潮たる武士的精神と佛教的思想とを基調として、保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記等の軍記物語、寶物集・發心集・宇治拾遺物語・十訓抄・古今著聞集・沙石集・雜談集等の説話文學、方丈記・東關紀行・十六夜日記等の日記隨筆等を生み、室町時代（およそ建武中興の頃から慶長八年（一六〇三）江戸幕府成立の頃まで）に於ては、前期にひきつゞいて中世的な文學が益〻發展し、軍記物語に太平記・義經記・曾我物語等、歴史文學に神皇正統記・增鏡・吉野拾遺等、隨筆に徒然草等があらはれ、或は國家的精神を昂揚し、或は前期の文學が穢土を厭離し淨土を欣求しつゝなほ現實生活に對する愛著を斷ち得なかつたのに對して、現實への執著を完全に克服して普遍の世界を示し、一方には謠曲及び狂言の詞章、お伽草子・連歌・俳諧等の新興文學を生んで、中世的な特質を發揮すると共に既に近世文學を胚胎せしめた。又別に漢文學として、鎌倉時代の禪宗東漸によつて準備せられ、南北朝時代から室町時代の末にかけて京都の禪林を中心として發達した五山文學（詩文・日記・語錄・史傳）の存在も見逃すことが出來ない。

〔中世〕近古ともいふ。歴史の時代區劃の一。一般に西洋史に於ては地理上の發見（西曆一四九二年アメリカ發見）からアメリカ合衆國の獨立（西曆一七七六年）まで、東洋史に於ては五代の初（皇紀一五六七年西曆九〇七年）から明の滅亡（皇紀二二七六年西曆一六一六年）まで、國史では鎌倉幕府成立（一八五二）から江戸幕府成立（二二六三）までの所謂鎌倉室町時代をいふ。

【平家物語】ヘイケモノガタリ　軍記物語。十二卷（流布本）。作者及び成立年代に就いては確説はないが、信濃前司行長が最も有力な原本の作者に擬せられ、鎌倉時代の初期即ち建久以後承久以前約三十年ばかりの間に成り、語り物として流轉するうち幾多の人によつて改竄・增補せられたものであらうとせられる。平家三十年の興亡を敍し、それによつて變轉極りなき人生の姿を描き出した一大敍事詩であるとともに、平安の都に生ひ立ち、そこで成長し、そこで爛熟した公卿文化が、關東を中心として勃興した地方武士によつて衰滅の悲運におかれるに至る、その重大な轉換期の犧牲者たる平家一門の沒落を、深い同情と一種の批判とを以て描き來り描き去つた一大悲劇である。保元物語・平治物語・源平盛衰記と共に軍記物語として中世の生んだ新しい文學樣式であるが、素材の廣汎なことに於ても、又文藝的價値の傑出してゐる點に於ても、到底他の三書の比ではない。物語として、謠曲・淨瑠璃等の先驅をなしたのみではなく、その內容・文致等に於て、後代の文學に著しい影響を與へた代表的作品の一つであることはいふまでもない。

【敍事詩的】ジョジシテキ　敍事詩としての性質を具へてゐる。敍事詩の趣をもつてゐる。

〔敍事詩〕epic（英）客觀的事件を敍述的形式によつて表現した詩。多くは英雄・偉人の業績を傳へ、併せてその時代の繪卷物を展開する。これを分つて民族的敍事詩・藝術的敍事詩の二つとし、前者は民族的生活の中に成立し傳承せられた說話內容が自然に超個人的形式に於て結成されたもので、ギリシヤの「イリアッド」「オディッセー」、インドの「マハマバラータ・ラマヤーナ」等の如きはこの例である。後者は個人的作家の藝術意識から生產せられた作物で、ミルトンの「失樂園」の如きはこれに屬する。

【軍記物語】グンキモノガタリ　戰爭を中心として、ある歷史時代を取扱つた敍事的文學作品の總稱。戰記物語。軍記物。

廣義には、狹義の軍記物語の先驅をなした將門記・陸奥話記・奥州後三年記・承久記・承久軍物語・承久兵亂記等の漢文の戰亂記錄、或は後の義經記・曾我物語等の個人的物語も含めるが、狹義には保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記の五種を稱するのが普通である。平安朝時代の假構物語・歷史物語が、鎌倉時代に於て、武士の活動や戰爭を寫す敍事詩的文學として展開し、貴族文化と武家文化との融合・調和によつて產み出されたものである。語物といふ特殊の性質を有し、その成立の事情も、ある特定の個人によつて一時に創作されたといふよりは、むしろ多數の人々によつて順次に成長していつたと認められ、中世の中心層を形成してゐた代表的な社會を反映してゐる點に於て當代（主として鎌倉時代）の代表的な文藝であり、且敍事文學竝びに國民文學としても代表的作品である。

【敍事的精神】ジョジテキセイシン　主觀を沒却して、事件を時間的展開に於て敍述しようとする客觀的精神。

【悲壯美】ヒサウビ　悲壯な感情を與へる美的內容。

一般に、永遠なるべきもの、正・善・美等の價値あるもの、偉大な力のあるもの等が、破滅・死・不幸等有限なるものの持つ制約を受けることによつて、鑑賞者に悲哀の感情を喚起するとともに、それ等の價値感情を高揚せしめるところに成立するもので、文學の重要な美の一種である。

【近世】キンセイ　（二三頁を見よ）

【擬古文脈】ギコブンミャク　擬古文の流れ。擬古文の系統。

〔擬古文〕和文・雅文ともいふ。江戸時代から明治の初年にかけて國學者・歌人等が古代の歌文を模範として、雅言・雅語を選び中古の文法にしたがつて作つた文。文字は平假名を主とし、漢語も假名で書く事が多い。平安朝の初期に平假名の文が發生し、この種の文語が後世までも襲用せられて一系統をなすに至り（後に和文と稱せられるもの）、和歌・連歌・物語・隨筆の如き平安朝以來の傳統を追ふ文學の用語となつたが、時代が下ると共に當時の口語や漢文その他の影響を受けて古に違ふところを生ずるのを免れなかつた。然るに江戸時代の國學者は古代の言語を正雅であるとなし、後世のものを轉訛した卑俗なものとして排し、直ちに古代の歌文を模範とすることとなつた。併し、奈良朝以往の上代の文はあまりに古風で實用にも幾分遠いところから、普通平安朝の和歌や假名文を模範とし、その用語及び語法を研究して後世のものと異なる點を明らかにし、以て後世の風を混へた從來の假名文を改革した。その作者としては、賀茂眞淵・本居宣長・橘千蔭・村田春海・上田秋成・清水濱臣・藤井高尙・石川雅望・黑澤翁滿などが名高い。（當時は多くこれを雅文と呼んだ。）

【宣長の物語論】（五四四頁「本居宣長は『もののあはれ』を云云」の項を見よ）

【和歌に於ける新古今主義】

宣長の歌論は「石上私淑言」に纏められ、更に新古今集の歌風を稱讚したことは「國歌八論及同斥非評」「新古今集美濃の家づと」等によつて明らかである。

而してその歌論の根本はやがてその物語論の根本をなす「もののあはれ」の說で、歌は人の情が「もののあはれ」に堪へないとき自らにもれ出る聲であり、人をして十分そのあはれを感ぜしめることを本旨とするものであるとし、そのためにはあくまで調を整へ語を美しくして人の感情を動かすやうに詠むべきであることを說いた。かくの如き思想から、古歌のうちでは技巧に勝れ優麗を極めた新古今集の歌風を理想とし、實際の作歌に於ても、萬葉集を理想とした眞淵の門下でありながら自らは新古今風であつた。かゝる宣長の思想は、同じく新古今主義を唱へた荷田在滿の歌論に胚胎するところ多く、而も一層徹底して精細を極めて居り、萬葉全盛の當時にあつてかくの如く徹底した新古今主義を見たことは近世歌壇の一異彩とも稱すべきであるが、一面新古今集を單に「もののあはれ」の立場のみから理解したことは一面的であることを免れず、これに就いては作者もその著「日本文學評論史」（近世（最近）篇）の中に、「宣長の『もののあはれ』の立場は文學評論としては極めてすぐれた立場であり、殊に技巧の意義を論理的に說明して、內容と形式との調和を說いた如きはすぐれた見解であるが、たゞ宣長の文學論は源氏物語の歸納的考察としては適切であるが、その立場を新古今集にそのまゝ應用しようとした結果は、新古今集の一面のみ見得て源氏物語の發展としての新古今集の理念ともいふべき幽玄や有心を閑却してしまつたのである」と述べてゐる。

因みに、近世に於ける歌論は主として萬葉・古今・新古今三歌集の研究史の上に築かれたものといふべく、在滿・宣長を代表とする新古今派の外、田安宗武・加茂眞淵等を代表とする萬葉派、小澤蘆庵・香川景樹等を代表とする古今派等がある。

〔和歌〕　ワカ　もと和（にぎ）ふる歌といふ意味であつたが、後には日本の歌の意味になり、漢詩に對して我が國固有の詩といふ意味をもつに至つた。うた・やまとうた・國歌などともいふ。日本詩歌のうち、三十一音の短歌を主とし、その以前に起つた長歌・旋頭歌（せどうか）・片歌を含み、後に起つた連歌・俳諧・狂歌・川柳・新體詩等は含まないのが一般である。この意味に於て、近代的詩歌に對する古典的詩歌の謂であるといへる。短歌は三十一音形式で、更に五・七・五・七・七の五句に分れ、旋頭歌は五・七・七・五・七・七の六句、長歌は長句短句の連續であつたものが、萬葉時代になつて、大體五・七の奇數句形式となり、更に反歌を有するやうになつた。平安朝以後には短歌がひとり優勢になつて、今日に及んでゐる。

〔新古今〕　シンコキン　新古今和歌集。勅撰和歌集の第八。二十卷。歌數約二千首、撰者時代のものが三分の一强、萬葉集以後千載和歌集までのものが約三分の二を占めてゐる。土御門天皇の建仁二年（一八六一）十一月三日に、後鳥羽院の院宣によつて撰上のことが仰せ下され、撰者は、時の寄人、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮の六人であつた。（但し寂蓮は撰進に先立つて歿した。）撰進は元久二年三月二十六日、竟宴が行はれたのは二年三月二十七日であつたが、竟宴後にも切繼のことが行はれ、完成したのは承元四年頃といはれる。藤原親經の撰にかゝる眞名序、同良經の撰にかゝる假名序があり、作者三百九十五名（或は三百九十四名）のうち、歌數の多いのは、西行・慈圓・良經・俊成・式子內親王・定家・家隆・寂蓮・後鳥羽院等である。歌風は外見に於て妖艶・豐麗、調に於て哀婉・幽玄と稱すべく、象徵的・客觀的・繪畫的・音樂的等の特色を有し、表現の上に彫琢の苦心を重ね、その著しい特徵として本歌取・三句切・體言止の三點が擧げられる。題號の示すやうに、「新しき古今集」を作る意氣を以ての編纂らしく、古今集以來の所謂「たわやめぶり」の歌風と平安末期以來の新風とを融合・大成した趣があり、萬葉・古今と相竝んで和歌史上の代表的三潮流をなすに至つた。

【古今集の眞名序】　コキンシフのマナジョ　古今集の卷末にある、漢文で書かれた序。

一般に古今集には卷首に假名序、卷末に眞名序が載せられてある。（元永本・冨士谷本等には眞名序がなく、俊成本には眞名序が卷頭にある。）大體前者は紀貫之の作、後者は紀淑望（中納言紀長谷雄の子で、貫之の弟子とも傳へられる）の作とせられてゐるが、兩者の關係に就いては文獻に明記なく、隨つて或は假名序を先とし、或は眞名序を先とし、最近に於ても山田孝雄氏は「古今和歌集の假名の序の論」（「文學」昭和十一年一月號）に於て眞名序を先とする見解を發表し、次いで西下經一氏は「山田博士の古今集序に關する新說に對して卑見を述ぶ」（「國語と國文學」昭和十一年五月號）を發表して假名序を先とする說を主張してゐる。尙作者は「日本文學評論史」（古代中世篇）に於て、眞名序には假名序に見られるやうな精彩に乏しく如何にも飜譯らしい感じがするといふ見地から「假名序の方が先きに作られたとしたい」と述べ、「從つて序の見解は貫之のものであると考へたいのであるが、もしたとへ一切をゆづつて眞名序が先にしてもその內容は必ず貫之のものであつたと思ふ。それは貫之の見識からしても貫之が主として撰定する古今集の骨子ともいふべき序の見解を淑望に全然ゆだねたとは思はれないからである」といつてゐる如く、何れにせよ貫之の和歌に對する見解が主となつてゐることは爭はれないであらう。

〔古今集〕　古今和歌集。勅撰和歌集の嚆矢。二十卷。歌數約千百首、春・夏・秋・冬・賀・離別・羇旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體・旋頭歌・俳諧歌等に分類せられ、最初は續萬葉集と呼ばれ、ついで古今和歌集と改められた。「古」は萬葉集以後を、「今」は撰集當時をさし、萬葉集以後當時に至るまでの歌を集めたものの意である。醍醐天皇の延喜五年（一五六五）、紀貫之・凡河內躬恒・壬生忠岑・紀友則の四人に勅して撰ばしめられた集で、撰者自身の詠が最も多數を占めてゐることは、萬葉以後漢詩文に壓倒せられた和歌の衰運を挽回し、新生命を開拓しようとする當事者の抱負と自信とを證するものである。和漢兩樣の序があり、假名序は紀貫之、眞名序は紀淑望の筆とせられ、殊に貫之の序は、纏つた歌論の最初のものとして注意され、その分類と共に後世に大きな影響を與へた。歌は大體讀人不知の時代の歌、六歌仙時代の歌、撰者時代の歌に分けられるが、その中心的歌風は勿論貫之等によつて代表される延喜時代の歌風で、理知的・觀念的の傾向に富み、優美・纖麗を主とし、又一面平淡味をもつてゐる。後世廣く玩讀され、作歌の模範に、或は本歌取の本歌にされ、又物語その他の文學に多く引用されたが、殊に中世には最も尊重されて、所謂「古今傳授」なるものを生じた。

〔眞名〕　「眞字」とも書く。假名に對して漢字の稱。まんな。

〔序〕　もと支那に於ける文體の一種で、文體明辨に「按、爾雅云、序、緒也、字亦作敍、言其善敍事理次第有序若絲之緒也、（中略）其爲體有二、一曰議論、二曰敍事」とあり、我が國に於てはそれに倣つて撰集その他書物の首に、成立の由來等を記したものをいふ。和歌集の序としては、萬葉集にはまだなかつたが、古今集に至つてはじめて見られ、二十一代集中序のあるもの九集（古今・後拾遺・千載・新古今・新勅撰・續古今・風雅・後拾遺・續古今）、うち四集（古今・續古今・風雅・新續今古）は假名序と共に眞名序を具へてをり、その他私撰和歌集にも序のあるものがある。

【或事關神異、或興入幽玄】　或は事柄が人間の業ならぬ不思議な事に屬し、或は歌の感興が深奧に入つてゐる。古今集の眞名序に「神世七代時質人淳情欲無分和歌未作。逮于素盞烏尊到出雲國始有三十一字之詠。今反歌之作也。其後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通情者。爰及人代此風大起長歌短歌旋頭混本之類雜體非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露。至如難波津什獻天皇富緒川之篇報太子或事關神異或興入幽玄」とある。「難波之什獻天皇」とは王仁が仁德天皇に「難波津にさくやこ

の花冬ごもり今を春べとさくやこの花」といふ歌を獻つたことをさし、「富緒川之篇報太子」とは日本靈異記等に次の如く傳へられてをり、「或事關神異云々」の語はその傳說を踏んでいつたものであらう。

皇太子、鵤の岡本の宮に居住す。時に緣ありて宮を出で遊觀す。片岡村の路の側に乞匄人あり、病を得て臥す。太子見て輦より下り、俱に語りて、問ひ訊ね、着る所の衣を脫ぎ、病人を覆ひて言ふ。「安く臥せ」と。遊觀既に訖り、輦を返して幸行す。脫ぎ覆ひし衣、木の枝に挂かりてかの乞匄なし。太子衣を取りて着る。ある臣白して曰ふ。「賤人に觸れて穢れたる衣、何の乏しくして更に着る」と。太子詔ふ。「佳し。汝知らざるなり」と。かの乞匄人、他處にして死す。太子聞き使を遣して以て殯す。岡本の村法林寺の東北の角にある守部山に墓を作りて收む。名を人木墓と曰ふ。後、使を遣し看せしむ。墓の口開かずして乞匄人なし。たゞ歌を作りて書きて以て墓の戸に立てり。歌に曰ふ。

斑鳩の富の緒川の絕えばこそ吾が大君の御名を忘れめ

使還りて狀を白す。太子聞きて默然として言はず。誠に知る。聖人聖人を知り、凡夫は知らず。凡夫の肉眼は賤人を見、聖人の通眼は隱身を見る。これ奇異の事なり。（靈異文）

〔神異〕　シンイ　ふしぎ。人間業でないこと。

【形象】　ケイシャウ　こゝでは、人間の作意によつて形成せられた具象的統一體としてのすがた、かたち。作者自身「上代日本文學の研究」第一編「古事記と國家的精神」の中に、形象とは雜多の統一であるといふ見地から、「我々は一のすぐれた彫刻を見る時に、均整と調和とをそなへた形象は、雜多のものの統一であることをしみじみ思ふ。あらゆる雜念が純化され淨化され統一された時に、そこに生れ出るものは形象である。而もそれは生命のない形ではなく、生命の息吹が形象をなした點に、形象を通じて統一された精神を見ることが出來るのである」といつてゐる。

【景氣】　ケイキ　（一）ありさま。模樣。光景。けしき。（二）威勢のよいこと。元氣なこと。（三）人氣。評判。（四）經濟界に於ける需要・供給の釣合程度のこと。市況。こゝは（一）。

俊成の日吉社歌合判詞に「よき歌になりぬればその詞姿のほかに景氣のそひたるやうなることあるにや」等とある。

【餘情】　ヨジャウ　名殘の風情。言外の情趣。

長明は無名抄に幽玄體を說明して「詮はたゞ言葉にあらはれぬ餘情姿に見えぬ氣色なるべし」等といつてゐる。

【象徵的】　シャウチョウテキ　象徵としての。象徵としての趣を具へてゐる。

〔象徵〕　Symbol（英）　現さうとしてゐる意味とそれを現す形式とが、夫々多少獨立の意義を有しながら、不可分の關係に融合してゐるもの。そしてその關係が知識的結合よりも感情的融合を示す場合ほど美的效果が著しい。

【俊成の幽玄】

俊成はその歌論の中に特に幽玄を唱道し或は幽玄體といふ如き風體を設定したと見られる確な證左を留めてはゐないが、その歌合判詞中に十數箇所「幽玄」の語が見出されること等から幽玄を重んじたことは明らかであり、長明の如き後進が俊成の後を追つて極力幽玄體の解明に努力した點等から推して、一世の新風の指導者として歷史的に幽玄體の創始者と見ることが出來る。然し俊成が如何なる意味に於て「幽玄」の語を用ゐたかに就いては、的確にはその眞意を捕捉し難いが、歌合判詞中の用例から推して、言外に暗示せられるほのかな情趣を意味したことは明らかであり、更にその性質としてはやさしく、かすかに、或る時は稍妖艶ではあるが、多くの場合、彼自ら屢〻使用した「心細く」「すがたさびて」等の語が意味する靜寂・幽遠・纖細等の趣を含み、更に「なには潟あさこぎ行けば時鳥聲をたかつの宮に鳴くなり」（三井寺新歌合）の如き歌を「入幽玄」と評してゐる點等から彼の所謂「長高く遠白き」趣をも含んでゐたもののやうである。かくの如

き俊成の幽玄は、一面に於て高雅・典麗な古今集の古風を慕つて新しく見出したものであると同時に、その背景にはその歌論「古來風體抄」に示された如き佛道への歸依が横たはつてゐることは明らかであり、更に脱俗的・高踏的である點に於て道家的世界への關聯も見られ、かくして「まこと」や「もののあはれ」が純日本的であるに比して「幽玄」は支那的・印度的要素をも含む文學精神であることが理解せられる。

〔俊成〕　シュンゼイ　藤原俊成。平安朝末期の歌人。俊忠の子、定家の父。永久二年（一七七四）に生まれ、幼にして葉室家の顯頼の養子となり、名を顯廣といつたが、仁安二年俊成と改めた。同年正三位に進み、次いで右京大夫・皇太后大夫等に任ぜられ、安元二年病の爲出家して釋阿と號した。五條京極（延慶本・長門本・山槐記等の説。正徹物語によれば五條室町）に住んだので五條三位といふ。幼時から和歌を能くし、既に十八九歳の頃から殿上・仙洞の歌會に伺候して斯道に精進し、保延四年には藤原基俊に師事し、源俊頼に私淑した。壽永二年（七十）後白河法皇の院宣を蒙つて千載和歌集を撰し、文治三年奏上し、建久八年式子内親王の仰によつて古來風體抄（八卷）を書いた。元久元年（一八六四）十一月歿、享年九十一。直接には基俊の門から出て、基俊の保守的傾向を推進めて所謂三代の典雅に還り、又基俊から見れば寧ろ敵とも見えた俊頼一派の自由な態度をも攝取して新時代の生命を吹入れ、平安朝時代から鎌倉時代への轉回期にある歌壇の中央に立つて若い歌人に圍繞せられながら中世への道を拓いた偉大な指導者であつた。歌は勅撰集の詞花集・千載集・新古今集・新勅撰集、以下十二集の總べてに入り、合計凡そ四百首、家集に長秋詠藻（三卷）がある。

【能樂の「幽玄」】

能樂に於て「幽玄」が特に重んぜられたことは世阿彌が「上代末代に藝人の得手得手樣樣なりといへども、至上長久の、天下に名を得る仕手に於いては、幽玄の花風は離るべからず」（申樂談儀）とか、「幽玄のふうてい（風體）の事。諸道諸事に於いて幽玄なるをもて上果とせり。ことさら、當藝において、幽玄のふうてい、第一とせり」（覺習條々）等といつてゐることによつて明らかであり、更に世阿彌のいふ「幽玄」は彼自ら「抑、幽玄のさかひとは、まことには、いかなる所にてあるべきやらん。まづ、世上のありさまをもて、人のしなじなを見るに、公家の御たたずまひの、位たかく人ぼう（望）世にかはれる御ありさま、是幽玄なる位と申すべきやらん。しからば、ただうつくしくにうわ（柔和）なるてい、幽玄の本體也」（覺習條々）といつてゐる如く、美しく柔和であるといふことを本質とするものであつたことが理解せられる。更にその極致としては「しほれたる」（花傳書）、「冷えたる」「さび〳〵としたる中に、何とやらん感心のある」（覺習條々）ものでありたいと望んでゐるやうに、花やかなもの、艶やかなもの、眩しいもの、一切をいぶしにかけてさびとした如き境地を意味してゐた。

〔能樂〕　ノウガク　能ともいふ。足利義滿の頃、觀阿彌清次・世阿彌元清父子によつて大成せられ、爾來今日まで生命を保つてゐる日本特有の樂劇。

我が國には古くから素朴單純な舞踊・物眞似・滑稽問答等が行はれてゐたが、飛鳥朝から奈良朝にかけて大陸から伎樂・雅樂とともに散樂（滑稽な演技を主とし、舞樂・手品・軽業・遊藝等が含まれ、何れも無面を用ゐて歌舞せられたもの）が輸入せられ、次第に原始演劇と結合し、平安朝の中頃から呪師の舞・延年の舞・猿樂・田樂等を發達せしめた。就中猿樂と田樂とは曲藝的な演技として、田樂は笑劇的な演戯として發達したが、時代とともに進歩し、それ〳〵の本藝の外に能藝と稱する一種の演劇的所作を發達せしめ、猿樂の能・田樂の能と呼ばれ、鎌倉時代の後半期に於ては、田樂が北條氏保護の下に著しく發達したが、室町時代の初期觀阿彌・世阿彌によつて猿樂の能が大成せられるに及び田樂の能はまもなく衰へるに至つた。即ち大和四座（結

崎・圓滿井・外山・坂戸）の一たる結崎座の猿樂師であつた觀阿彌及びその子世阿彌は、延年舞や田樂の能等をとり入れて一層複雜な作曲を試みて、素材を古典や軍記物等に取り、辭句を平安朝以來の詩歌・物語等に據り、曲節を宴曲・曲舞・聲明等に求めることによつて猿樂の面目を改め、將軍義滿の異常な保護の下に幽玄美の體現たる綜合的樂劇として大成せしめ、遂に天覽に供するまでにその地位を高めた。以後歷代の將軍に愛護せられ、殊に德川時代に武家の式樂となるに及んで益〻隆盛になり、明治維新後は武家階級の解消とともに保護者を失つて急激に衰微したが、次第にその藝術的價値が注目せられて復興し、以て今日に及んでゐる。（卷八、三六六頁參考資料一參照）

【無常觀】　ムジャウクワン　佛教の教理に隨つて世間一切の事物を流轉の相に於て觀ずること。

但し、平安末期から鎌倉期にかけて著しく現れた無常觀は、轉變常なき人生のはかなさを悲しむ生活感情を主としたもので、未だ實相としての無常に徹したものではなかつた。

〔無常〕　ムジャウ　梵語「阿儞怛也」(Anitya)の譯語。世間一切の事物が生滅遷流して刹那も止住することのないのをいふ。（常住の對。）涅槃經「諸行無常、是生滅法」

【俊成が彼の最も得意な歌として云々】

鴨長明の無名抄に次の如くある。

俊憲云、五條三位入道のみもとに、まうでたりしついでに御詠の中には、何れかすぐれたりとおぼす。よそ人はやうやうにさだめ侍れど、それをばもちひ侍べからず。まさしく承り候はむと聞えしかば、

夕されば野べの秋風身にしみて鶉啼くなりふかくさの里

是をなむ身にとりて、おもて歌と思ひ給ふるといはれしを、俊憲又いはく、世に普く人の申し侍るは、

面かげに花の姿を先だてゝ幾へこえきぬ峯の白雲

これを勝れたるやうに申し侍るはいかにときこゆれば、いさよそにはさもやさだめ侍らむしらず。猶みづからは、さきの歌にはいひくらぶべからずとぞ侍りしかと語りて、是をうちうちに申ししは、かの歌は身にしみてといふこしの句、いみじく無念に覺ゆるなり。これ程になりぬる歌は、けしきをいひながして、たゞそらに、身にしみけむかしと思はせたるこそ、心にくゝもいうにも侍れ。いみじくいひもてゆきて、歌の詮とすべきふしを、さは〳〵といひ現したれば、むげにこと淺くなりぬるなりとて、其の次に、我歌の中には、

三吉野の山かきくもり雪ふれば麓の里は打ちしぐれつゝ

これをなむ、かのたぐひにせむとおもひ給ふる。もし世の末に、おぼつかなくいふ人もあらば、かくこそいひしかと語りたまへとぞ。

【夕されば野の歌】　夕暮になつたので、野邊を吹く秋風が一入身にしみ、あはれ深くうづらが鳴いてゐるよ、深草の里は。

千載集卷四にある俊成の歌。

〔さる〕　來る。到る。熟語に用ゐられて、「になりゆく」の意を表す。「夜さり來れば」「秋されば」

〔うづら〕　鶉　鶉鷄目、雉科に屬する鳥。頭は黑色で白い縱斑を有し、背面は赤褐色で、羽軸に沿つて細長三角形の白斑がある。腹面の腮及び喉の羽毛は美麗な赤栗色で、多く中央部に黑色縱斑がある。雌の羽色もほゞ同じであるが、喉は黃又は白にわづか褐色を混じてゐる。古來飼鳥及び獵鳥として珍重され、肉は頗る美味である。樺太以南、九州及び臺灣に分布し、蕃殖は本州東北地方である。

〔深草〕　フカクサ　現京都市伏見區東北部の汎稱。稻荷山の西南麓で東方の丘を霞谷といひ、地勢西南に流れ南は大亀谷に至り西は鴨川に至る。往昔この附近一帶は歸化人秦氏の根據地の一であつたが、後いつしか貴人の別莊地となり、深草の里といつて鶉や月の名所として歌枕となつた。現今は第十六師團司令部及びその他の軍衙に大部を占められ、稻荷山麓に稻荷神社寶塔寺があり、又、深草陵・深草北陵がある。

【西行】　サイギャウ　（二四四頁「圖位」を見よ）

【放浪】　ハウラウ　さまよひあるくこと。さすらふこと。

【とほじろい、卽ち壯大といふ感情】

「とほじろし」といふ語は、萬葉卷三の山部赤人の長歌、及び同卷十七の大伴家持の長歌に「山高み、河とほしろし」とあつて、註釋家の說は、(一)「大なり」の義とするもの(代匠記・萬葉考・井上博士の新考)と、(二)「あざやかなり」「さやけし」の義とするもの(玉小琴・槻落葉・略解・古義)とに二分されてゐるが、俊成は(一)の意味に理解して用ゐた。

これに就いて、作者はその著「日本文學評論史(古代中世篇)」第二篇第一章に於て次の如く述べてゐる。

長明の無名抄にも匡房の

白雲と見ゆるにしるし三吉野の吉野の山の花さかりかも

を評して

これこそよき歌の本とは覺え侍れ、秀句もなく飾れる言葉もなけれど、姿美しく淸げに言ひくだして長高く遠白き也。

とあるをはじめ多く見える。この言葉は萬葉集にも

舊京師者山高三河登保志呂之(卷三)

安麻射可流比奈爾之安證婆山高美河登保之呂思(卷十七、思放逸屢夢見感悅作歌一首并短歌)

とあるがこの遠白しは契沖も「大きにゆたけき意なり」(代匠記)といつて居る如く壯大といふ意が主であると思ふ。たゞ長高きに比すれば感情の上だけでも纖細味は加はつては居ると思ふ。さうしてたけ高しも遠白しも壯大ではあるがいとおそろしきものでなく、優艷といふ感情の加はつて居ることは前の言からも察せられるであらう。

【心が細かい、卽ち纖細といふ情趣】

俊成は歌の批評に「心細し」「姿さび」等の語を屢〻用ゐた。これに就いては作者自ら前項中の引用文に直ぐ續いて次の如く述べてゐる。

さうしてこのたけ高しや遠白しに對立する觀念は心細し、姿さびといふ言葉で表される。この心細しや姿さびはかつて基俊も「翁さびゆく白菊の花」とよんだ如く保守派の基俊の方に於ても大體見られる思想であつたが、俊成に於ても多く見られるのである。たとへば廣田社歌合に

ねざめしてものぞ悲しき昔見し人はこの世にあるぞすくなき

の歌に「すがたさびて心ほそく」と批評して居り、同じ廣田社歌合に

武庫の海をなぎたる朝にみわたせば眉も亂れぬあはの島山

を批評して

詞をいたはらずして、またさびたる姿ひとつの體に侍るめり

とある。その他

さびしさをとふ人ぞなき山深み立よる嶺のかすみならでは

別雷社歌合

を「姿ゆうにして立よる嶺のかすみならではといへる心ほそくきこゆ」とあり

唐さきやしがの浦わに月すめばはるかにうたふ沖の釣舟

三井寺新羅社歌合

を「見るやうに侍るうへに棹歌一曲釣漁翁といへる詩の心とおぼえて心ほそくきこゆ」とある。

この「さび」と「細く」は前の「たけ」「遠白し」に對して纖細な味を指したものと思はれるのであつて、蕉風に於ていふ「細み」と「さび」ともこれから來て居る事は明らかである。さうして「細く」の方は心或は氣分情調の方を主としてさし、「さび」が姿卽ち表現の方をさしたものと思はれる。俊成が平安時代の基調であつた「あはれ」から進んでこれだけ複雜な方面を見出してきた所に、彼の個性からいつても時代の情調からいつても注意すべきであるが、かういふ理念を統一して作られたのが幽玄であつたのである。

【中世の人々が個人を否定して「家」に生き、云々】

作者自ら「日本文學概說」に於て次の如くにも述べてゐる。

平安時代に於ては個人を中心として居り、個性の中に文學の世界が作られる。然るに中世に於ては個人の弱さはかなさを觀じた結果、傳統の中に自己の生命を見出さうとするに至るのである。阿佛尼の十六夜日記は平安時代の女性の日記と異なつて自己を生きるよりは、子を中心として、家の傳統の中に生きる精神が見られる。この家を存續せしむる事によつて自己の生命を永遠ならしめようとする精神は、歌の家を作り傳授といふ如き現象を作出した。是等は個性的であるべき文學を傳統の中に入れる事によつて、生々とした歌の生命を

失ひはじめた事は事實であるが、そこに中世の文學精神の一面が見られる。卽ち文學を個性的にそのまゝ表現せずして、これを傳統の型の中に入れてそこからいぶしにかけた上で表現するのである。大きな自由な精神を型といふ窮屈な狹い中に入れてそれを凝縮せしめ結晶せしめてそこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。

〔「家」〕　こゝでは、血統又は職業・藝道等の傳統としての家をいつた。

【個性】　コセイ　一の個體を他の個體から區別し、個體をしてその個體たらしめる所以の特性。人間に就いていふならば、性格の差別的な性質・特徵、又はその特性のうちの根本的なものをさす。

【普遍性】　フヘンセイ　こゝでは、普遍的な人間性。經驗的特殊としての個性を超越し、而も個性をして眞の個性たらしめる本質。

【水晶】　スヰシャウ　無色透明又は殆どそれに近い石英の結晶。六方晶系、半面像晶族に屬し、常に六方柱狀をなして、柱狀面の右又は左の肩に三角偏方形の特徵ある面を有する。その純粹なものは無水珪酸から成つて無色透明であるが、多少の不純物を混じて種々の色を呈するものが多く、それらの色彩又は包裹物質の如何によつて、黑水晶・煙水晶・紫水晶・銀入水晶・泡入水晶・綿入水晶・雲入水晶・草入水晶等、種々の種類に分たれる。

【我】　ガ　(一)「自我」に同じ。(二)佛語。梵語 Atman の譯語。「常一主宰」の義。人の身は五蘊が因緣によつて、假りに和合して生じたもので、何處にもわれと稱すべき實體はないのに、誤つて一の常住な主宰が認められる。これが卽ち我であつて、こゝから我欲や我執を生じ一切の迷の根本となるのであるとする。(三)(二)の意の我から生ずる心の働。こゝは(一)。

【大きな自我】　普通に我又は自我と考へられてゐるものを否定した所に發展し來る、普遍的・絕對的なもの。自他の根柢に在つてこれを成立せしめる普遍者・絕對者。

〔自我〕　ジガ　諸々の體驗の支持者としての意識的統一體。經驗論乃至感覺論的には諸々の感覺・表象・感情等卽ち經驗の總體として考へられ、先驗哲學的には經驗的自我に對して一切の經驗を可能ならしめる論理的制約として說かれる。具體的には自己以外のものに對して、精神物理的統一體としての所謂自己を意味する。

【茶道】　チャダウ・サダウ　茶の湯の道。道としての茶の湯。茶の湯によつて自己の精神を養ひ、又、これを他と行つて主客歷然の境を實現せしめる道。和敬・淸寂を旨とし、所謂茶禪一味の境に參ずることを目的とする。

單に茶を喫むことは夙に奈良朝頃から行はれ、南北朝時代には支那鬪茶の影響をうけて豪奢な茶會が行はれたが、足利義政が東山の閑居に南都稱名寺の僧珠光を召して茶會を催すに至つて一定の法式が定められ、ここに嚴肅な茶道の基礎が成り、これがその門人宗陳・宗悟を經て紹鷗に傳はり、その弟子千利休（宗易）に至つて遂に大成せられた。珠光は一休禪師に參じ、一休から碧巖錄の著者圜悟禪師（宋代の禪僧）の墨跡を授けられ、その前に端坐して茶を喫したといはれ、茶に禪味を加へ、又四疊半の茶室を作つて、所謂小座敷の茶若しくは侘茶のもとを成し、利休は弟子に宗啓を得て互に導き導かれつゝ技を練り、信長や秀吉の庇護を受け、又德大寺の僧古溪に參禪して茶禪一味の境を體得し、愈〻茶を簡素なものにして侘の精神を高揚し、茶道の內容・形式ともに完備せしめた。以來戰國和平の世を通じて、或は養神の法として、或は風流の翫として、或は政道・交際の具として盛に行はれたが、一方には多くの流派を生ずると共にその技が複雜化して形式に墮し、或は道具に贅を盡くした豪華な茶會が行はれる等、道としての精神は却つて衰頹するに至つた。但し、近年又茶道の意義に目覺めた茶の湯が勃興しようとしてゐる。

【茶室】　チャシツ　特に點茶の爲に工夫された小家或は小室。數寄屋・圍・茶席・席などともいひ、これ等の名稱

は種々混用されてゐるが、「數寄屋」とは本來獨立した茶事專用の建築をいひ、「園」とは母屋の一廊を仕切つたもの（珠光が東山東求堂十八疊の間を四分の一に隔つて茶席に供したのに始る）、「茶席」又は「席」とは數寄屋であると園であるとを問はず茶技を行ふ室そのものをいふのであつて、「茶室」はそれ等の汎稱とみるのが妥當であらう。

數寄屋は、一見極めて無造作な草庵風の建築で、茶席の外、水屋（茶事の調備室）・待合（客が刷入り前に相席を待合はせる所）・露地（待合と茶席とを連ねる庭内の小徑）等から成る。茶席の廣さは、小は一疊半から大は十八疊に及ぶものがあるが、四疊半を正式とし、五客を容れるのを標準とする。床を設け、爐を切り、躙口（客の出入口）・勝手口（亭主の出入口）をつけ、勝手口から水屋につづく。露地には腰掛・雪隱・蹲踞（手洗鉢）・石燈籠等を配置し、樹石・蘚苔等を布置し、利休の所謂「心をすますにありて目を樂しますに非ず」の精神に隨つて技巧を避け、山野自然の趣を主とし、又常によく掃除をし打水をして、塵外の清境への通路たるにふさはしからせることもなく、あくまで自然への愛好に終始した。

然るに中世以降禪宗の興隆と共に、夢窓國師以下幾多の優れた禪僧の煙霞癖はこの自然觀照を更に深め、足利代々の將軍を始め細川勝元や豐臣秀吉の如き武將も亦好んで建築・園冶の事を起したので、築庭技術は著しき發達を遂げ、義政の時代には善阿彌の如き名手も出た。これら武將や禪僧の築庭には氣宇頗る雄大なものあるのは勿論であるが、しかも限られた空間に巧みに樹石を按排し、海や山や川の風景を組合はせ、所謂殘山剩水を集めて一幅の畫となし、全體を一つの美の理想の下に綜合統一した風景美を創造しようとする結果は、一木一草も忽にせざる小庭の發達を促すに至つた。その間雪舟や元信に代表される室町時代山水畫の發達との關係を看過し得ぬものあるは勿論であるが、就中、禪宗を基礎とし簡素幽寂の「侘」を旨とする茶道の發達は、狹小の空間に僅少の素材を以て天地自然の妙趣を表現しようとして、この主觀的傾向を極

しめる。

【庭園藝術】　テイエンゲイジュツ　一定の區劃せられた地域內に草・木・水・砂・石その他の工作物を配して一つの美的景觀を作り、以て觀賞・慰樂の用に供する藝術。その中核をなすものは所謂觀賞庭園で、普通人爲的法則に準據して規則的に整然と構成せられる建築式庭園（建築園又は形式園）と、自然の風景を摸寫又は象徵する自然式庭園（自然園）とに分けられる。

我が國の庭園は、歐米のそれが建築園を主とするに對し、上古以來殆ど專ら風景園として發達した。平安朝時代になると單なる鑑賞の外、歌舞・遊樂の爲にするやうになつて、所謂中島林泉式もその規模頗る大となり、又、外來の思想・文學の影響をうけては武陵桃源・蓬萊島・須彌山・極樂淨土・龍宮等眞鄕樂土への憧憬を表し、種々浪曼的な手法をも生ずるに至つたが、しかも歐米に於ける如き實用に出發した幾何學的構成や、支那に於ける如き超自然的な怪奇の空想に駢度に發展せしめ、獨自の茶庭樣式さへ生むに至つた。

【文人畫】　ブンジングワ　士夫畫ともいふ。(一)文人・士大夫等が必ずしも專門家的格法に囚れることなく自由且端的に胸中の逸氣をゑがいた畫。我が國に於ても文學者殊に漢學者・漢詩人等の餘技になる畫、又はそれに類するものをいふ。(二)「南畫」に同じ。南畫が多く文人・士大夫によつてゑがかれたので、董其昌が「文人之畫、自王右丞始」（容臺集）と稱して以來、文人畫と南畫とは全く同義に用ゐられるに至つた。こゝは（一）。（四三二頁「南畫」の項參照）

【氣韻】　キキン　詩文・繪畫等に於ける生き〳〵した趣。

〔氣〕　こゝでは、形に宿つた生命の根元。

〔韻〕　こゝでは、生命の根元が形をとつて表れる表れ方に統一があり、美のあること。

【生動】　セイドウ　いき〳〵として動くこと。生命の活動。畫などの眞に逼ること。

【室町藝術】　ムロマチゲイジュツ　室町時代の藝術。その